

秋田県文化財調査報告書第 263 集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 XXII

— 岩瀬遺跡 —

秋田県埋蔵文化財センター

1996・3

秋田県教育委員会

秋田県文化財調査報告書第 263 集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 XXII

— 岩瀬遺跡 —

1996・3

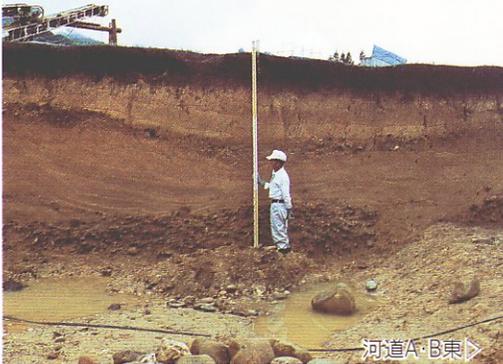
秋田県教育委員会



作業風景(南▷) 調査区の中央北側で、Ⅺ層の礫層を除去している。



岩瀬遺跡の立地(東▷) 横手川が、左から右へ湾曲して流れている。

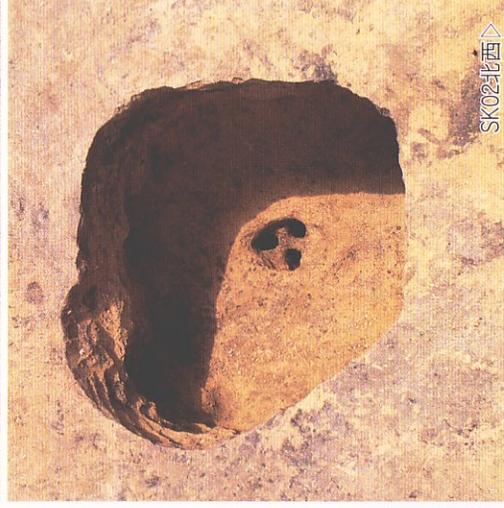
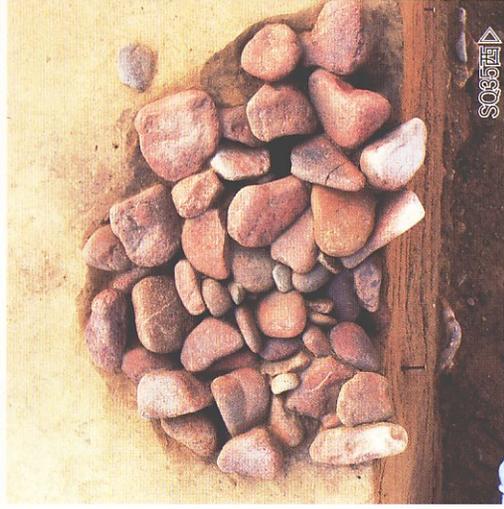
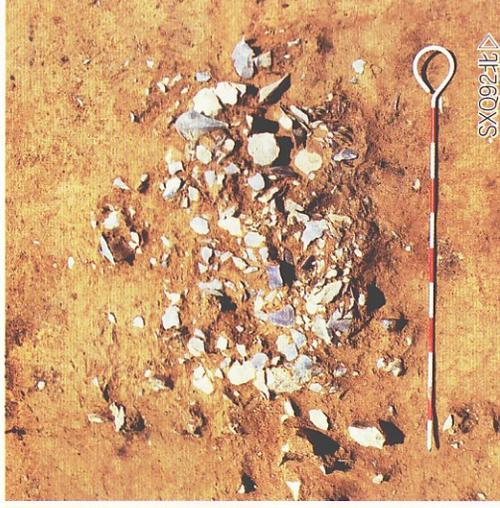
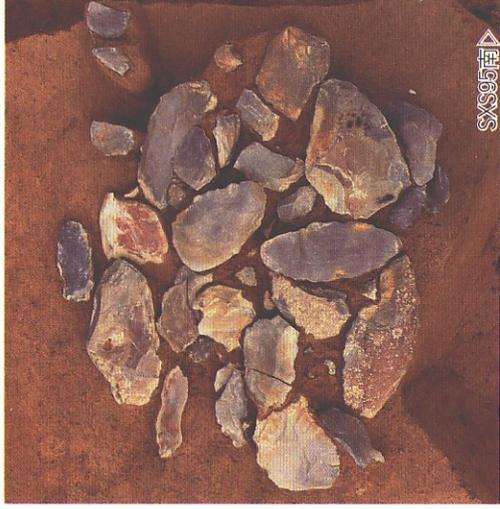
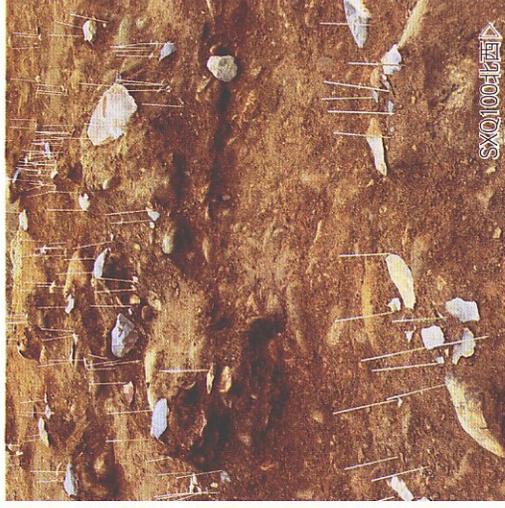
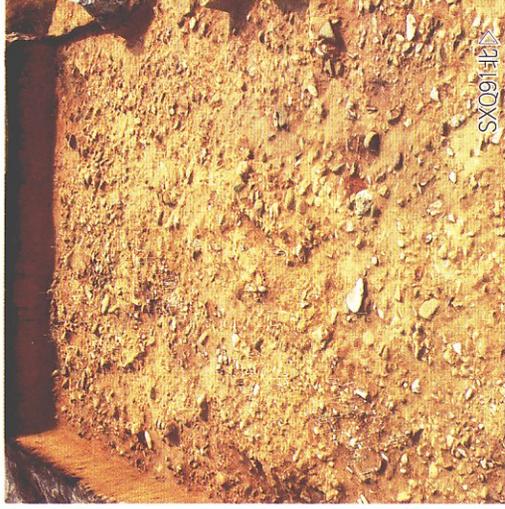


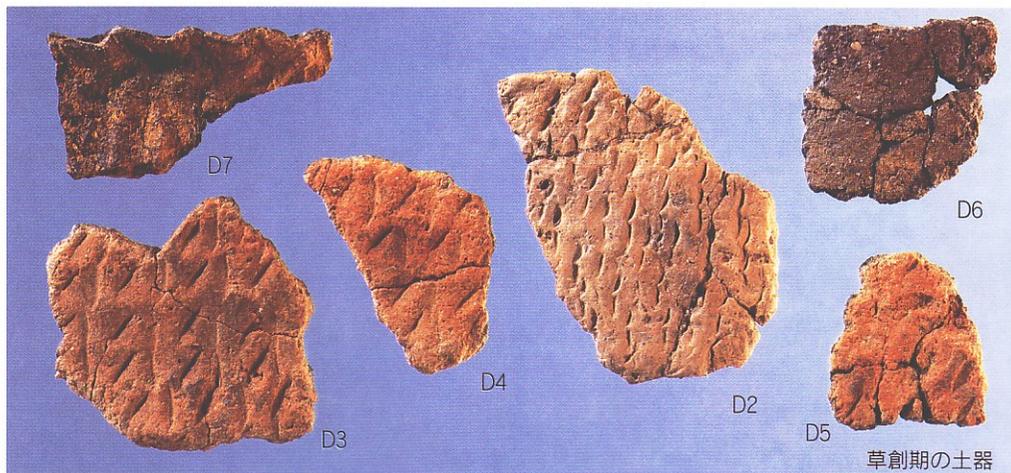


SXQ66(南東▷) 礫が取り除かれたと考えられ、半円状を呈している。

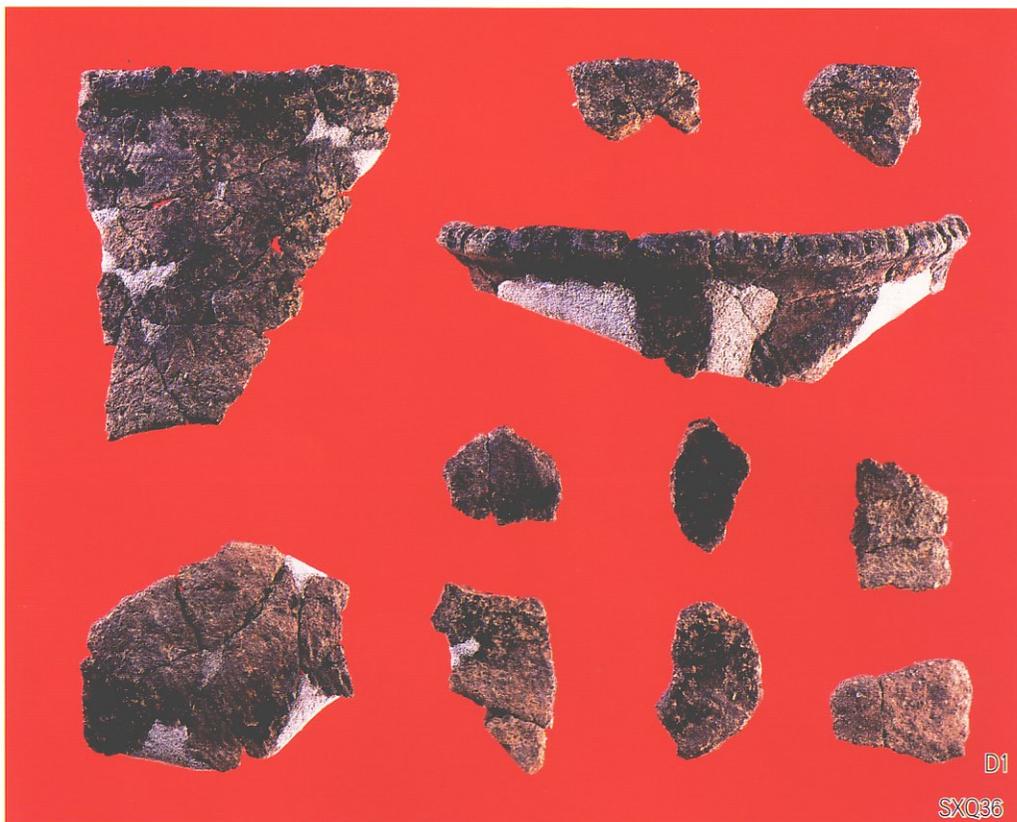


SXQ60(南▷) 手前右が炉跡1、中央左隅が炉跡4、奥壁左下が炉跡5である。



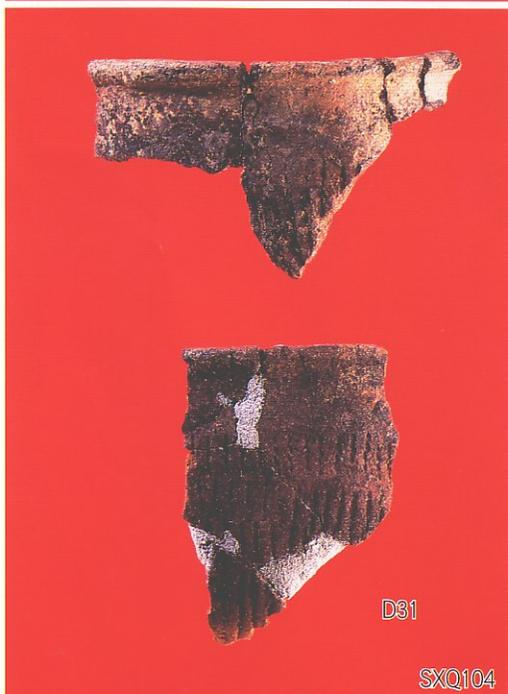


上S=2/3・中1/2・下1/3



D1

SXQ36



D31

SXQ104



SXQ104裏

S=1/2



234



235



d面
SXQ125



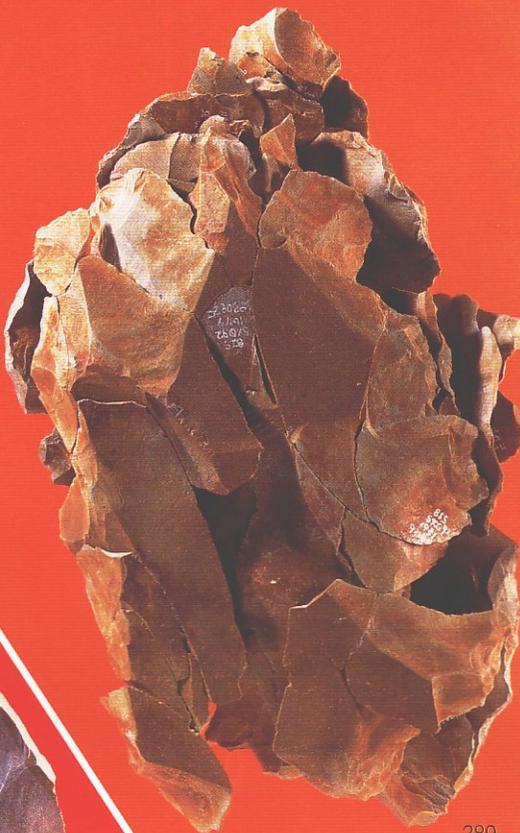
148

SXQ60

上の中・右S=1/3・下S=1/4



81



289



121



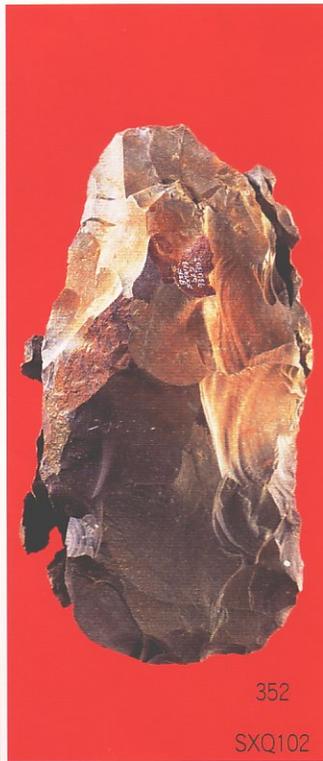
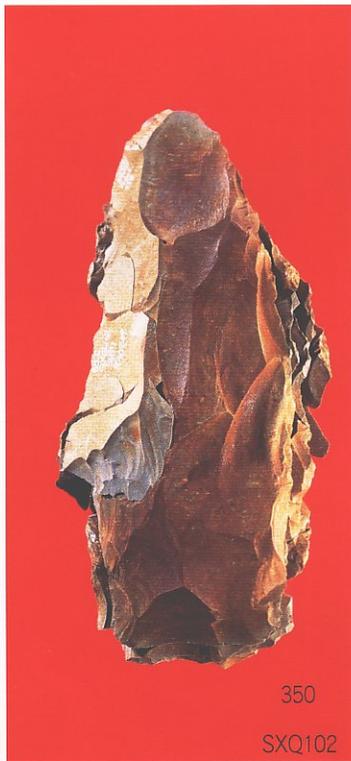
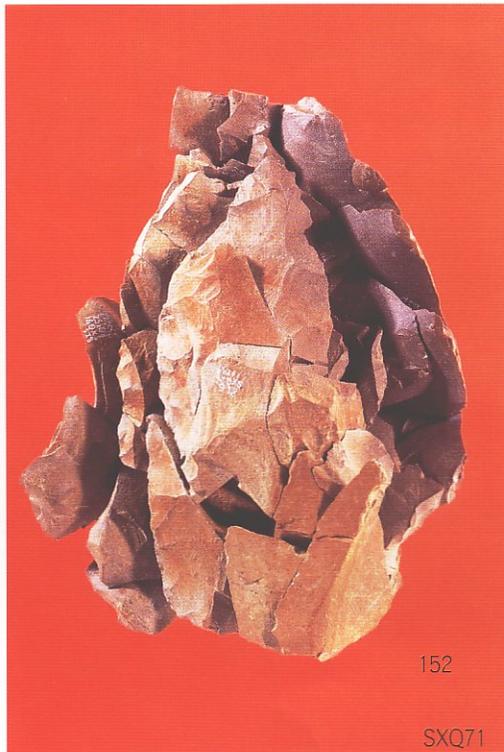
121

SXQ60



317

SXQ92



序

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるものです。すでに秋田市から岩手県湯田町までの約 73.2km については、平成 7 年 11 月に開通し供用されています。

本区間の路線上には、多くの遺跡の存在することが確認されており、秋田県教育委員会では、平成 2 年から工事に先立って遺跡の発掘調査を実施し、記録保存に努めてまいりました。

本報告書は、平成 3 年度と平成 5 年度に調査しました山内村岩瀬遺跡の調査成果をまとめたものであります。岩瀬遺跡は、県内では 3 例目となる縄文時代草創期の遺跡で、爪形文土器や日本最古級の石匙が発見されました。

本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化財を研究する資料として、多くの方々にご利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施および本書の刊行に際し、御協力を賜りました山内村、山内村教育委員会、横手市教育委員会、増田町教育委員会、十文字町教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成 8 年 3 月 25 日

秋 田 県 教 育 委 員 会

教育長 橋 本 顕 信

例 言

1. 本書は、東北横断自動車道遠野秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の22冊めの報告書である。
2. 本書は、平成3年度と5年度に発掘調査した岩瀬遺跡の調査成果を収めたものである。
3. 調査内容については既に一部が公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。
4. 本書は、第1章、第2章第1節と第3節、第1節2を除く第3章、第4章第3節を谷地薫が執筆し、利部修が補筆した。それ以外は、依頼原稿の第2章第2節、第5章を除いて利部修が執筆した。
5. 本書の編集は、利部修が行った。
6. 第2章第2節の「地形と地質」は専門指導員の板垣直俊氏、第5章第1節2の「岩瀬遺跡の考古地磁気調査」は、秋田大学鉱山学部西谷忠師教授から原稿を賜った。記して感謝申し上げます。なお、第2章第2節の第8図は、調査担当の作成による。
7. 第5章第1節1は学習院大学年代測定室、第2節、第3節2は株式会社古環境研究所、第3節1はパリノ・サーヴェイ株式会社による分析結果の報告である。
8. 石器の実測および写真撮影は、株式会社シン技術コンサルの協力を得た。
9. 堆積土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。
10. 本書の作成にあたり、下記の方々のご教示・ご協力を戴いた。記して感謝申し上げます。

安齊 正人	井久保好信	石坂 圭介	井田 秀和	岩見 誠夫
上東 克彦	岡 修司	大竹 憲治	小熊 博史	梶原 洋
加藤 勝仁	可児 通宏	川口 潤	工藤 大	小池 孝
近藤 尚義	佐々木洋治	佐藤 宏之	佐藤 雅一	杉浦 重信
鈴木 俊男	芹澤 長介	早田 勉	館野 孝	田村 俊之
千田 和文	千葉 英一	鶴丸 俊明	手塚 均	寺崎 康史
豊島 正幸	長崎 潤一	長沢 展夫	長沼 孝	西 幸隆
長谷川潤一	原 寛	秦 昭繁	平川 善祥	福田 裕二
松田 真一	宮塚 義人	矢野 健一	山田 昌久	山田 晃弘
吉崎 昌一				(敬称略、五十音順)

遺構の凡例

1. 検出された遺構には、検出順に番号と略記号を付した。略記号は以下の通りである。
SD…溝状遺構 SI…竪穴住居跡 SK…土坑 SKP…柱穴状遺構
SN…焼土遺構 SQ…集石炉 SS…炭焼成遺構 SXH…竪穴状遺構
SXQ…石器集中部 SXP…土器集中部 SXR…礫集中部
SXS…石器石材集積遺構
2. 遺構は時代の種類ごとにまとめてあるが、その中では番号の小さい順に配列してある。
3. 遺構の縮尺は、土坑や集石炉等は1/40を基本としたが、これ以外の縮尺も適宜用いた。
4. 各挿図には、スケールと方位を付してあるが、そうでないものも若干含む。
5. 石器集中部の遺物は、遺構の縮尺によらず同じ大きさに統一してある。
6. 遺構を表現するに当たって、使用したスクリントーンは以下の通りである。これ以外は挿図中に凡例を示してある。



……地山



……焼土

遺物の凡例

1. 挿図中の遺物番号は、遺構の内外を問わず土器・石器ごとの通し番号である。この番号は図版中の遺物番号と対応している。その際、土器の番号にはDを付してある。
2. 石器は接合資料を1/2、それ以外は1/3を基本としたが、そうでないものは適宜縮尺を与えている。土器の縮尺は1/3を基本としたが、これ以外の縮尺も適宜用いた。
3. 巻頭図版を除く図版中の遺物は、基本的に接合資料が1/3、そうでないものが1/2である。
4. 各挿図中にはスケールを付したが、図版も含めて()付けで縮尺を示したものもある。
5. 土器の文様には、実測図と拓本を併用してある。
6. 石器の各面における指示は、a・b・c…のアルファベットを利用している。
7. 石器の自然面の表現は、礫皮面を点描で表し、古い分割面と思われる部分はスクリントーンで示している。また、摂理面はこれらと区別した表現をとっている。
8. 石器の接合資料には、取り上げ番号や区名を表示してある。その際、他の遺構から出土した取り上げ番号には、頭にその遺構名を付してある。
9. 石器の接合資料の内、剥片の混み合っているものには、なるべく接合関係の略図を付してある。その際、取り上げ番号の繁雑なものは省いてある。
10. 石器の接合資料の多くには、取り上げ番号を基にした大まかな剥離の順序を示してある。その記号の意味は、以下のとおりである。矢印は隣り合う剥離の順序を、破線の矢印は途中が抜けている剥離の関係を、実線は並行関係にある状態を、各々示している。丸印は、取り上げ番号のないものや、整理途中で注記の判読が不明になったものである。
11. 石器接合関係図の矢印は、矢印側にある剥片番号の剥離が古く、その反対側の剥片番号はそれの先行していることを意味している。
12. 石器観察表の単位は、長さ・幅・厚さがmm、重さがgである。

目 次

巻頭図版

序

例 言 凡 例 目 次

第1章 はじめに	1	5 中期	330
第1節 調査に至るまで	1	6 縄文時代で時期不明	338
第2節 調査の組織と構成	3	第2節 縄文時代以外の検出遺構	351
第2章 遺跡の立地と環境	5	第3節 遺構外出土遺物	353
第1節 遺跡の位置と立地	5	第5章 自然科学分析	415
第2節 地形と地質	7	第1節 年代測定	415
第3節 周辺の遺跡	15	1 学習院大学放射性炭素年代測定	415
第3章 発掘調査の概要	21	2 岩瀬遺跡の考古地磁気調査	415
第1節 遺跡の概観	21	第2節 火山灰同定	419
第2節 調査の方法	33	1 岩瀬遺跡の火山灰分析(1991年度分)	419
第3節 調査経過	35	2 岩瀬遺跡の火山灰分析(1993年度分)	421
第4章 調査の記録	45	第3節 植物遺存体同定	428
第1節 縄文時代の検出遺構とその遺物	45	1 縄文時代草創期炉の植物利用	428
1 草創期	45	2 MCライン西壁の珪藻分析・植物 珪酸体分析	433
2 早期	172	第6章 まとめ	443
3 前期	278	写真図版	445
4 早期から前期	318		

挿図目次

第1図 岩瀬遺跡の位置	5	第13図 基本土層図(2)	27
第2図 横手I・C以東の路線と遺跡	6	第14図 基本土層図(3)	29
第3図 対象地域	8	第15図 基本土層図(4)	32
第4図 対象地域の地質図	9	第16図 遺構配置図(1)草創期	38
第5図 調査地域の段丘区分図	11	第17図 遺構配置図(2)早期	39
第6図 河岸段丘の断面図	12	第18図 遺構配置図(3)早期から前期	40
第7図 河床の変動	13	第19図 遺構配置図(4)前期	41
第8図 河道の変動略図	14	第20図 遺構配置図(5)中期	42
第9図 周辺の遺跡	16	第21図 遺構配置図(6)縄文時代で時期不明	43
第10図 推定範囲と発掘調査区	22	第22図 遺構配置図(7)縄文時代以降	44
第11図 工事計画と発掘調査範囲	23	第23図 竪穴状遺構(1)SXH66	46
第12図 基本土層図(1)	25	第24図 竪穴状遺構(2)SXH66	47

第 25 図	遺構内出土遺物 (1) S X H66①	49	第 63 図	遺構内出土遺物 (28) S X Q60④	99
第 26 図	遺構内出土遺物 (2) S X H66②	51	第 64 図	遺構内出土遺物 (29) S X Q60⑤	101
第 27 図	接合関係図 (1) S X H66	53	第 65 図	接合関係図 (5) S X Q60③	103
第 28 図	遺構内出土遺物 (3) S X H66③	54	第 66 図	遺構内出土遺物 (30) S X Q60⑥	104
第 29 図	遺構内出土遺物 (4) S X H66④	55	第 67 図	遺構内出土遺物 (31) S X Q60⑦	105
第 30 図	遺構内出土遺物 (5) S X H66⑤	56	第 68 図	遺構内出土遺物 (32) S X Q60⑧	106
第 31 図	遺構内出土遺物 (6) S X H66⑥	57	第 69 図	遺構内出土遺物 (33) S X Q60⑨	107
第 32 図	集石炉 (1) S Q68・116	58	第 70 図	遺構内出土遺物 (34) S X Q60⑩	108
第 33 図	石器石材集積遺構 (1) S X S57・94・95	60	第 71 図	接合関係図 (6) S X Q60④	109
第 34 図	遺構内出土遺物 (7) S X S57	61	第 72 図	遺構内出土遺物 (35) S X Q60⑪	110
第 35 図	遺構内出土遺物 (8) S X S94①	62	第 73 図	遺構内出土遺物 (36) S X Q60⑫	111
第 36 図	遺構内出土遺物 (9) S X S94②	63	第 74 図	遺構内出土遺物 (37) S X Q60⑬	112
第 37 図	遺構内出土遺物 (10) S X S95①	65	第 75 図	遺構内出土遺物 (38) S X Q60⑭	113
第 38 図	遺構内出土遺物 (11) S X S95②	66	第 76 図	遺構内出土遺物 (39) S X Q60⑮	114
第 39 図	遺構内出土遺物 (12) S X S95③	67	第 77 図	遺構内出土遺物 (40) S X Q60⑯	115
第 40 図	遺構内出土遺物 (13) S X S95④	68	第 78 図	遺構内出土遺物 (41) S X Q60⑰	116
第 41 図	遺構内出土遺物 (14) S X S95⑤	69	第 79 図	遺構内出土遺物 (42) S X Q60⑱	117
第 42 図	石器集中部 (1) S X Q36	70	第 80 図	遺構内出土遺物 (43) S X Q60⑲	118
第 43 図	遺構内出土遺物 (15) S X Q36①土器	72	第 81 図	遺構内出土遺物 (44) S X Q60⑳	119
第 44 図	遺構内出土遺物 (16) S X Q36②	73	第 82 図	遺構内出土遺物 (45) S X Q60㉑	120
第 45 図	接合関係図 (2) S X Q36	74	第 83 図	遺構内出土遺物 (46) S X Q60㉒	122
第 46 図	遺構内出土遺物 (17) S X Q36③	75	第 84 図	遺構内出土遺物 (47) S X Q60㉓	123
第 47 図	遺構内出土遺物 (18) S X Q36④	76	第 85 図	遺構内出土遺物 (48) S X Q60㉔	124
第 48 図	遺構内出土遺物 (19) S X Q36⑤	77	第 86 図	遺構内出土遺物 (49) S X Q60㉕	125
第 49 図	遺構内出土遺物 (20) S X Q36⑥	78	第 87 図	遺構内出土遺物 (50) S X Q60㉖	126
第 50 図	遺構内出土遺物 (21) S X Q36⑦	79	第 88 図	遺構内出土遺物 (51) S X Q60㉗	127
第 51 図	遺構内出土遺物 (22) S X Q36⑧	80	第 89 図	遺構内出土遺物 (52) S X Q60㉘	128
第 52 図	遺構内出土遺物 (23) S X Q36⑨	81	第 90 図	石器集中部 (6) S X Q71・85・89・93	130
第 53 図	遺構内出土遺物 (24) S X Q36⑩	82	第 91 図	遺構内出土遺物 (53) S X Q71①	131
第 54 図	石器集中部 (2) S X Q60・67	84	第 92 図	遺構内出土遺物 (54) S X Q71②	132
第 55 図	石器集中部 (3) S X Q60	85	第 93 図	接合関係図 (7) S X Q71①	133
第 56 図	石器集中部 (4) S X Q60 (炉)	88	第 94 図	遺構内出土遺物 (55) S X Q71③	134
第 57 図	石器集中部 (5) S X Q60	89	第 95 図	遺構内出土遺物 (56) S X Q71④	135
第 58 図	遺構内出土遺物 (25) S X Q60①土器	90	第 96 図	接合関係図 (8) S X Q71②	136
第 59 図	遺構内出土遺物 (26) S X Q60②	93	第 97 図	遺構内出土遺物 (57) S X Q71⑤	137
第 60 図	接合関係図 (3) S X Q60①	95	第 98 図	遺構内出土遺物 (58) S X Q71⑥	138
第 61 図	接合関係図 (4) S X Q60②	96	第 99 図	遺構内出土遺物 (59) S X Q71⑦	139
第 62 図	遺構内出土遺物 (27) S X Q60③	97	第 100 図	遺構内出土遺物 (60) S X Q71⑧	140
			第 101 図	遺構内出土遺物 (61) S X Q85①	142

第 102 图	遺構内出土遺物 (62) S X Q85②	……143	S X R126・139	……185	
第 103 图	遺構内出土遺物 (63) S X Q85③	……144	第 134 图	遺構内出土遺物 (83) S Q162,	
第 104 图	遺構内出土遺物 (64) S X Q85④	……145	S X R75・136, S X Q141	……187	
第 105 图	遺構内出土遺物 (65) S X Q85⑤	……146	第 135 图	礫集中部 (2) S X R75	……188
第 106 图	遺構内出土遺物 (66) S X Q67・86・89・ 91・93	……147	第 136 图	礫集中部 (3), 土器集中部 (1), 石器石材集積遺構 (2) S X R136・ S X P98, S X S29	……190
第 107 图	石器集中部 (7) S X Q91	……148	第 137 图	遺構内出土遺物 (84) S X P98 土器	……191
第 108 图	石器集中部 (8) S X Q100	……150	第 138 图	遺構内出土遺物 (85) S X S29①	……192
第 109 图	遺構内出土遺物 (67) S X Q100① 土器・石器	……152	第 139 图	遺構内出土遺物 (86) S X S29②	……193
第 110 图	遺構内出土遺物 (68) S X Q100②	……153	第 140 图	石器集中部 (12) S X Q01・31・32	……195
第 111 图	遺構内出土遺物 (69) S X Q100③	……154	第 141 图	遺構内出土遺物 (87) S X Q01	……196
第 112 图	遺構内出土遺物 (70) S X Q100④	……155	第 142 图	石器集中部 (13) S X Q73・96	……197
第 113 图	遺構内出土遺物 (71) S X Q100⑤	……156	第 143 图	遺構内出土遺物 (88) S X Q73①	……198
第 114 图	遺構内出土遺物 (72) S X Q100⑥	……157	第 144 图	遺構内出土遺物 (89) S X Q73②	……199
第 115 图	石器集中部 (9) S X Q86・117	……159	第 145 图	遺構内出土遺物 (90) S X Q73③	……200
第 116 图	遺構内出土遺物 (73) S X Q117①	……160	第 146 图	遺構内出土遺物 (91) S X Q73④	……201
第 117 图	遺構内出土遺物 (74) S X Q117②	……161	第 147 图	石器集中部 (14) S X Q80	……203
第 118 图	遺構内出土遺物 (75) S X Q117③	……162	第 148 图	遺構内出土遺物 (92) S X Q73⑤・ 80①	……204
第 119 图	石器集中部 (10) S X Q121・123・124・ 129	……164	第 149 图	遺構内出土遺物 (93) S X Q80②	……205
第 120 图	遺構内出土遺物 (76) S X Q123①	……165	第 150 图	石器集中部 (15) S X Q92	……207
第 121 图	遺構内出土遺物 (77) S X Q121・ 123②	……166	第 151 图	遺構内出土遺物 (94) S X Q92①	……209
第 122 图	遺構内出土遺物 (78) S X Q124①	……167	第 152 图	接合関係图 (9) S X Q92①	……211
第 123 图	遺構内出土遺物 (79) S X Q124②・ 125①	……169	第 153 图	接合関係图 (10) S X Q92②	……212
第 124 图	石器集中部 (11) S X Q125	……171	第 154 图	遺構内出土遺物 (95) S X Q92②	……213
第 125 图	遺構内出土遺物 (80) S X Q125②	……173	第 155 图	遺構内出土遺物 (96) S X Q92③	……215
第 126 图	土坑 (1) S K56・97・118・148	……175	第 156 图	接合関係图 (11) S X Q92③	……218
第 127 图	遺構内出土遺物 (81) S K118 土器	……176	第 157 图	遺構内出土遺物 (97) S X Q92④	……219
第 128 图	遺構内出土遺物 (82) S K148, S Q34・ 35・77・90	……178	第 158 图	接合関係图 (12) S X Q92④	……221
第 129 图	集石炉 (2) S Q30・33	……179	第 159 图	接合関係图 (13) S X Q92⑤	……222
第 130 图	集石炉 (3) S Q30・34・35・37	……180	第 160 图	遺構内出土遺物 (98) S X Q92⑤	……223
第 131 图	集石炉 (4) S Q77・79・90	……182	第 161 图	遺構内出土遺物 (99) S X Q92⑥	……225
第 132 图	集石炉 (5) S Q103・127・149・152	……184	第 162 图	遺構内出土遺物 (100) S X Q92⑦	……226
第 133 图	集石炉 (6), 埴土遺構 (1), 礫集中 部 (1) S Q153・162, S N157,		第 163 图	遺構内出土遺物 (101) S X Q92⑧	……227
			第 164 图	遺構内出土遺物 (102) S X Q92⑨	……228
			第 165 图	遺構内出土遺物 (103) S X Q92⑩	……229
			第 166 图	遺構内出土遺物 (104) S X Q92⑪	……230
			第 167 图	遺構内出土遺物 (105) S X Q92⑫	……231

第 168 図	遺構内出土遺物 (106) S X Q92⑬	232	第 202 図	石器集中部 (20) S X Q156	275
第 169 図	遺構内出土遺物 (107) S X Q92⑭	233	第 203 図	石器集中部 (21) S X Q155・161	276
第 170 図	遺構内出土遺物 (108) S X Q92⑮	234	第 204 図	遺構内出土遺物 (132) S X Q160	277
第 171 図	遺構内出土遺物 (109) S X Q92⑯	235	第 205 図	竪穴住居跡 (1) S I 46	279
第 172 図	石器集中部 (15) S X Q96	236	第 206 図	竪穴住居跡 (2) S I 46 炉・S K163	280
第 173 図	遺構内出土遺物 (110) S X Q96①	237	第 207 図	遺構内出土遺物 (133) S I 46①土器・石器	281
第 174 図	接合関係図 (14) S X Q96	239	第 208 図	遺構内出土遺物 (134) S I 46②土器	282
第 175 図	遺構内出土遺物 (111) S X Q96②	241	第 209 図	竪穴住居跡 (3) S I 142, S K140	284
第 176 図	遺構内出土遺物 (112) S X Q96③	242	第 210 図	竪穴住居跡 (4) S I 142, S K140	285
第 177 図	遺構内出土遺物 (113) S X Q96④	243	第 211 図	竪穴状遺構 (3) S X H19	287
第 178 図	遺構内出土遺物 (114) S X Q96⑤	244	第 212 図	竪穴状遺構 (4) S X H19	288
第 179 図	遺構内出土遺物 (115) S X Q96⑥	245	第 213 図	遺構内出土遺物 (135) S X H19 土器・石器	289
第 180 図	遺構内出土遺物 (116) S X Q96⑦・99①・102①	246	第 214 図	土坑 (2) S K02・09・10	291
第 181 図	石器集中部 (16) S X Q99・102	248	第 215 図	土坑 (3) S K14・15・26	292
第 182 図	遺構内出土遺物 (117) S X Q99②	249	第 216 図	土坑 (4) S K27・28・69・74	294
第 183 図	接合関係図 (15) S X Q99	251	第 217 図	土坑 (5) S K47・108・109	295
第 184 図	遺構内出土遺物 (118) S X Q102②	252	第 218 図	遺構内出土遺物 (136) S K47, S X S48 土器・石器	298
第 185 図	遺構内出土遺物 (119) S X Q102③	253	第 219 図	土器集中部 (2) S X P11	299
第 186 図	遺構内出土遺物 (120) S X Q102④	254	第 220 図	遺構内出土遺物 (137) S X P11 土器・石器	300
第 187 図	遺構内出土遺物 (121) S X Q102⑤	255	第 221 図	石器集中部 (22) S X Q17	302
第 188 図	遺構内出土遺物 (122) S X Q102⑥	256	第 222 図	遺構内出土遺物 (138) S X Q17 土器・石器	303
第 189 図	石器集中部 (17) S X Q104	258	第 223 図	石器石材集積遺構 (3), 焼土遺構 (2), 石器集中部 (23) S X S48, S N08, S X Q20	304
第 190 図	遺構内出土遺物 (123) S X Q104① 土器・石器	259	第 224 図	遺構内出土遺物 (139) S X Q20	305
第 191 図	遺構内出土遺物 (124) S X Q104②	260	第 225 図	石器集中部 (24) S X Q21・43・55	306
第 192 図	遺構内出土遺物 (125) S X Q104③	261	第 226 図	遺構内出土遺物 (140) S X Q21	307
第 193 図	遺構内出土遺物 (126) S X Q104④	262	第 227 図	石器集中部 (25) S X Q22	308
第 194 図	遺構内出土遺物 (127) S X Q115・150①	263	第 228 図	石器集中部 (26) S X Q44	311
第 195 図	石器集中部 (18) S X Q115・141	264	第 229 図	遺構内出土遺物 (141) S X Q22 土器・石器, S X Q43①	312
第 196 図	石器集中部 (19) S X Q128・150・151・154・159・160	265	第 230 図	遺構内出土遺物 (142) S X Q43②・44①土器	313
第 197 図	遺構内出土遺物 (128) S X Q150②	267			
第 198 図	接合関係図 (16) S X Q150	269			
第 199 図	遺構内出土遺物 (129) S X Q150③	271			
第 200 図	遺構内出土遺物 (130) S X Q150④	273			
第 201 図	遺構内出土遺物 (131) S X Q151・154	274			

第 231 図	遺構内出土遺物 (143) S X Q44②土器・石器	314	第 255 図	溝状遺構 S D63・70・83・114	352
第 232 図	石器集中部 (27) S X Q45	316	第 256 図	遺構外出土遺物 (1) 土器①	354
第 233 図	遺構内出土遺物 (144) S X Q03・45	317	第 257 図	遺構外出土遺物 (2) 土器②	356
第 234 図	集石炉 (7), 焼土遺構 (3), 石器集中部 (28) S Q105, S N16, S X Q03	319	第 258 図	遺構外出土遺物 (3) 土器③	359
第 235 図	石器集中部 (29) S X Q24・87・143	320	第 259 図	遺構外出土遺物 (4) 土器④	361
第 236 図	遺構内出土遺物 (145) S X Q87	322	第 260 図	遺構外出土遺物 (5) 土器①	363
第 237 図	石器集中部 (30) S X Q138	323	第 261 図	遺構外出土遺物 (6) 土器②	365
第 238 図	遺構内出土遺物 (146) S X Q138①	324	第 262 図	遺構外出土遺物 (7) 土器③	367
第 239 図	遺構内出土遺物 (147) S X Q138②	325	第 263 図	遺構外出土遺物 (8) 土器④	369
第 240 図	遺構内出土遺物 (148) S X Q138③ 土器・石器	326	第 264 図	遺構外出土遺物 (9) 土器⑤	371
第 241 図	遺構内出土遺物 (149) S X Q138④	327	第 265 図	遺構外出土遺物 (10) 土器⑥	372
第 242 図	遺構内出土遺物 (150) S X Q138⑤・143	328	第 266 図	遺構外出土遺物 (11) 土器⑦	373
第 243 図	石組炉, 焼土遺構 (4) S Q54, S N12・40・41	331	第 267 図	遺構外出土遺物 (12) 土器⑧	374
第 244 図	遺構内出土遺物 (151) S Q54	332	第 268 図	遺構外出土遺物 (13) 土器⑨	375
第 245 図	遺構内出土遺物 (152) S N12・50 土器	333	第 269 図	遺構外出土遺物 (14) 土器⑩	376
第 246 図	焼土遺構 (5), 土器集中部 (3) S N49~53, S X P42	335	第 270 図	遺構外出土遺物 (15) 土器⑪	377
第 247 図	遺構内出土遺物 (153) S X P42 土器・石器, S X P04・65, S K140 土器	336	第 271 図	遺構外出土遺物 (16) 土器⑫	379
第 248 図	土坑 (6) S K04・05・13・18	339	第 272 図	遺構外出土遺物 (17) 土器⑬	381
第 249 図	土坑 (7) S K25・58・64・72	341	第 273 図	遺構外出土遺物 (18) 土器⑭	382
第 250 図	土坑 (8) S K111~113・119	342	第 274 図	遺構外出土遺物 (19) 土器⑮	383
第 251 図	土坑 (9) S K131~135	344	第 275 図	遺構外出土遺物 (20) 土器⑯	384
第 252 図	土坑 (10) S K144~147	346	第 276 図	遺構外出土遺物 (21) 土器⑰	386
第 253 図	ピット S K P59・61・76・81・82・120	348	第 277 図	遺構外出土遺物 (22) 土器⑱	387
第 254 図	土坑 (11), 焼土遺構 (6), 炭焼成遺構 S K88, S N84, S S106・107	350	第 278 図	S Q30 試料交流消磁後の磁化方向	417
			第 279 図	S Q35 試料交流消磁後の磁化方向	417
			第 280 図	S Q30 試料の伏角頻度分布	417
			第 281 図	S Q30 集石炉最終加熱時温度分布図	417
			第 282 図	MA51 区北壁土層柱状図	424
			第 283 図	MF51・ME56 区土層柱状図	425
			第 284 図	MA59・MC52 区土層柱状図	426
			第 285 図	MCライン土層における植物珪酸体分布結果	438

表目次

第 1 表	河岸段丘の区分の比較	9	第 5 表	石器観察表 (3)	391
第 2 表	周辺の遺跡	17	第 6 表	石器観察表 (4)	392
第 3 表	石器観察表 (1)	389	第 7 表	石器観察表 (5)	393
第 4 表	石器観察表 (2)	390	第 8 表	石器観察表 (6)	394

第 9 表	石器観察表 (7)	395	第 26 表	石器観察表 (24)	412
第 10 表	石器観察表 (8)	396	第 27 表	石器観察表 (25)	413
第 11 表	石器観察表 (9)	397	第 28 表	石器観察表 (26)	414
第 12 表	石器観察表 (10)	398	第 29 表	岩瀬遺跡採集試料一覧.....	416
第 13 表	石器観察表 (11)	399	第 30 表	岩瀬遺跡考古地磁気測定結果一覧.....	418
第 14 表	石器観察表 (12)	400	第 31 表	岩瀬遺跡のテフラ検出分析結果.....	423
第 15 表	石器観察表 (13)	401	第 32 表	岩瀬遺跡MA59 区のテフラ検出分析結果.....	427
第 16 表	石器観察表 (14)	402	第 33 表	岩瀬遺跡MCA52 区のテフラ検出分析結果.....	427
第 17 表	石器観察表 (15)	403	第 34 表	分析試料一覧.....	429
第 18 表	石器観察表 (16)	404	第 35 表	炭化材の樹種同定結果.....	432
第 19 表	石器観察表 (17)	405	第 36 表	岩瀬遺跡の珪藻化石産出表.....	434
第 20 表	石器観察表 (18)	406	第 37 表	植物珪酸体分析結果.....	437
第 21 表	石器観察表 (19)	407	第 38 表	主な分類群の植物体量の推定値.....	438
第 22 表	石器観察表 (20)	408	第 39 表	分析試料一覧.....	439
第 23 表	石器観察表 (21)	409	第 40 表	炭化材樹種同定結果.....	440
第 24 表	石器観察表 (22)	410			
第 25 表	石器観察表 (23)	411			

巻頭図版目次

巻頭図版 1	作業風景 (南▷) 岩瀬遺跡の立地 (東▷)	S Q35 西▷, S K02 北西▷
巻頭図版 2	IX層~XI層南▷, ME~MGライン西▷ 河道A・B東▷, 58ライン南▷ 河道C南西▷, MJライン南東▷ 河道C・D南東▷, 河道H・I北▷	巻頭図版 5 草創期の土器, 草創期の石匙 草創期の両面調整石器
巻頭図版 3	S X Q66 (南東▷), S X Q60 (南▷)	巻頭図版 6 S X Q36, S X Q104, S X Q104 裏
巻頭図版 4	S X Q91 北▷, S X Q100 北西▷ S X S95 南▷, S X Q92 北▷	巻頭図版 7 S X Q125, S X Q60
		巻頭図版 8 S X Q60, S X Q92
		巻頭図版 9 S X Q60, S X Q71
		巻頭図版 10 S X Q36, S X Q71, S X Q102

図版目次

図版 1 竪穴住居跡 S I 46 S I 46Pit11・S I 46 炉と S K163・S I 142	図版 6 土坑 (4) S K P65・S K64・S K111・ S K112・S K113・S K119・S K131
図版 2 竪穴状遺構 S X H66・S X H19	図版 7 土坑 (5) S K132・S K133・S K134・ S K135・S K144・S K145・S K146・ S K147・S K88
図版 3 土坑 (1) S K56・S K79・S K118・ S K148・S K09・S K10・S K14・S K15	図版 8 集石炉 (1) S Q68・S Q116・S Q30・ S Q33・S Q34・S Q37
図版 4 土坑 (2) S K26・S K27・S K28・ S K47・S K69・S K108・S K04	図版 9 集石炉 (2) S Q77・S Q79・S Q90・ S Q103・S Q127
図版 5 土坑 (3) S K109・S K05・S K13・ S K18・S K25・S K P59・S K58・S K72	

図版 10 集石炉 (3)・石組炉 SQ149・SQ152・
 SQ153・SQ162・SQ105・SQ54
 図版 11 焼土遺構 (1)・SN157・SN08・SN16・
 SN41・SN40・SN50・SN49
 図版 12 焼土遺構 (2)・炭焼成遺構 SN50・
 SN53・SN52・SN51・SN84・SS106・
 SS107
 図版 13 礫集中部 SXR75・SXR126・SXR136・
 SXR139
 図版 14 土器集中部 SXP98・SXP11・SXP42
 図版 15 石器石材集積遺構 SXS57・SXS94・
 SXS95・SXS29・SXS48
 図版 16 石器集中部 (1) SXQ36・SXQ60
 図版 17 石器集中部 (2) SXQ60 炉 1・
 SXQ60 炉 4・SXQ60 炉 5・
 SXQ60・SXQ60 台石下
 図版 18 石器集中部 (3) SXQ73・SXQ71・
 SXQ85・SXQ86・SXQ89・SXQ91
 図版 19 石器集中部 (4) SXQ93・SXQ117・
 SXQ100・SXQ121・SXQ122
 図版 20 石器集中部 (5) SXQ123・SXQ124・
 SXQ125・SXQ129・SXQ01・SXQ31・
 SXQ32
 図版 21 石器集中部 (6) SXQ32・SXQ73
 SXQ80・SXQ99・SXQ96
 図版 22 石器集中部 (7) SXQ104・SXQ115・
 SXQ128・SXQ150
 図版 23 石器集中部 (8) SXQ151・SXQ154・
 SXQ155・SXQ156・SXQ159・SXQ160
 図版 24 石器集中部 (9) SXQ161・SXQ17・
 SXQ20・SXQ21・SXQ22・SXQ43
 図版 25 石器集中部 (10) SXQ44・SXQ45・
 SXQ03・SXQ24・SXQ87・SXQ138
 図版 26 草創期接合資料 (1) SXQ71・SXQ85・
 SXQ36
 図版 27 草創期接合資料 (2) SXQ85・SXQ71・
 SXQ36
 図版 28 草創期接合資料 (3) SXQ36・SXQ71・
 SXQ85

図版 29 草創期接合資料 (4) SXQ71・SXQ36・
 SXQ85
 図版 30 草創期接合資料 (5) SXQ36・SXQ117・
 SXQ71
 図版 31 草創期接合資料 (6) SXQ71・SXQ36
 図版 32 草創期接合資料 (7) SXQ71・SXQ36
 図版 33 草創期接合資料 (8) SXQ36・SXQ71・
 SXQ85
 図版 34 草創期接合資料 (9) SXQ60
 図版 35 草創期接合資料 (10) SXQ60
 図版 36 草創期接合資料 (11) SXQ60
 図版 37 草創期接合資料 (12) SXQ60
 図版 38 草創期接合資料 (13) SXQ60
 図版 39 草創期接合資料 (14) SXQ60
 図版 40 草創期接合資料 (15) SXQ60
 図版 41 草創期接合資料 (16) SXQ60
 図版 42 草創期接合資料 (17) SXQ60
 図版 43 草創期接合資料 (18) SXH66
 図版 44 草創期接合資料 (19) SXQ124・SXH66
 図版 45 草創期接合資料 (20) SXQ125・SXS95
 図版 46 草創期接合資料 (21) SXQ100・SXQ123
 図版 47 早期接合資料 (1) SXQ92
 図版 48 早期接合資料 (2) SXQ92・SXQ73
 図版 49 早期接合資料 (3) SXQ92
 図版 50 早期接合資料 (4) SXQ73・SXQ102・
 SXQ80
 図版 51 早期接合資料 (5) SXQ92
 図版 52 早期接合資料 (6) SXQ92・SXQ102・
 SXQ80
 図版 53 早期接合資料 (7) SXQ102・SXQ92
 図版 54 早期接合資料 (8) SXQ102・SXQ92
 図版 55 早期接合資料 (9) SXQ73・SXQ92
 図版 56 早期接合資料 (10) SXQ96
 図版 57 早期接合資料 (11) SXQ96
 図版 58 早期接合資料 (12) SXQ104
 図版 59 早期接合資料 (13) SXQ104
 図版 60 早期接合資料 (14) SXQ138
 図版 61 早期接合資料 (15) SXQ150
 図版 62 早期接合資料 (16) SXQ150・SXQ99・

S X Q160

- 図版 63 遺構内出土石器 (1) S X H66
図版 64 遺構内出土石器 (2) S X H66・S X S95
図版 65 遺構内出土石器 (3) S X S95
図版 66 遺構内出土石器 (4)・土器 (1) S X Q36
図版 67 遺構内出土石器 (5) S X Q36・S X Q60
図版 68 遺構内出土石器 (6) S X Q60
図版 69 遺構内出土石器 (7) S X Q71・S X Q85・
S X Q89
図版 70 遺構内出土石器 (8) S X Q86・S X Q100
図版 71 遺構内出土石器 (9) S X Q100・S X Q117
図版 72 遺構内出土石器 (10)・土器 (2) S X Q117・
S K118
図版 73 遺構内出土石器 (11)・土器 (3) S Q34・
S X Q141・S Q01・S I46
図版 74 遺構内出土石器 (12) S X Q73・S X Q80・

S X Q92・S X Q96

- 図版 75 遺構内出土石器 (13)・土器 (4) S X Q104・
S X Q150・S X Q115・S X Q151・S X Q154・
S X H19・S I46
図版 76 遺構内出土石器 (14)・土器 (5) S X P11・
S X Q17・S X Q20
図版 77 遺構内出土石器 (15)・土器 (6) S X Q22・
S X Q43・S X Q138・S X Q44・S X Q45
図版 78 遺構内出土石器 (16)・土器 (7) S Q54・
S N12・S N50・S K140・S X P42
図版 79 遺構外出土石器 (1)・土器 (1)
図版 80 遺構外出土石器 (2)
図版 81 珪藻化石と植物珪酸体の顕微鏡写真
図版 82 植物珪酸体の顕微鏡写真
図版 83 炭化材の顕微鏡写真

付図1 岩瀬遺跡遺構配置図

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮と県内の陸上交通体系の改善など、地域の生産活動と住民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的に計画された高速道路である。道路は、東北自動車道から岩手県北上市で分岐し、横手市―大曲市を経て秋田市に至る総延長108Kmに及んでいる。このうち、秋田―横手間57.4Kmについては、昭和53年11月の第8次施行命令によって具体化し既に平成3年7月に、また、横手―湯田間については平成7年11月に供用が開始されている。

秋田―横手間の、道路計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の扱いについては、昭和60年4月に日本道路公団と秋田県教育委員会との間で協議した結果、計画路線の変更が無理であることなどから、記録保存の措置を取ることで合意した。そして、昭和60年の河辺郡河辺町七曲地区に所在する6遺跡を皮切りに、平成元年度の仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅱ遺跡まで、合計27遺跡の発掘調査が実施され、それぞれに報告書が刊行されている。

横手インター・チェンジ（I・C）以東の横手―湯田間19.7kmについては、昭和61年3月に第9次施工命令が下された。これに伴い昭和62年3月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和62年5月と同63年6月に遺跡分布調査を実施し、平鹿郡山内村の計画路線内に11遺跡が存在することを報告した。また、横手I・C以東の横手市分についての分布調査は、横手―秋田間の分布調査と同時に、昭和56年と同58年に実施され、4遺跡の存在することが報告されていた。これら計画路線上に存在する合計15遺跡の取り扱いについては、昭和60年の日本道路公団と秋田県教育委員会の合意を踏襲することとした。15遺跡は横手I・Cから北上市側に、柳田Ⅰ・柳田Ⅱ・小松原・新町遺跡（以上、横手市）、茂竹沢・小田Ⅲ・小田Ⅱ・小田Ⅰ・虫内Ⅱ・虫内Ⅰ・岩瀬・中島・相野々・上谷地・越上遺跡（以上、山内村）である。

発掘調査に先立って、横手市分として昭和62年には柳田Ⅰ・柳田Ⅱ遺跡、平成元年には小松原遺跡西半部、平成2年には小松原遺跡東半部と新町遺跡南半部、平成3年には新町遺跡北半部の範囲確認調査を実施した。その結果、柳田Ⅰ・柳田Ⅱ・小松原遺跡については遺跡の範囲が計画路線に及んでおらず、また新町遺跡北半部については宅地造成などによる攪乱が著しく遺構等が遺存していないため、これらは発掘調査の必要がないと判断された。

山内村分の遺跡範囲確認調査は、平成2年に虫内Ⅰ遺跡、平成3年に茂竹沢・虫内Ⅱ・岩瀬・中島・力石Ⅱ・越上遺跡、平成4年に小田Ⅴ・小田Ⅳ・虫内Ⅲ・相野々・上谷地遺跡について実施した。その結果、中島・相野々・力石Ⅱ遺跡については遺跡の範囲が計画路線内には及ばないことから調査が不要となった。なお平成2年に、虫内Ⅰ遺跡の南東側と虫内Ⅱ遺跡の西側、および上谷地遺跡の東側で縄文時代の遺物が採集され、この3つの地点にも遺跡の存在することが判明したことから、各々を虫内Ⅲ遺跡・小田Ⅳ遺跡・力石Ⅱ遺跡として登録し、範囲確認調査を行っている。これらのことから、横断道山内村分の発掘調査対象遺跡は、岩手県側から順に越上・上谷地・岩瀬・虫内Ⅲ・虫内Ⅰ・虫内Ⅱ・小田Ⅳ・小田Ⅴ・茂竹沢遺跡の9遺跡となったのである。

横手市の1遺跡・山内村の9遺跡に対する発掘調査は、平成2年度の新町遺跡から開始され、平成3年には越上遺跡、岩瀬遺跡の一部、虫内Ⅰ遺跡の一部、虫内Ⅱ遺跡、茂竹沢遺跡が、平成4年には上谷地遺跡、虫内Ⅲ遺跡、虫内Ⅰ遺跡の一部、小田Ⅳ遺跡、平成5年には小田Ⅴ遺跡、虫内Ⅰ遺跡の一部、岩瀬遺跡の残り部分が実施されている。また、これらの遺跡のうち、新町遺跡、茂竹沢遺跡、虫内Ⅱ遺跡、越上遺跡の発掘調査報告書が平成5年3月に、上谷地遺跡、小田Ⅳ遺跡、虫内Ⅲ遺跡の発掘調査報告書が平成6年3月に刊行されている。

平成6年10月14日から10月23日まで、大曲仙北広域交流センター（大曲市）において、東北横断自動車道秋田線（秋田市ー山内村間）発掘調査終了記念展を開催し、出土遺物、写真パネル等を展示した。10日間の期間中、計2,945人の入場者があり盛況を博した。

なお、岩瀬遺跡は、平成3年度に工事区域内遺跡範囲の全域を発掘調査する予定であったが、下記の経緯を経て、平成3年度と平成5年度の2ヵ年度に分けて調査することとなった。

平成3年度は、排土置き場の考慮から西側下段より調査を開始した。ところが6月後半の段階で、当初予想していなかった礫層に近い砂質土から、まとまりをもった石器や集石炉が検出されてきた。そして、包含層が細かく分かれる所もあり、これらの文化層が西側の深い所に堆積することも分かってきたのである。さらに、東側上段で試掘調査を行ったところ、黒色土下の砂質土は無論のこと、岩盤上の礫層中にも遺物の存在が確認された。この時点で、遺構の調査および排土の掘削量を考慮して、当該年度で調査区全域を終了することは不可能と判断した。以上の経過より、上段の調査に伴う予算措置と併せて、次年度の調査の延期が決定されたのである。

しかし、平成4年度は工事計画の関係で、虫内Ⅰ遺跡・虫内Ⅲ遺跡・小田Ⅳ遺跡・上谷地遺跡の調査が優先することになった。そのために、岩瀬遺跡の調査は平成5年度まで待つことになったのである。なお2年間の調査では、下段が排土の関係で2つの区域に、上段でも工事用道路の関係でやはり2つの区域に分けて調査を行っている。

第2節 調査の組織と構成

遺跡名	岩瀬遺跡	
遺跡所在地	秋田県平鹿郡山内村土淵字岩瀬 144-1 外	
調査期間	平成3年5月27日～11月22日 平成5年5月6日～11月19日	
調査面積	4,180㎡（平成3年度1,580㎡、平成5年度2,600㎡）	
調査主体者	秋田県教育委員会	
専門指導員		
	(平成3年度)	小林 達雄 国学院大学文学部教授
		林 謙作 北海道大学文学部助教授（現 教授）
		岡村 道雄 文化庁記念物課文化財調査官（現 主任文化財調査官）
		板垣 直俊 由利郡鳥海町立川内中学校教諭 （現 由利郡由利町立由利中学校教諭）
	(平成5年度)	小林 達雄 国学院大学文学部教授
		林 謙作 北海道大学文学部助教授（現 教授）
		岡村 道雄 文化庁記念物課主任文化財調査官
		板垣 直俊 由利郡鳥海町立川内中学校教諭 （現 由利郡由利町立由利中学校教諭）
調査担当者		
	(平成3年度)	利部 修（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
		小林恵美子（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
	(平成5年度)	利部 修（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
		谷地 薫（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
		榮 一郎（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
		佐野 浩子（秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
総務担当者		
		佐田 茂（秋田県埋蔵文化財センター主査） （現 秋田県教育庁福利課課長補佐）
		皆川 清（秋田県埋蔵文化財センター主査） （現 秋田県立横手工業高等学校主査）

第1章 はじめに

佐々木 真 (秋田県埋蔵文化財センター主任、主査)

(現 秋田県立博物館主査)

藤肥 良清 (秋田県埋蔵文化財センター主査)

佐藤 広文 (秋田県埋蔵文化財センター主事、主任)

須田 輝樹 (秋田県埋蔵文化財センター主事)

調査協力機関 山内村・山内村教育委員会、横手市・横手市教育委員会
平鹿町・平鹿町教育委員会

参考文献

- 1：秋田県教育委員会 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ～Ⅺ」 秋田県文化財調査報告書第150・166・180・186・189～191・205～207・209集 1986～1991(昭和61～平成3年)
- 2：秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第93集 1982(昭和57年)
- 3：秋田県教育委員会 「遺跡詳細分布調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第179・201・217・226集 1989～1992(平成元～4年)
- 4：小田Ⅰ・小田Ⅱ・小田Ⅲ遺跡については、横断道の分布調査の際に付した遺跡名が、既に別の遺跡として遺跡地図に登録されていたことが判明したと、地形的には1遺跡とするのが妥当であること等から、これらをまとめて小田Ⅴ遺跡とした。
- 5：秋田県教育委員会 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅻ－新町遺跡－」 秋田県文化財調査報告書第232集 1993(平成5年)
- 6：秋田県教育委員会 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅼ－茂竹沢遺跡－」 秋田県文化財調査報告書第233集 1993(平成5年)
- 7：秋田県教育委員会 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅭⅣ－虫内Ⅱ遺跡－」 秋田県文化財調査報告書第234集 1993(平成5年)
- 8：秋田県教育委員会 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅭⅤ－越上遺跡－」 秋田県文化財調査報告書第235集 1993(平成5年)
- 9：秋田県教育委員会 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅭⅥ－上谷地遺跡－」 秋田県文化財調査報告書第241集 1994(平成6年)
- 10：秋田県教育委員会 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅭⅦ－虫内Ⅲ遺跡－」 秋田県文化財調査報告書第242集 1994(平成6年)
- 11：秋田県教育委員会 「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅭⅧ－小田Ⅳ遺跡－」 秋田県文化財調査報告書第243集 1994(平成6年)
- 12：秋田県埋蔵文化財センター 「もうすぐ歴史が見えてくる－東北横断自動車道秋田線(秋田市－山内村間)発掘調査終了記念誌－」 1994(平成6年)

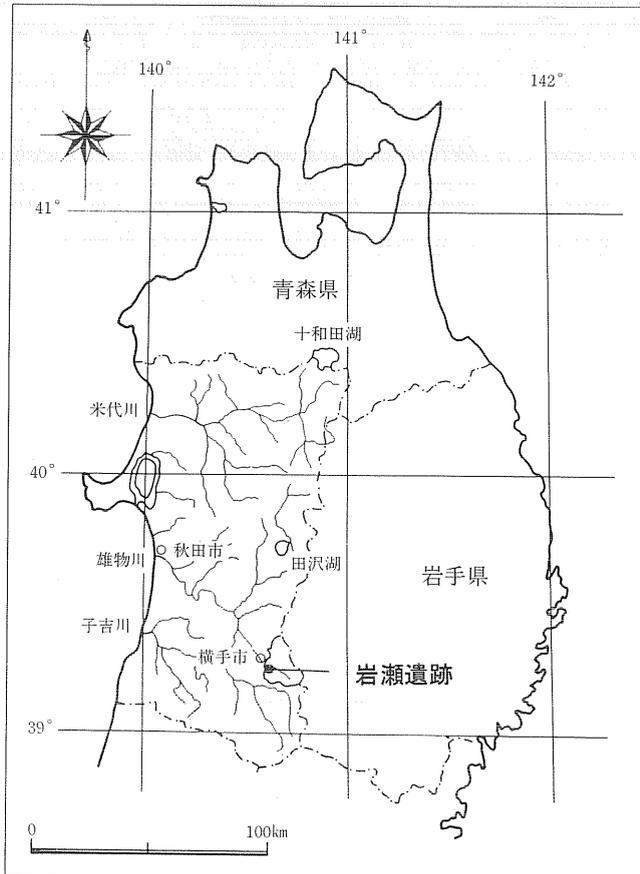
第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と立地

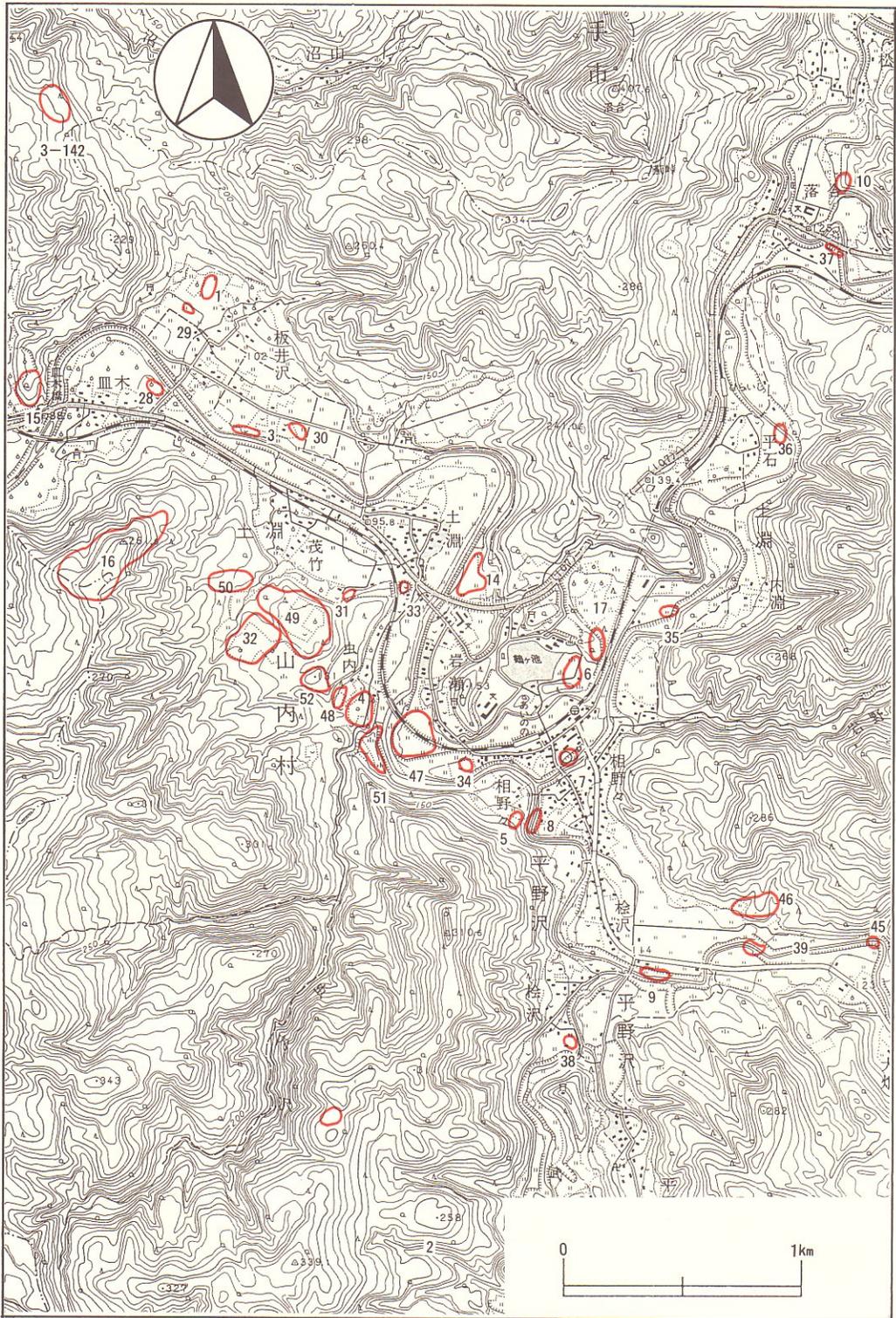
岩瀬遺跡は、平鹿郡山内村土淵字岩瀬地内に所在する。遺跡が位置する山内村は秋田県の南東部にあたり、秋田県と岩手県を隔てる奥羽山脈西側の山々に囲まれた典型的な山村で、村全体の87%は山林原野である。現在の集落は、奥羽山脈中に水源を発する横手川・松川・黒沢川・武道川の、4河川の流域に形成された河岸段丘上に立地している。

遺跡は、JR東日本北上線相野々駅から直線で西方約500mに位置する。北緯 $39^{\circ}16'30''$ 、東経 $140^{\circ}36'59''$ を中心とする区域である。

遺跡は、横手川右岸に形成された、標高約103mの河岸段丘上に立地している。雄物川の支流である横手川は、秋田・岩手両県の県境となっている奥羽山脈の甲山一帯(標高700~1,000m)



第1図 岩瀬遺跡の位置



第2図 横手I・C以东の路線と遺跡

の山地を縫うように西流し、横手盆地中央部の東端に出る中規模の河川である。岩瀬遺跡の立地する低位段丘は、山内村南郷方面から西流して来た横手川が羅婆王山（らばおうさん、標高310.6m）の北裾で大きく蛇行し流路を北北東に変える屈曲部の東側に形成されている。そして、南～西側を横手川の現流路と旧流路によって囲まれた格好になっている。横手川の、現河川との比高差は約9mである。

第2節 地形と地質

1 地形と地質の概況

(1) はじめに

ここで対象とする地域を第3図の地域とする。本地域は山内村の西端に位置する、4km四方の地域である。本地域には33カ所の遺跡が確認されているが、その中で8遺跡が東北自動車道秋田線建設事業に係る発掘調査の対象となっている。

(2) 地形の概況

本地域は雄物川の支流である横手川とその支流黒沢川・武道川の流域に位置し、地形的には、山地と河岸段丘および氾濫原・谷底平野に区分される。

山地は河川によって区分され、秋田県（1976）によると、西部と南部の金峰山山地、南東部の大日向山山地、東部の大穴峠山地、北部の御岳山山地の4つに分けられる。いずれの山地も標高250～350mの中起伏山地が大部分を占めている。本地域の最高峰は東端部にある天竺森（標高368m）である。

河岸段丘は横手川と黒沢川に沿って、500m～1kmの幅で分布しているが、武道川沿いでは発達が少ない（詳細は後述）。

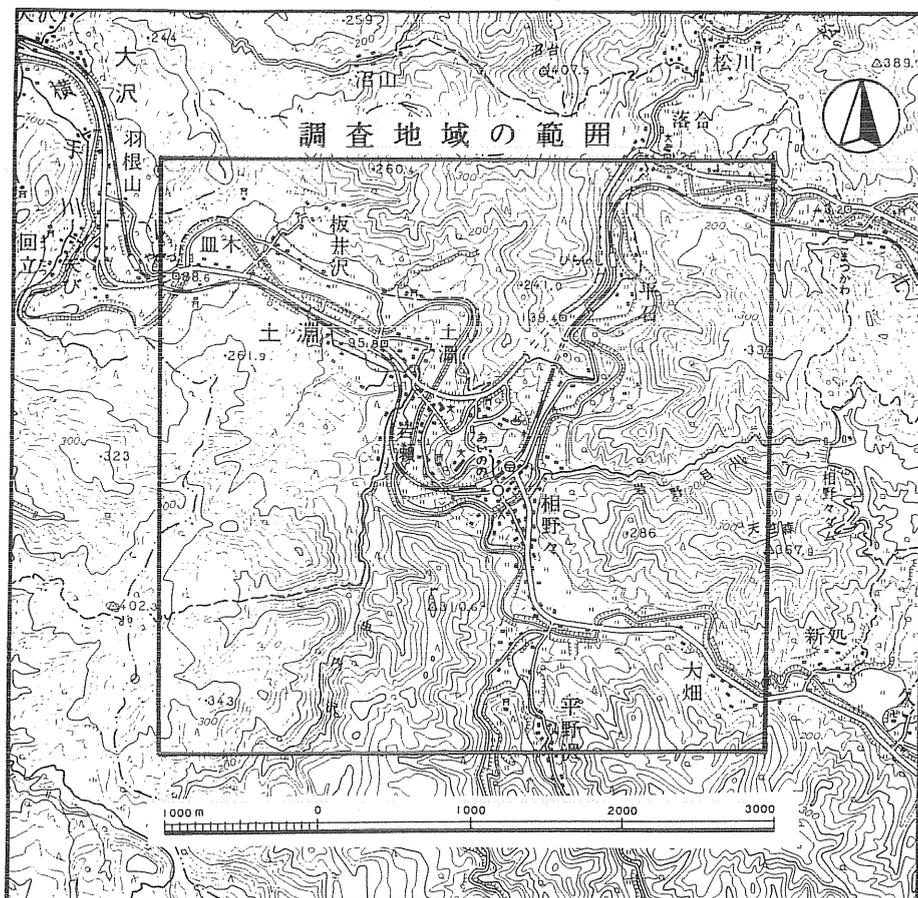
氾濫原は横手川と黒沢川の現河床沿いに僅かに分布する程度である。また、谷底平野は武道川沿いと小さな谷沿いにいくつかの分布がみられる。

(3) 地質の概況

本地域の地質は、河岸段丘堆積物を除くと、古い順に山内層・相野々層・黒沢層（いずれも新第三紀中新世）に区分される（第4図）。

山内層は淡灰褐色～褐色の硬質泥岩で、層理が発達しており板状に割れる性質がある。横手市東方の山地に広く分布し、本地域では相野々よりも西方の山地を形成している地層である。

相野々層は主として黒色泥岩からなり、一部では石灰質の団塊や凝灰質砂岩を含む。また、最下部に灰白質～白色の石英安山岩質凝灰岩の薄い層をはさむ。山内層の上に不整合にのり、西は横手市の中山丘陵から、東は横手川・黒沢川の流域に広く分布する。本地域では相野々よ



第3図 対象地域

りも東方に分布し、平野沢集落付近では、石英安山岩質凝灰岩がみられる。

黒沢層は主として青灰色～暗灰色の細粒砂岩、砂質シルト岩からなり、相野々層とは整合であり、若干指交関係をなすが、やや斜交して黒沢層が上位となる。横手川・黒沢川の流域に分布するが、相野々層よりは分布範囲が狭い。本地域では東南部の横手川沿いにみられる。

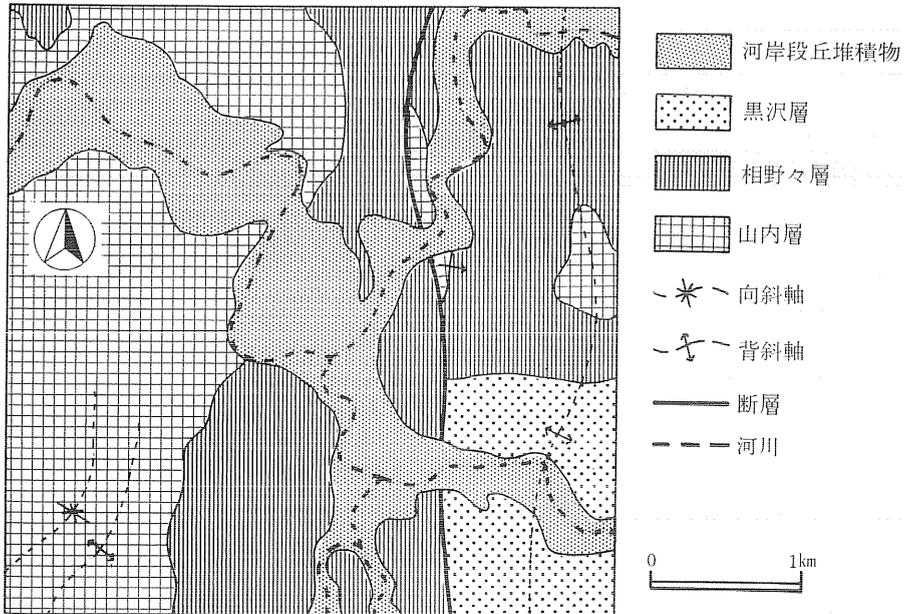
河岸段丘堆積物は横手川・黒沢川の河川沿いに発達し、礫・砂および泥からなり、厚さは数m程度である。

本地域は断層と褶曲によって複雑な地質構造を示している。本地域の東部には、平野沢断層が南北に縦断しており、さらにその東方には、断層と平行に背斜軸がみられる。また、南部にもいくつかの背斜・向斜構造がみられ、複雑な構造を物語っている。

(4) 河岸段丘について

① これまでの研究

本地域の河岸段丘については、これまでいくつかの研究例がある(第1表)。



第4図 対象地域の地質図

第1表 河岸段丘の区分の比較

中川ほか (1971)	秋田県 (1976)	TOYOSIMA (1984)	本 稿
外 山 段 丘	砂礫段丘 I ⁺		
相野々高位段丘	砂礫段丘 I	横手沢段丘	横手沢段丘
相 野 々 段 丘	砂礫段丘 II	岩瀬段丘	岩瀬段丘
長 瀬 段 丘	砂礫段丘 III ⁺	板井沢段丘	板井沢段丘
土 淵 段 丘	砂礫段丘 III	南郷段丘	南郷 (I~III) 段丘
季 原 段 丘	砂礫段丘 IV ⁺		土淵段丘
回 立 段 丘	砂礫段丘 IV 礫段丘 V		

中川ほか (1971) では、脊梁山脈とその両側の低地帯における第四紀の地変について考察を進めようと、横手川・黒沢川の河岸段丘と和賀川の河岸段丘の対比を行い、横手川・黒沢川流域では7つに段丘を区分している (第5図)。

秋田県 (1976) では、ほぼ中川ほか (1971) の段丘区分を踏襲しながら、さらに詳細な段丘面区分図を作製し、最も新しい砂礫段丘Vを加えて、全部で8段丘に区分している。

TOYOSHIMA (1984) では、2万年以後の河岸段丘の発達過程を調査するために横手川・黒沢川流域を取り上げ、板井沢段丘を filltop terrace (砂礫堆積段丘)、南郷段丘を板井沢段丘を侵食した fillstrath terrace (砂礫侵食面段丘) であると考えた。さらには¹⁴Cの年代測定資料から、板井沢・南郷両段丘の形成年代を約23,000年前よりも新しく、約12,000年前よりも古いと考えている。

② 段丘の区分と対比

本稿では、これまでの研究の中から、TOYOSHIMA (1984) の段丘の区分を踏襲しながらも、南郷段丘をさらにⅠ～Ⅲの3つに区分し、現河床とほとんど同じ高度の最も低い段丘を「土淵段丘」と命名した(第1表)。

中川ほか(1971)の外山段丘と回立段丘および秋田県(1976)の砂礫段丘Ⅴは、調査地域内には分布しないので、本稿では省略した。

a 横手沢段丘

調査地域内では最も高位の段丘で、模式地は横手市の横手沢両岸であるが、本地域では、相野々～落合の黒沢川左岸と横手川の大畑に僅かに分布する。標高は相野々付近では140～160mであるが、落合では高度を増し、180～200mとなる。かなり開析が進んだ段丘面がみられる。堆積物については不明である。

b 岩瀬段丘

調査地域中央鶴ヶ池付近とその対岸である小田遺跡周辺、および相野々南西に分布する。標高は120～130mで段丘面の開析度は横手沢段丘よりも小さく、平坦面が残る。安山岩を主体とする最大直径50cmの風化した円礫層が5m以上堆積しており、その上に1～2.5mの角礫混じりの砂質粘土層が発達している。本段丘は中川ほか(1971)によると、下末吉面(約12～13万年前)に対比される。

c 板井沢段丘

下位の南郷段丘の山沿いに断片的に分布し、板井沢東方、その対岸の茂竹沢付近、相野々南方などでみられる。段丘面が山側から河谷側に傾斜し、標高は110～140mに及ぶ。本調査では確認できなかったが、TOYOSHIMA (1984) によると、本段丘は filltop terrace (砂礫堆積面段丘) でその構成層は砂やシルトを多く含む亜円礫・亜角礫からなり、層厚は10m以上にも達する。岡田ほか(1972)によると、本段丘に対比される横手川上流の三又付近の段丘堆積物の上部の泥炭から $23,200 \pm 1,100$ yr B.P. という ^{14}C 年代が得られており、本段丘の堆積面は約23,000年以後に形成されたことが明らかになっている。

d 南郷段丘

本地域に最も広く分布する段丘で、横手川・黒沢川に沿って連続的に跡をたどることができる。TOYOSHIMA (1984) では同一の段丘と考えていたが、段丘崖が認められることや標高の違いから、本稿ではⅠ・Ⅱ・Ⅲの3段丘に細分した。標高は、岩瀬付近では南郷Ⅰ段丘が107～110m、南郷Ⅱ段丘が104～106m、南郷Ⅲ段丘が101～103mである。

TOYOSHIMA (1984) によると、本段丘は fillstrath terrace (砂礫侵食面段丘) で、板井沢段丘を侵食して形成され、埋積堆積物の上に2～5mの薄い円礫層が堆積している。本調査で



- | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| ----- 河川 |  南郷Ⅰ段丘 |
|  横手沢段丘 |  南郷Ⅱ段丘 |
|  岩瀬段丘 |  南郷Ⅲ段丘 |
|  板井沢段丘 |  土淵段丘 |

第5図 調査地域の段丘区分図

は、埋積堆積物の上に薄い円礫層が堆積している露頭は発見できなかったが、南郷Ⅰ～Ⅲのいずれの段丘にも厚さが5m以下の薄い円礫層が堆積していることを確認できた。

TOYOSHIMA (1984) は横手川上流で南郷段丘を覆う沖積錐に含まれる木片から 12,780 ±

340 yr B. P. という ^{14}C 年代を得ている。したがって、南郷Ⅰ段丘は少なくとも約 12,000 年前には形成されていたことが明らかである。TOYOSHIMA (1984) は、板井沢段丘と南郷段丘にみられる河谷の堆積と侵食は、東北地方の山間地域の諸河川流域では数多くみられることを、現地調査によって確かめており、このような河岸段丘の形成が最終氷期後半に東北地方で一般的であったと考えている。

e 土淵段丘

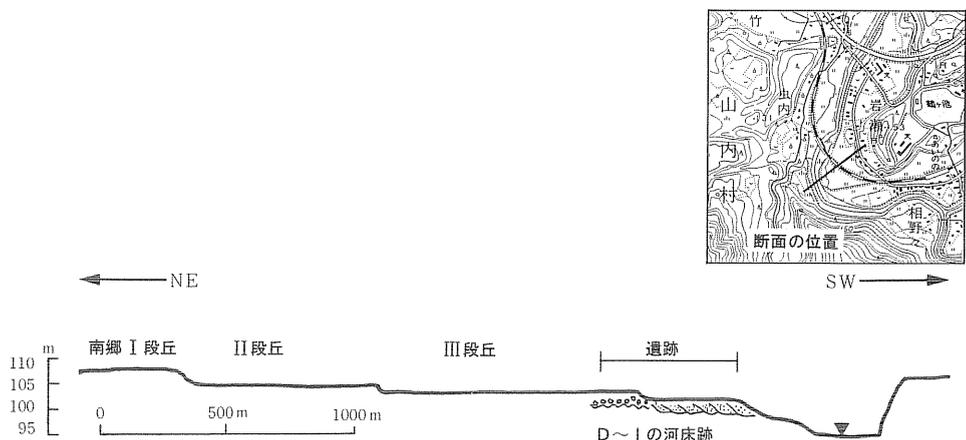
本地域で最も低位の沖積段丘で、土淵から板井沢にかけてと、黒沢川の現河川沿いに断片的に分布する。標高は岩瀬付近で 98~100m であり、相野々駅北では段丘面が旧河道として残っている。堆積物は現河床と同じような円礫であるが、厚さは不明である。

2 遺跡の地形と地質

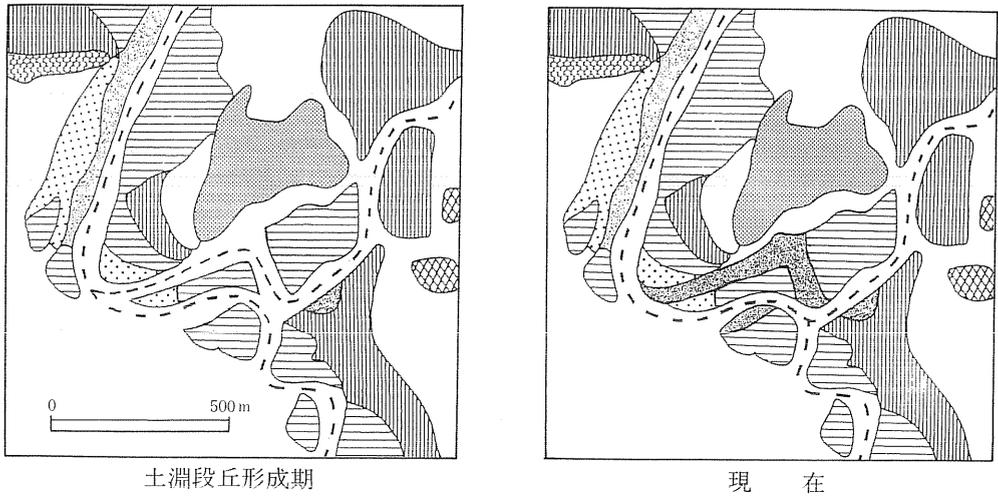
本遺跡は蛇行する横手川右岸、滑走斜面側（凸岸側）の河岸段丘上に位置している。本遺跡が位置する河岸段丘は南郷Ⅲ段丘で、 ^{14}C 年代によって約 12,000 年前よりも古いことが明らかである南郷Ⅰ段丘よりも 2 段低い段丘である。遺跡の標高は東側では約 103m、西側では約 101m で中央部に南北方向に約 1.5m の段差がある。西側は堆積物の状態から南郷Ⅲ段丘が下刻される途中に生じた副次的な段丘と考え、東側と同じ南郷Ⅲ段丘に含めた（第 6 図）。

本遺跡では、基盤となる硬質泥岩（山内層）の上に南郷Ⅲ段丘を構成する層厚約 1~2.3m の段丘礫層がのる。礫は直径約 10~20cm の大礫が多いが、希に直径 40cm 程度の巨礫も含む。この南郷Ⅲ段丘構成層に不整合に、東側では A~D の 4 層の礫層が、西側ではさらに E~I の 5 層の礫層が堆積している（第 8・13・14 図）。A~I の礫層中の礫は、いずれも南郷Ⅲ段丘構成層よりも直径が小さく、基質の細礫や砂を多く含んでいる。

本遺跡に隣接して東方に土淵段丘に対比される低地が存在するが、この低地は航空写真の判



第 6 図 河岸段丘の断面図



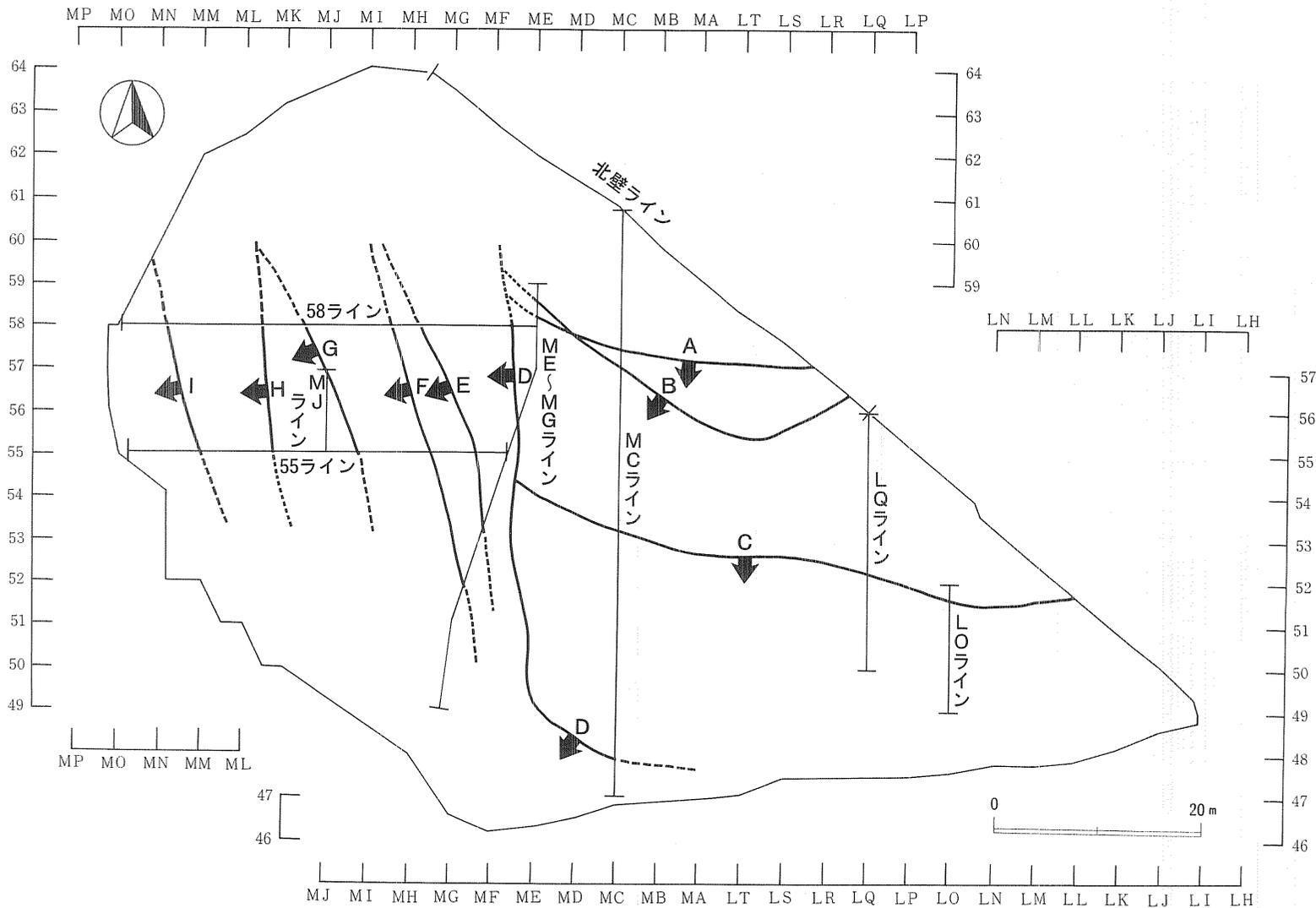
第7図 河床の変動

読から黒沢川の旧河道と考えられる。現在横手川と黒沢川は相野々集落で合流しているが、土淵段丘形成期には、現在の合流点よりも約500m西方の遺跡の南で合流していた。しかし、黒沢川の蛇行が進むにつれて、黒沢川が相野々駅の約200m南で横手川に合流し、そのために相野々集落から岩瀬集落方向に流れる黒沢川の河道は陸化したと考えられる(第7図)。この黒沢川の旧河道は、土淵段丘よりも古い南郷Ⅲ段丘形成期には、その西端は現在の旧河道よりも北を流下し、流れの方向を西～北西～北と変えていっていることを、河岸段丘との関係から推測できる。本遺跡は、この黒沢川が蛇行しながら流路を変えていく位置に立地している。

以上のことから、本遺跡中に見られる礫層は、かつての黒沢川・横手川の河床で、両河川が南郷Ⅲ段丘を下刻していく約1万年前後の間に南郷Ⅲ段丘構成層を侵食するとともに、滑走斜面側にA～Iの順に侵食と堆積を繰り返していったものと考えられる。

参考文献

- 秋田県「雄平仙中核都市建設計画地域土地分類基本調査 横手」(1976)
 秋田県「秋田県総合地質図幅 横手」(1977)
 中川久夫ほか「北上線沿線の段丘群」東北大地質古生物研邦報 No. 71 p47-59 (1971)
 岡田篤正ほか「奥羽山脈内秋田県平鹿郡山内村三叉における堆積段丘の形成年代」地球科学 26 p263-264 (1972)
 TOYOSHIMA, M. 「The Sequence of River Terrace Development in the Last 20,000 Years in the Ou Backborn Range, Northeastern Japan」 Reprinted from the Science Reports of the Tohoku University. 7th Series (Geography) 342 (1984)
 豊島正幸「過去2万年の下刻過程にみられる10年オーダーの侵食段丘形成」地形 104 p309-321 (1989)



第8図 河道の変動略図

第3節 周辺の遺跡

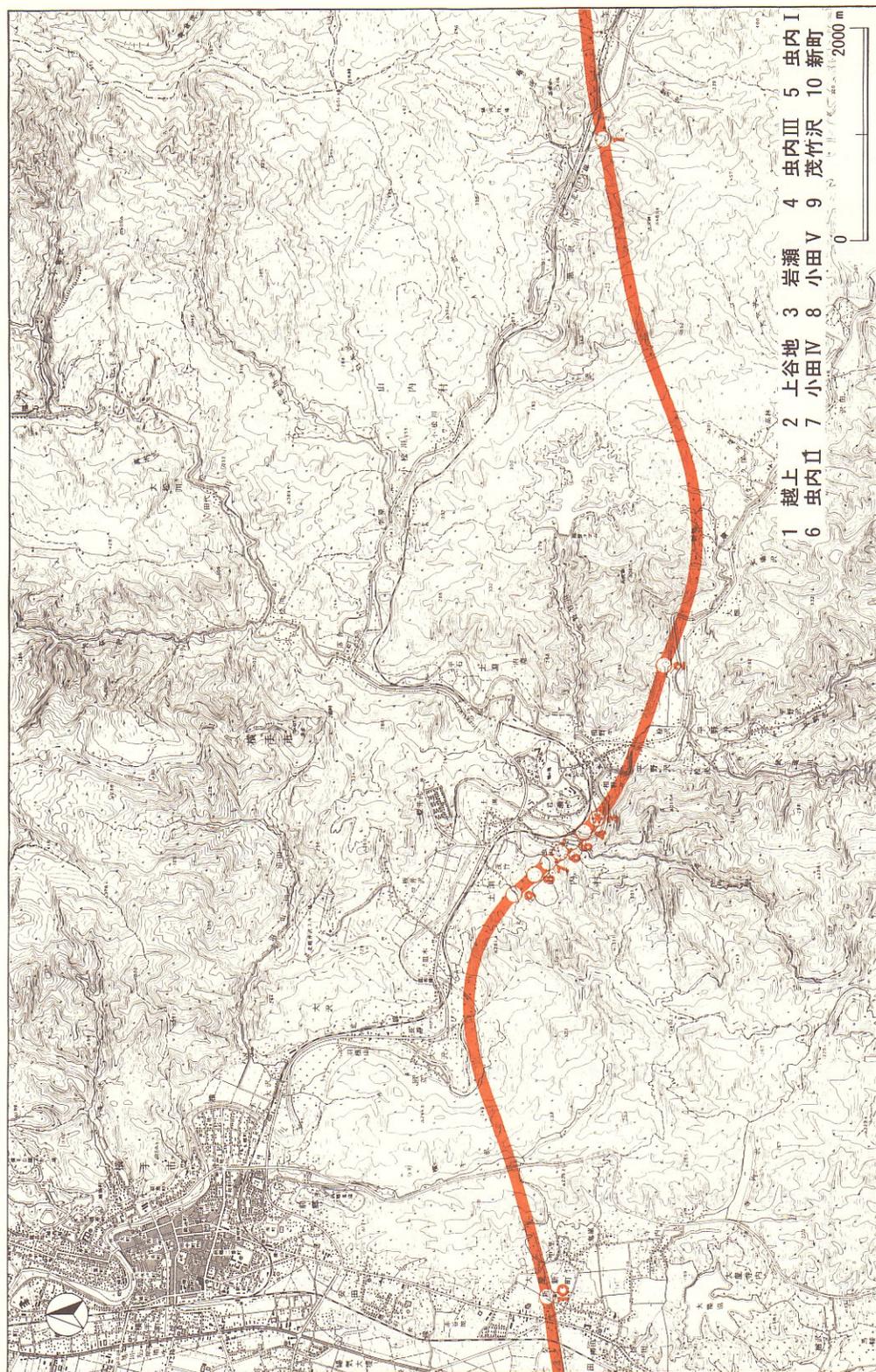
1987年12月に、秋田県教育委員会が発行した「秋田県遺跡地図（県南版）」に記載されている山内村内の遺跡数は、43遺跡である。その後、今回の秋田自動車道の建設に伴って、新たに9遺跡が確認され、現在の遺跡総数は52である。時代の明確な遺跡では、縄文時代を主とする遺跡が33、城館跡13であり、他に縄文時代と中世～近世・縄文時代と中世以降の複合遺跡が各々1つずつある。旧石器時代・弥生時代の遺跡は、僅かである。旧石器時代が小田V遺跡、弥生時代が越上・小田V遺跡で確認されている。時代の特定できない遺跡では、出土遺物として石器片・土器片があげられていることから、その大部分が縄文時代と考えられる。

第6図には、国土地理院発行の1/25,000「横手」・「羽後黒沢」から、土淵・相野々・平野沢地区を中心とした部分を切り取り、現在確認されている遺跡の推定範囲を示した。なお、図中の番号に対応する遺跡名を第2表に示したが、ともに「秋田県遺跡地図（県南版）」中の山内村内での遺跡登録番号を用いた。また、新しく確認した9遺跡については、発見順を考慮して、東側から順に44番以降の番号を付した。以下、山内村の遺跡については、縄文時代の状況を中心に概観する。後述する（ ）内の番号は、第2図および第2表の番号である。

旧石器時代の遺物は、小田V遺跡で石刃が1点出土しているのみである。

岩瀬遺跡からは、縄文時代草創期から晩期までの土器・石器が出土した。横手川の川原の礫層中には、草創期の人々の足跡を認めることができた。その後も、たび重なる川の氾濫と土砂の堆積によって形成された川岸の砂洲や礫層に、繰り返し立ち入って生活の痕跡をとどめていることが判った。したがって、各時期において周辺の各遺跡との関連を考慮する必要がある。しかし縄文時代で、時期を特定できる16遺跡の中では、岩瀬遺跡の主たる遺構期である草創期・早期の関連遺跡は無い。特に草創期の遺跡は秋田県内でも未だ3遺跡しか発見されていない。本遺跡を営んだ草創期や早期の人々が、近くの他の場所に全く生活の痕跡を残さなかったとは考えられない。この時期の遺跡が、本遺跡のように地中深くまで埋没しており、岩盤直上まで掘り下げなければ発見しにくいことによるものだろう。草創期における本遺跡の関連性を考え得る遺跡は、今後の発見を待たなければならない。

早期前葉～後葉の遺跡も草創期同様、本遺跡の周辺では未発見である。ただ、秋田県南部では、雄勝町にある国指定史跡岩井堂洞窟で早期の好資料が発掘されている。岩井堂洞窟では、沈線文系土器・貝殻沈線文系土器・縄文条痕土器など早期から前期前葉の土器が重層して出土した。洞窟と川岸という立地上の大きな違いはあるが、土器編年上の層位的出土例としては、本遺跡とともに、きわめて重要な遺跡である。また、双方とも長期間にわたって繰り返し利用



第9図 周辺の遺跡

第2表 周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代など	文献番号
1	板屋沢	山内村土淵字板屋沢	縄文	2・4
2	谷地端	山内村土淵字小貝	縄文	2・4
3	赤淵	山内村土淵字板井沢	縄文(晩) 竪穴住居跡	2・4
4	虫内Ⅰ	山内村土淵字虫内	縄文(後・晩)	2・4・5・6
5	三明岡	山内村平野沢字三明岡	縄文(晩) 岩版	4
6	鶴ヶ池	山内村土淵字鶴ヶ池	縄文	4
7	二瀬	山内村土淵字二瀬	縄文	4
8	相野々	山内村土淵字相野々	縄文(晩) 遮光器土偶	4・10
9	神成	山内村土淵字神成	縄文(中・後)	4
10	上台	山内村大松川字上台	縄文	2・4
14	道地	山内村土淵字道地	縄文(中) 組石遺構	3・4
15	大沢館	山内村大沢字矢櫃	館跡 郭2 空堀	1・4
16	皿木館	山内村土淵字皿木上段	館跡 郭3 空堀	1・4・8
17	和田城	山内村土淵字鶴ヶ池	館跡 郭2 空堀	1・4
28	皿木	山内村土淵字君ヶ原	縄文	4
29	板屋沢Ⅱ	山内村土淵字板屋沢	縄文	4
30	板井沢	山内村土淵字板井沢	縄文	4
31	小田	山内村土淵字小田	石器片	4
32	小田Ⅱ	山内村土淵字小田	石器片	4
33	小田Ⅲ	山内村土淵字小田	石器片	4
34	中島	山内村土淵字中島	土器片・石器片	4
35	菅生	山内村土淵字菅生	石器片	4
36	平石	山内村土淵字菅生	石器片	4
37	霜焼野	山内村大松川字霜焼野	石器片	2・4
38	桧沢	山内村平野沢字桧沢	縄文(晩) 岩版・土偶	4
39	力石	山内村筏字力石	石器片	4
45	力石Ⅱ	山内村大松川字力石	縄文(中)	10
46	上谷地	山内村平野沢字上谷地	縄文(前・中)	5・10
47	岩瀬	山内村土淵字岩瀬	縄文(草創～晩)	4・5・7
48	虫内Ⅱ	山内村土淵字虫内	縄文(前～晩)	4・5・7・13
49	小田Ⅴ	山内村土淵字小田	縄文(早～晩)・弥生	10
50	茂竹沢	山内村土淵字茂竹沢	縄文(前～晩)・中近世	4・5・7・8・12
51	虫内Ⅲ	山内村土淵字虫内	縄文(早～晩)	10
52	小田Ⅳ	山内村土淵字小田	縄文(前～晩)	10
3-142	上片倉	横手市大沢字上片倉	縄文	4・11

され続けた場所である。そして、対照的な立地状況を比較検討すれば、早期の人々の行動や生活様式を解明する手掛かりともなり得る。本遺跡の、発掘調査によって得られた膨大な情報を評価していく際に、重要な役割を担う遺跡として特に注目すべきであろう。

早期終末～前期初頭にかけての土器片は、少量ながら虫内Ⅰ・虫内Ⅲ・小田Ⅵ遺跡で確認されている。前期前半の遺物は茂竹沢遺跡(50)・虫内Ⅱ遺跡(48)・虫内Ⅲ遺跡(51)・上谷地遺跡(46)で出土している。いずれも土器片は少量見つかったが、石籠を中心に石器・剥片は比較的多く出土している。岩瀬遺跡で、土器・石器集中出土地点として把握された遺構の中には、前期前葉の羽状縄文系土器を伴うものがある。出土遺物の量と検出遺構の状況から、これらの遺跡と比較すると、本遺跡は中心的な遺跡であったことが判る。川岸に土器や石器を残した人々の、生活拠点がどこであったのかは不明である。しかし、本遺跡の川岸が生活の諸行動の中で、ある程度重要な一定の役割を担う場であったことは確かであろう。それは、土器片が少量散在するのみの、これらの遺跡との比較で明らかである。

前期後半大木5式期の竪穴住居跡3軒が、貯蔵穴と考えられる土坑等と共に小田Ⅴ遺跡から検出されている。本遺跡では、前期前葉～中葉の住居跡も検出されており、小田Ⅴ遺跡と並んで該期の生活拠点の一つであったことが伺える。

中期後半～後期初頭にかけては上谷地遺跡(46)・神成遺跡(9)・虫内Ⅲ遺跡(51)・小田Ⅵ遺跡(52)に集落が形成されている。本遺跡でも、中期後葉大木8a～8b式期の焼土遺構、土器が検出された。大木9式期、大木10式期～後期初頭の土器も出土しており、竪穴住居跡は検出されなかったものの、本遺跡の立地する川岸が各時期の人々によって継続して利用されていたことが判る。なお、神成遺跡は昭和34年という早い時期に、大和久震平氏によって発掘調査が行われたことが同年6月9日の「秋田魁新報」に報じられている。また、道地遺跡も、昭和59年村教育委員会(調査担当者は山田貞吉氏)により発掘調査が行われている。

後期前葉～中葉にかけては、第9図の東側にある越上遺跡の捨て場から良好な土器群が出土している。また茂竹沢遺跡では、後期中葉に位置付けられる竪穴住居跡が2軒検出されている。

後期後半以降晩期の前半には、虫内Ⅰ遺跡を中心に虫内Ⅲ遺跡・虫内Ⅱ遺跡・小田Ⅳ遺跡を含む範囲の大きな墓域がつくられている。この墓域は主に土壇墓と土器棺墓で特徴づけられており、土壇墓の範囲はそれぞれの遺跡内でいくつかまとまりを示している。また虫内Ⅰ遺跡では、広い範囲の捨て場が形成されており、膨大な量の遺物が出土している。岩瀬遺跡は、晩期におけるこの大きな墓域の東方に隣接する位置にあるが、土器が少量出土したのみで、墓壇や埋設土器はない。本遺跡と虫内Ⅲ遺跡を隔てる横手川が、晩期の墓域の東側を区切る境界となっていたことが知られる。晩期の集落・住居は、今のところ特定できないが、晩期の遺跡としては、昭和61年に村教育委員会(調査担当者は山田貞吉氏)によって小規模な発掘調査が行われ

た檜沢遺跡(38)の外、赤淵遺跡(3)、三明岡遺跡(5)、相野々遺跡(8)等の遺跡群が河川沿いに分布している。秋田自動車道に係る各遺跡の詳細については、刊行されたあるいは逐次刊行される予定の発掘調査報告書を参照していただきたい。

以上の縄文時代の遺跡は、村内を流れる横手川・黒沢川・松川・武道川の4河川の河岸段丘上に点在している。今のところ、これら河川の流路に近接した低位段丘上からは、後期後半～晩期の遺構や遺物が多く見い出され、中期～後期初頭の集落は上谷地遺跡や小田IV遺跡のような高い台地上に立地していることが指摘できる。一方、古くは草創期初頭頃から土砂の堆積が始まったと考えられる河川の堆積作用があり、一段落した段階の川辺での生活跡が層位的に残されている。従来、このような低位段丘上に縄文時代の古い時期の遺構・遺物が存在するとはほとんど予想されていなかった。それだけに、今後十分な注意が払われなければならない。

弥生時代の遺物は越上・小田V遺跡で少量出土しているのみで、それ以降の遺跡については現在のところ城館跡以外には知られていない。しかし、西方の横手盆地には旧石器時代や弥生時代以降の各時代の遺跡が数多く存在している。山内村の場合も、高速道路建設の事前調査で1本のトレンチによって数多くの発見が相次いだことを考えれば、今後、本村内でも縄文時代の遺跡はもとより、他の時代の遺跡も多く確認されていくものと考えられる。

引用・参考文献

- 1：秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
- 2：山内村郷土史編纂委員会『山内村郷土史年報』1983(昭和58年)
- 3：山内村郷土史編纂委員会『山内村郷土史年報』1984(昭和59年)
- 4：秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』1987(昭和62年)
- 5：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第179集 1989(平成元年)
- 6：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集 1991(平成3年)
- 7：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第226集 1992(平成4年)
- 8：秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第239集 1993(平成5年)
- 9：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XIII-茂竹沢遺跡-』
秋田県文化財調査報告書第233集 1993(平成5年)
- 10：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XIV-虫内II遺跡-』
秋田県文化財調査報告書第234集 1993(平成5年)
- 11：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XV-越上遺跡-』
秋田県文化財調査報告書第235集 1993(平成5年)
- 12：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XVI-上谷地遺跡-』
秋田県文化財調査報告書第241集 1994(平成6年)
- 13：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XVII-虫内III遺跡-』
秋田県文化財調査報告書第242集 1994(平成6年)
- 13：秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XVIII-小田IV遺跡-』

第2章 遺跡の立地と環境

秋田県文化財調査報告書第243集 1994（平成6年）

- 14：山下孫継『岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財保護協会 1969（昭和44年）
- 15：雄勝町教育委員会『岩井堂洞窟 第4洞穴第8次発掘調査報告書』1979（昭和54年）
- 16：石川恵美子「岩井堂洞窟における早期貝殻沈線文土器の系統と変遷」『秋田県立博物館研究報告』第15号 1990（平成2年）

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

1 遺跡の推定範囲と調査区

岩瀬遺跡は、横手川右岸に形成された南郷Ⅲ段丘に立地する。遺跡周辺の横手川現河道は、山内村相野々で支流の黒沢川と合流した後、南西に流れ、羅婆王山の北側山裾に当たって流路を西に転ずる。山裾の急峻な斜面に沿って約300m西流した後、山裾を離れて北北西に曲がり、緩い弧を描いて北流する。そして、約270mの地点で南西から流れてくる虫内沢と合流する。この辺りから、弧の半径がやや小さくなり、北東に向かう。南～南西～北～北東と流路を変えながら流れる横手川によって、その右岸には東側、南側、西側を横手川に囲まれた南西に張り出す半径約250mの半円形の範囲が形成されている。この範囲の中には南西端（横手川の川岸）から約230m北東の地点を通して高さ約2.5mの段丘崖が南東～北西方向に延び、この段丘崖よりも南側が標高105m前後の南郷Ⅲ段丘、北側が標高108m前後の南郷Ⅱ段丘である。また、この範囲では、黒沢川の旧河道である土淵段丘が約50m幅で東北東～西南西方向に貫入し、南端で現横手川に到達している。土淵段丘は南郷Ⅲ段丘より3～4m低位である。

岩瀬遺跡の発掘調査で検出した河道Dの右岸は、東側が東西方向、西側はほぼ垂直に曲がった南北方向である。東西方向部分は土淵段丘とされる黒沢川旧河道の右岸、南北方向部分は旧横手川の右岸に平行している。したがって、ほぼ直角に屈曲している部分が両河川の旧河道の合流点と考えられる。河道Dより古い河道A～Cは、流路の方向が河道D東側部分とほぼ一致し、やはり黒沢川の旧河道であろう。河道A～Cと横手川との合流点の川岸は、河道Dに侵食されて残っていないが、河道Dの合流点より下流側のそれほど遠くない地点で合流していたものと思われる。河道D以降横手川は河道E～Iを形成しながら、しだいに西側に移動していく。おそらく旧黒沢川との合流点も少しずつ東側に移っていったのであろう。

土淵段丘の現地表面レベルは99～100mで、ここが黒沢川の旧河道であった時点では河床レベルはさらに低くおよそ96～97m、また、横手川の現河床は94m前後とみられる。一方、河道E～Iの河床レベルは97～99m、河道Dの河床レベルは約100mである。遺跡の営まれた時期、横手川と旧黒沢川はいずれも下刻作用のみを行う段階であったことを考慮すれば、旧黒沢川は、横手川が河道E～Iを流れていた時点においても遺跡の東側を流れ、その後に最終河道である現在の土淵段丘の位置に流路をとった後、陸化したものと考えられる。その時期は、河道I堆積層で検出した縄文時代中期中葉の焼土遺構が営まれた頃以降と推測される。したがっ

て、その頃までは遺跡の東側を旧黒沢川、南側～西側を横手川が流れ、両河川の合流点の右岸に形成された舌状地に生活の一端が営まれるという景観であったと考えられる。

河道E～Iの形成より後、おそらく縄文時代後期以降のある時点で黒沢川は流路を大きく変え、この範囲から姿を消す。すなわち山内村相野々付近で東側に新たな流路をとり、南郷Ⅰ段丘、南郷Ⅱ段丘を侵食しながら横手川と合流する現在の流路となるのである。

また、発掘調査範囲とは、旧黒沢川を挟んだ対岸にあたる調査区東側の南郷Ⅲ段丘面は、分布調査の時点では遺跡である可能性があって中島遺跡として認識されていた部分である。しかし、範囲確認調査の結果、遺物、遺構が検出されなかった。これは、旧黒沢川が左岸を侵食し右岸に土砂を堆積させる作用を繰り返しながら、河道を西から東に移動させる一方向の運動を行ったことがその要因と考えられる。河道の動きの特徴を熟知していた縄文時代の人々が、旧黒沢川の右岸にのみ遺跡を営み、左岸は当初から選地しなかったことを推測させるのである。

以上のような、河川の変遷等を考慮しつつ岩瀬遺跡の範囲を推定すれば、東は土淵段丘と南郷Ⅲ段丘の段丘崖、南～西は横手川、北は南郷Ⅱ段丘と南郷Ⅲ段丘の段丘崖を境とし、北端部で東西方向の最大幅が約240m、これに直交する南北方向の最大長が約140mの、北から南に張り出す舌状の範囲である。

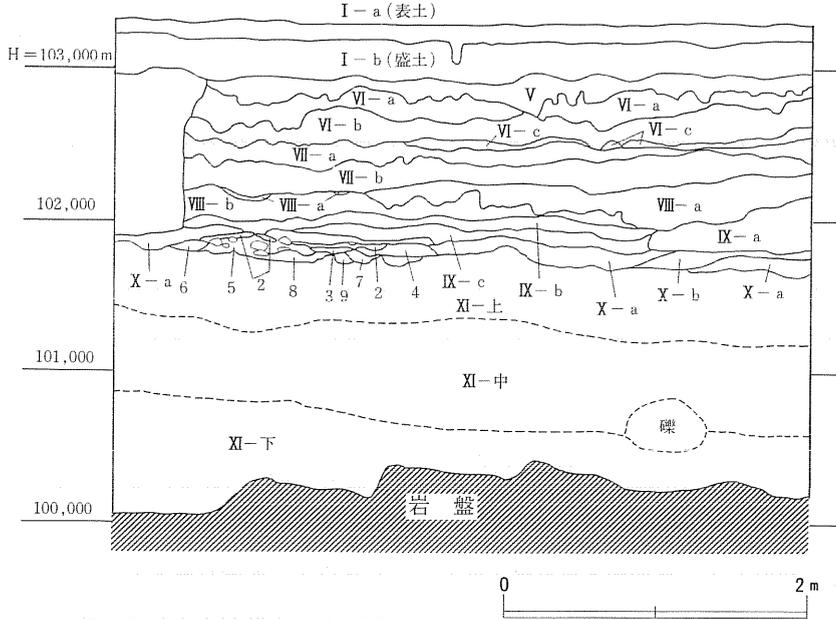
推定遺跡範囲の現況は、横手川に近い低位部分は荒地、平坦な段丘面のほとんどは畑地もしくは水田である。調査区の北方約80mの地点を東西にJR北上線が通っている。

発掘調査を行ったのは、この遺跡範囲の南西端部分にあたる。遺跡の推定面積は約20,000㎡で、発掘調査面積はその約20%である。調査区は、北東側が高く、南西側に下る緩斜面を階段状に造成して水田・畑地として利用されていた。山内村相野々を通る県道から分岐した農道は、北東から南郷Ⅲ段丘上を土淵段丘の東縁に沿って延び、途中で一端土淵段丘面に降りた後、再び南郷Ⅲ段丘面上がり、今度は土淵段丘の西縁に沿って調査区内に入り、横手川岸の水田に至っている。調査範囲で、最も高い調査区の北東端は標高約104m、最も低い南西端は標高約101mで、3段に分けて畑地が造成されていた。平成3年度には最も低い南西部の一面を調査し、平成5年度に残りの部分を調査した。

2 遺跡の基本層序

岩瀬遺跡の層序は、大きな時間幅をトータル的に把握できる層位(第12図)と、限られた時間幅で先後関係が把握できる河道堆積層(第13・14図)の、2つの基準になる層位によって理解することにした。そして、これらの層位について順次説明するが、前期包含層の時代相を把握する上で良好な層位であるMJラインの西壁(第15図)についても、補足的に説明を加える。

(1) 基本層位



- I 表土
- V 10 Y R3/4暗褐色中砂混じりシルト。褐色土をブロック状に多量に含む。土壌化した部分である。しまり中。
- VI-a 10 Y R5/8黄褐色粗砂混じり細砂。粗砂30%。径10mm以下の小礫を5%含む。灰白色微粒子を多く含む。しまり強。
- VI-b 10 Y R4/6褐色細砂混じり粗砂。細砂30%。径10mm以下の小礫を5%含む。灰白色微粒子を多く含む。VI-b層はVI層の本体部分。VI-c層はVII-a層が弱い浸食を受けて再堆積した部分。しまり中～強。
- VI-c 10 Y R5/8黄褐色粗砂混じり細砂質シルト。粗砂20%。細砂質シルトはシルトの小ブロックが灰白色～浅黄褐色の細かい斑紋状になって分散する。粗砂はVI-b層と同質。しまり中～強。
- VII-a 10 Y R6/8明黄褐色微砂混じりシルト質土。微砂30%含む。VII-b層上部で特に風化、土壌化の強い部分。灰白色から浅黄褐色の小ブロック(シルト質粘土)が細かい斑紋状に入る。褐色味の強い部分は、植物根等による土壌化(腐植)の強い部分である。しまり強。
- VII-b 10 Y R5/6黄褐色(60%) + 10 Y R6/6明黄褐色(40%)微砂質シルト。本来は10 Y R6/6明黄褐色土だが土壌化により10 Y R5/6黄褐色部分が不規則なひび状に入り、10 Y R6/6明黄褐色の大ブロックが入っているように見える。しまり強。
- VIII-a 10 Y R6/8明黄褐色シルト混じり細砂。VII-b層の土壌化がVIII層に及んでいる部分である。明黄褐色土のブロックが黄褐色土中に点在するように見える。しまり中～強。
- VIII-b 10 Y R5/8黄褐色シルト混じり細砂。均質な砂層である。VIII-a層とVIII-b層は漸移的。しまり中。
- IX-a 10 Y R6/6明黄褐色中砂混じり細砂。しまり中。
- IX-b 10 Y R5/6黄褐色粗砂。しまり弱。
- IX-c 10 Y R5/6黄褐色砂礫。径80mm以下の中礫主体。径200mm以下の大礫10%、径20mm以下の小礫30%。粗砂10%含む。中礫と小礫はラミナが発達する。しまり弱～中。

- X-a 10 Y R5/8黄褐色中砂混じりシルト混じり細砂。中砂20%、シルト20%含む。しまり中～強。
- X-b 10 Y R5/6黄褐色シルト混じり中砂。しまり中。
- XI-上 10 Y R5/8黄褐色砂礫層。径150mm以下の大円礫主体。径50mm以下の小円礫30%含む。粗砂20%含む。ラミナやあり。
- XI-中 礫層。径200mm以下の大礫主体。径500mm以下の大円礫30%、径20mm以下の小礫10%、粗砂10%含む。ラミナなし。
- XI-下 礫層。径200mm以下の大礫主体。径200mm以下の大円礫30%、径20mm以下の小礫10%、粗砂10%含む。ラミナなし。

炉周辺

- 1 10 Y R5/8黄褐色中砂混じり細砂。中砂30%含む。径1mm以下の炭化物を2%含む。しまり中。
- 2 10 Y R5/6黄褐色中砂混じりシルト。中砂10%含む。斑のしみ状に炭化物が5%混じる。径3mm以下の炭化物粒子を5%含む。しまり中。
- 3 10 Y R4/3にふい黄褐色小礫混じり微砂。小礫10%含む。全体に黒っぽい。径3mm以下の炭化物粒子を5%含む。しまり中～弱。
- 4 10 Y R4/3にふい黄褐色細砂質シルト。細砂30%含む。全体に黒っぽい。径1mm以下の炭化物粒子を5%含む。しまり中。
- 5 10 Y R2/2黒褐色細砂、小礫混じり粗砂。径10mm以下の小礫5%含む。全体に黒い。径5mm以下の炭化物粒子を10%含む。しまり中。
- 6 10 Y R3/4暗褐色粗砂、小礫混じりシルト。径10mm以下の小礫5%、粗砂30%含む。径5mm以下の炭化物を2%含む。斑状に黒いしみが入る。しまり中。
- 7 10 Y R3/3暗褐色粗砂混じり細砂。しまり中。粗砂30%含む。全体に黒い。径5mm以下の炭化物を2%含む。
- 8 10 Y R3/2黒褐色粗砂。全体に黒っぽい。径2mm以下の炭化物を5%含む。しまり中。
- 9 10 Y R4/6褐色中砂。炭化物を含まない。しまり中。

第12図 基本土層図(1)

第12図は、調査区北側の境界線の中央部で、MB60区南東杭付近の土層断面である。ここでは、Ⅱ～Ⅳ層が削平されⅠ～Ⅺ層までが観察できる。Ⅱ～Ⅳ層については、第14図上段のME58区南東杭の南側で確認できており、ここの観察で補うことにする。

Ⅰ層は厚さ約0.4mの表土で、盛土も含んでいる。Ⅱ層は厚さ約0.1mの黒褐色土で、炭粒を含み黒色に近い。Ⅲ層も厚さ約0.1mの黒褐色土であるが、褐色に近い。Ⅳ層は厚さ約0.3mの黒褐色で、炭粒を含み黒色に近い。Ⅴ層は厚さ0.1～0.2mの暗褐色土で、シルト質の漸移層である。貝殻文系の土器が出土している。Ⅵ層は、厚さ0.2～0.4mの黄褐色系の砂質土で、特徴から3つに区分した。草創期と考えられる縄文土器が出土している。Ⅶ層は、厚さ0.2～0.3mの黄褐色系の砂質土（シルト質土）で、含有ブロックの在り方から2つに区分した。Ⅷ層は、厚さ0.2～0.3mの黄褐色系の砂質土で、砂質土の状態より2つに区分した。Ⅸ層は、厚さ0.1～0.35mで3層に区分したが、a層が礫層・b層が細砂・c層が粗砂である。a層の最下位より、草創期の隆起線文土器が出土している。Ⅹ層は厚さ0.1～0.2cm黄褐色で、砂とシルトの在り方で3つに区分した。草創期の爪形文土器が出土している。Ⅺ層は厚さ1.3～1.8mの礫層で、主体的な礫の在り方から3つに区分した。同層下位からも、石器が出土している。

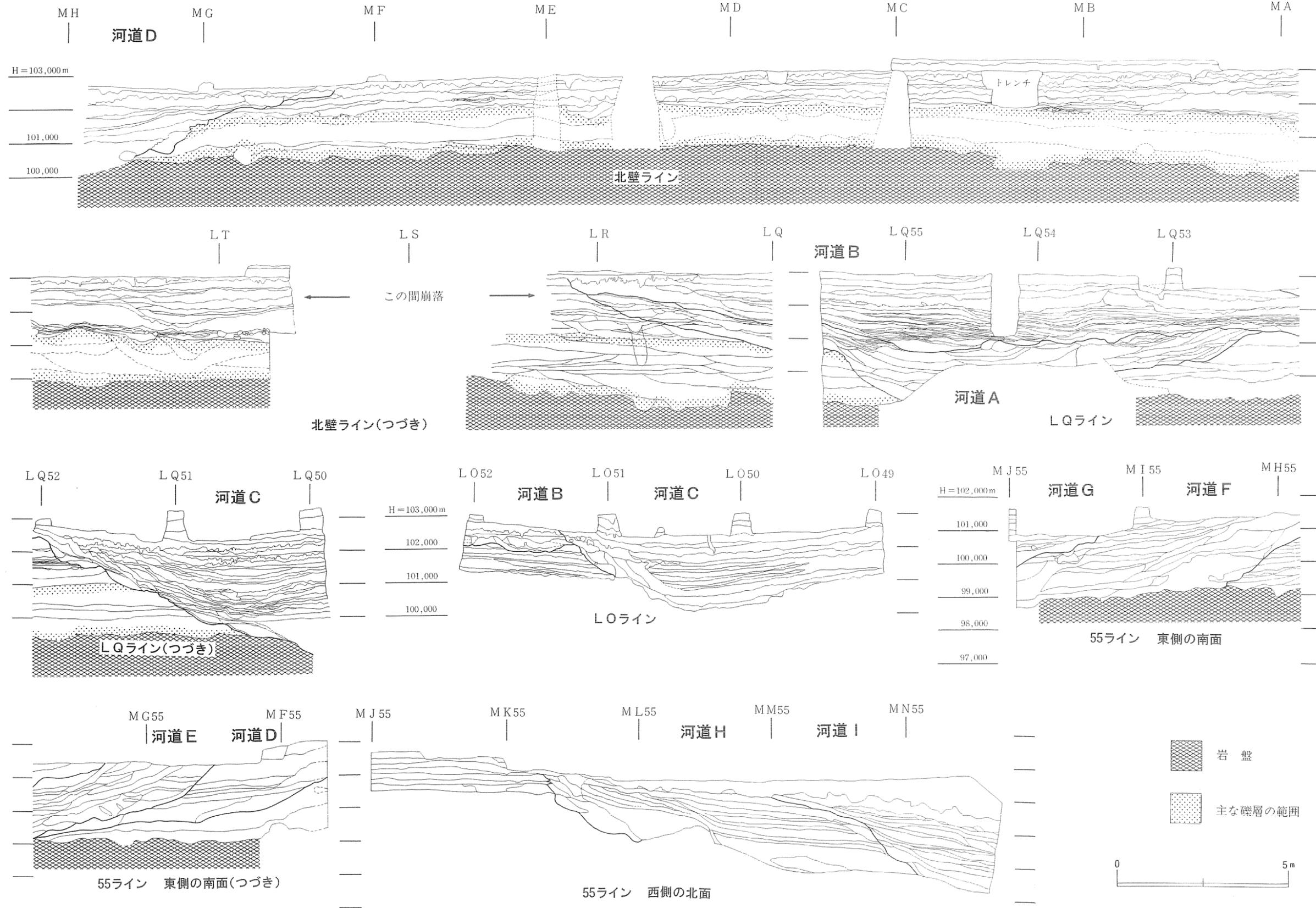
(2) 河道の層位

第14図のMCラインでは、西壁にみられる顕著な切り合いや砂・礫の広がりから、A～Dまでの河道の単位が把握できた。また、第14図の58東西ラインでも、北壁に見られる不整合面の切り合いで、Dを含んだE～Hまでの河道の単位が把握できた（以下、河道A～河道Hと記述する）。以下、各河道についての説明をMCラインと58ラインを基にして行う。

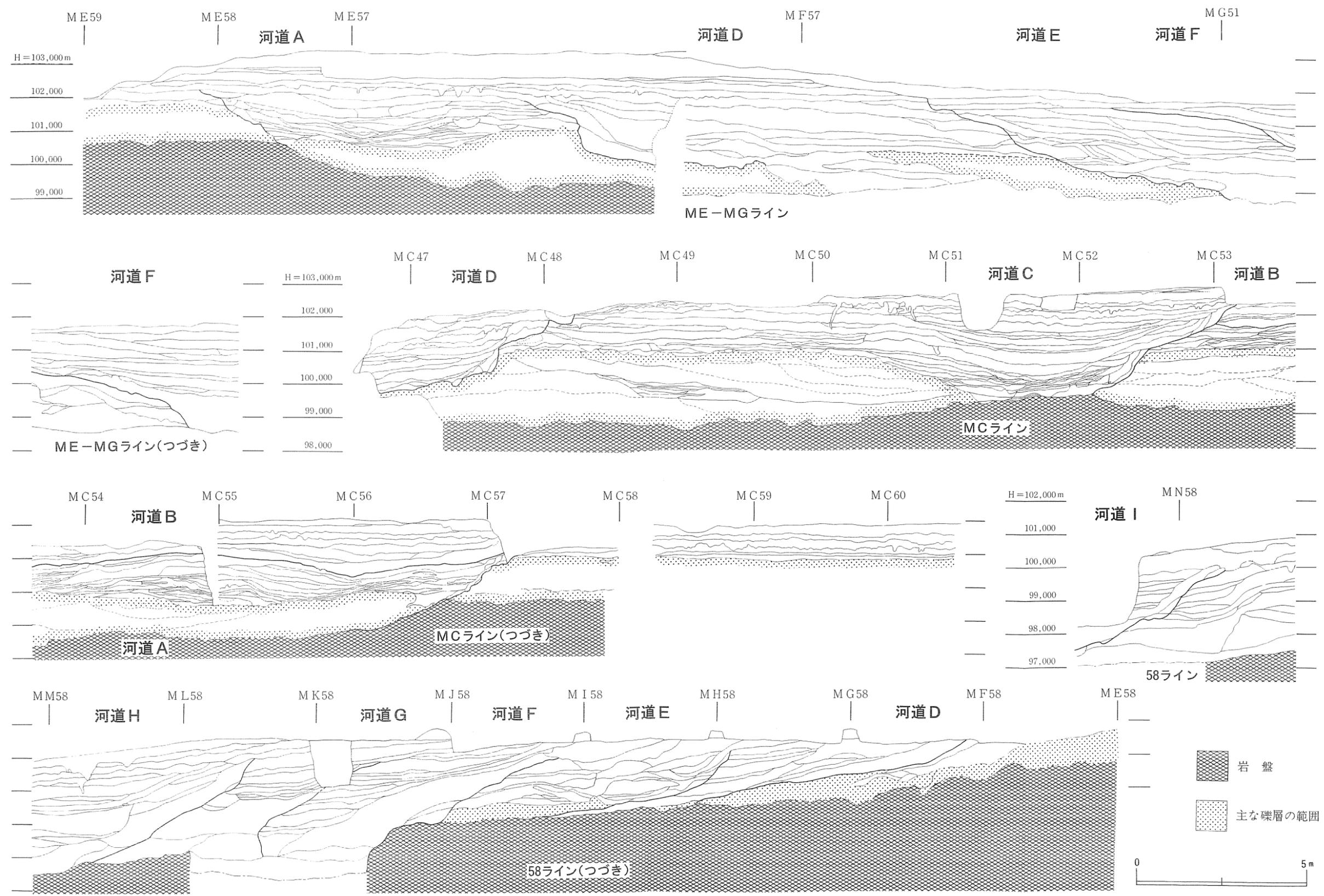
河道Aは、MC57区南東杭の北側でⅩ層を切り込む不整合面から、MC53区南東杭の北側とMC52区南東杭にかけて形成された不整合面（後述の河道C）までである。上端の幅は約20mで、この堆積層の上を河道Bが覆う。堆積層は、厚い所が1.8mで礫層が岩盤直上を覆い、その上は概ね砂層とシルト層の互層である。この河道は、同岩盤の中央部を頂点に左右2つの弧状を呈することや礫層中の不整合面の観察から、いくつかの大きな洪水による河道も含んでいると解釈される。その流路は調査区北東から西へ、さらに同中央部で北西へと緩やかな方向をとる。堆積層上部の砂層より、早期撚糸文系土器が出土している。

河道Bは河道Aのを覆い、MC56区南東杭付近で緩やかな窪みを呈する。河道の東側は、徐々に底面の勾配を増してⅤ層に収束される。西端は、河道Aと同様河道Cに切られている。堆積層は、河道Aの直上に厚さ20～40cmの礫層を、さらにその上には砂混じりのシルト層が覆うものである。流路は一過性のものと考えられ、調査区東端より西側へ、さらに同中央部で北西の方向をとる。

河道Cは、河道A・Bを切り込む不整合面から、MC48区南東杭の南側とMC47区南東杭



第13図 基本土層図(2)



第14図 基本土層図(3)

の北側にかけて形成された不整合面（後述の河道D）までである。上端の幅は約22mで、その北側の10mは緩やかに窪み南側はほぼ平坦である。堆積層は、基本的に砂層とシルト層の互層を成すもので、上位はV層以上の黒色土に覆われている。一方平坦な礫面は、河道A堆積層中の南側礫層上面とほぼ同一のレベルを示し、両者が同一の条件で形成された可能性がある。河道Cの流路は、調査区東端から同中央部で北西へ向かい、南西側に緩い弧状をつくる。

河道Dは、河道Cの堆積層やその下部の礫層を切り込む。現状の上端の幅は約5.5mで、この肩部より約4m南側は、本遺跡が立地する地形を限る南側斜面にあたる。この下部堆積層は、黒色系の土層が砂層やシルト層と互層を成して形成されている。そしてこれらの堆積層が、上面を覆うIV層最下位～V層最上位に収束されていく。河道は調査区南東端から西へ、さらに中央南端部で北へとほぼ直角に方向転換している。

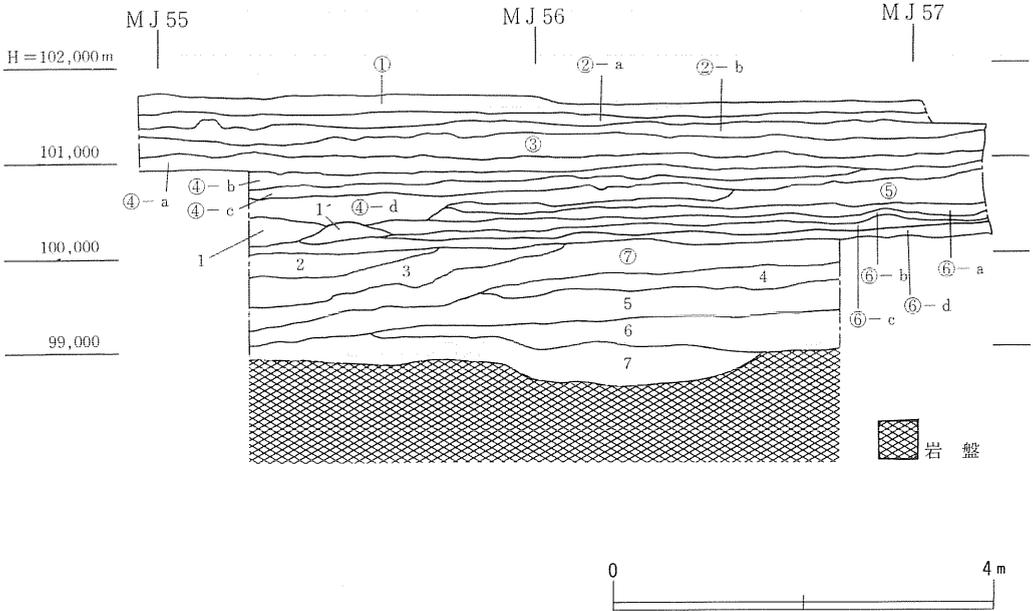
一方、河道Dの南北に現れている肩部は、ME-MGライン（第14図）までが確かめられている。その北側は、58ラインに現れているはずで、この点について若干補足する。ME-MGラインでは、ME58南東杭の南側に河道Aの不整合面を、ME57南東杭の南々西約6～7mには河道Dの不整合面が認められる。この底面下の礫層には、一部不整合による砂層やシルト層が堆積しており、MCラインで河道C下の礫層中でも確かめられた。これと同じ状況が、河道Dに直行する55ライン北壁の東端（ME54区北壁）と、58ライン東側でも確認できた。したがって、これらの堆積層より新しくかつ河道D肩部の方向性より、第14図の不整合面を河道Dと推定している。なお、この上端の幅は約7mである。以下、同図によって河道E以降の説明を行う。

河道Eは、河道Dを切り込む不整合面から、MI58区南東杭の南側で始まる不整合面（後述の河道F）までで、上端の幅は約5mである。この不整合面は、緩やかな傾斜で岩盤に到達している。堆積層は、基本的に砂層とシルト層の互層を成すが、いくつかの小規模な洪水による複雑な堆積状態を示す。流路は、概ね南々東から北々西の方向をとる。縄文早期の土器が出土している。

河道Fは、河道Eを切り込む不整合面から、MK58区南東杭の東側で同地点中位の堆積層を切り込む不整合面（後述の河道G）までで、上端の幅は約5.5mである。MK58区南東杭の西側で、岩盤を深く抉り込んでいる。堆積層は下部が厚い単一の砂層で、上部は薄い砂層とシルト層の互層を基調とするが、上位には薄い暗褐色土層を含む。上位暗褐色土層は、第15図の⑥層にあたる。流路は、概ね南々東から北々西の方向をとる。縄文早期の土器が出土している。

河道Gは、河道F切り込む不整合面から、MK58区南東杭より2m西側で始まる不整合面（後述の河道H）までで、上端の幅は約4mある。堆積層は下部が厚い砂質土で、上部は暗褐色土とシルト層の互層である。上部のうち下位にある暗褐色土は、第15図④の暗褐色にあたる。

第3章 発掘調査の概要



- ① 盛土及び耕作土
- ②-a 10Y R2/3 黒褐色土。砂質土。褐色土を微量含む。粘性、しまり普通。
- ②-b 10Y R4/6 褐色土。暗褐色土を40%含む。粘性、しまり普通。
- ③ 10Y R5/8 黄褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。
- ④-a 10Y R3/4 暗褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。
- ④-b 10Y R5/6 黄褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。
- ④-c 10Y R4/6 褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。0.3~1 cmの砂利を10%含む。
- ④-d 10Y R5/6 黄褐色土。砂、砂利、礫を多量に含む。旧河川であるが、岸は砂、砂利。粘性無し。しまり普通。
- 1 10Y R5/8 黄褐色土。砂。3~10mmの砂利30%。横に縞状に砂がはしっている。砂利も縞状にある。
- 1' 10Y R5/6 黄褐色土。砂。砂利、礫を多量に含む。旧河川であるが、岸は砂、砂利。粘性無し、しまり普通。
- ⑤ 10Y R5/8 黄褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。
- ⑥-a 10Y R4/4 褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。3 mm前後の砂利を3%含む。
- ⑥-b 10Y R3/3 暗褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。3 mm前後の砂利を3%含む。
- ⑥-c 10Y R5/8 黄褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。3 cm前後の礫を1%含む。3 mm前後の砂利を3%含む。
- ⑥-d 10Y R5/6 黄褐色土。砂質土。粘普、ややしまる。3 mm前後の砂利3%含む。
- ⑦ 10Y R5/8 黄褐色土。粘性、しまり普通。
- 2 10Y R5/8 黄褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。
- 3 10Y R5/8 黄褐色土。砂質土。粘性、しまりややあり。
- 4 10Y R5/8 黄褐色土。きめが粗い砂。粘性、しまりなし。
- 5 10Y R5/8 黄褐色土。砂質土。粘性、しまりややあり。
- 6 10Y R5/8 黄褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。
- 7 10Y R5/6 黄褐色土。砂質土。粘性、しまり普通。黄白色と茶色のグライ化土を斑状に含む。

第15図 基本土層図(4)

また河道の不整合面は、第15図④-dの底面にあたっている。流路は一過性のものと考えられ、概ね南々東から北々西の方向をとる。縄文前期の土器が出土している。

河道Hは、河道Gを切り込む不整合面から、MN58区南東杭より約1m東側で始まる不整合面（後述の河道I）までで、上端の幅は約9mである。不整合面は、緩く湾曲して岩盤に連続する。堆積層は、比較的厚い砂質の下部堆積層と多くの薄い堆積状態を示す上部堆積層に二分される。その中央では、緩やかな暗褐色土が階段状を呈する。河道は、下位砂礫層の在り方から一過性のものとは考えられない。流路は、やはり概ね南々東から北々西の方向をとる。

河道Iは、河道Hを切り込む不整合面から始まる。現状の上端の幅は2.5mで、西側の限界は不明である。不整合面は緩く湾曲し、底面は岩盤に至ると考えられる。堆積層は、砂質の下部堆積層と多くの薄い堆積状態を示す上部堆積層に分けられる。流路は、概ね南々東から北々西の方向をとる。縄文中期の土器が出土している。

(3) MJライン西壁の層位

第15図は、調査区西側のMJラインの中央部で、MJ55・56区西壁の土層断面である。ここでは、遺物の垂直および広がり状況より、①～⑦層までの有効な層位について説明する。

①層は厚さが0.1～0.2mの表土で、盛土も含む。②層は、厚さ約0.4mの暗褐色系の土層で、色調より黒褐色土と褐色土に二分した。③層は厚さが0.1～0.3mの、黄褐色土の砂質土である。④層は南側ほど厚く、北側に行くに従って薄くなり③層に収束される。ここでは0.25～1.1mの厚さをもつが、色調より4層に区分した。この層より、羽状縄文を主体とする前期の土器や石器が出土している。⑤層は厚さが0.1～0.25mの、黄褐色土の砂質土である。⑥層は厚さが0.4mで、色調等の特徴からa～dの4つに区分した。e・dは同色だが、区分は含有物の違いによる。⑥層より縄文土器が出土している。⑦層は、0.2～0.4mの黄褐色土である。これより下には同様な土層が続く。これらの層の内、④-dはMI53区西壁の厚さが1mで岩盤まで達している。そして、同区域の堆積層が礫層であることより、同層の底面は大きな不整合面と理解できた。この不整合面は、第14図にある河道Gの不整合面に対応している。

第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法で行った。対象範囲全域にグリッド（遺構の記述等では区と表記）を設定するため、まず日本道路公団が打設した路線中心杭STA148+80（X：-80500.5002、Y：-18727.1910）を原点とし、国家座標第X系の南北方向に南北基準線Y軸を設定した。この基準線と直交して原点の基準杭を通る線を東西基準線X軸とし、これらX・Y両軸に4m×4mの方形メッシュを割り付けた。原点をMA50とし、東西方向には、X軸上を西に4m進む毎にM

第3章 発掘調査の概要

B・MC・MD・・・と正順に、東に4m進む毎にLT・LS・LR・・・と逆順に各々A～Tまでの2文字のアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、Y軸を北に4m進む毎に51・52・53・・・と増加し、南に向かう毎に49・48・47・・・と減少する2桁のアラビア数字を付した。各グリッドの呼称は、南東隅を通るX軸とY軸の組み合わせで、MA50・MB51・MC52・・・のように呼ぶことにした。

遺構は種類を略号で付し、検出順に連番で遺構番号を付けた。平成3年度に検出された遺構は01～35、平成5年度は36～161である。しかし、精査段階で攪乱坑等と判断したものは欠番とした。遺構は、原則として半截または十字に土層断面観察用のベルトを残して、2または4分割法による精査を行った。また、地表を掘り窪めた遺構以外に、遺物が集中して出土することによってその範囲が石器製作跡等の遺構と認識される場合が非常に多いので、表土や盛土、攪乱坑以外の遺物は基本的に全点の出土位置を記録することにした。

平成3年度の調査では遺物台帳に遺物番号、出土グリッド、グリッド杭から北方向と西方向の距離で表した出土地点、出土レベル、出土層位を記入した。平成5年度の調査ではこの方法と、1/20平面図に出土地点を点で記し出土レベルを記入する方法を併用した。また、遺構内でチップ等がきわめて密集している場合、直径2cm以下の範囲に近接し、同一レベルで出土したものは一括して番号を付し取り上げたものもある。遺物には、遺物番号、グリッド名または遺構名、出土した層位、年月日を記入した耐水性荷札を添付した。

平面図および断面図は、原則として1/20、細部状況を表すために適宜1/10の縮尺で作成し、それぞれにレベルを記入した。作図は、グリッド杭を利用した簡易遣り方測量によった。断面図には土色・堅さ・しまり・土性・混入物を注記した。必要に応じてエレベーション図も作成した。

発掘調査における写真撮影は、35mm判カメラと6×4.5プロニー判カメラを用い、モノクロ、カラーリバーサル(スライド用)のフィルムを装着して撮影した。必要に応じて、35mm判カメラでネガカラーも用いた。

堆積層の年代を推定するために火山灰や炭化物をサンプリングし、自然科学的分析も行った。また、熱残留地磁気測定も行った。

図面の記録では、現場で実測した図をもとに、平面図と断面図等を組み合わせた第2原図を作成し、トレースした。

遺物は、洗浄・注記・接合・復元の後、選別して原寸で実測図を作成した。実測は、整理作業員による手実測と写真実測委託を併用した。図のトレースも両者がある。報告書に掲載するにあたって適宜縮尺した。遺物写真は、35mm判カメラにマイクロレンズ(55mm)を装着し撮影したが、写真実測用に撮影したネガから焼き付けたものもある。

第3節 調査経過

1 平成3年度

5月27日、機材を搬入し、本日より発掘調査を開始した。5月28日より調査区南西部の低い部分から粗掘りをはじめた。まずMJラインより東側の調査を行った。6月3日より遺構精査を開始。SX01石器集中部では、地山土から石器が出土し始めた。また、地山土の黄褐色土中から羽状縄文土器も出土した。基本土層を見るため、6月5日からME57区の深掘りを行い、地山土の黄褐色土の下位に暗褐色土や黄褐色土が互層となって堆積し、その下に礫層のあることが判明した。黄褐色土中にも石器が集中して含まれることから、当初は旧石器時代のもので考えられた。しかし、その後土器や石筥の出土層位の検討から、6月28日には河川による土砂の堆積と侵食が繰り返されていることがはっきりしてきた。そして、縄文時代の遺物包含層であることを前提として層位と平面的広がりについて、基本的な認識を得ることができた。

7月1日、秋田大学鉱山学部西谷忠師教授、大学院生河野秀樹氏、4年生菊山浩喜氏、佐藤秀幸氏が熱残留磁気年代測定のスプリングのため来跡。この後も、9月14・28日にスプリングを行った。6月中は、主に黄褐色土から礫層上面までの各層から検出される遺物集中地点や集石遺構の精査と、層位関係の確認や広がり範囲を押える作業を並行して行った。その結果、7月6日、MA51区の深掘りは深さ約3.2mで岩盤に達した。岩盤直上の礫層からも剥片が出土した。7月9日からは、MIラインのトレンチを北へ延長し、礫層の状況把握に努めた。7月11・12日、古環境研究所の早田勉氏が来跡し、地形、土層について話し合いを重ねながら火山灰を睨んだスプリングを行った。

7月17日、MI55～57区で検出したVII層中の遺物取り上げをほぼ終了。7月18日にはSX19も終了し、さらに下部の掘り下げに入る。7月31日、MI53区の礫を掘り下げ、岩盤に達した。8月1日、MG54区では⑫層から縄文土器が出土した。これにより、⑫層から上位の堆積物の時期決定資料が得られた。8月6日、専門指導員板垣直俊川内中学校教諭と、豊島正幸農林水産省東北試験場主任研究官が来跡。8月6・7日の両日、板垣先生による調査指導が行われた。

8月19日より、北部のMF58・59区の掘り下げに着手した。この範囲にはSX01石器集中部があり、9月3日までに遺物の取り上げを行った。8月22日よりMJラインより西側の調査に入った。9月3日より北東部の礫層の掘り下げにかかった。翌日には、一部で岩盤に達することができた。

9月9日までにMJラインより東側の調査を終え、9月10日より西側の調査に入った。表土除去後、黄褐色土などの堆積土を掘り進め、9月19日には南西端部で砂利層まで掘り下げた。

第3章 発掘調査の概要

9月26日、土層確認のため北側にある範囲確認調査時のトレンチを掘り起こした。また、翌日には56ラインの北側にもトレンチを入れる。約10枚の土層が西側に傾斜していることが判った。

9月28日、台風19号の強風によりプレハブ小屋の窓ガラスとトイレの一部が破損した。他の現場では、2階建プレハブが横転した所もあったがこちらでは比較的被害は小さかった。

10月2日、55ラインの土層観察により基本的層位関係を決定した。専門指導員小林達雄国学院大学教授が来跡し、10月2・3日の両日調査指導が行われた。10月7・8日には、専門指導員岡村道雄文化庁主任文化財調査官も来跡し調査指導が行われた。調査区西端のMN56区では、焼土遺構の集中する範囲を検出した。SN40では炭化物、焼土のサンプリングを行った。

10月中旬より遺構精査の終わった所は、黄褐色土の掘り下げを新たに進めたところ、ML52区周辺で焼土と土器の広がりを検出した(SI46)。さらに精査を進め、11月1日には周囲に柱穴らしきピットも検出した。前期の明瞭な住居跡として唯一の遺構であり、炉跡の断ち割りが終了したのは11月20日であった。MJライン近くで南北に多くの遺構が並び、これらの遺構精査と並行して、比較的遺構の少ないMJ～MNラインの間の掘り下げを進め、11月15日にはSI46など2・3の遺構以外は、ほぼ岩盤までの掘り下げを終了した。11月18日には調査終了全景写真も撮影し、その後、本年度以外の範囲に入れたトレンチの埋め戻し作業や、撤収作業を行い、11月22日現場作業を終了した。

2 平成5年度

平成5年度の発掘調査は、5月6日より開始した。工事用道路造成の関係で、調査区の北側境界より平行に約15m幅の部分を先に調査し、終了引き渡し後、その南側を調査するという変則的な形で行うことになった。5月10日より、人力の粗掘りに並行して一部重機を入れて表土除去を行った。表土除去後に早くも遺構が検出されはじめ、以後、粗掘りと漸移層中の遺構精査を並行した。5月後半には、漸移層より下位の黄褐色土中からも石器が出土し、6月4日には両面調整石器4点が重ねられた状態でⅦ層中より出土した。6月中は、黄褐色土(Ⅵ～Ⅷ層)の掘り下げと遺構精査を進め、一部の区域では、その下の下部礫層上面に達した。この下部礫層上面には石器集中部(SXQ60・SXH66等)があり、特にSXQ60には多量の石器とともに炭の散布が認められ、下に炉跡のあることが予想された。

6月28日より7月16日まで、シカゴ大学大学院生のスウェーデン人マグヌス・フィスケヨー氏が調査に参加した。マグヌス氏にはSXQ73・80などの石器集中部や、SQ77・79等の焼礫の集中する集石炉の精査・実測を主に担当していただいた。SXQ36の範囲では倒立の埋設土器を検出し、6月24日に半截して取り上げたところ、早期初頭の井草式土器を連想させる

口唇部の肥厚が認められ、遺構や層位の時期を検討する大きな手がかりが得られた。

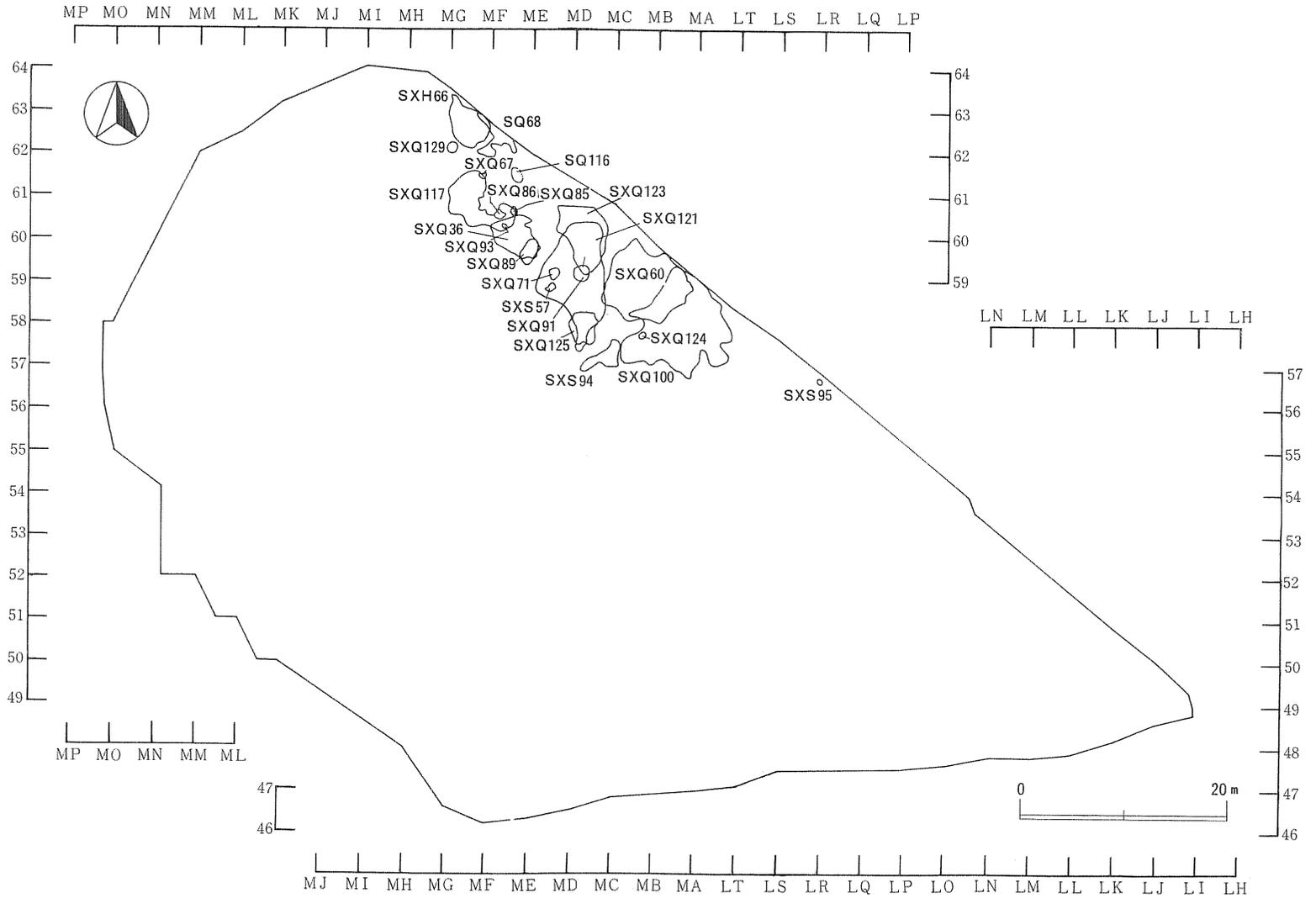
7月1日、秋田大学鉱山学部西谷忠師教授に依頼した熱残留磁気年代測定のスAMPLINGを行うため、大学院生菊山氏と4年生京氏が来跡した。7月5日には西谷教授も来跡し、この後、遺構精査の進展に合わせて7月8日、9月2・20日、11月2日にも来跡、スAMPLINGを行った。

7月に入り、調査区東部の礫層上面までの掘り下げを本格的に行った。これによって、7月19日、東西方向の旧河道（後に河道Cとする）があることが判明した。この旧河道の上部堆積土（漸移層）より、無文尖底土器が1個出土し、早期以前の河道であることが判った。7月21日より、中央部の砂利層をさらに掘り下げ、岩盤まで到達する作業を開始した。8月2・3日、専門指導員林謙作北海道大学教授による調査指導が行われた。

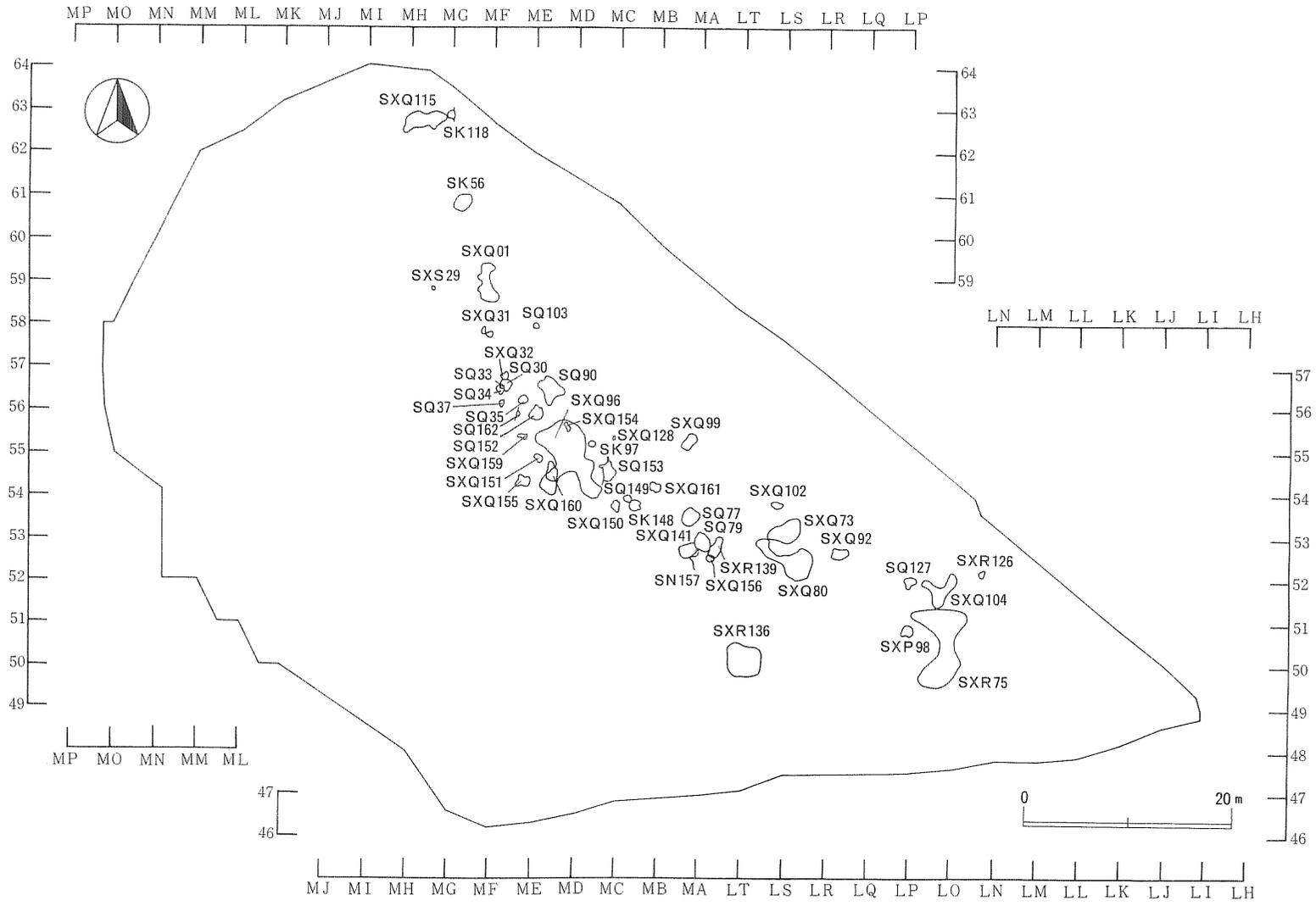
8月5日より調査区北部の礫層は、S X Q60・S X H66以外の部分から岩盤まで掘り下げる作業に入った。これ以降、礫層の掘り下げと遺構精査を並行して行った。8月9日、掘り下げ中の礫層から石匙が出土した。後に草創期のものと判明。8月18日、専門指導員板垣直俊由利中学校教諭が来跡。11月5日にも来跡し調査指導が行われた。8月25日より、中央部と同様に東部でも、岩盤まで礫層を掘り下げる作業に入った。8月31日にS X Q92の精査が終わり、河道Bより上位の遺構は精査を終了した。この後は、下部礫層の掘り下げと礫層上面のS X Q60・S X H66の精査を精力的に行った。

9月13日、S X Q60の東側の礫層中に挟まれた砂層から爪形文土器口唇部が出土した。出土地点が明らかな草創期の土器は県内初のものである。これに引き続き、9月16日にはさらに下位の礫層中より石匙が1点出土した。折から、専門指導員岡村道雄文化庁主任文化財調査官の調査指導が9月16・17日の両日行われ、日本最古の石匙であることが判った。9月21日には、S X Q60の炉内から爪形文土器と無文土器が出土した。このS X Q60やS X H66が乗る礫層の調査を9月末まで行い、9月28日航空写真撮影も行って、10月4日調査区の北側を道路公団へ引き渡した。

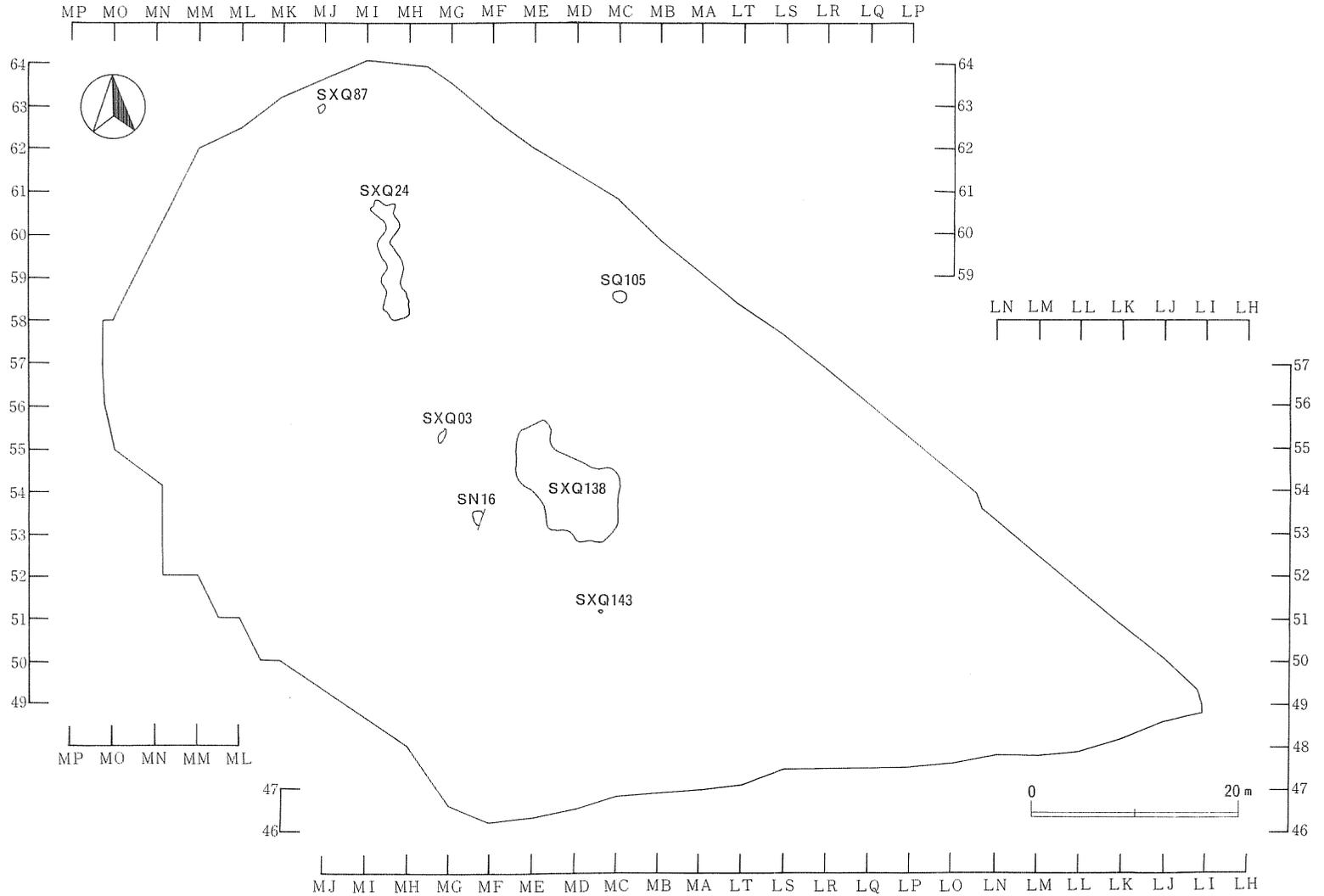
10月からは調査区南側の調査に入り、漸移層から遺構が検出され始めた。10月6・7日、専門指導員小林達雄国学院大学教授による調査指導が行われた。10月13日からはMCラインより東側で、1グリッド分の幅で砂利層の掘り下げを開始。岩盤のレベルは南側ほど低く、南端部では11月上旬ようやく岩盤に到達した。深い所で、約3mの砂利層が堆積していた。10月28日、岩瀬遺跡の調査内容を報道関係に公開。AKT、NHK、AAB、各新聞に報道され、日本最古の石匙や爪形文土器などが注目を集めた。11月12日には、最後まで残っていたMCラインの土層ベルトも掘り下げ、11月17日からは撤収作業に入った。11月19日、遺物や機械を搬出しすべての現場作業を終了した。



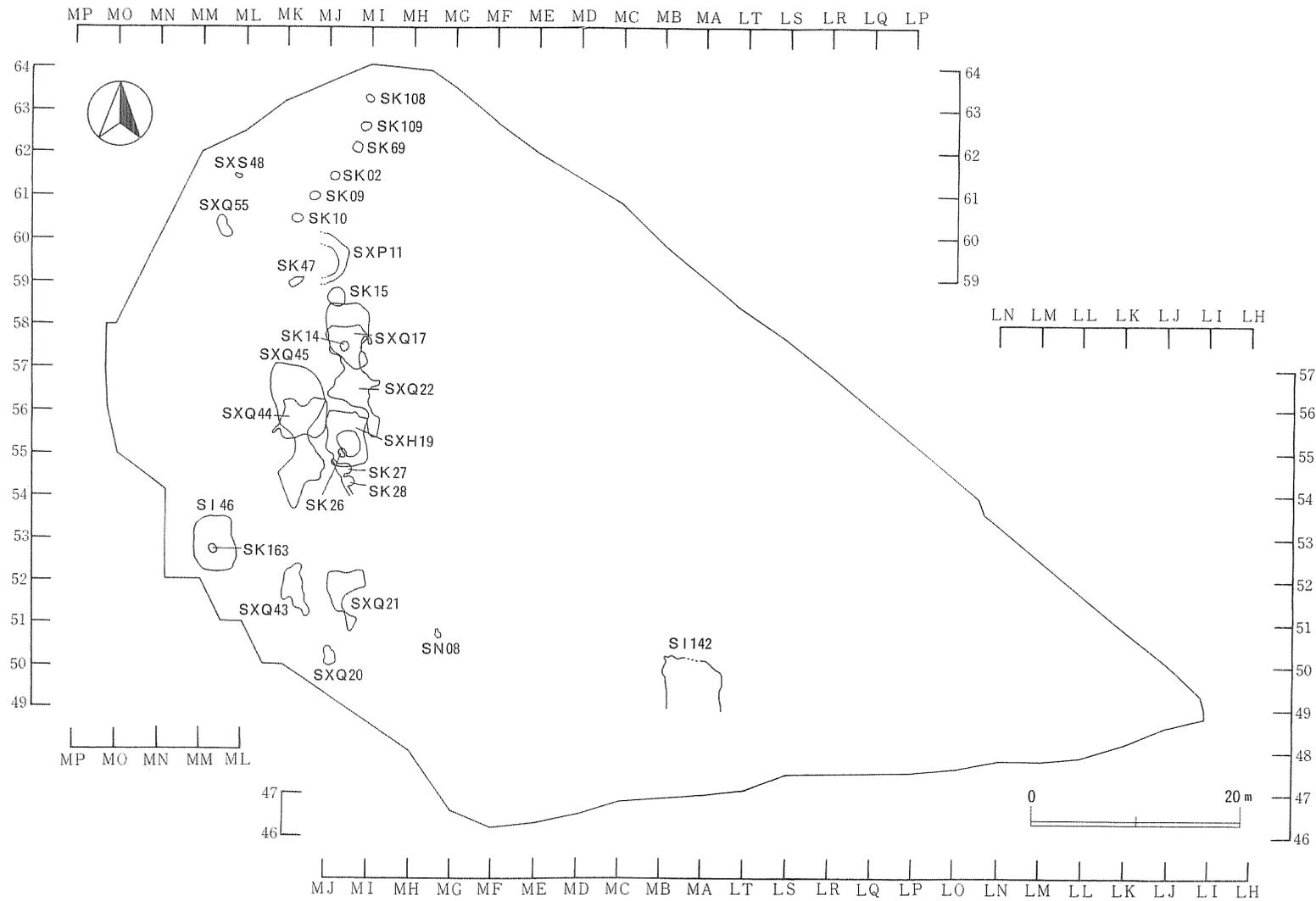
第16図 遺構配置図(1) 早創期



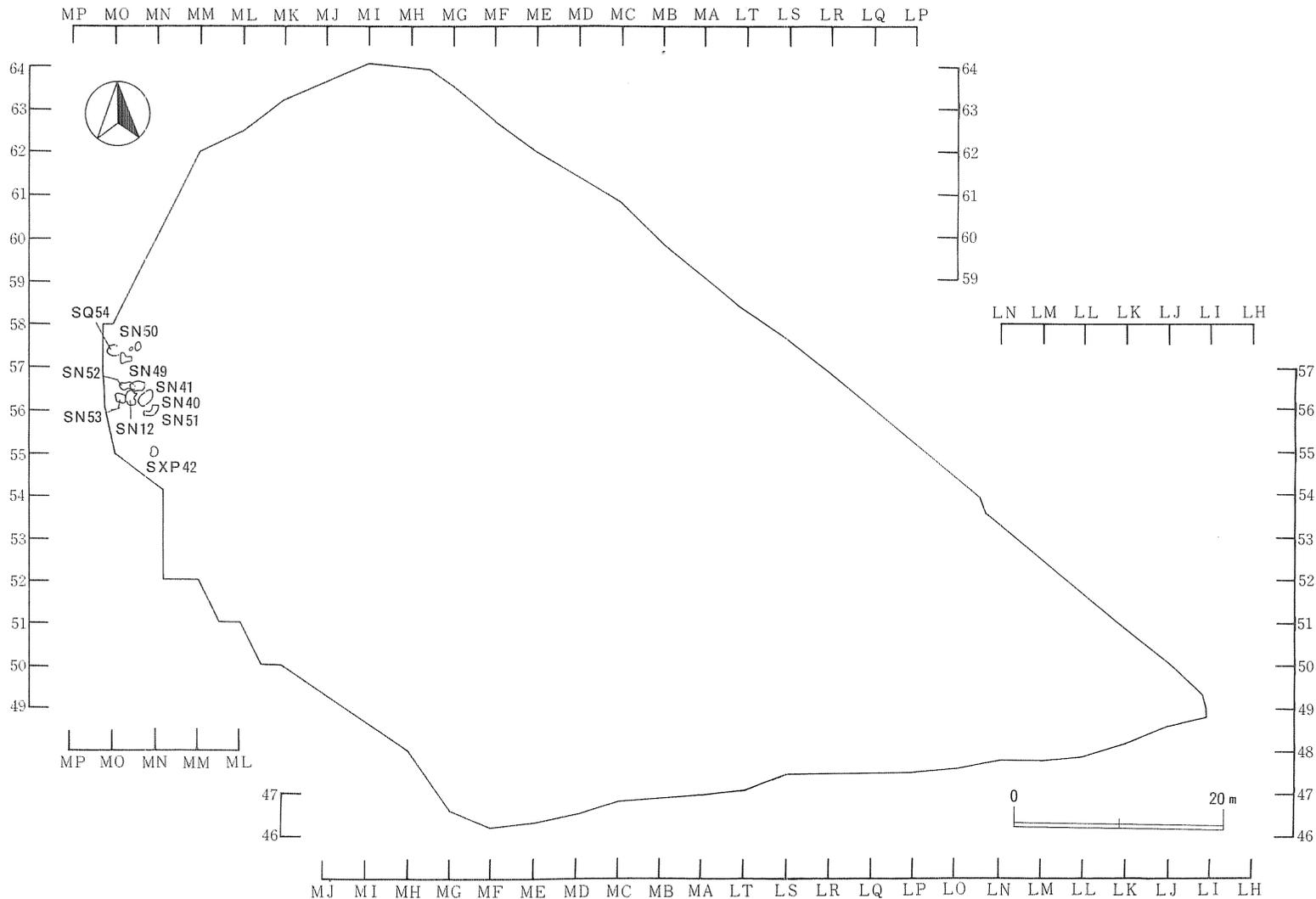
第 17 図 遺構配置図 (2) 早期



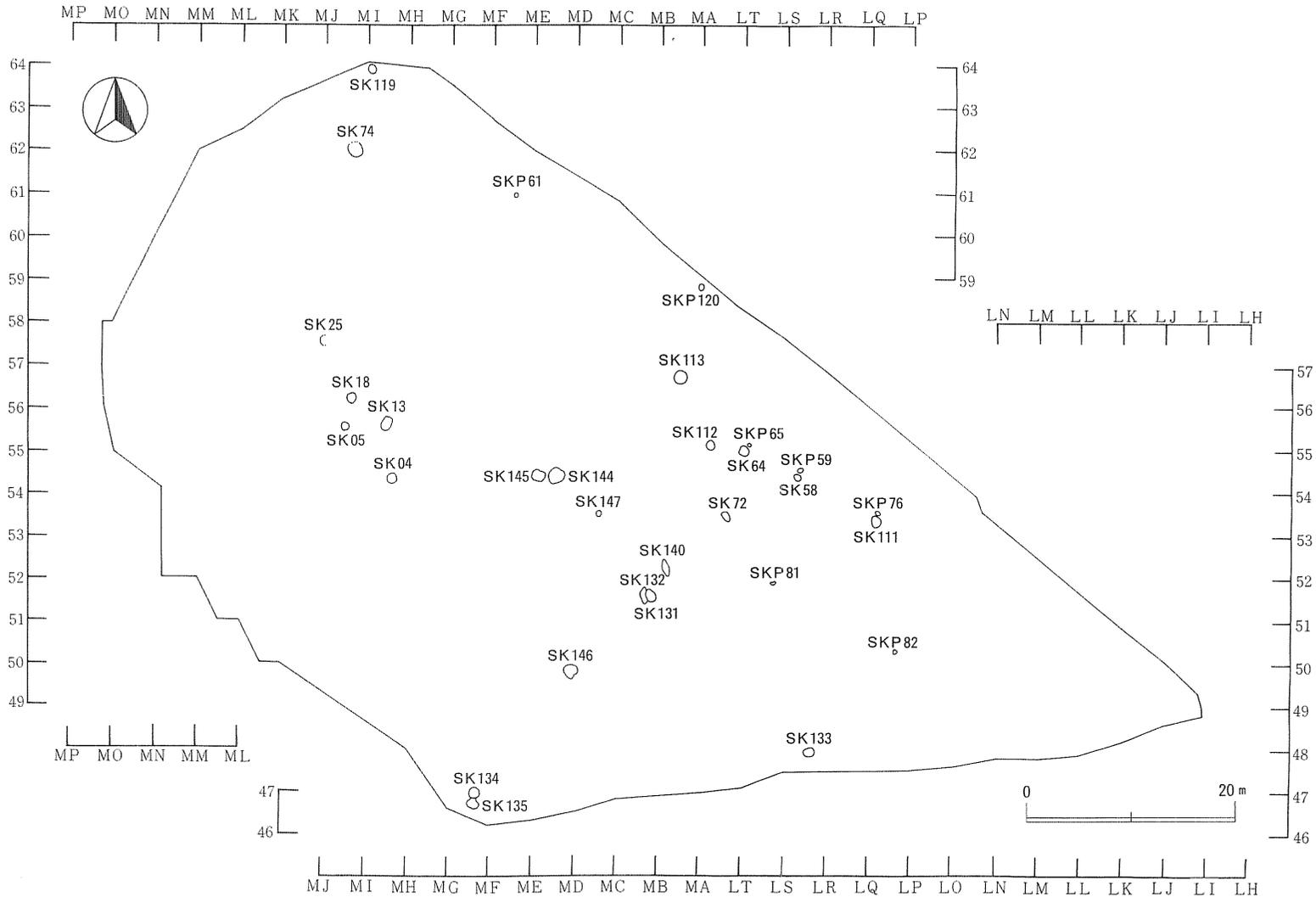
第18図 遺構配置図(3) 早期から前期



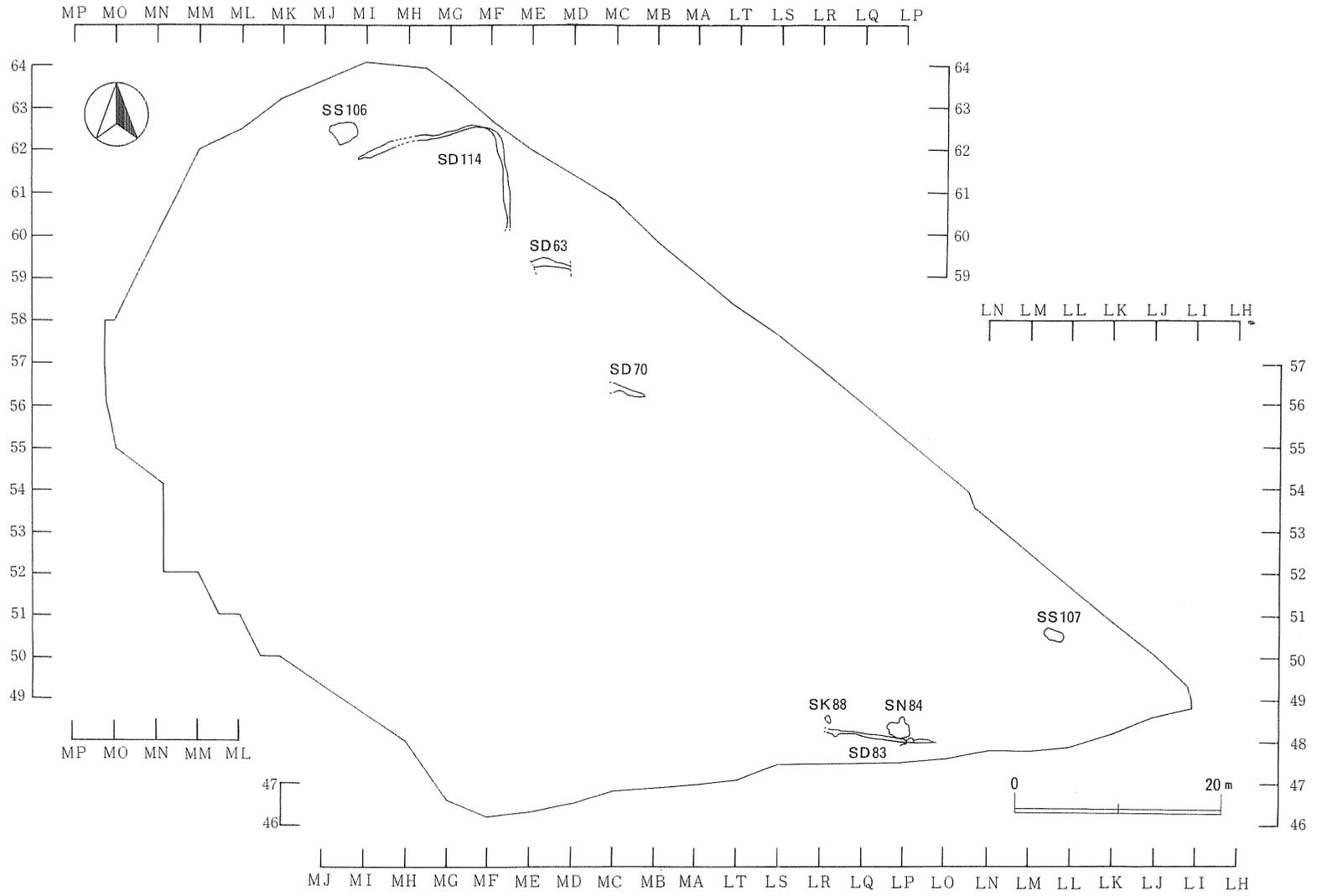
第19図 遺構配置図(4) 前期



第20図 遺構配置図(5) 中期



第21図 遺構配置図(6) 縄文時代で時期不明



第22図 遺構配置図(7) 縄文時代以降

第4章 調査の記録

第1節 縄文時代の検出遺構とその遺物

1 草創期

草創期の遺構と遺物は、調査区中央北側で河道Aより山側に集中している。層位的には、基本層位のVI～XI層より検出している。遺構の種類と数は、竪穴状遺構1基、集石炉2カ所、石器石材集積遺構3カ所、石器集中部16カ所、炉跡8基（内2基は不明瞭）である。遺物は、隆起線文・爪形文・縄文・無文土器の草創期の土器が少量出土した外、多量の石器が出土している。石器の種類は、両面調整素材・両面調整石器・石槍・石鏃・搔器・削器等があり、接合資料に恵まれている。

(1) 竪穴状遺構

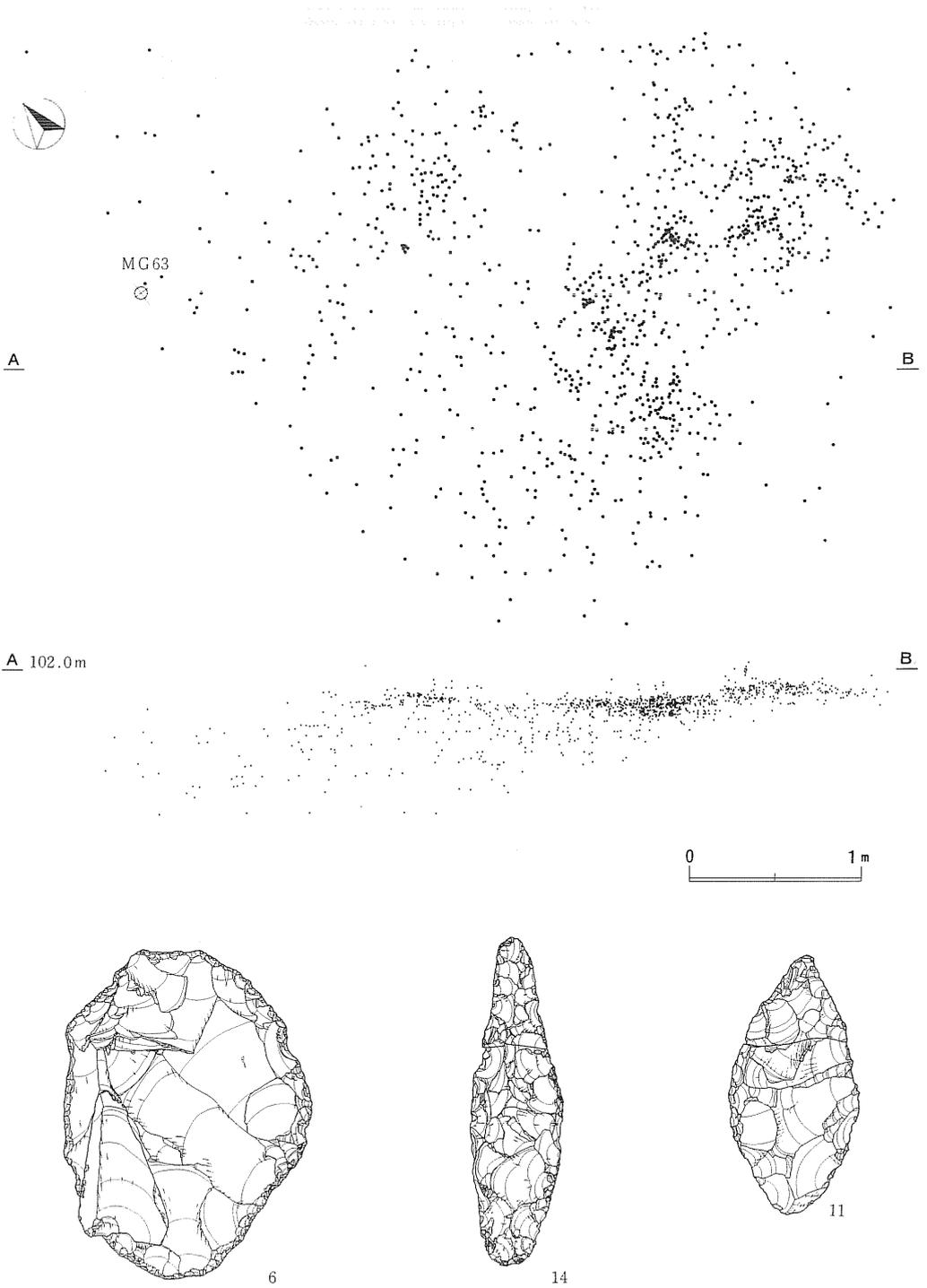
SXH66（第23～31図、巻頭図版3、図版2・43・44・63・64）

上段で調査区北西部のMF62区に位置し、表土下約1mのXI層直上で検出。本遺構では、竪穴状遺構を中心にそれより広い範囲で、多量の石器が出土した。竪穴状遺構は、MF62区の中央から北東にかけて、30cm前後の大きな礫が取り除かれて、緩い窪み状を呈したものである。遺構は長軸が南西―北東の方向を指す楕円形と考えられ、その半分弱と推定される北東側は調査区外に延びている。規模は推定長軸約2.2m×短軸約2mである。北東側には、礫の上面が部分的に赤く焼けた推定長軸1m×短軸0.8mの範囲があり、これも調査区外に延びている。石器の集中は、竪穴状遺構とその周辺部に及び、さらに北東側の調査区外に広がると予想される。これらは、XI層直上とその上のVIII層下位で出土し、特に竪穴状遺構内での出土量が多い。取り上げ総数は1,004点で、約6m×4mの広がりがある。垂直分布の内、特に集中する上位面では、平均0.1mの幅に収まるものが多い。逆に、南西側の傾斜した礫層面から出土している遺物は、最大0.8m幅のものもある。以上のことから、遺構は上屋を伴った住居跡の可能性があり、さらに多量のチップが出土していることから、ここで石器製作を行ったと考えられる。

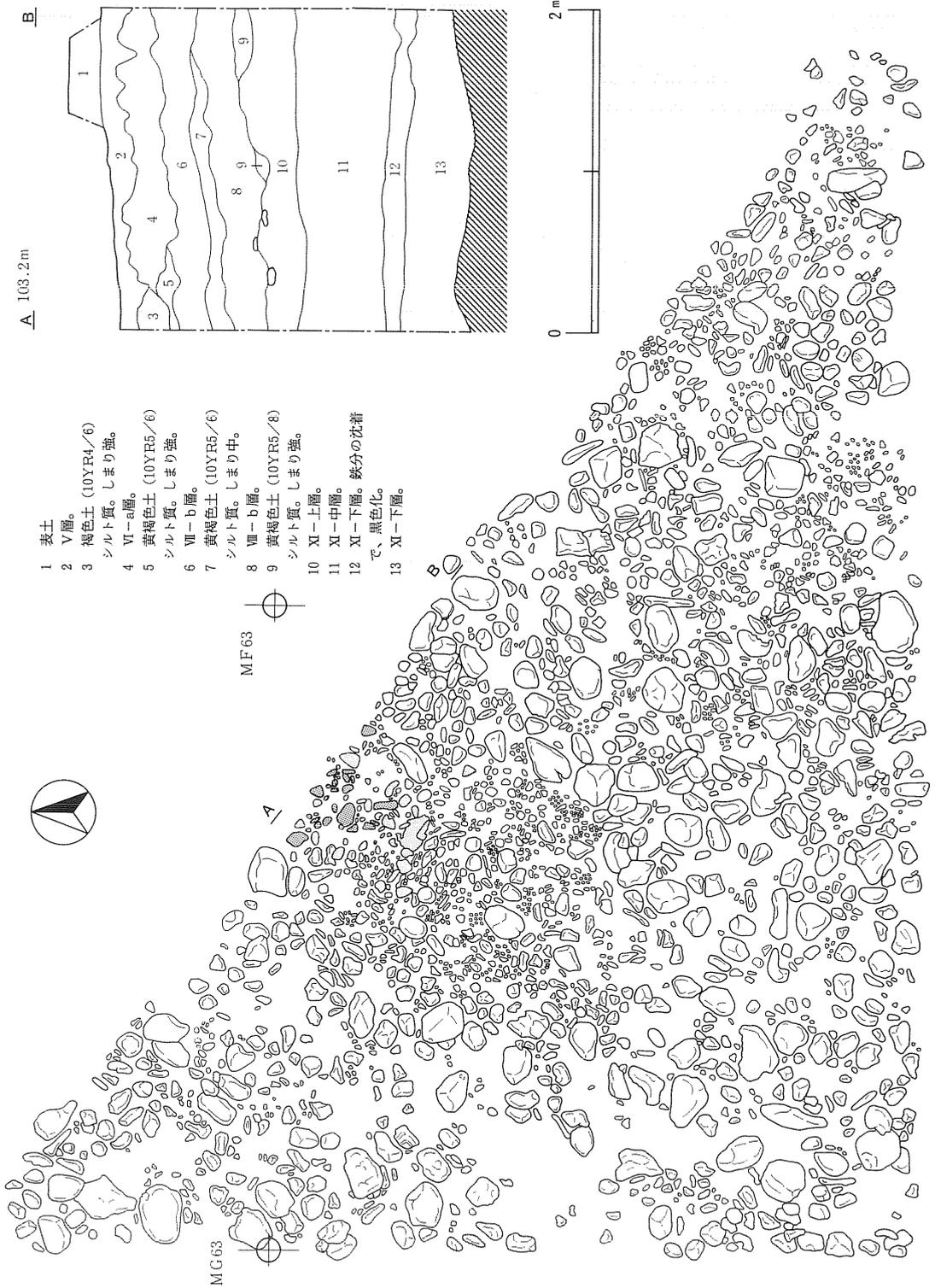
出土遺物は石器のみで、接合資料・両面調整素材・両面調整石器・石槍・石斧がある。

接合資料（1～4） 1は大型の細長い扁平な素材で、初めa・b両面に粗い調整を施す。その後a面からの折断がある。折れ面から剝離を施した後、さらに2つに折れ放棄している。2は扁平な楕円形の河原石を素材とする。c・d面の側面に打面を作り、各々そこから交互剝離を

第4章 調査の記録



第23図 竪穴状遺構(1) SXH66



第24図 竪穴状遺構(2) SXH66

施す。3・4は、両面調整を意図した片側の剝片接合資料である。4の剝片には、礫皮面の資料が多い。

両面調整素材（5） 分厚く両面に礫皮面をもち、河原石を素材にする。両面に粗い調整を施し、a面左側縁に沿って、打面作出のため長い剝離を上下両端から施す。不均一な材質のため、剝離の碎けた痕跡がある。

両面調整石器（6～16） 6は縦長の大型剝片で、a面の周辺すべてとb面の右側縁に細かな調整がある。a面の左下位に剝片が接合する。7は1の石核。下端で打面を作出しており、上端の折断は、適当な大きさと打面調整を意図した可能性がある。8は、a面の左側縁を打点とする横長剝片の可能性がある。特にb面の右側縁には細かい調整がある。a面の上位には礫皮面がある。9は剝片素材と考えられる。b面ではS字状を呈し、下位は尖っている。a面左下位側縁とb面の左側縁に調整を施すが、b面左上位が丁寧である。10は横長剝片の素材で、a面の左上位を除く両側縁を整える。11は2の石核。木の葉形の整った形で、a面側縁には細かな調整がある。上部にb面からの折断があり、b面中央やや上の剝離が影響したと考えられる。12は、大型で木の葉形を呈していたと考えられる。特にb面の右側縁に丁寧な調整を施し、作業途中でa面から不慮の折断が生じたものであろう。13はa・b面を整えたもので、a面からの折断がある。上位が幅広で、そこから急に厚みを増す。14は、a面が甲高でb面が相対に湾曲ぎみなことから、剝片素材の可能性がある。これは上位が窄まり、下位も先細りになるものの先端が丸みをもつ。細かく丁寧な剝離は少ないが、完形品と考えられる。風化した頁岩で黄白色を呈すが、上位に限っては茶褐色に変色している。15はこれと同一形態で、上位部分が残存したもの。b面からの折断があり、調整は丁寧で細かい。16は薄く扁平な仕上げで、幅の狭い半月形を呈す。a面からの折断がある。

石槍（17） 柳葉形を呈しており、a面が甲高になる。左右が非対称形で、製作途中と考えられる。b面から不慮の折断がある。

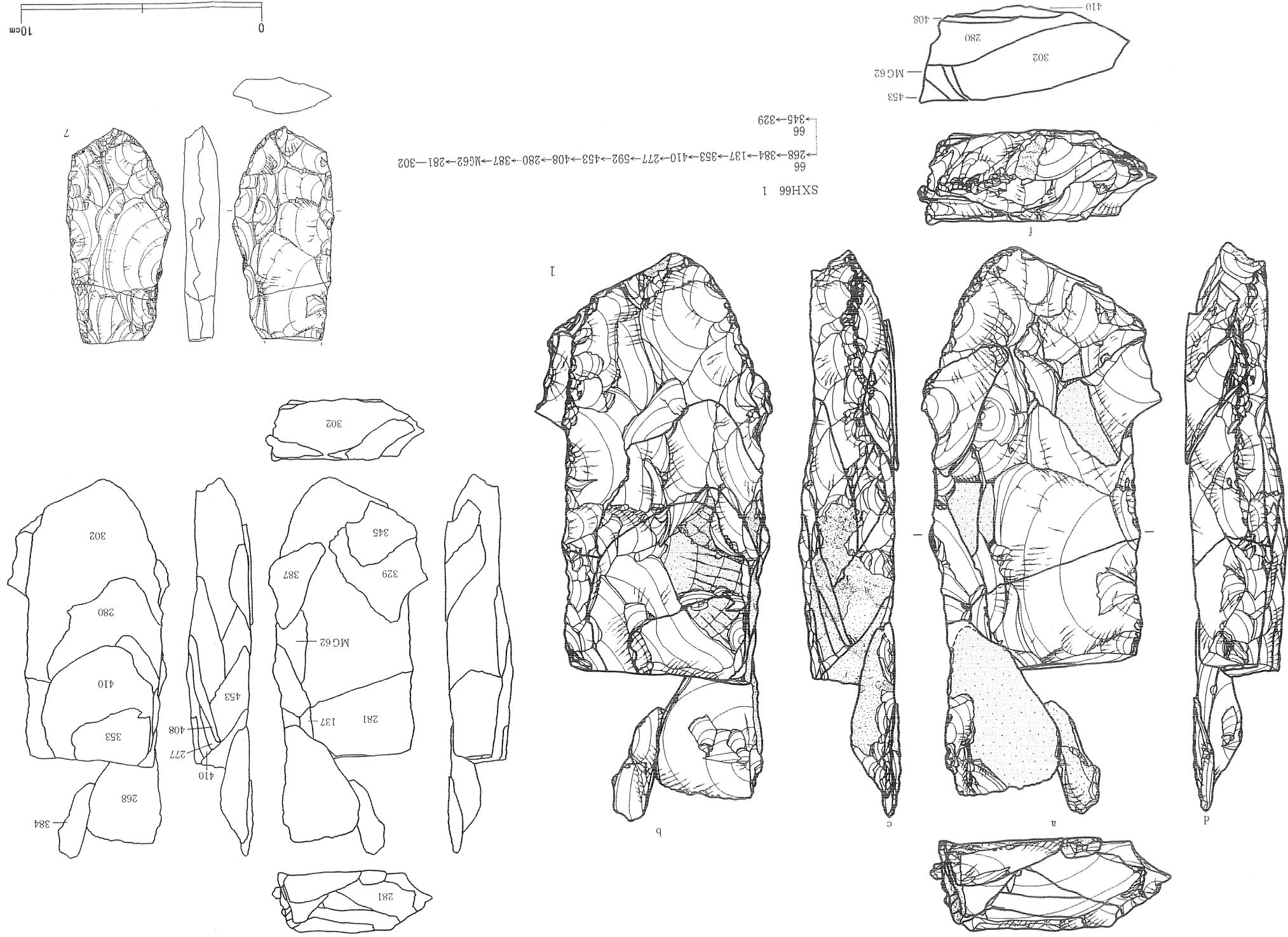
石斧（18） 全体を細長い楕円形状に整えたもので、下端の刃部は薄く鋭角に仕上げている。b面からの折断がある。

（2）集石炉

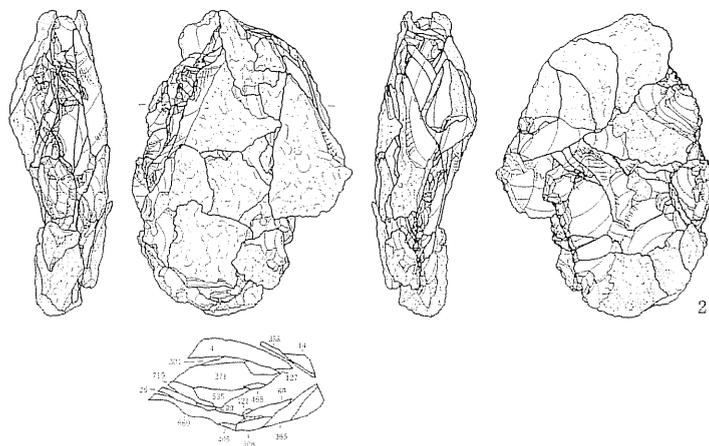
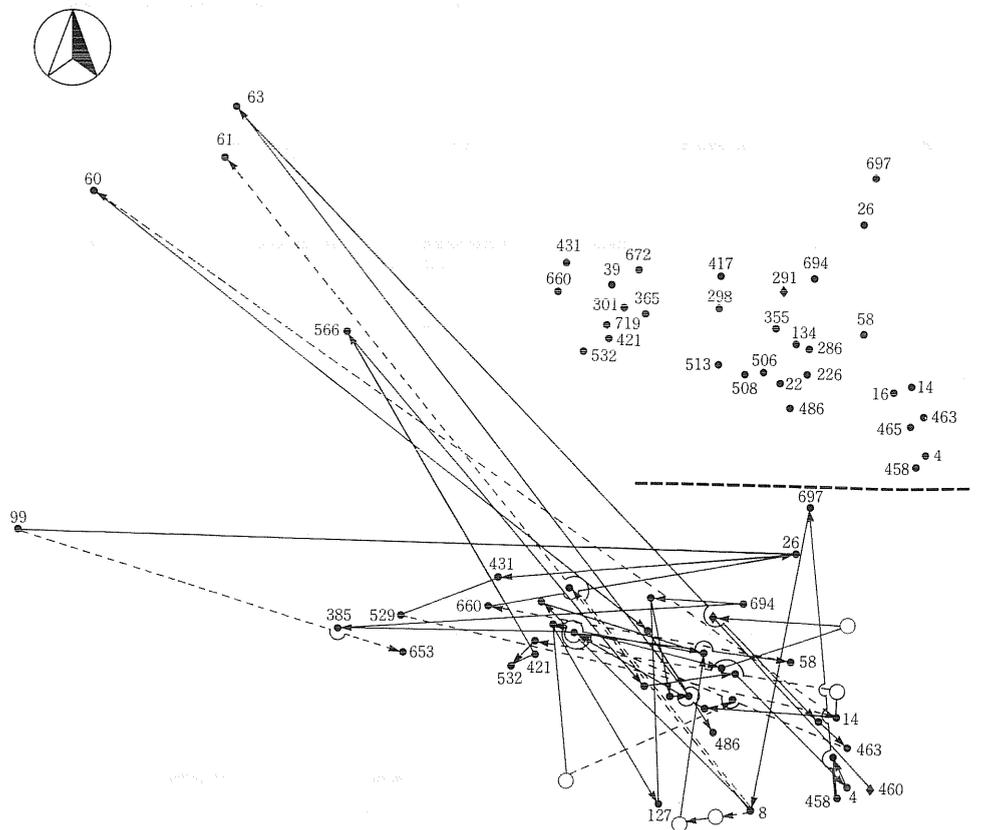
SQ68（第32図、図版8）

下段で調査区中央の北側ME62区に位置し、表土下約0.7mのⅧ層上面で検出。黄褐色砂質土で、炭粒および焼礫の広がりとして検出。北側は調査区外に延びている。緩やかな窪地状の地形に、礫が集中したものと考えられる。礫の広がりには直径約3mの半円状の範囲で、中心の径1m程以外は疎らである。炭粒を除去した形態は、深さ0.1～0.15mの不整形である。礫の大きさは5～20cmで、大半が赤く焼け破碎したものが半数を占める。覆土は黄褐色砂質土。

0
10cm



第25図 遺構内出土遺物(1) SXH66①

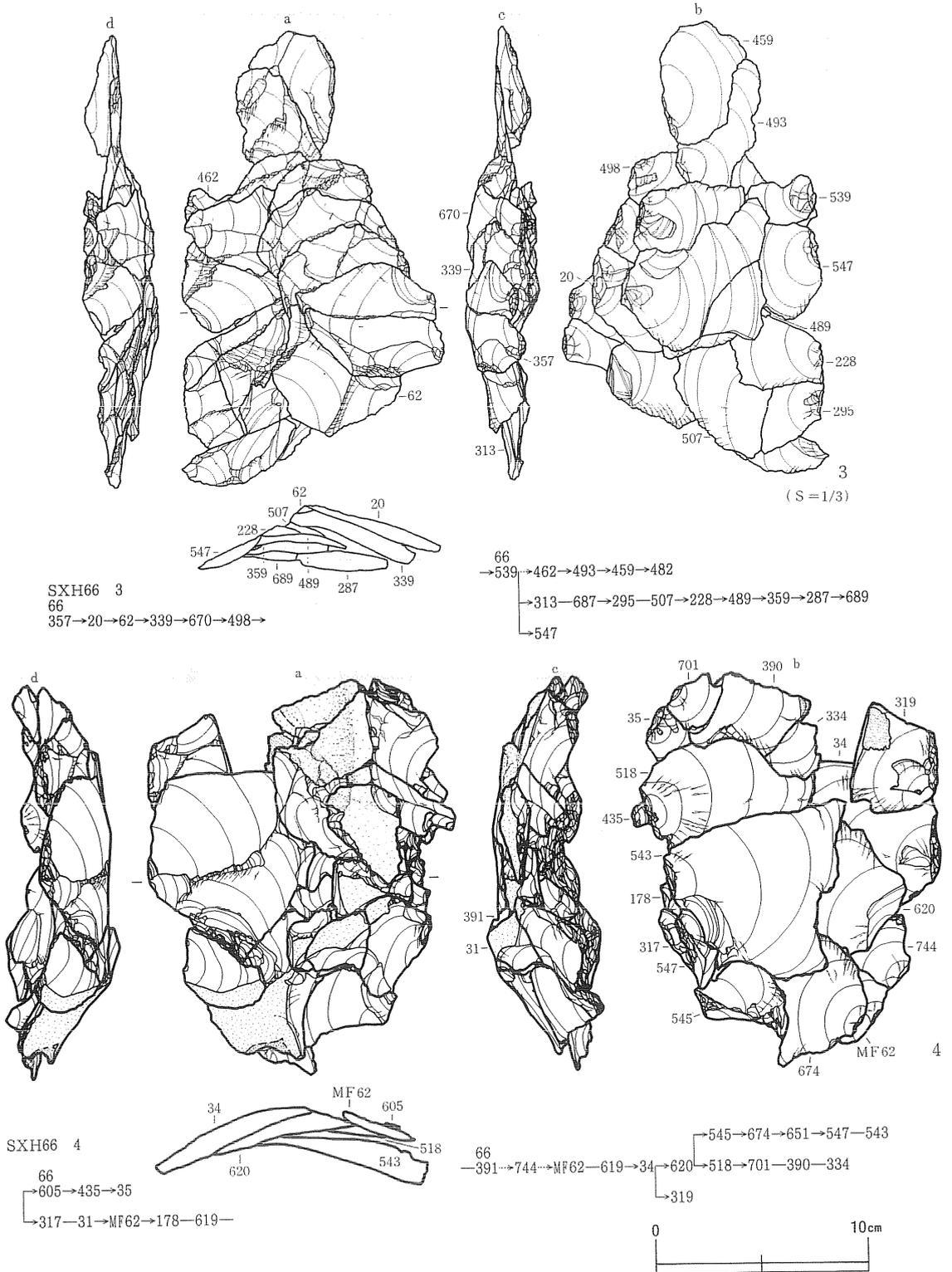


MF62

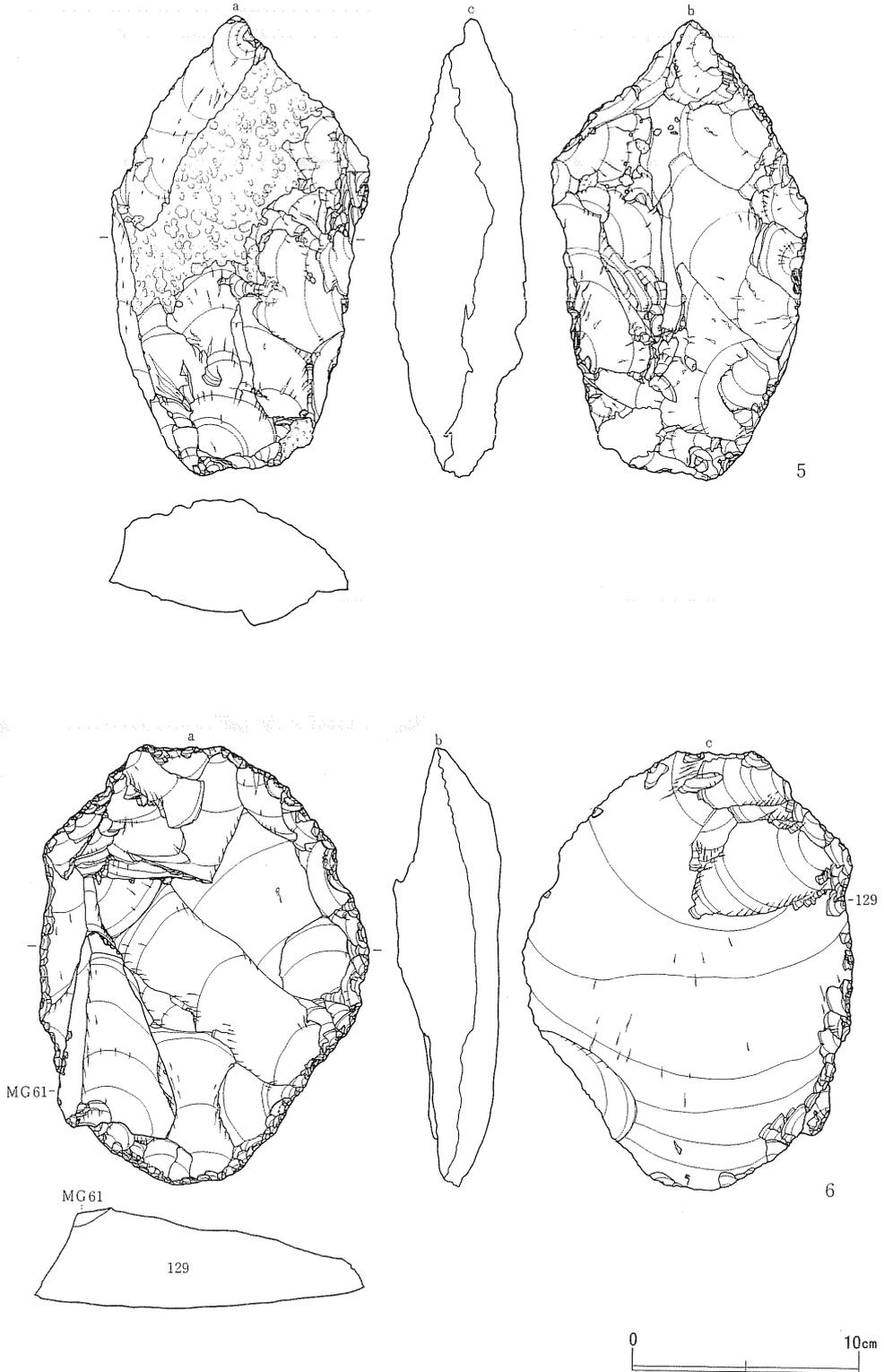


第27図 接合関係図(1) SXH66

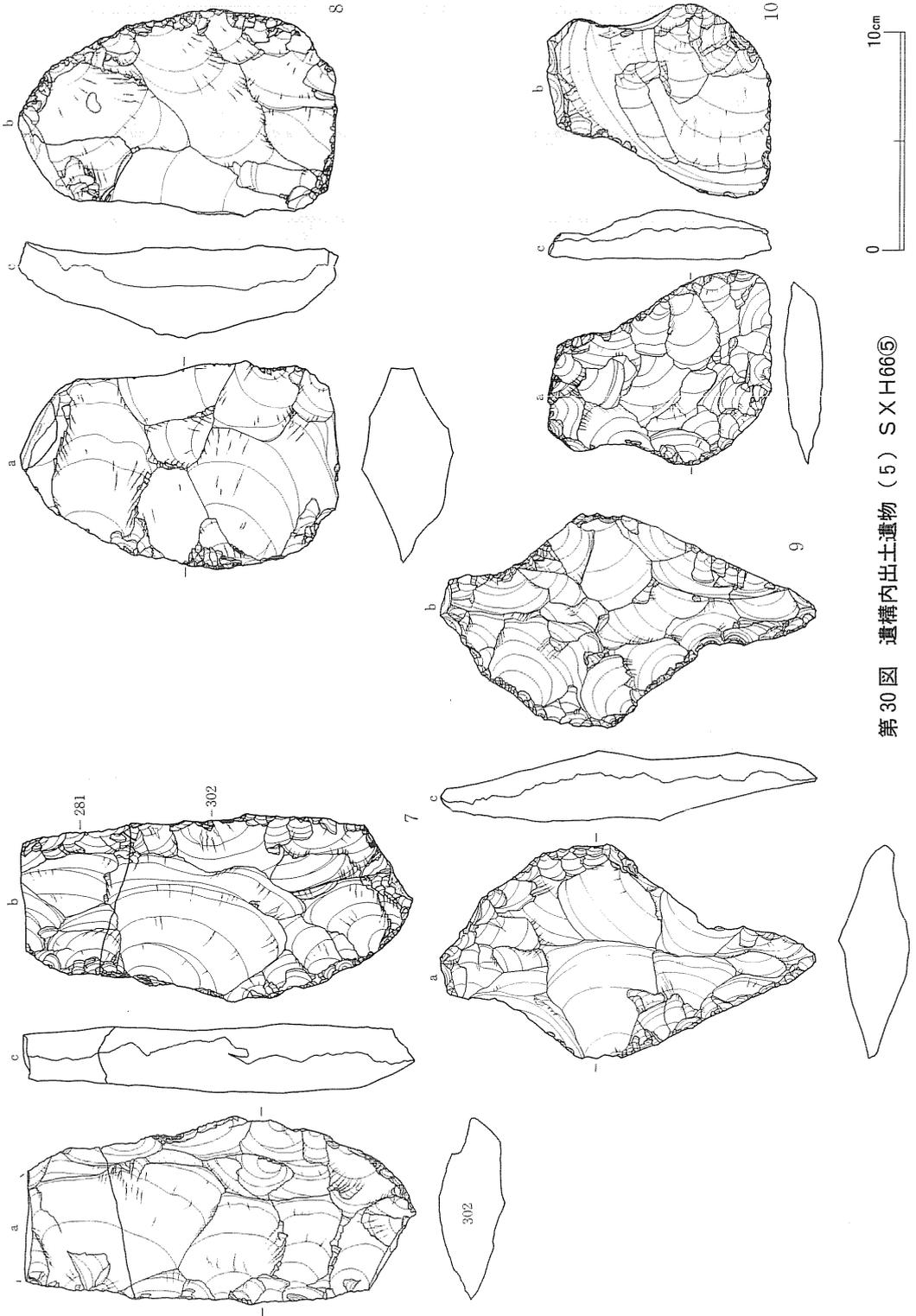
第4章 調査の記録



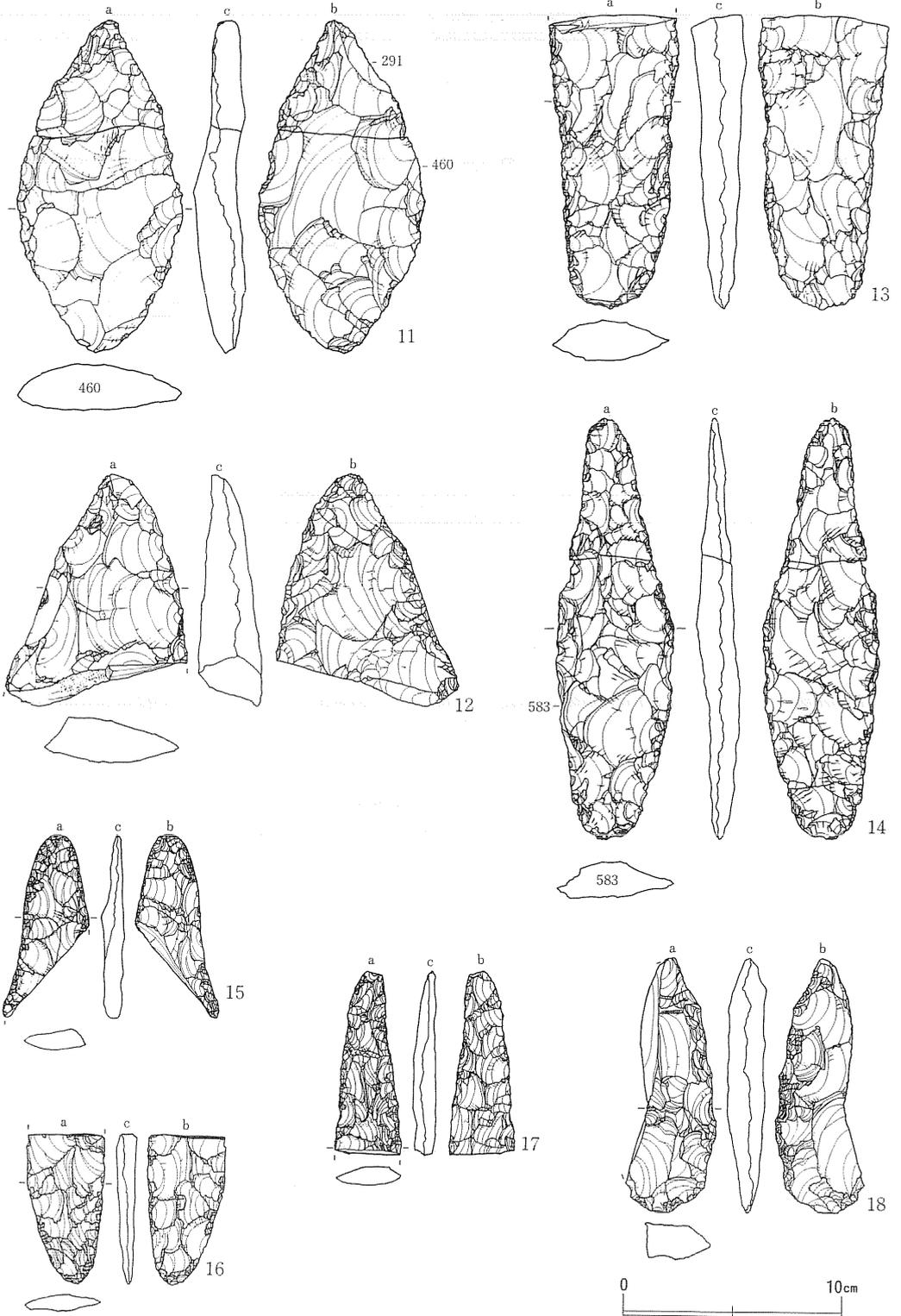
第28図 遺構内出土遺物(3) SXH66③



第29図 遺構内出土遺物(4) SXH66④

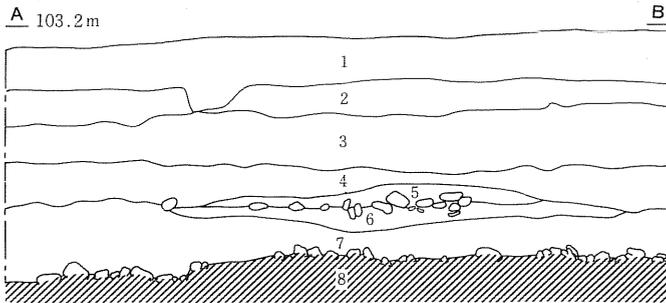
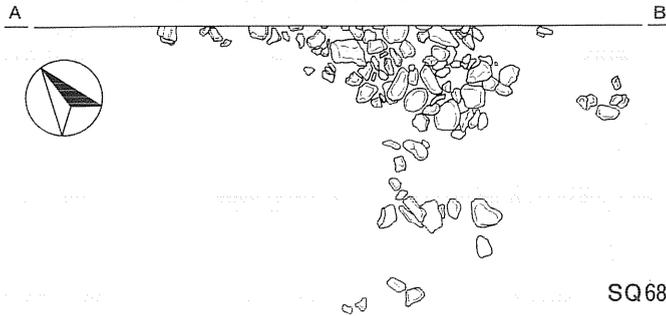


第30図 遺構内出土遺物 (5) S X H 66⑤

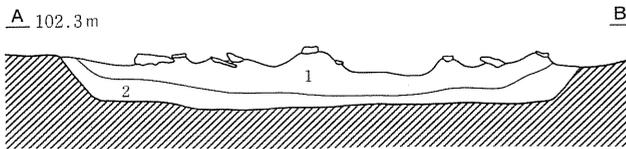
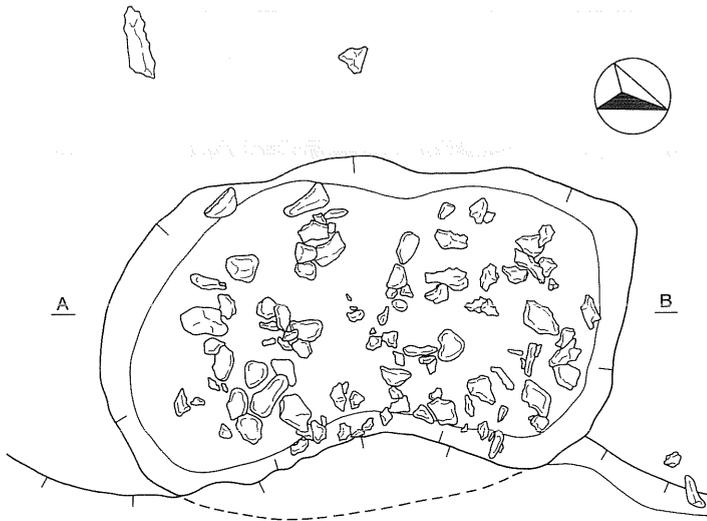


第31図 遺構内出土遺物(6) SXH66⑥

第4章 調査の記録



- 1 耕作土
- 2 褐色土 (10Y R4/4)
地山、白色砂を含む。しまる。
- 3 黄褐色土 (10Y R5/6)
砂粒を含む。しまる。
- 4 黄褐色土 (10Y R5/6)
白色砂、シルトを含む。しまる。
- 5 黄褐色土 (10Y R5/6)
炭粒、砂粒を含む。
- 6 黄褐色土 (10Y R5/6)
炭化物、砂粒を含む。しまる。
- 7 黄褐色土 (10Y R5/6)
砂粒を含む。しまる。
- 8 礫層



- 1 褐色土 (10Y R4/6)
炭粒、シルトを含む。しまる。
- 2 黄褐色土 (10Y R5/8)
炭粒、シルトを含む。しまる。



第32図 集石炉 (1) SQ68・116

SQ116 (第32図、図版8)

下段で調査区中央の北側ME61区に位置し、表土下約0.7mのⅦ層で検出。東側は削平してしまつた。黄褐色砂質土中で褐色土として検出。掘り方をもち、その平面形は長軸2.9m×短軸1.8mの略楕円形で、深さ0.3mである。底面は平坦で、断面形は摺鉢状を呈す。礫は長さ5～15cmで破碎したものが多く、大半が赤く焼け覆土上位に集中している。覆土は炭粒を含み、上位が褐色土、下位が黄褐色土である。

(3) 石器石材集積遺構

SXS57 (第33・34図、巻頭図版5、図版15)

上段で調査区中央の北側MD58区に位置し、表土下約0.9mのⅦ層で検出。掘り方は確認できず、近くから焼礫1点と剝片5点が出土している。遺構は、4点の扁平な両面石器が密着して出土し、これらは主軸をほぼN-35°-Wに揃えていた。石器は下から、21・22→19→20の順に重なっている。

両面調整石器(19～22) 19は扁平な半月形を呈し、薄く長い剝離を施す。a面下位には槌状剝離があり、それをa・b面共に打面として利用している。槌状剝離面は、中央で6～9mmの幅で残ることから、形を整える意識が強かったものと考えられる。両側縁は薄く鋭利で、微小剝離痕が認められる。20も扁平な半月形を呈し、薄く長い剝離がある。両側面は薄く鋭利で、小さな剝離を丁寧に施す。上下の先端は、a面の小さな剝離で整えている。21も扁平な半月形を呈し、薄く長い剝離を施す。下端を除いた縁辺に小さな剝離がある。両側縁は鋭利な角度をもち、その先端は鈍い。22は縦長剝片を素材にし、幅の狭い半月形を呈する。a面上端に自然面を残す以外は、小さな剝離を施す。a面左下位では微小剝離痕が認められるが、他はやや粗い剝離が多い。

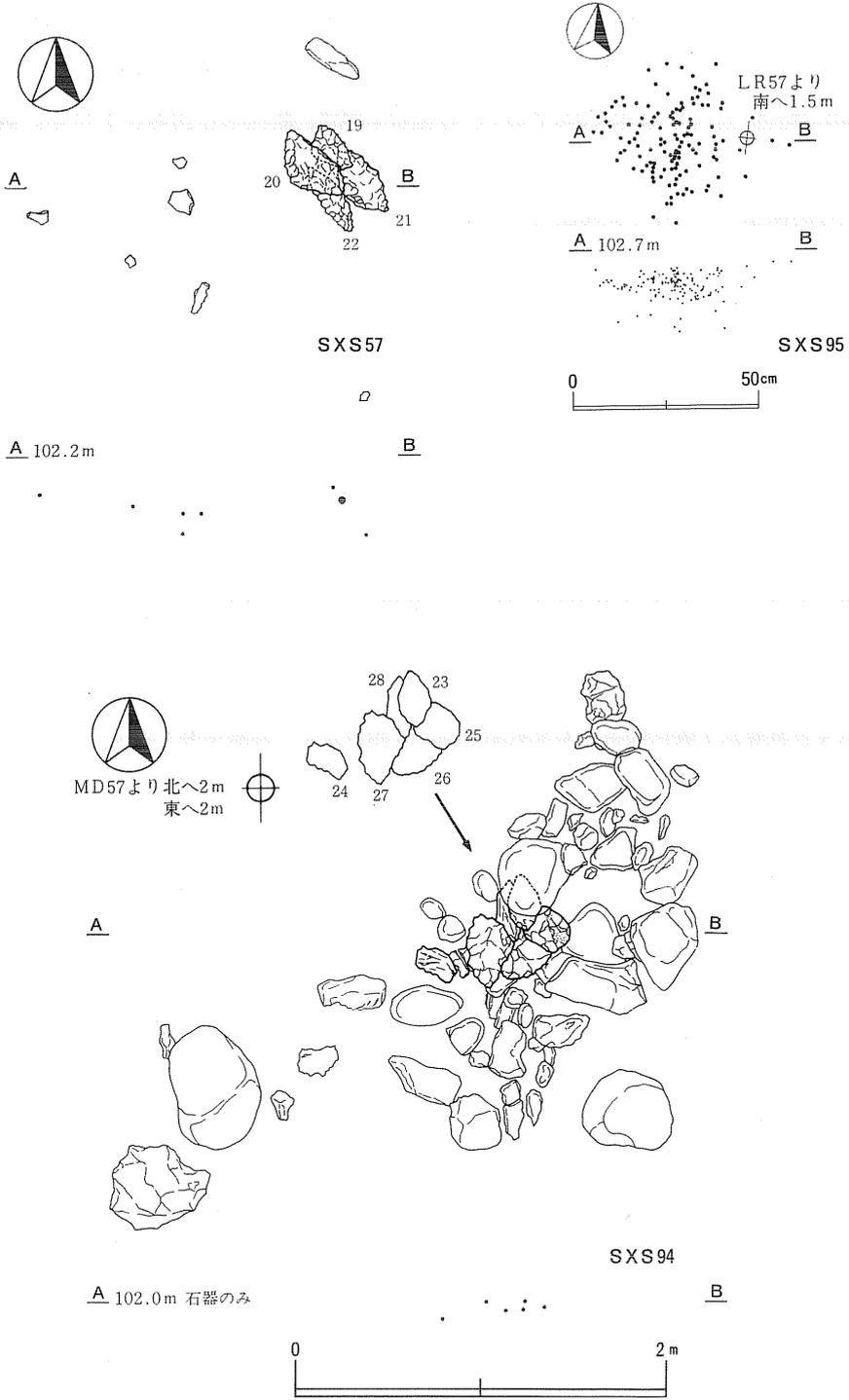
SXS94 (第33・35・36図、図版15)

上段で調査区中央の北側MC57区に位置し、表土下約1mのⅪ層で検出。6点の両面調整素材および両面調整石器が、径0.4mの狭い範囲に集中している。特に24を除くと、一部礫の下になる状態で固まって出土し、整然とした在り方は示さない。

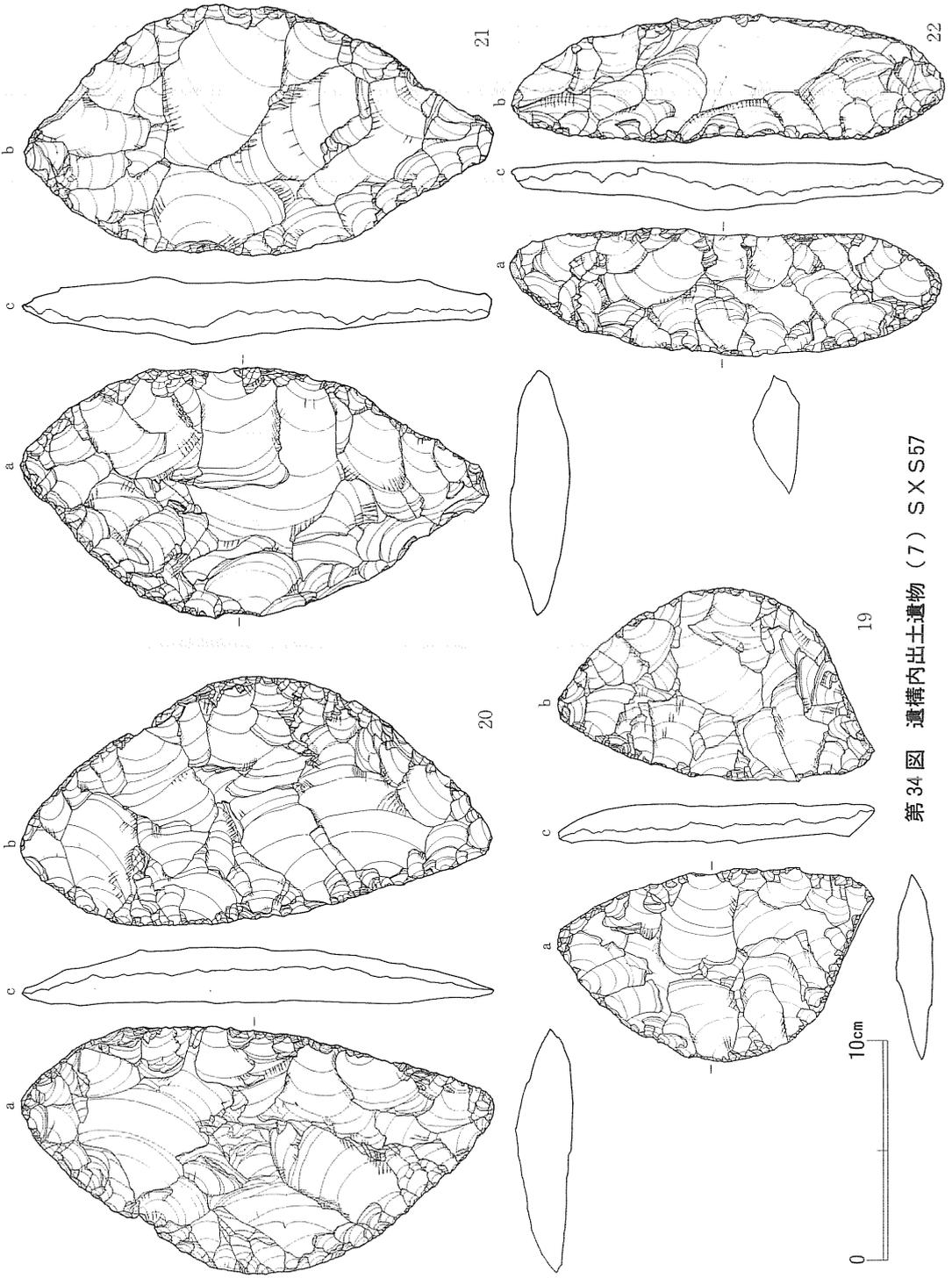
出土遺物は石器のみで、両面調整素材・二次加工ある剝片が出土している。

両面調整素材(23・25～27) 23は、a面が甲高でb面が礫皮面であることから、横長の剝片素材を用いたと考えられる。a面の右側縁上位に、細かい剝離がある。上位には、形を整えるためa面からの折断がある。25は扁平な楕円形の河原石を素材にし、a・b両面に粗い剝離がある。a面の左側縁には、微小剝離痕が認められる。26もやや厚い楕円形の河原石を素材にしたもので、a・b両面に粗い剝離がある。a面右側縁には微小剝離痕が認められる。27は断面三角形の甲高で、a・b両面に粗い調整がある。a面上・下位側縁と同右下位側縁に微

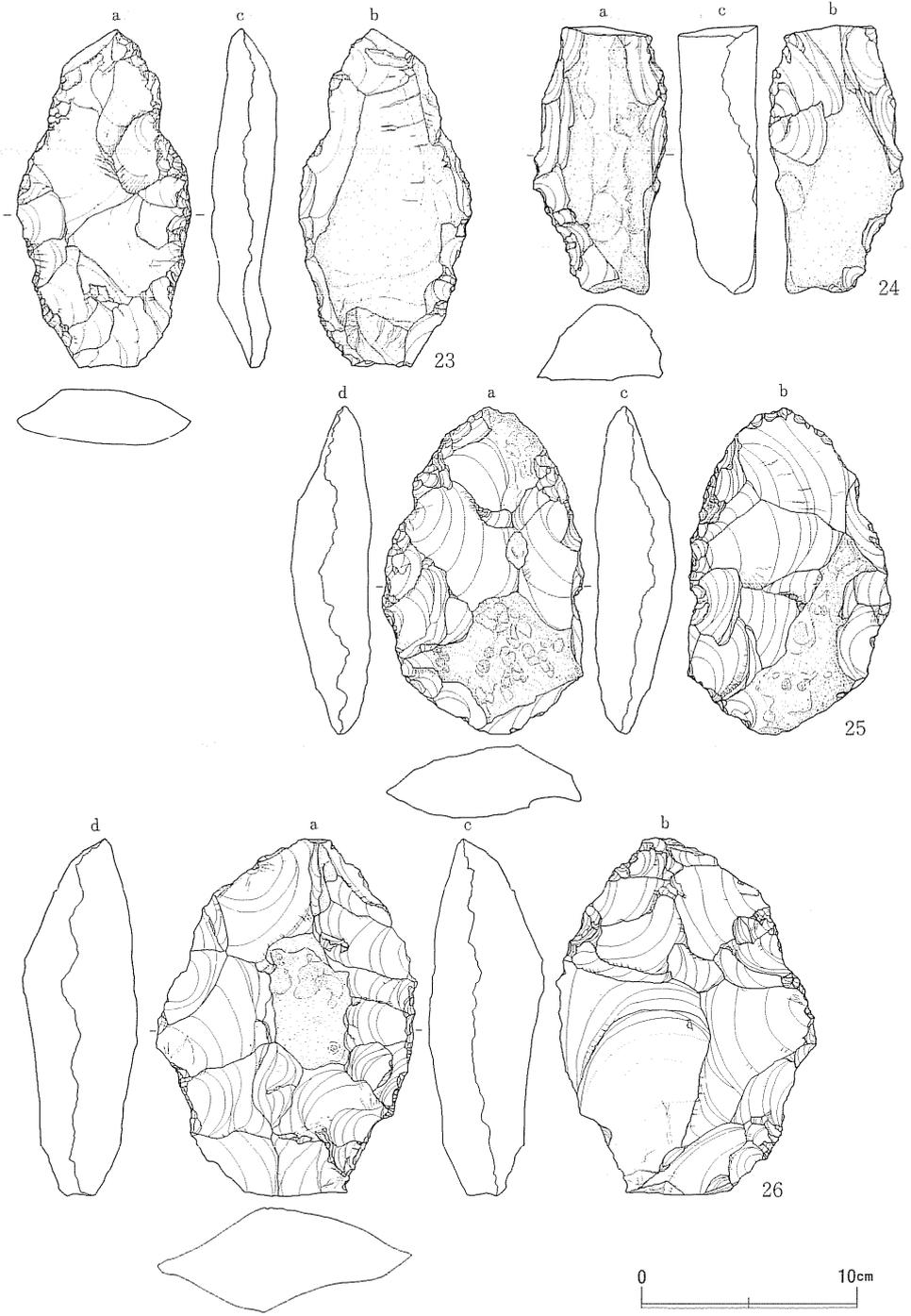
第4章 調査の記録



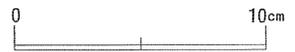
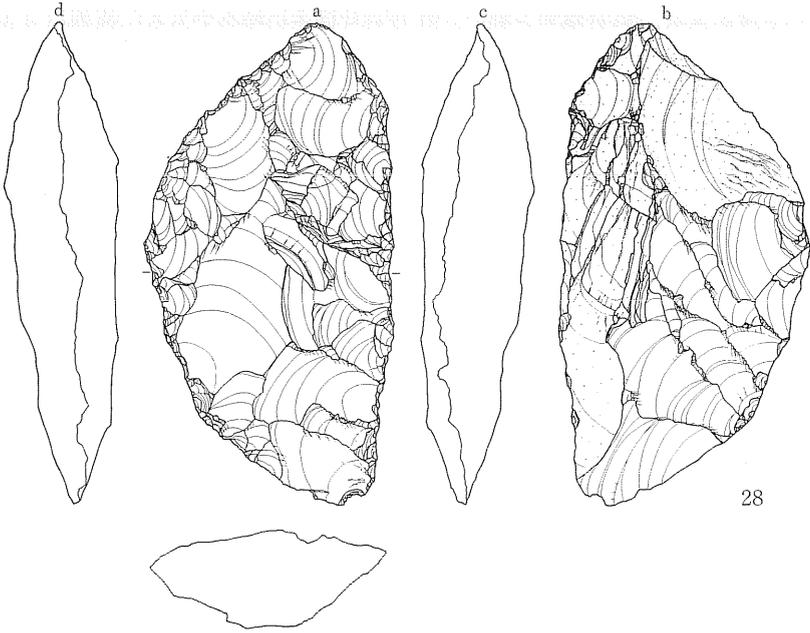
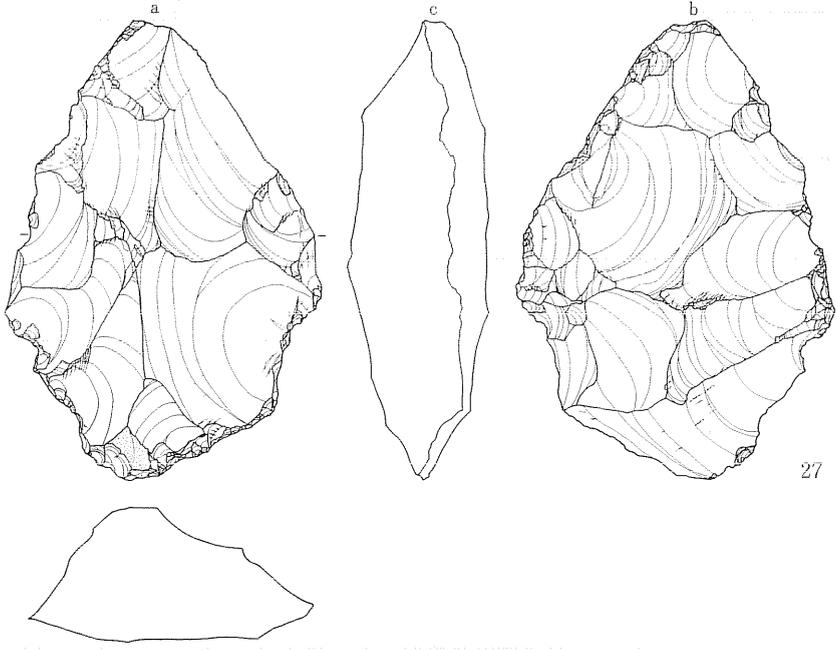
第33図 石器石材集積遺構(1) SXS57・94・95



第34図 遺構内出土遺物(7) S X S57



第35図 遺構内出土遺物(8) SXS94①



第36図 遺構内出土遺物(9) SX S94②

小剝離痕を認める。

両面調整石器 (28) 大型の剝片素材と考えられる。断面三角形の甲高で、半月形を呈している。b面は粗い剝離で、a面の両側縁には小さな剝離や微小剝離痕も認める。b面には自然面を残す。

二次加工ある剝片 (24) 横長剝片を素材にし、a・b両面に粗い剝離がある。b面からの折断があり、ほぼ全面が黒色の付着物で覆われている。

S X S 95 (第 33・37~41 図、巻頭図版 4、図版 15・45・64・65)

上段で調査区北東の L R 56 区に位置し、表土下約 0.4m の VII 層下位で検出。南側の一部を削平してしまった。2~20cm の剝片 135 点が、径約 0.5m の狭い範囲に集中して出土した。掘り方の平・断面は不明。しかし、石器を取り上げた状態が直径約 0.4m 前後で深さ 0.1m の摺鉢状を呈することから、本来掘り方を伴ったものと考えられる。チップ類は出土していない。

出土遺物は石器のみで、接合資料・両面調整素材・削器・二次加工ある剝片・剝片がある。

接合資料 (29~31・38・41) 29 は両面調整素材 (41) に 1 個の剝片が接合。41 は、a 面の自然面より大型の剝片素材と考えられ、a・b 両面に粗い剝離を施す。38 も両面調整素材に 1 個の剝片が接合する。両面調整素材は、c 面の自然面より大型の剝片素材と考えられ、やはり a・b 両面に粗い剝離がある。30 は搔器と剝片、31 は剝片同志の接合である。搔器は a 面右の資料で、同面下位に小さな剝離がある。

両面調整素材 (32・33・39~42・45) 41 は接合資料 (29) の石核。32・33 は、扁平な亜角礫の両面に、粗い剝離を施したものである。40・42・45 は横長剝片を素材にし、両面に粗い剝離がある。39 も c 面の反りの状態から、横長剝片の素材と考えられる。粗い剝離の後、a 面下端に細かい剝離を施す。42 は b 面右側縁が整っており、a 面端部の剝離からみて石斧製作途中の未製品と考えられる。

削器 (34~37・43・44) 34~37・44 は縦長剝片の素材で、礫皮面のある a 面の両側縁に細かく丁寧な剝離を施す。34・36 は、定形的な石器の可能性はある。43 は横長剝片の素材で、a 面の両側縁に調整がある。その結果先端が尖った形状を示す。

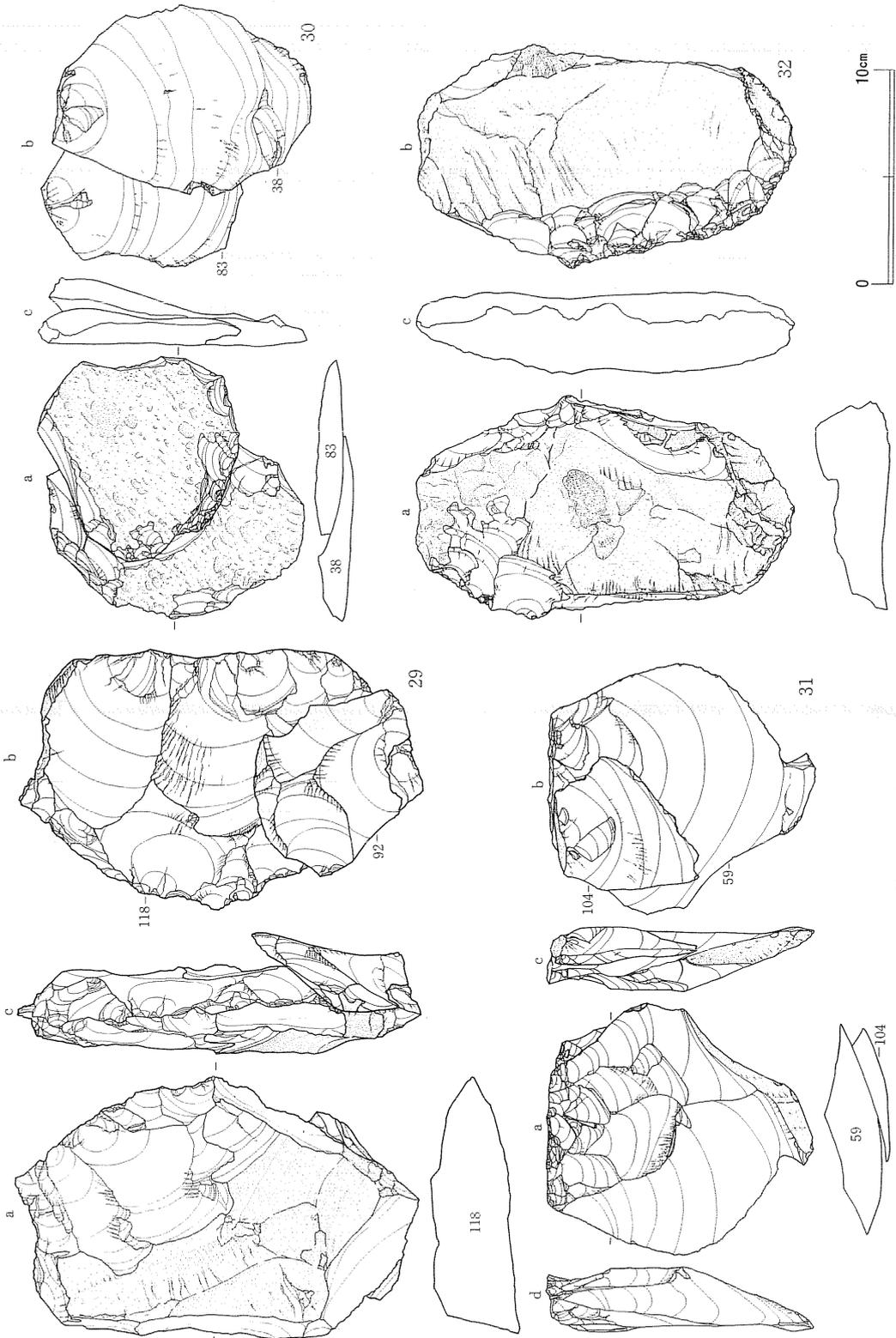
二次加工ある剝片 (53) 横長剝片で、b 面右端に細かく丁寧な剝離がある。

剝片 (46~52・54~58) 縦長と横長があり、大小の多くを掲載した。

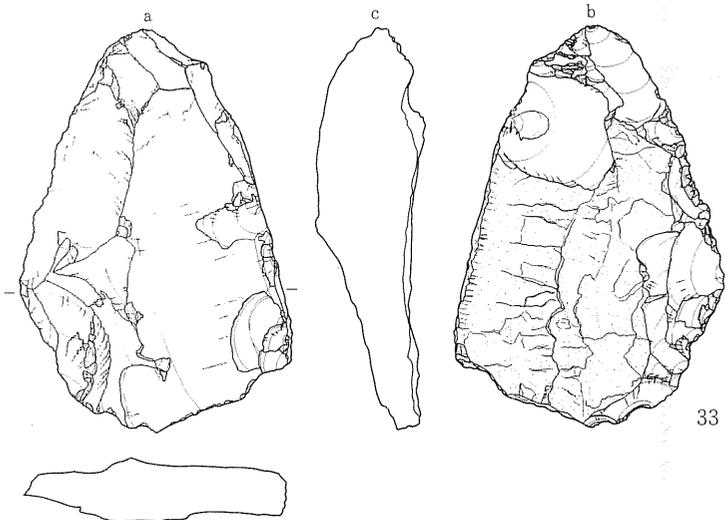
(4) 石器集中部

S X Q 36 (第 42~53 図、巻頭図版 6・10、図版 16・26~33・66・67)

上段で調査区中央の北側 MD 59 区、ME 59・60 区に位置し、表土下約 0.5m の VI 層で検出。石器の集中する範囲に、礫も重なるように確認された。北東には S X Q 85・86 が近接してい

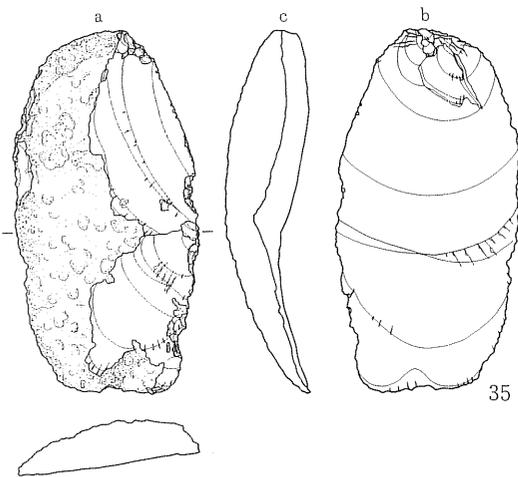


第37図 遺構内出土遺物(10) S X S95①

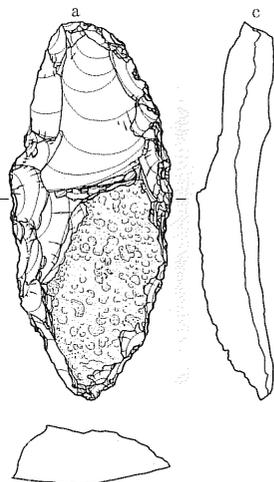


33

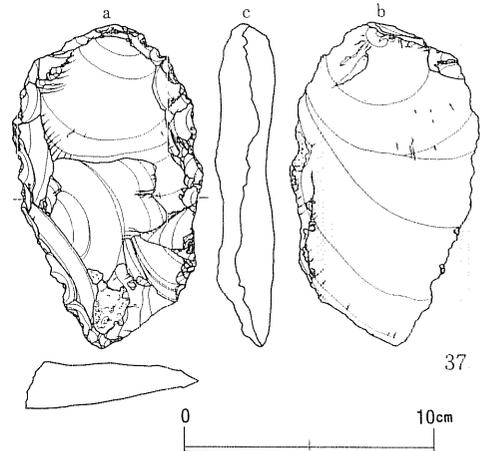
34



35



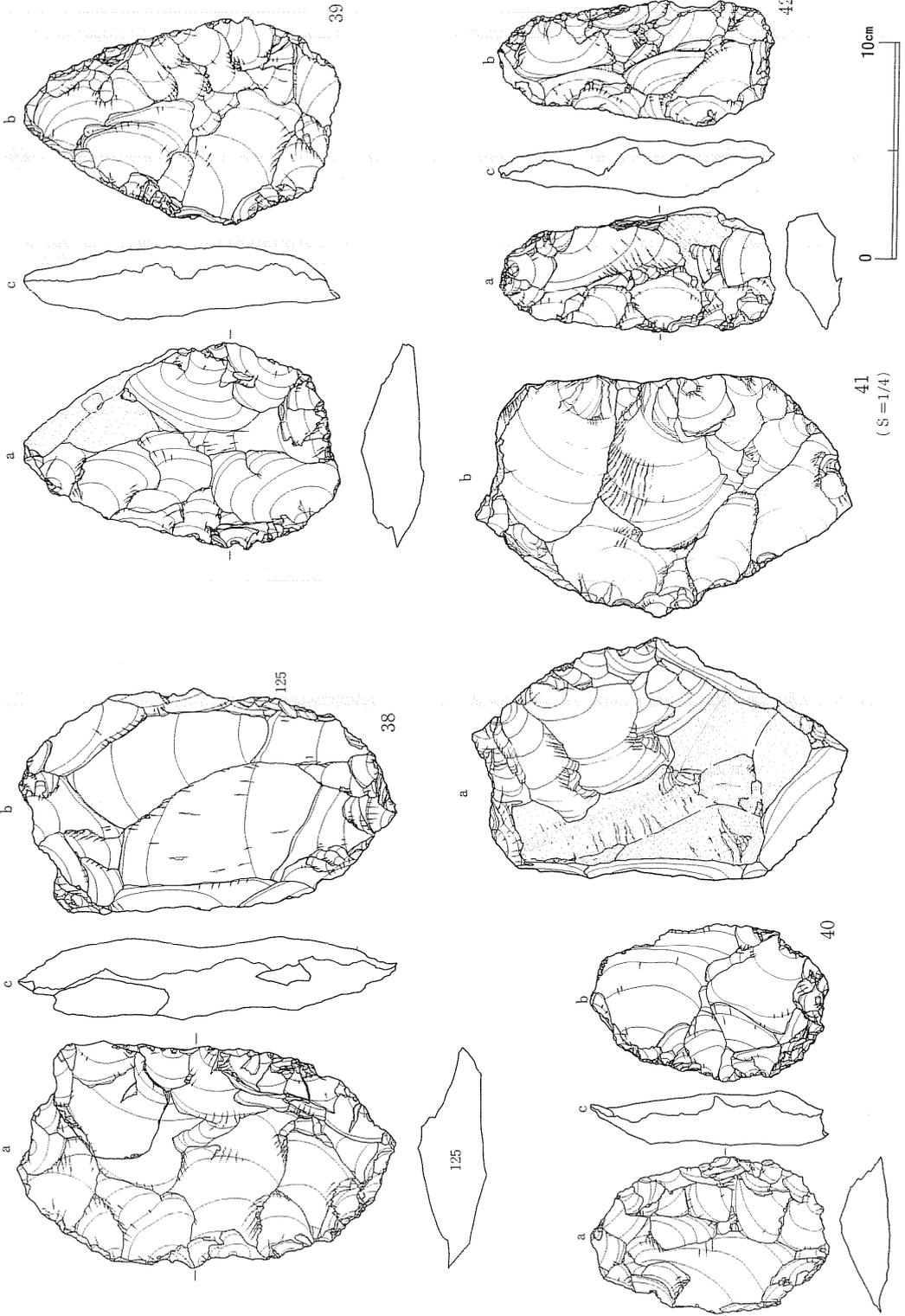
36



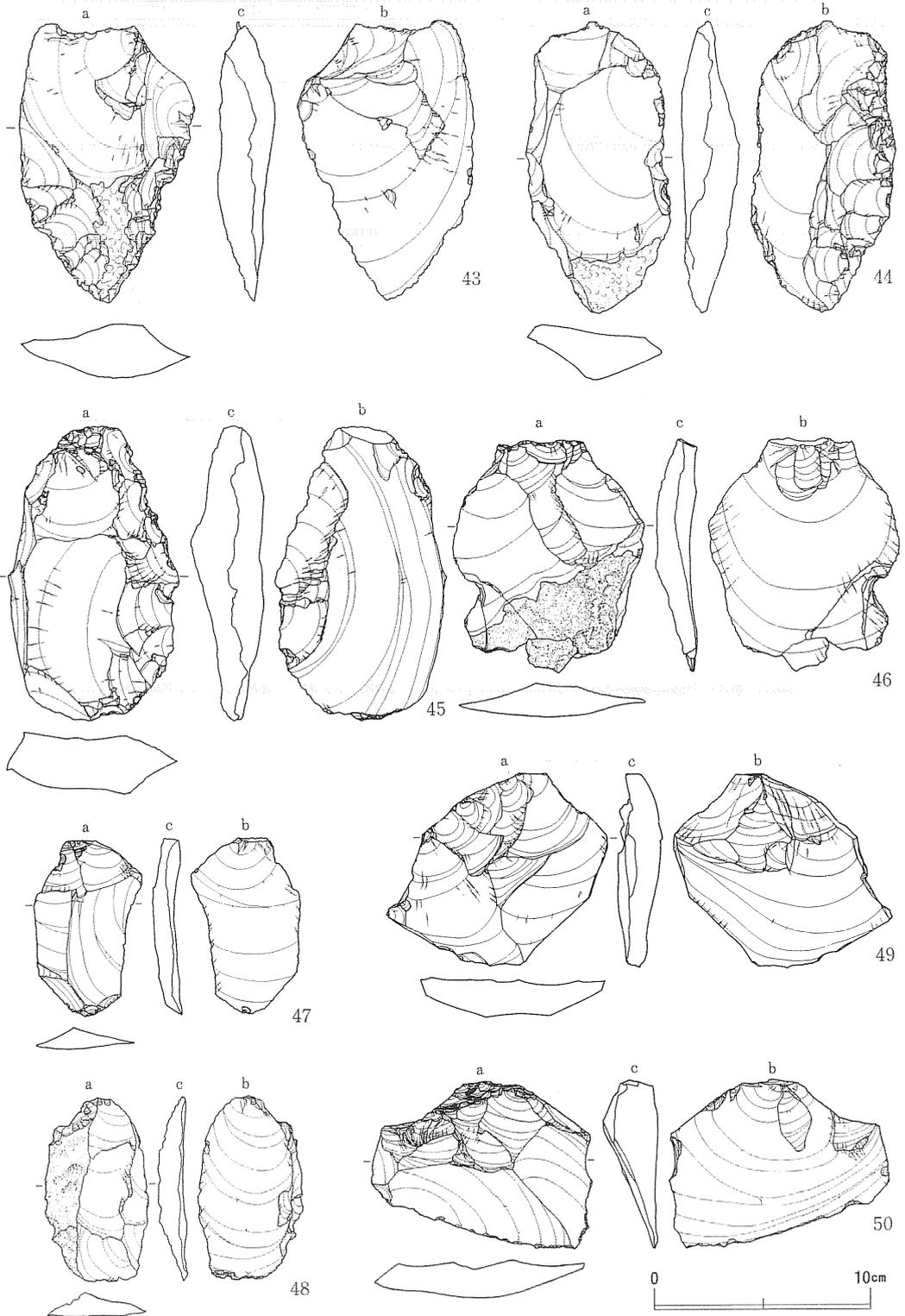
37



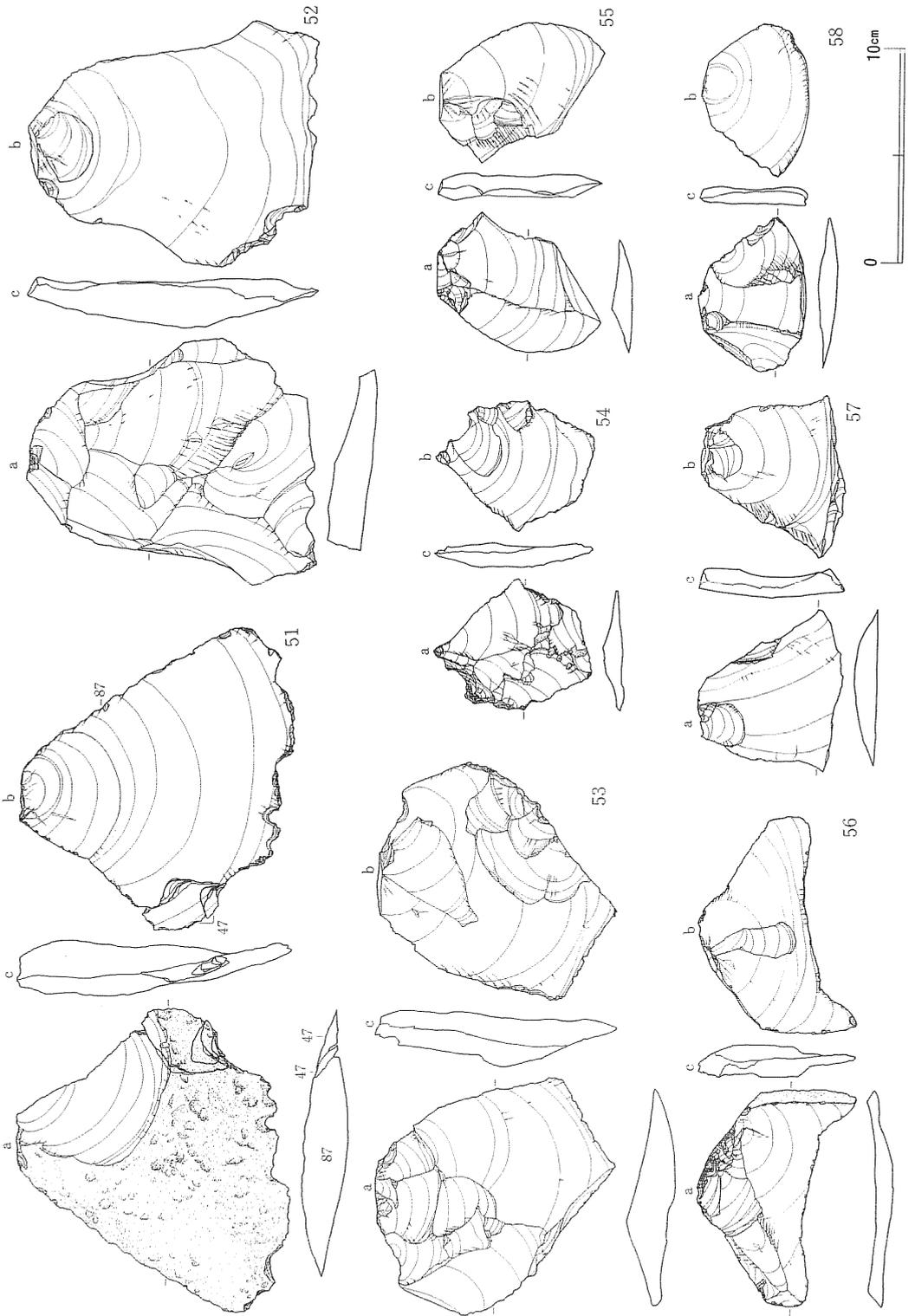
第 38 図 遺構内出土遺物 (11) S X S 95②



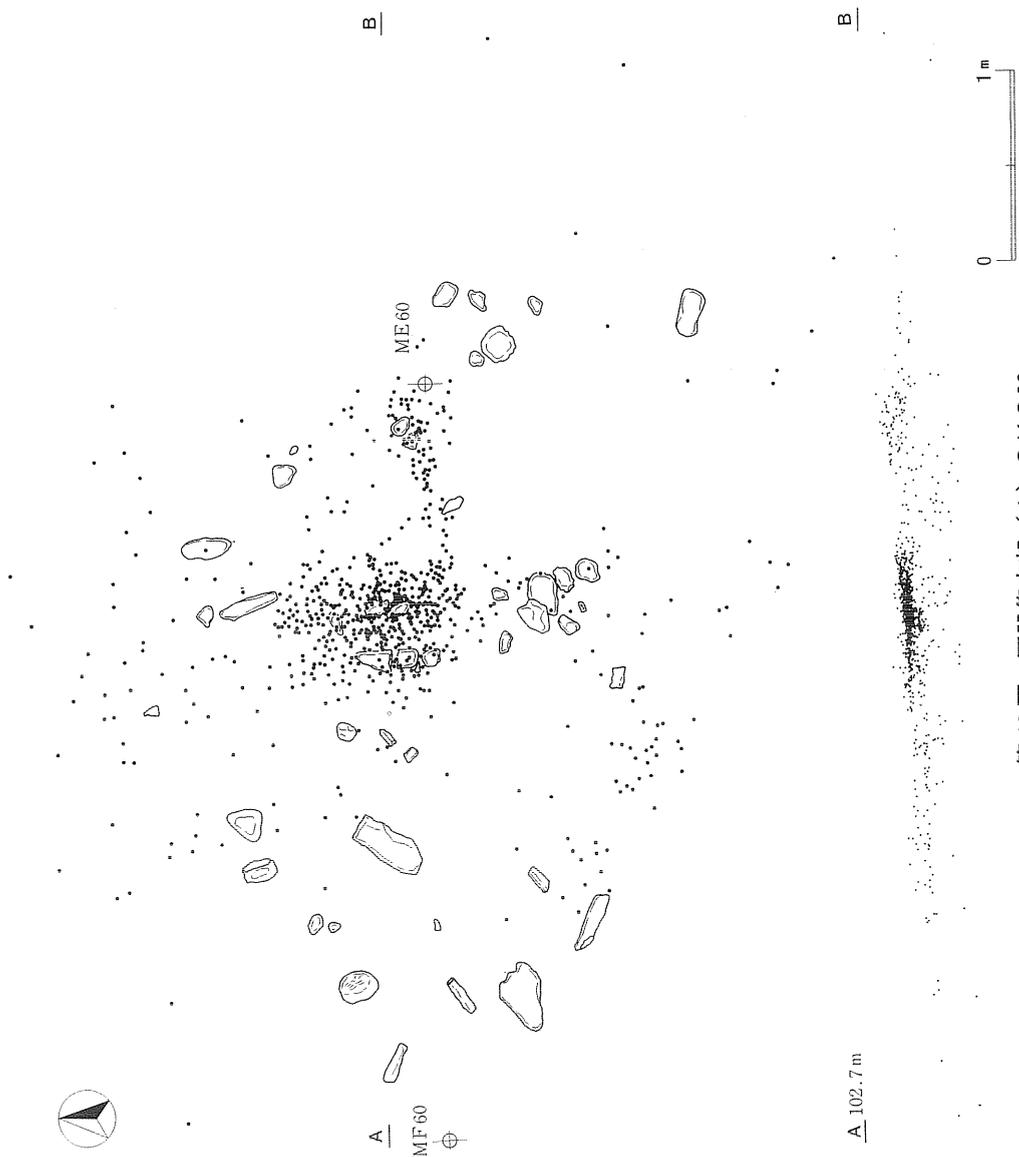
第39図 遺構内出土遺物 (12) SX S95③



第40図 遺構内出土遺物 (13) S X S 95④



第41図 遺構内出土遺物 (14) S X S95⑤



第42図 石器集中部(1) SXQ36

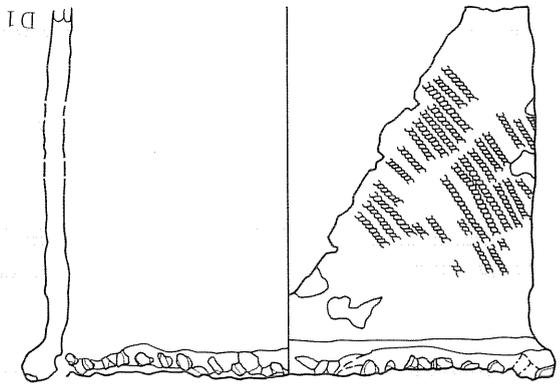
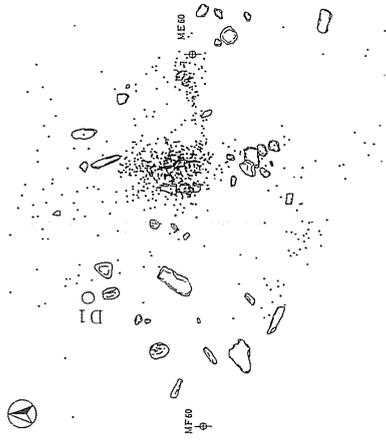
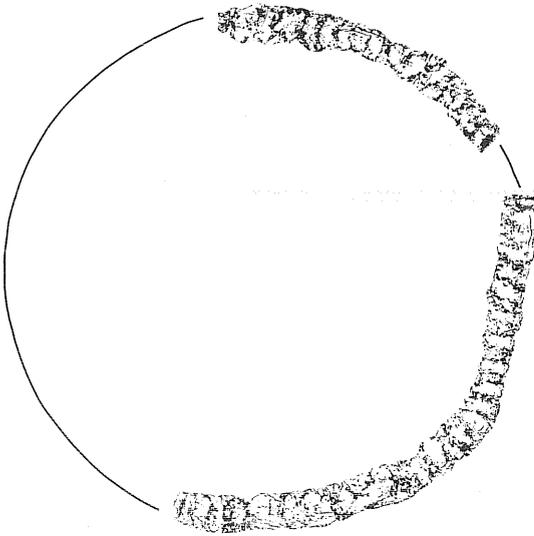
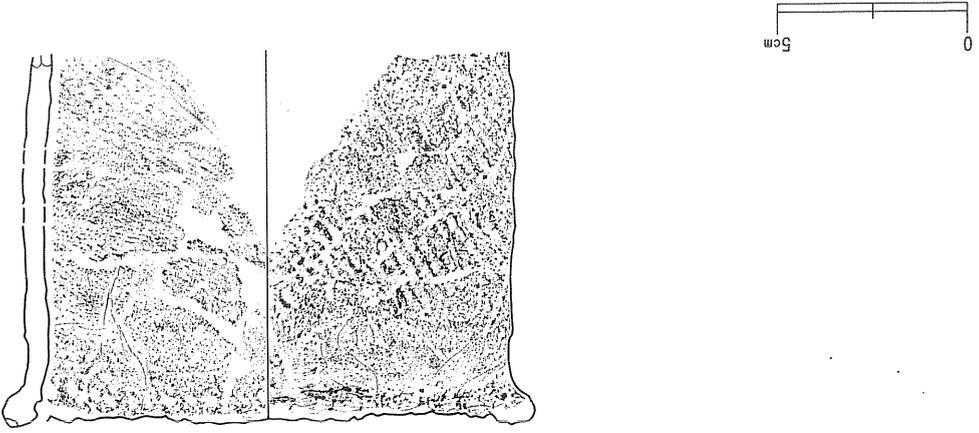
る。先に礫について記述する。礫の長さは5～40cmで、20cm以上のものが比較的多い。規模は長軸4.5m×短軸2.5mで、略楕円形の広がりをもつ。西側には棒状で角張った礫がやや目立つ。この中央には南北に2～3個の礫が、約0.2m離れて組まれたように配置される。そして、これとその中の石器は火熱の影響を受けており、ここでは炭粒も僅かに認められる。さらに南側では、重なった2個の礫を含んで一直線上に、4～5個の礫が配置されたように出土。この礫の垂直分布は、全体にほぼ水平である。出土石器の礫を含んだ取り上げ総数は4,362点で、3.5m×3.5mの広がりをもつ。組まれたような礫の集中部に最も多く出土し、その南側にも比較的多く分布している。前者は1m×0.6mの範囲があり、S X Q 85・86との境は曖昧である。垂直分布は0.1～0.4mの幅がある。一方遺構の北西側には、伏せて置かれていたと考えられる縄文土器が出土している。底部は当初から欠失し、掘り方は不明瞭。この土器はS X Q 85・86とも近接しているが、層位からしてもこれらの石器集中部に関わったものと考えられる。その他ピット等は検出できなかった。

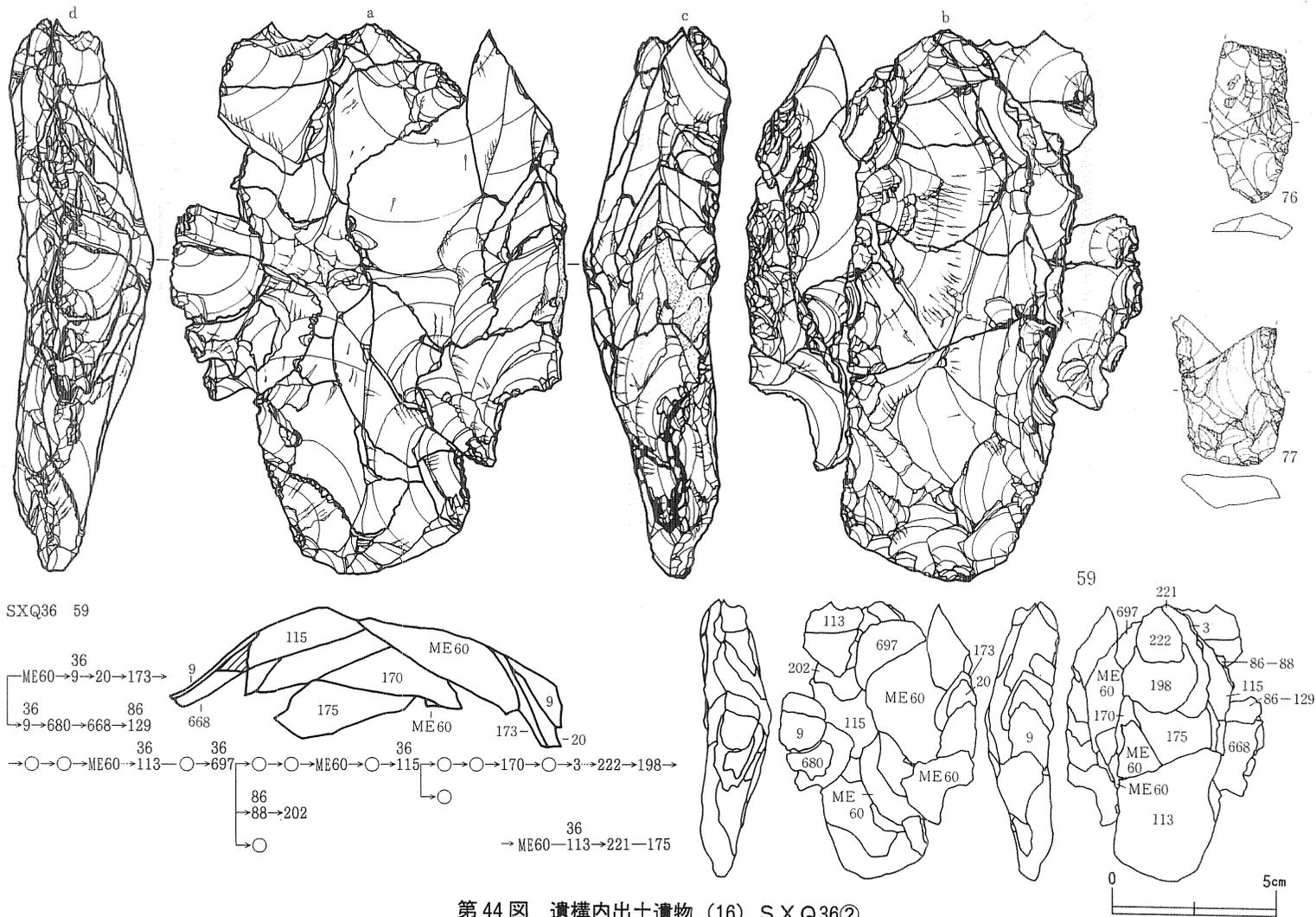
出土遺物は深鉢の縄文土器、接合資料・両面調整石器・石鏃がある。

深鉢(D1) 胴下半を欠損し、口縁部の約1/2が残存。推定口径14cm、現存高9.8cmである。口唇部は肥厚し、口縁部は外湾する。口唇の頂部は全体に丸みをもつが、部分的に平坦な所や押し潰して外傾する部分がある。口唇部の直下はやや窄まり、それより下は胴中央部で緩やかな張りを示す。口縁部は、口唇直下の2～2.5cmが無文帯で、その下の胴部にはRの縄文を施す。口唇部には、頂部から外側にかけてと頂部から内側の2面に、それぞれ押圧縄文を施す。前者はLと考えられる撚紐を、口唇部の弧に対して直角に押し当てた側面圧痕文である。後者は、Rと考えられる短い撚紐を口唇に沿わせたもので、それを連続させた側面圧痕文が約1/4周確認できる。逆に、少なくとも約1/4周には、それのないことも確認できる。また口唇内面の一部には、前者と類似原体による同じ施文を認める。器厚は胴部が5～6mmである。外面全体には炭化物が付着し、色調は表面が暗褐色土、裏面が灰褐色である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好。この土器については第6章で考察するが、草創期の範疇として捉えた。

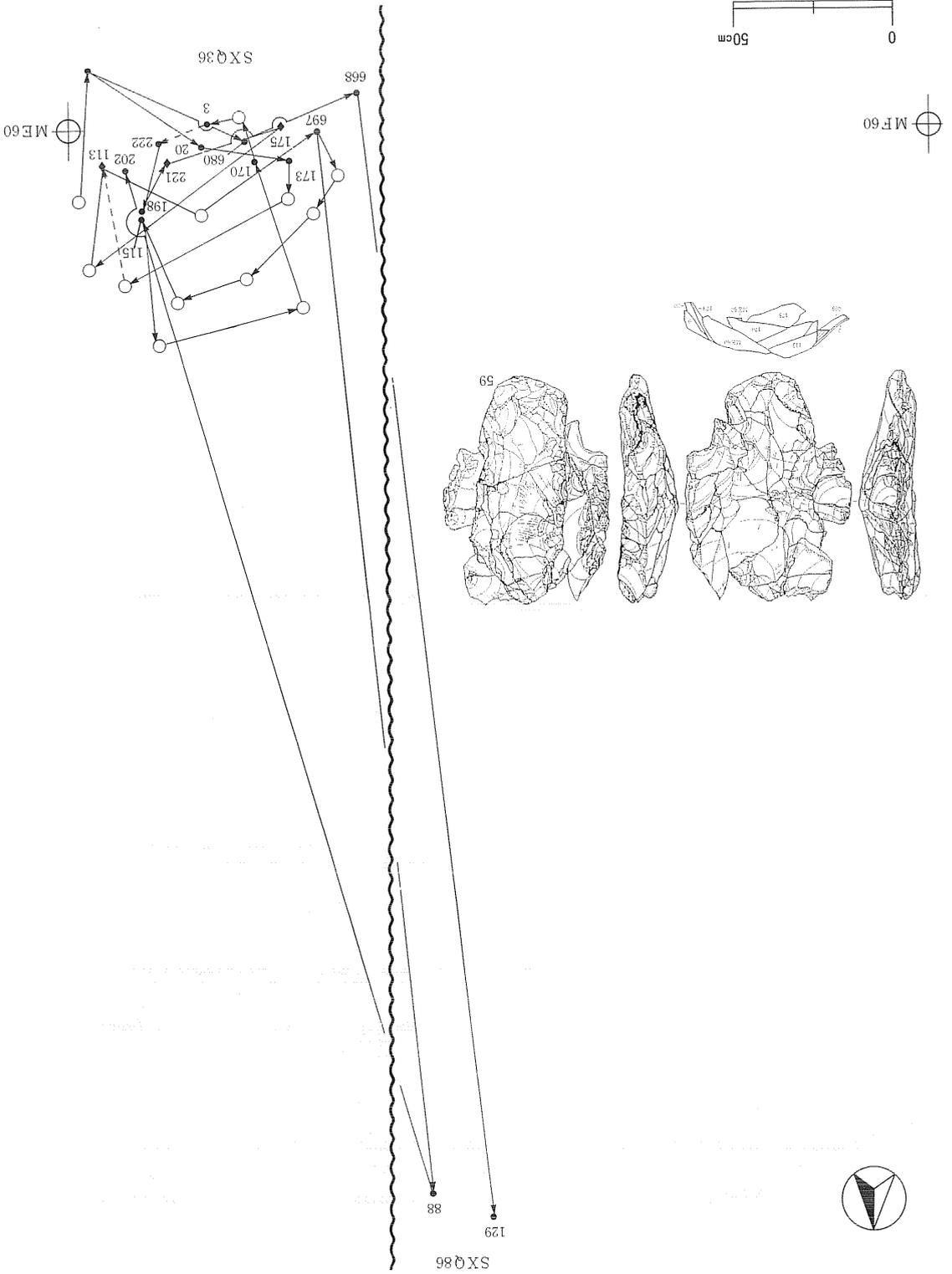
接合資料(59～69) 59は石斧を意図したと考えられる石核(76+77)に、多くの剝片が接合したもの。b面左の側縁では、下から上へ連続した剝離が見られる。b面の石核中央でこの裏からの折断があり、上部石核(76)と下部石核(77)に分かれる。石核60は横長の剝片を素材にし、c・d両側縁の交互剝離で側縁を整える。石核は石斧の未製品と考えられる。b面の刃部には細かい剝離があり、同面右下からの折断がある。さらに、折断面からの剝離もあるが製作を断念している。61・62は、両面調整石器に剝片が接合したものである。61は大きめの剝片数個が接合しており、礫皮面のある分厚い大型剝片を素材にした可能性がある。62は分厚い横長剝片を素材にしたもので、a・b両面に粗い剝離がある。63は、扁平な両面調整素材

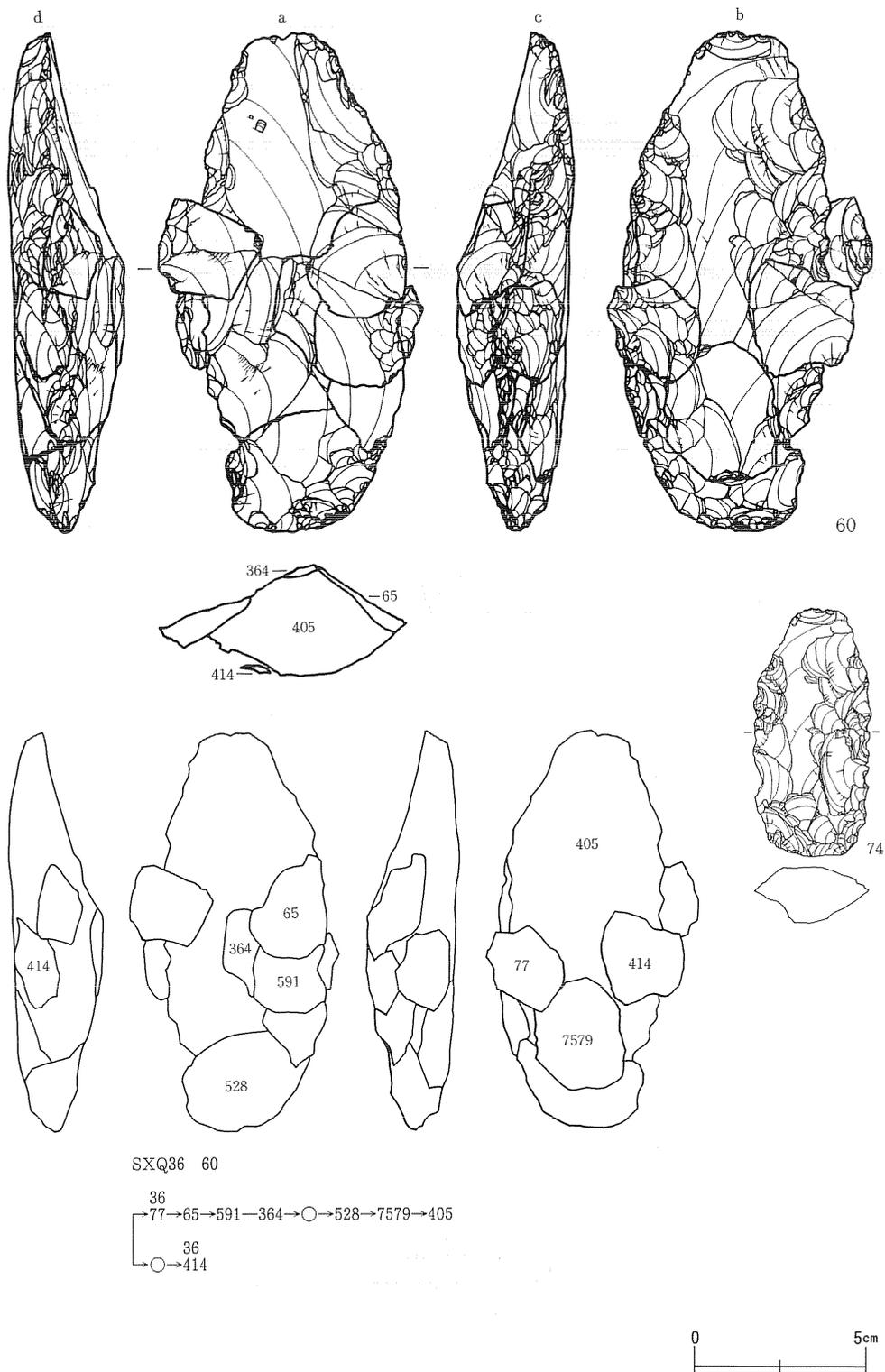
第43図 遺構内出土遺物 (15) S X Q36①土器



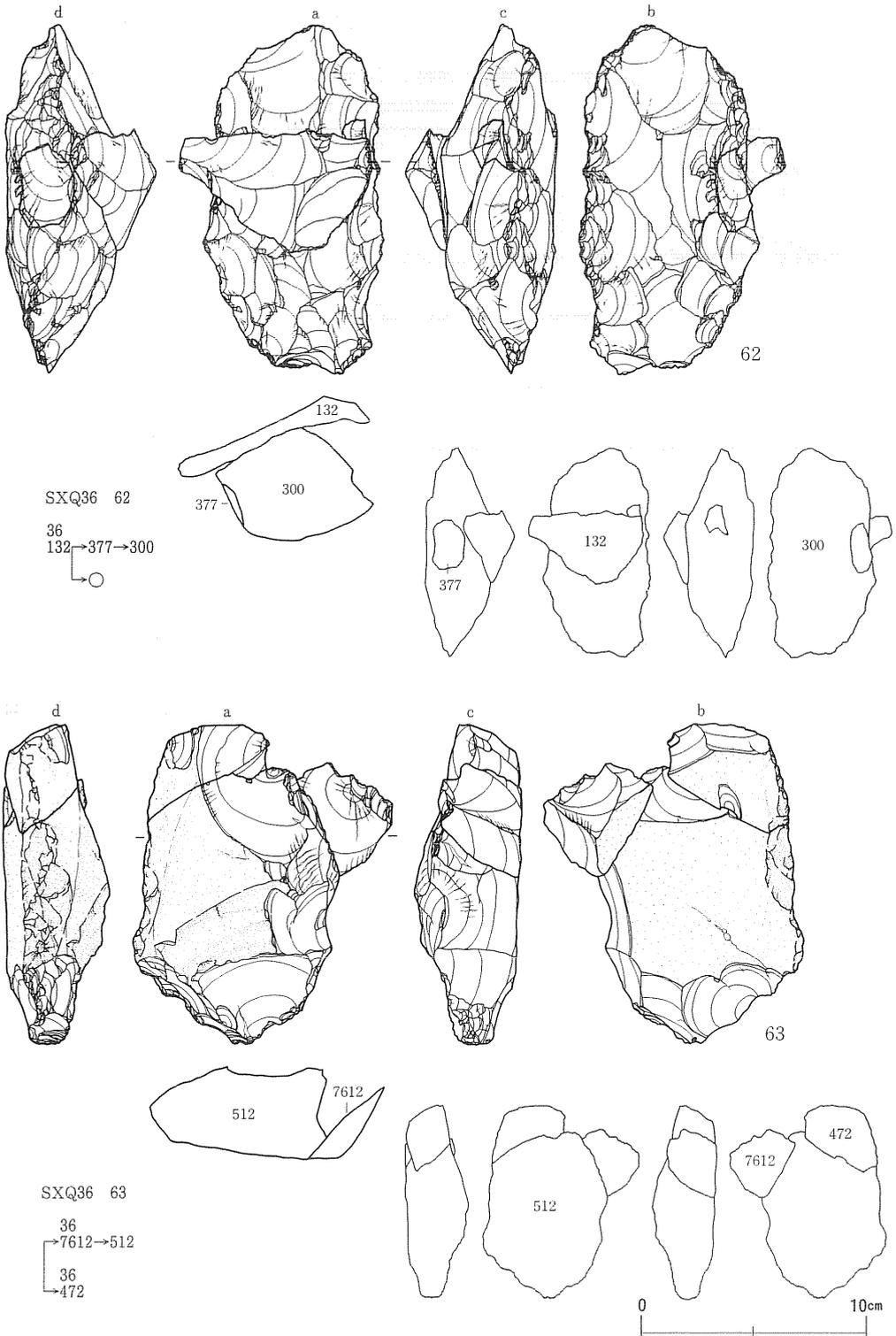


第45図 接合関係図(2) SXQ36

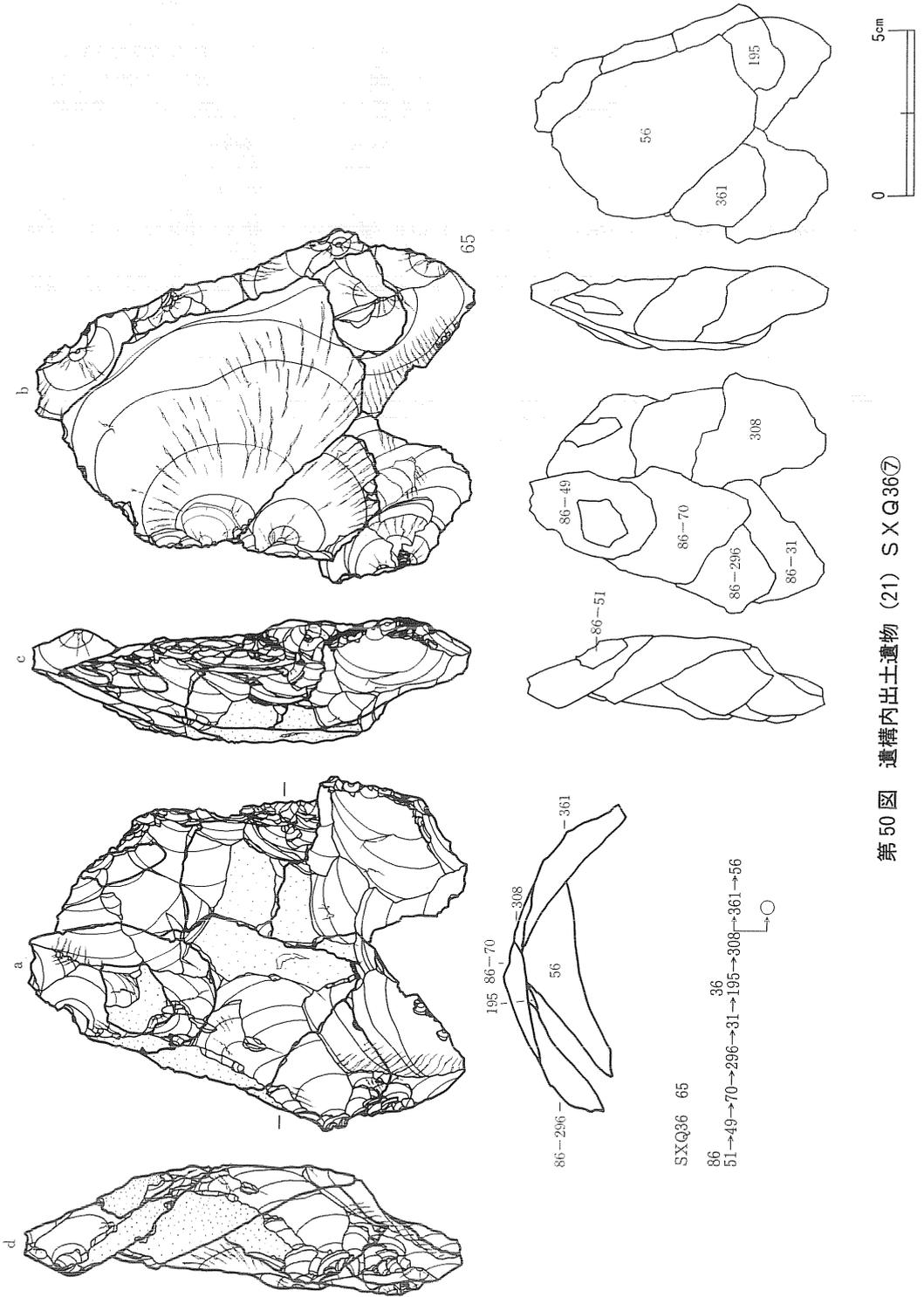




第46図 遺構内出土遺物 (17) SXQ36③

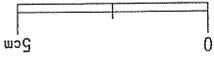


第48図 遺構内出土遺物 (19) S X Q36⑤



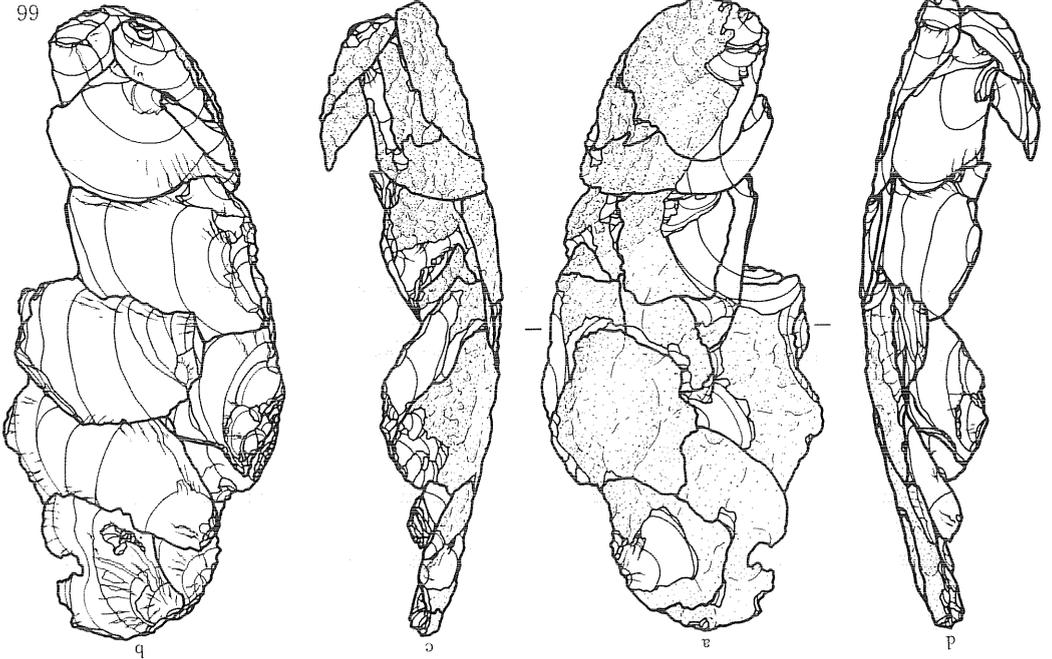
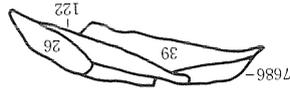
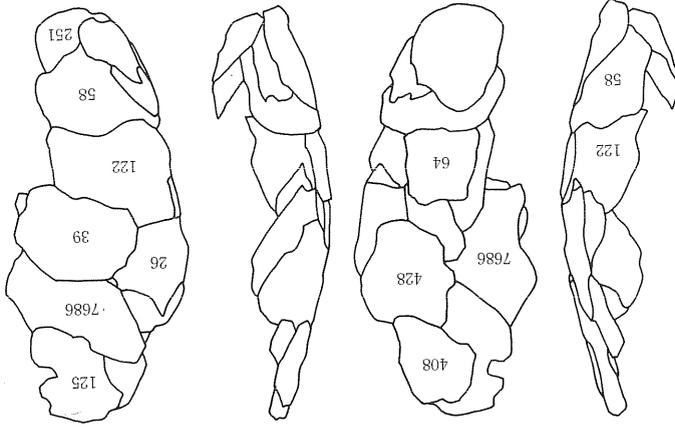
第50図 遺構内出土遺物 (21) SXQ36⑦

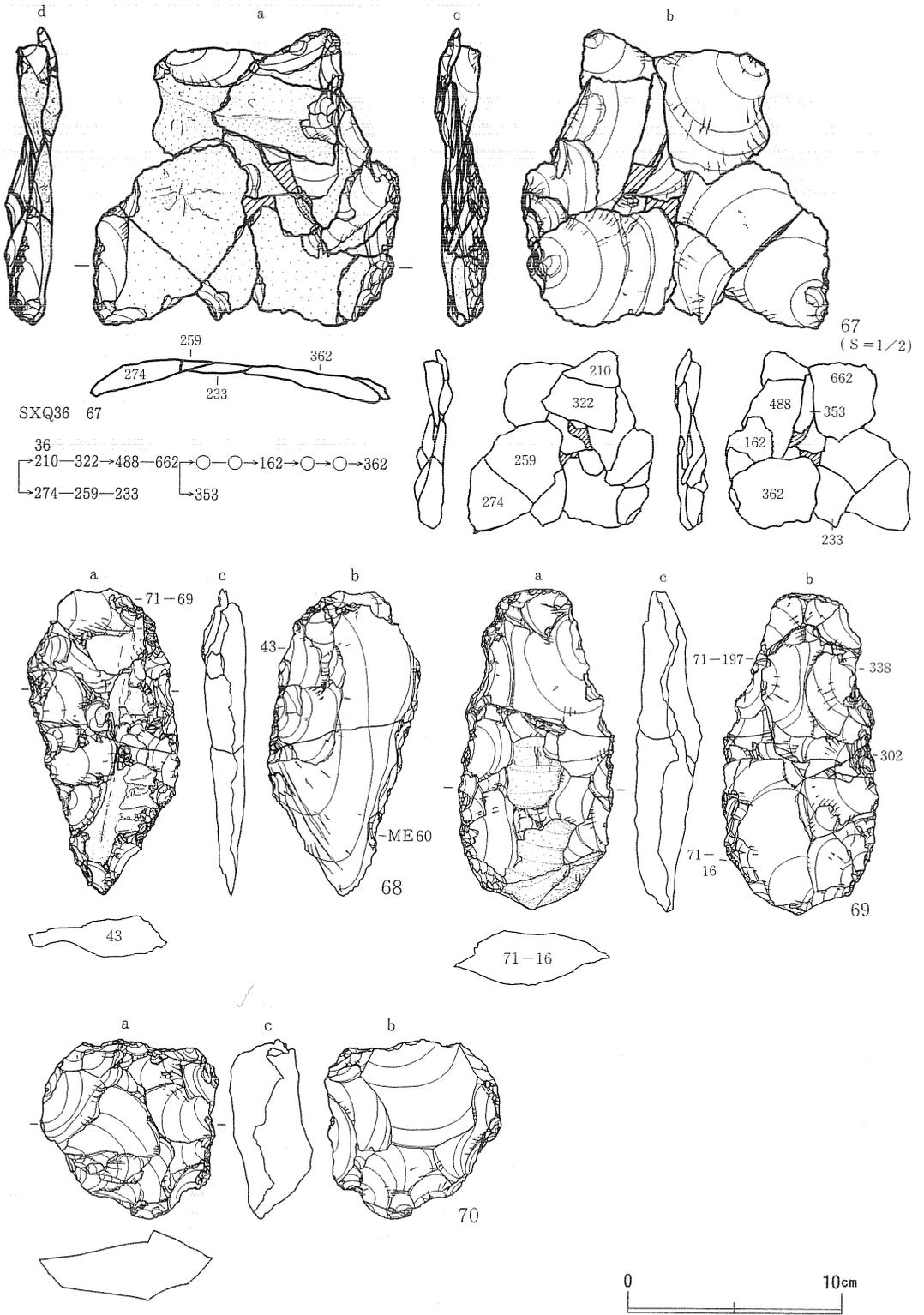
第51図 遺構内出土遺物 (22) S X Q36⑧



36
408→428→125→122→251→58→58→64→26→○→○→122→7686→39

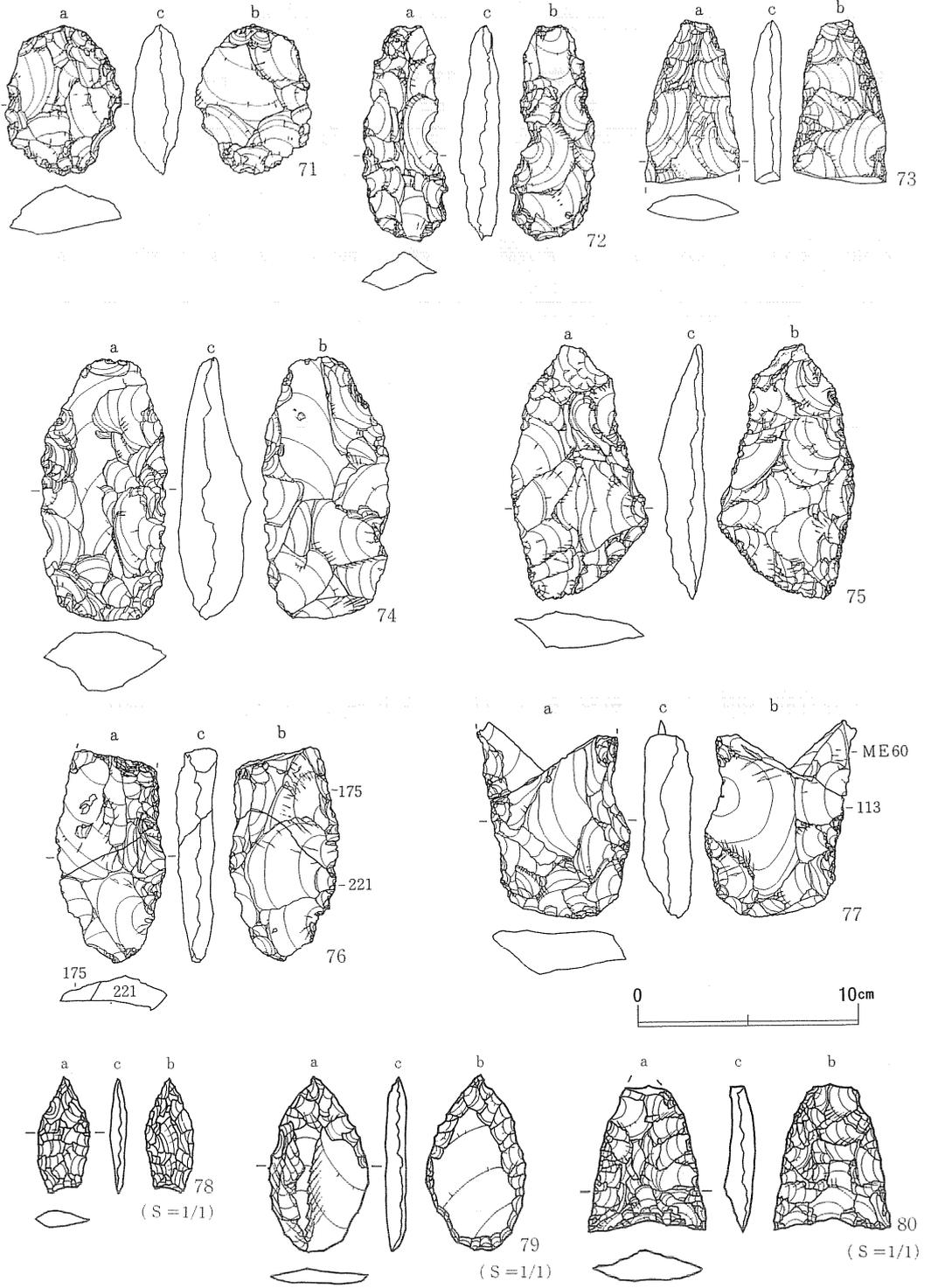
SXQ36 66





第52図 遺構内出土遺物 (23) S X Q36◎

第4章 調査の記録



第53図 遺構内出土遺物 (24) S X Q36⑩

に剥片が接合したものである。それは分割したと考えられる河原石を素材にしており、a・b両面に粗い剥離がある。64～66は礫皮面のある剥片の接合資料で、分厚い河原石から断面菱形の製品を意図したものである。67は自然面をもつ剥片の接合資料である。横幅が13cmで個々の剥片が薄く大きなことから、尖頭器状の大きな製品を意図したと想定される。68・69は両面調整石器に剥片が接合したもので、68は横長剥片を素材にしている。両者共a・b両面に粗い調整があり、69の両側縁下部に細かい剥離が見られる。

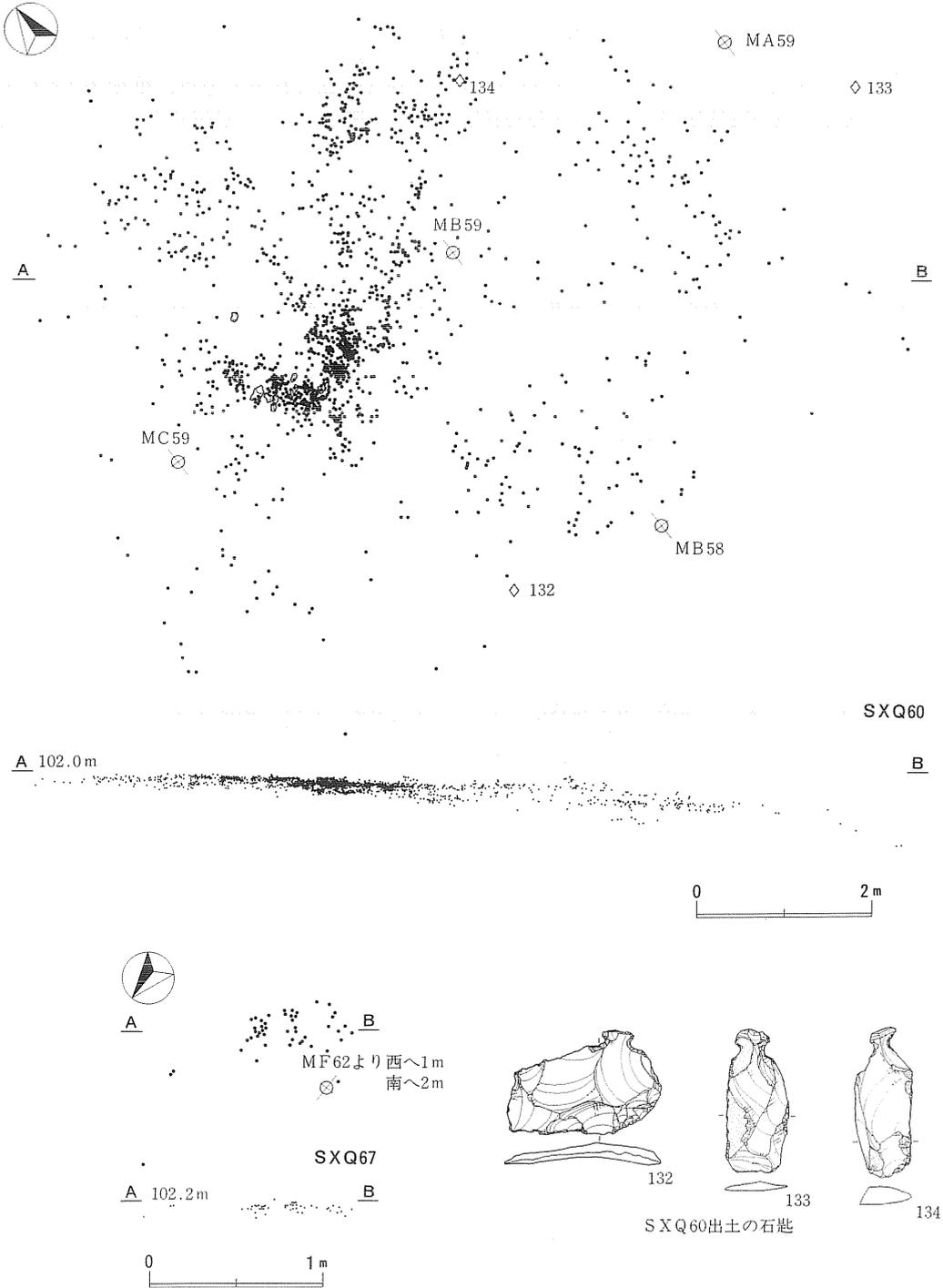
両面調整石器（70～77） 70・71は略円形もしくは楕円形に近く、他は細長い。70は61の石核。a面左からの剥離を失敗し、廃棄したと考えられる。71はa面右上に細かい剥離がある。72はa面右中央とb面左中央に大きな剥離のあることから、嵌入部を意図した可能性がある。73は、b面側縁の細かい剥離を施すことから石槍とも想定されるが、左右非対称形であり同器種に含めた。b面からの折断があり、a面に自然面が残る。石材は黄白色の頁岩である。74は60の石核。横長剥片の素材で、a面右下からの折断がある。75は、b面左下側縁と右側縁中央に細かい剥離がある。a面右下を刃部にした搔器の可能性もある。76・77は59の石核である。76は上位でa面からの折断があり、さらにb面左上からの折断がある。77ではa面上位からの折断がある。

石鏃（78～80） 78は剥離がa面の全面にある小さなもので、基部が欠損。79はb面の主要剥離面を大きく残し、基部が丸くなる。b面下位の両側縁で僅かな肩部をもつ。80は二等辺三角形で先端が欠損。全面に剥離が及び、基部は僅かに凹む。

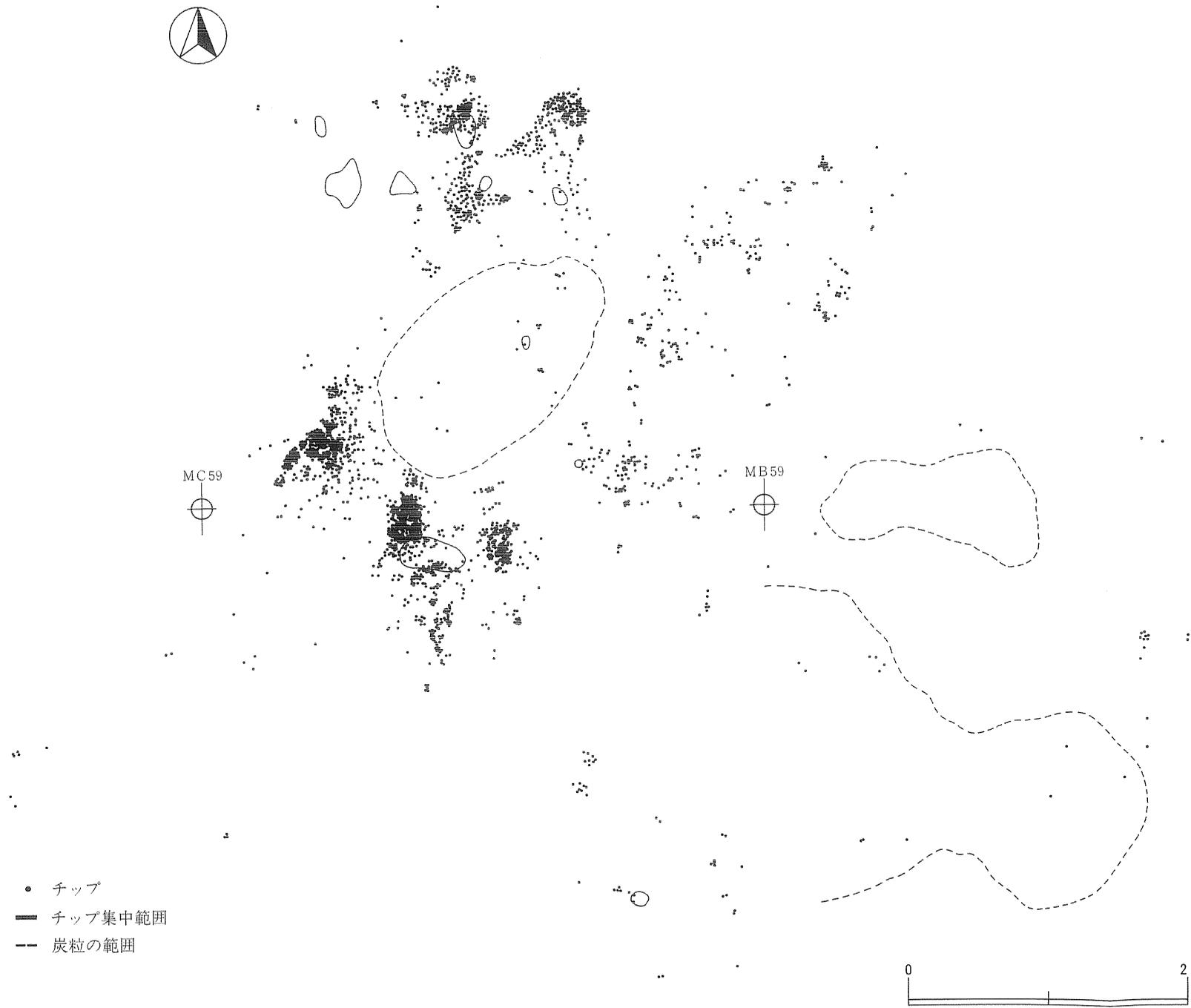
S X Q60（第54～89図、巻頭図版3・5・7～9、図版16・17・34～42・67・68）

上段で調査区中央北側のMA58・59区、MB58・59区、MC58区に位置し、表土下約1.1mのX層を中心に検出。西側にS X Q91が隣接し、北側が調査区境界に当たることから、本来大きな範囲で石器が分布していたと考えられる。S X Q91との連続性もあるが端で石器の分布が希薄になるためそれとは区別した。遺構の上には、MB59・MC58区の各南東杭をおよそ結んだ方向より、南東側にはIX層（礫層）が北西側にはその流れの砂層が直接覆う状態にある。そして本遺構の存在するX層は、これらの層の下に跨がって存在する。また、遺物が密集する所の層は0.1～0.2mの厚さがあり、MB58区南側やMA58・59区東側辺りから現河川側へは徐々に厚みを増す。

遺物の広がる範囲からは、これらに伴うように炉跡が重複して検出されている。当初石器集中部は、MB59区のX層（砂層）で斑状の炭粒の範囲と、いくつかの石器が出土したことで確認できた。出土遺物の総数は9,244点で、約8.5m×7.5mの広がりをもつ。特に、炉跡4の南側に当たる2m×1.5mの範囲には、多量のチップが集中している。ここからは線刻を施した台石が出土しており、この上部や周辺では多量の石器が、近くからは爪形文土器や無文土器



第54図 石器集中部(2) SXQ60・67



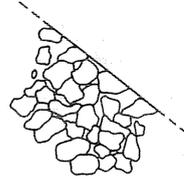
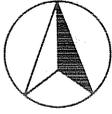
第55図 石器集中部(3) S X Q60

が出土している。垂直分布は、高位の平坦部ではおよそ0.1~0.2mの幅に収まり、下位の斜面側ではそれが大きくなる。遺構は、石器の広がりやチップの在り方から、度重なって利用されていた石器製作跡といえる。

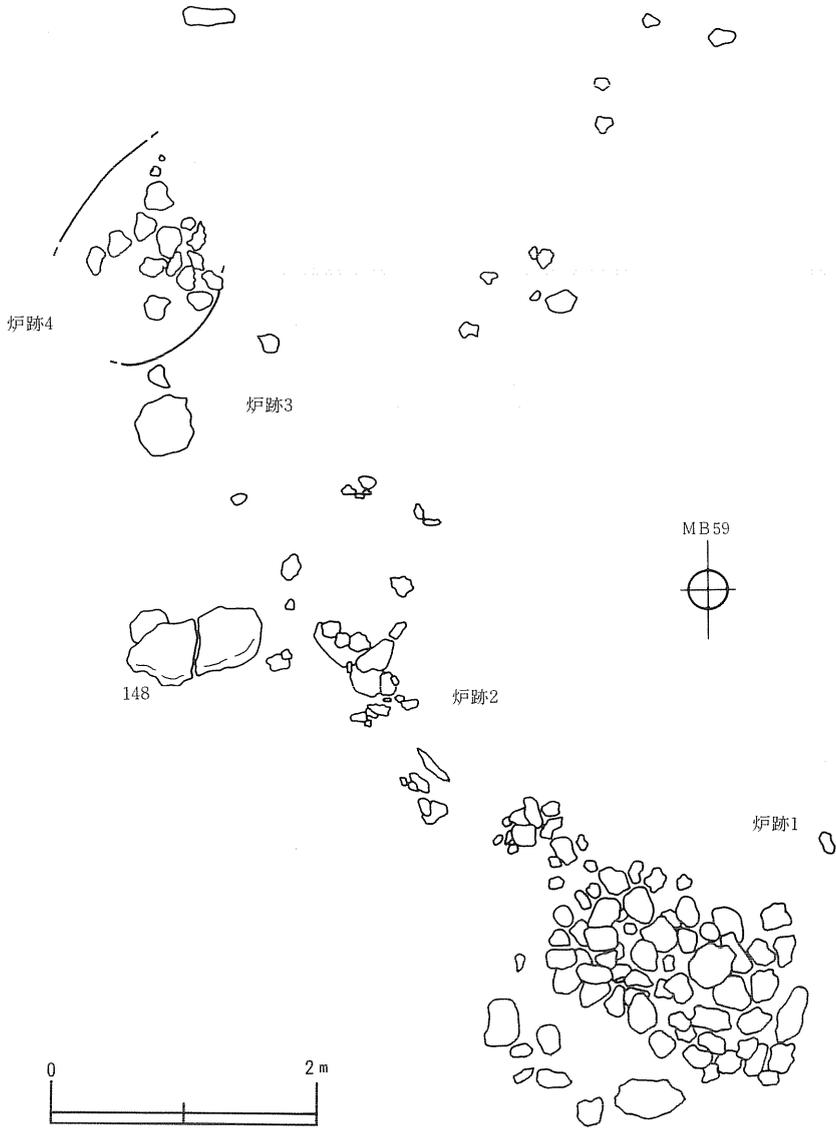
炉跡は5基検出された。その内3基(炉跡1・4・5)は明確であるが、2基(炉跡2・3)については不明瞭で、炉の可能性のあるものである。炉跡4はMB59区中央やや南側にあり、これを基点に炉跡5はその北東約2mに、炉跡1は南東2.5mにある。炉跡2・3は、炉跡1と炉跡4を結ぶ線上にあり、炉跡1側より炉跡2・3と並ぶ。炉跡1はX層の下部もしくはXI層上面に構築されたもので、大きな礫を寄せて浅い窪みを造ったようである。赤く焼けた礫は1.45m×1.2mの範囲にある。この内の1m×1.2mの範囲には、10~20cmの扁平な礫が密集しており、本体をなす部分と考えられる。この礫を取り除くと、火熱を受けたXI層の礫が現れる。密集する礫の内部やその周辺には、炭粒が斑状を呈しながら顕著に認められた。炉跡2・3では、X層中で各々径約0.6mの広がりには焼礫が散在する。これらは、石器の外に土器の破片やクルミ・炭粒を含み連続した在り方を示す。この内、炉跡2の断面が僅かに土坑状を呈することから、炉跡2・3と区分したものである。これらの礫は破碎したものが多く、灰の掻き出しや炉跡の崩壊による残存礫の可能性もある。炉跡4の掘り込み面は、X層上面と考えられる。初め、炭粒の斑状不整形プランとして確認したが、長軸方向の両端を削平してしまった。形態は推定長軸0.9m×短軸0.6mの楕円形と考えられ、深さは0.15mである。約10cm前後の赤く扁平な礫が、底面から主体的に出土した。覆土は、炭粒を含んだ黒褐色土の砂層である。炉跡5は当初炭化物の斑状プランとして確認したもので、少なくともその半分位が調査区外に及んでいた。X層下部もしくはXI層上面で構築され、礫を寄せて底面を浅い窪みにしたようである。大きさは0.5m×0.35mで、約10cmの扁平な礫が集中している。礫は赤く焼けており、そこから爪形文土器が出土している。この礫を取り除くと、やや大きめの火熱を受けたXI層の礫が現れた。礫の中には炭粒が充填している。この外、MB59区南東側に径約2mの広がり、破碎したものを含む赤く焼けた礫が散乱している。

出土遺物は、深鉢と考えられる縄文土器、接合資料・石核・両面調整石器・石槍・石斧・石匙・搔器・削器・鋸齒縁石器・二次加工ある剝片の石器がある。

深鉢(D2~D6) D2~D5は爪形文土器、D6は無文土器である。D2は外反する口縁部破片で、平坦な口唇部の一部が残存する。外面には、縦位に2つ連なる爪形文様の単位と考えられる痕跡が、やや斜位の方向で施文されている。内面には指頭圧痕があり、器厚は薄く2~3mmである。色調は表面がにぶい黄橙色で、裏面は黄褐色である。胎土は良好で、焼成は堅緻。D3~D5は同一個体の胴部破片で、ハの字形が縦横に連続して見られる。中に、ハの字の右側が繋がって直線状に見える2個1組のモチーフがあり、この単位で横位の帯状を成



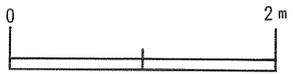
炉跡5



148

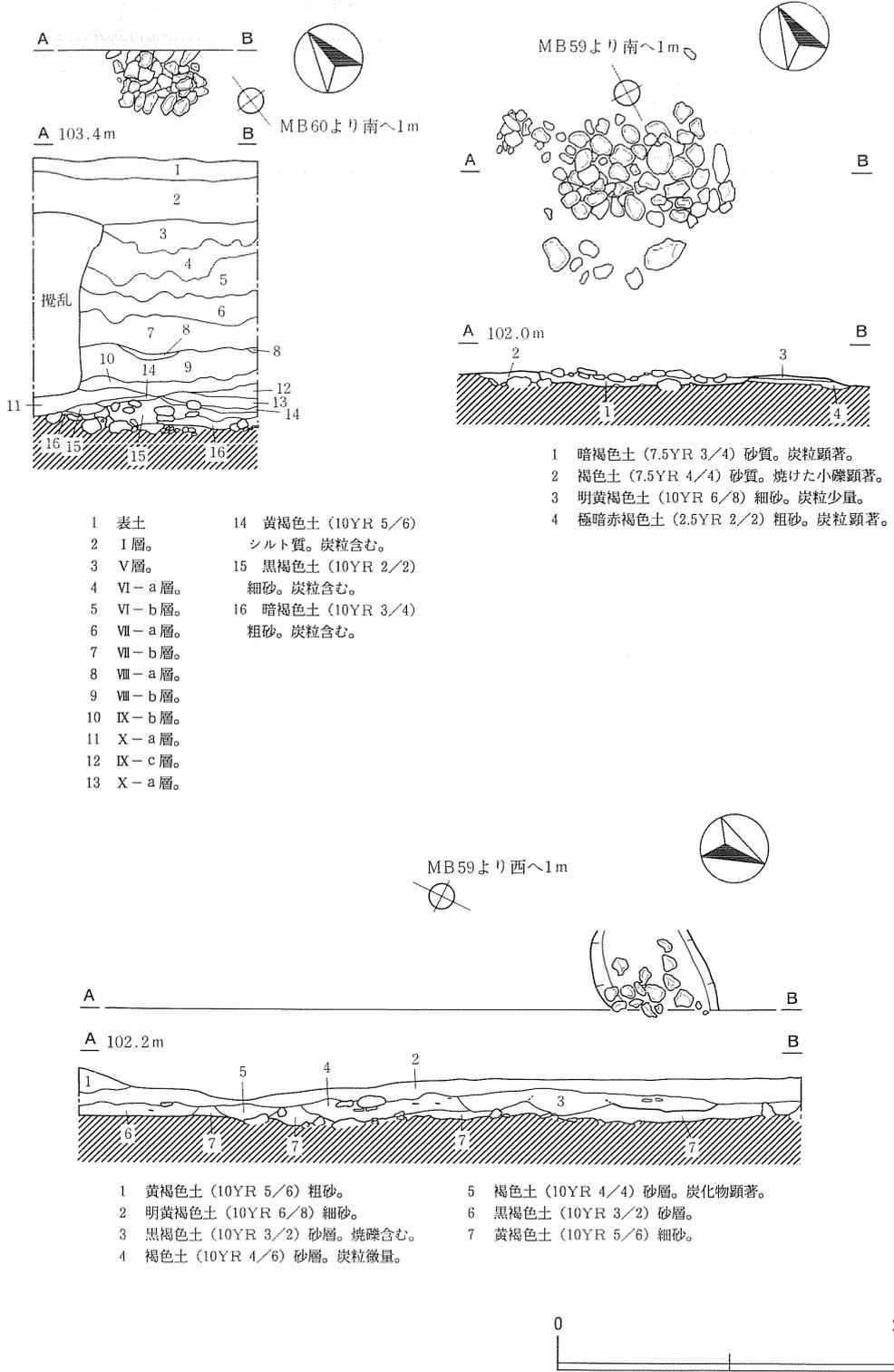
炉跡2

炉跡1

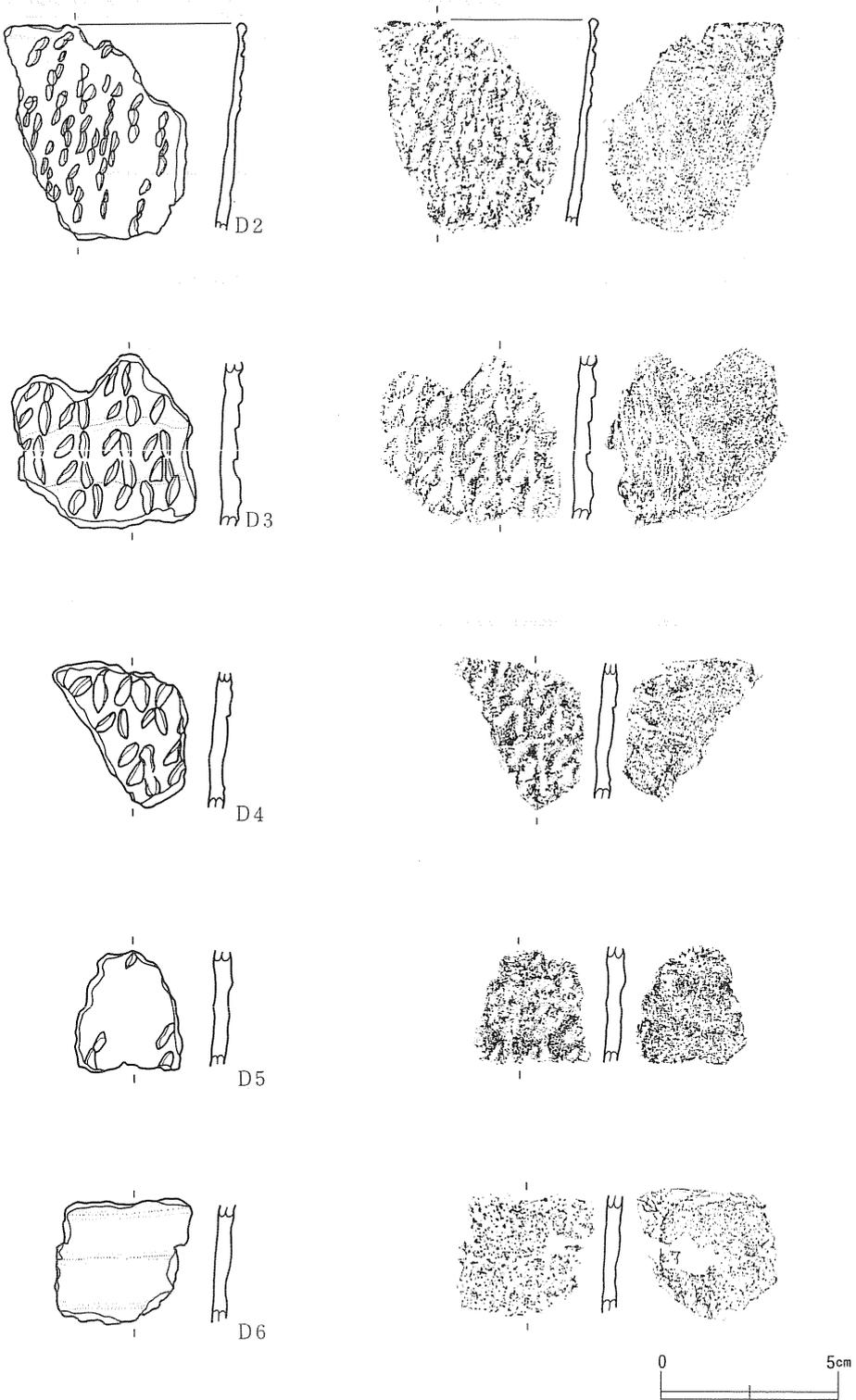


第56図 石器集中部(4) SXQ60(炉)

第1節 縄文時代の検出遺構とその遺物



第57図 石器集中部(5) SXQ60



第58図 遺構内出土遺物 (25) S X Q60①土器

す可能性がある。色調は表面が橙色、裏面は煤の付着で黒色を呈する。胎土・焼成は共に良好。D6は無文で、両面に指頭圧痕を認める。色調は表面が灰褐色で、裏面は煤の付着で黒色を呈す。D3～D6の器厚は3～4mmである。D2～D6は草創期に属す。

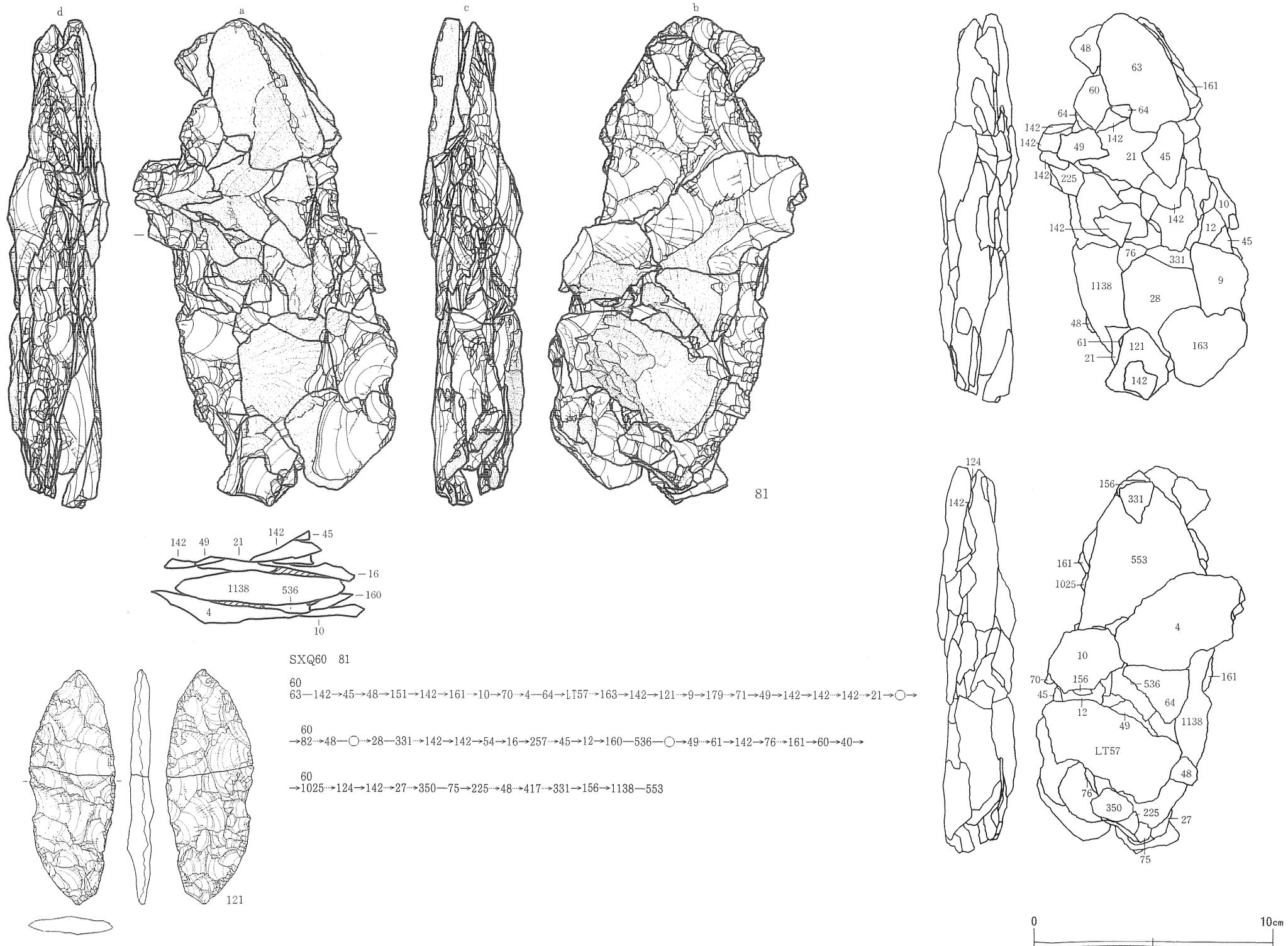
接合資料(81～108) 81は、石槍(121)に剝片が接合したもので、石槍より僅かに大きく、扁平で薄い河原石を素材にしている。当初から効率の良い製作を行っている。82は117、83は113の各両面調整石器に剝片が接合したものである。82は片側が平坦な河原石を素材にしている。a面の左側縁から大きく剝離を行い、扁平な素材に調整している。c・d面で交互剝離を施す。石器はa面から折断している。83は、113の両面調整石器に多くの剝片が接合したもので、分割礫を素材にしたと考えられる。b面の左側で打面形成の大きな剝離を施し、そこを打点にして連続的に剝離を行う。84は扁平な河原石を素材にしたもので、自然面のある剝片などが接合している。c・d面の側縁で交互剝離を施しており、断面菱形の製品を意図したと考えられる。85は、一部を除きほぼ原石の河原石に復元できた。河原石は扁平で、b面の左・右・上の面が平らである。初めにa面で左上位側縁の剝離を行い、次に左下位・右側縁に調整を施す。86～88は、両面調整を意図した片側の剝片接合資料である。86はa面の右下半が撰理面と判断され、素材は分割礫と考えられる。c面で連続的に剝離を行う部分があり、側縁の軸線と素材の軸線が大きくずれる。87は主に自然面をもつ剝片が多く、一面が平坦な河原石を用いたものである。a面左側面が平坦で、これを打面にしてd面右から連続した剝離を施す。88は礫皮面のある大型剝片が多い。b面の右側縁の上下と左側縁上位では、平坦な打面を形成する。断面菱形の大型製品を意図している。89は124の石槍に剝片が接合したもので、c・d両側縁の交互剝離で、薄く長い剝片を得る。石材は灰白色の頁岩である。90は115、91は111、95は114の、各両面調整石器に剝片が接合したもので、90は、b面上・下位とa面の上下側縁に自然面があり、石器とあまり変わらない大きさの河原石を素材にしている。91は礫皮面のある剝片が接合したものである。92は、僅かにa面左側縁や下端に自然面がある。石器は分厚く円形状を呈している。a面の左右側縁に、微細な剝離を施す。94は118の両面調整石器に剝片が接合したもので、横長の剝片を素材にしたと考えられる。95は横長剝片を素材にしている。93は搔器(137)の未製品に剝片が接合したもので、縦長の剝片を素材にしている。96は石核に剝片が接合したもので、河原石を素材にする。剝離の後a面からの折断があり、その面を打面にしてさらに剝離を施す。石材は、軟質の頁岩で黄白色を呈す。97は大型の両面調整石器に剝片が接合したもので、a面の左下端に細かい調整がある。これも軟質の頁岩で黄褐色を呈す。98～100・102～105・107・108は、両面調整を意図した片側の剝片接合資料である。98・99は礫皮面のある同一個体で、台石(148)の下から出土した。98の剝片は厚く、99は薄く全体が平坦である。これらが同一面で構成されないことから、河原石を素材

にしたことが判る。100 は礫皮面のある剥片が多く、素材の稜に当たる a 面上位で稜に沿った剥離を施す。102 は薄い剥片で構成される。103 は礫皮面のある大型剥片が目立ち、これらで構成する面は比較的薄い。a 面右側の剥片は、削器に作られている。104 は、b 面の上下剥片の打面に平坦面を形成している。105 の剥片には礫皮面があり、薄いものが多い。107 は厚い剥片が主で、b 面下位の観察では左右交互の剥離移動が見られる。108 は横長剥片が多く厚みもある。薄く細長い製品を意図している。101 は、両面調整石器の先端部剥片が接合したものである。b 面の剥離の後、a 面からの折断がある。この先端部の剥片は舟底形石核状で、これに剥離を施す。106 は両面調整石器に剥片が接合しており、b 面が平坦で河原石を素材にしている。粗い剥離によって、作業途中の石核が a 面上位で折断している。さらに、この下位の石核に調整を施し、粗い両面調整石器としている。

両面調整素材 (109・110) 109 は中央が厚く上位が尖っている。全体に粗い剥離を施すが、b 面下位に微細な剥離痕が認められる。a 面下位の右側縁に、小さな礫皮面がある。110 は、断面が三角形で粗い剥離を施す。

両面調整石器 (111・112) 111 は 91 の石核。b 面左側縁の剥離によると考えられる、同面からの折断がある。上位の先端に礫皮面を残す。石籠の未製品の可能性がある。112 は縦長剥片を素材にし、b 面の剥離は縁辺に限られる。a 面下位に礫皮面を残す。113 は 83 の石核。扁平で薄く、主として a・b 両面共に右側縁からの剥離を施す。a 面中央の加撃で 3 つの折断がある。114 は 95 の石核。横長剥片の素材に粗い調整を施す。石籠の未製品の可能性がある。115 は 90 の石核で、楕円形に整えている。この後 a 面上位の折断があり、上位の舟底石器状のものと同位の石器に分かれる。さらにそれぞれに調整を施す。116 は、b 面の左側縁を打点にもつ横長剥片である。a 面上位には上からの特徴的な剥離がある。a 面には同面からの折断があり、瘤状の自然面を削除した時の影響と考えられる。117 は 82、118 は 94 の石核で、横長剥片を素材にしたと考えられる。a 面の厚い端部を整えていることから、搔器の未製品の可能性がある。119 は、b 面の下と右側縁に連続した剥離がある。また、a 面右と b 面下の一部に、二次加工の剥離面を残す。120 は薄く扁平で、半月形を呈している。a 面の左右側縁に細かい剥離があり、左側縁は特に丁寧である。上下共に a 面からの折断がある。

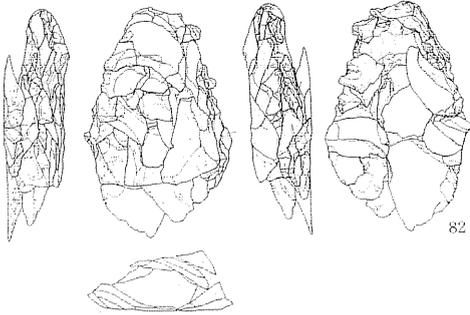
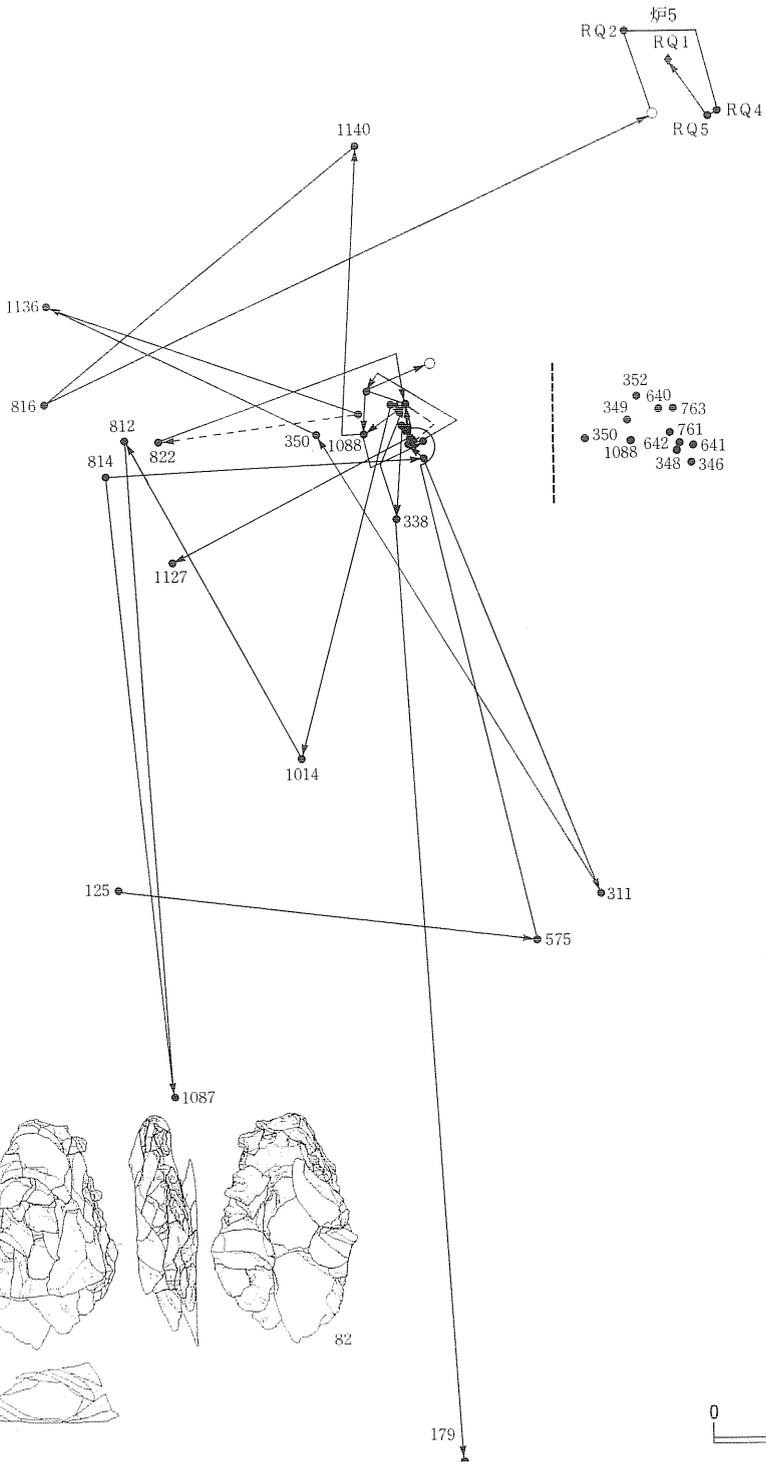
石槍 (121~129) 121 は 81 の石核。薄く扁平な作りで、木の葉形を呈している。a 面左下位と b 面右下には、両面共に丁寧な調整を施す。b 面右上に自然面を残しており、全体は粗い調整のままである。a 面からの折断は、右側縁からの剥離が影響したと考えられる。122~124 は同一個体と考えられ、124 は 89 の石核である。122 は b 面が平坦で、両側縁に丁寧な調整を施すが、先端に未調整部分が残る。b 面からの折断がある。123 と 124 は槍の中央部で、縁辺に細かい剥離がある。123 は b 面より、124 も上下とも b 面からの折断がある。125 は、先端



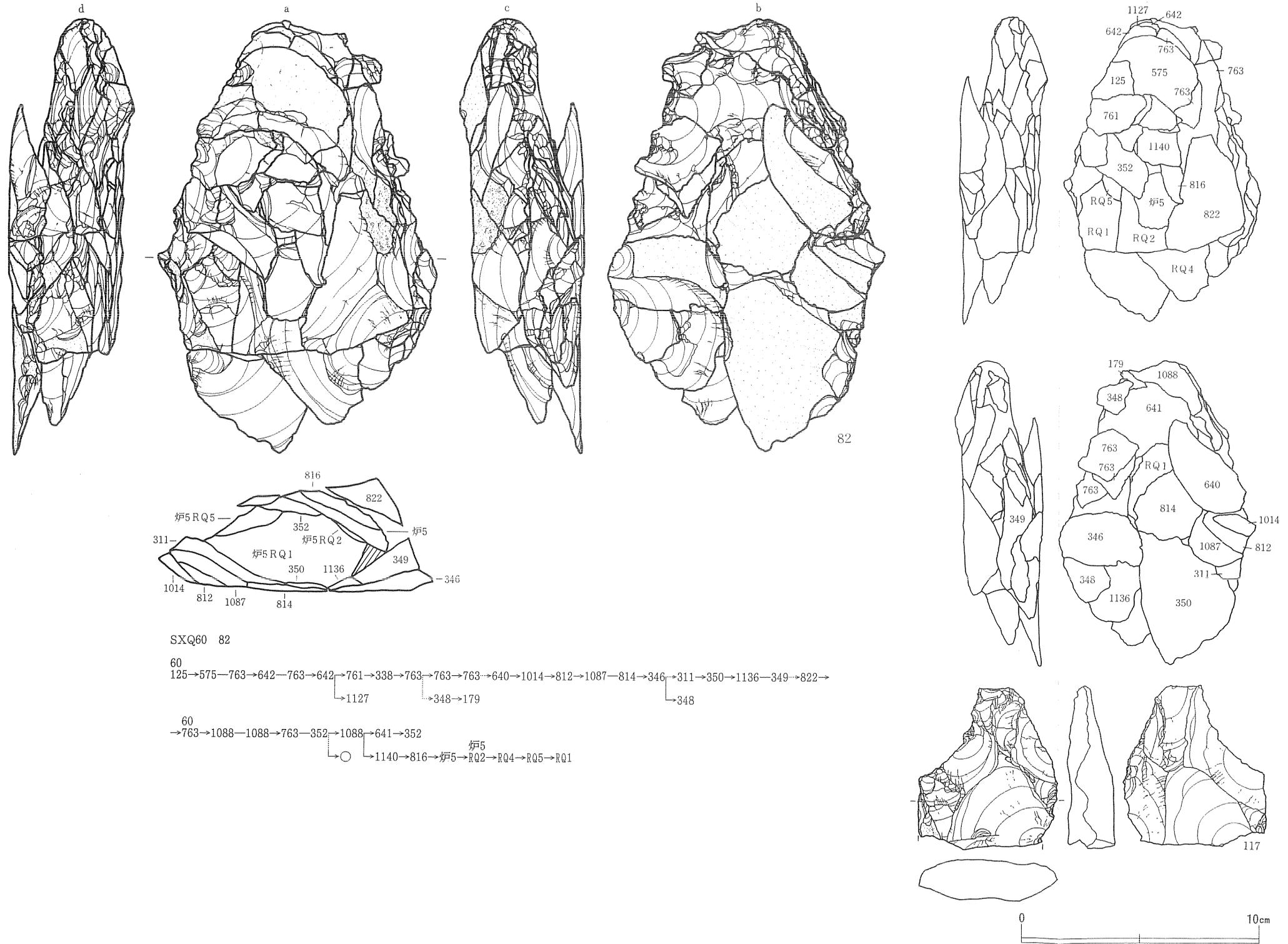
第59図 遺構内出土遺物(26) SXQ60②



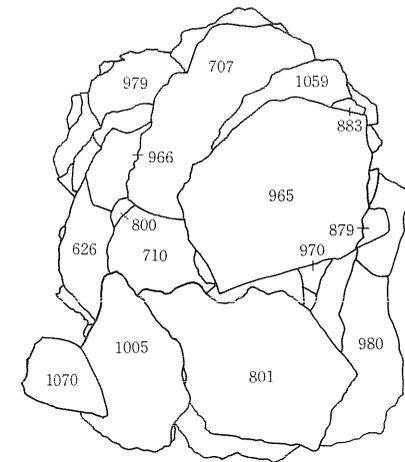
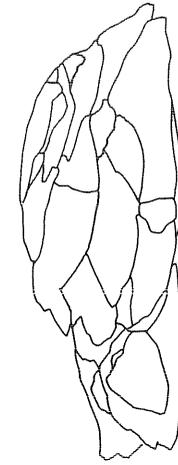
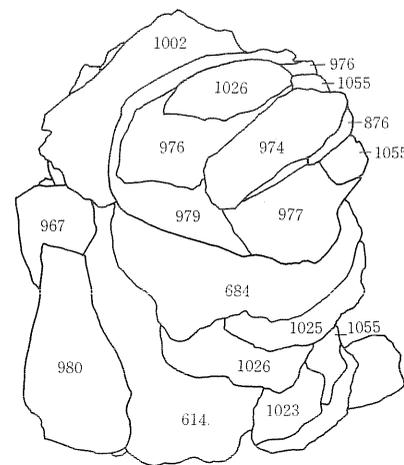
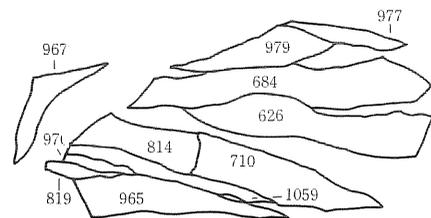
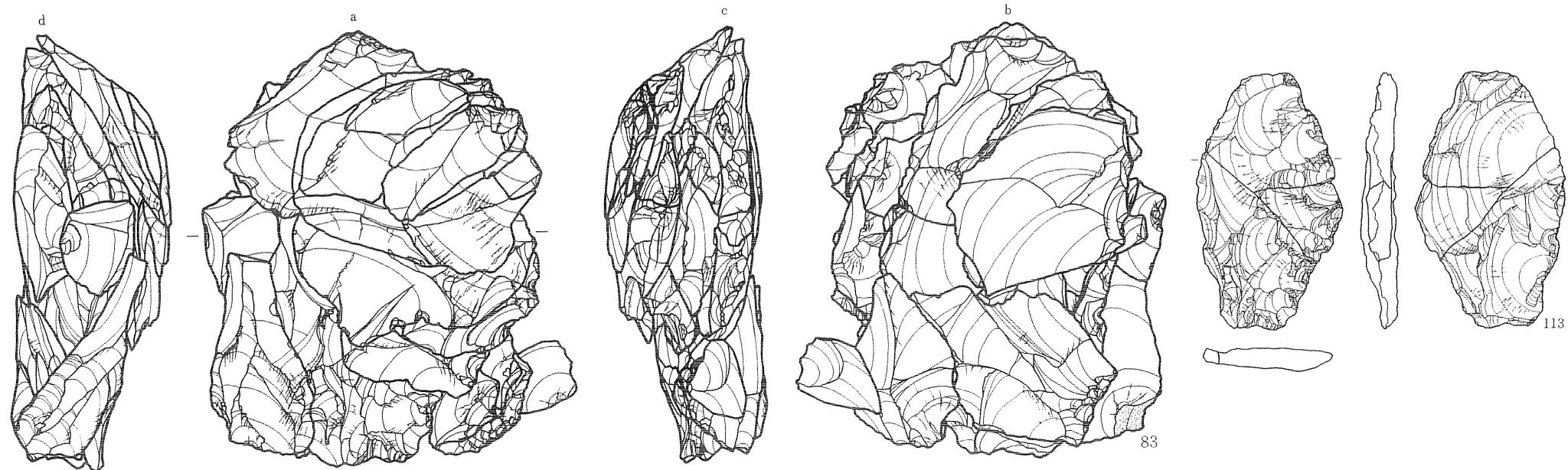
⊕ MB60



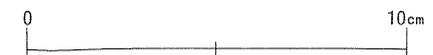
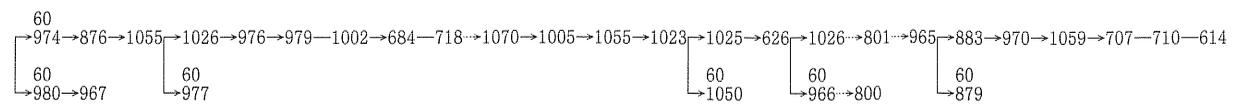
第61図 接合関係図(4) SXQ60②



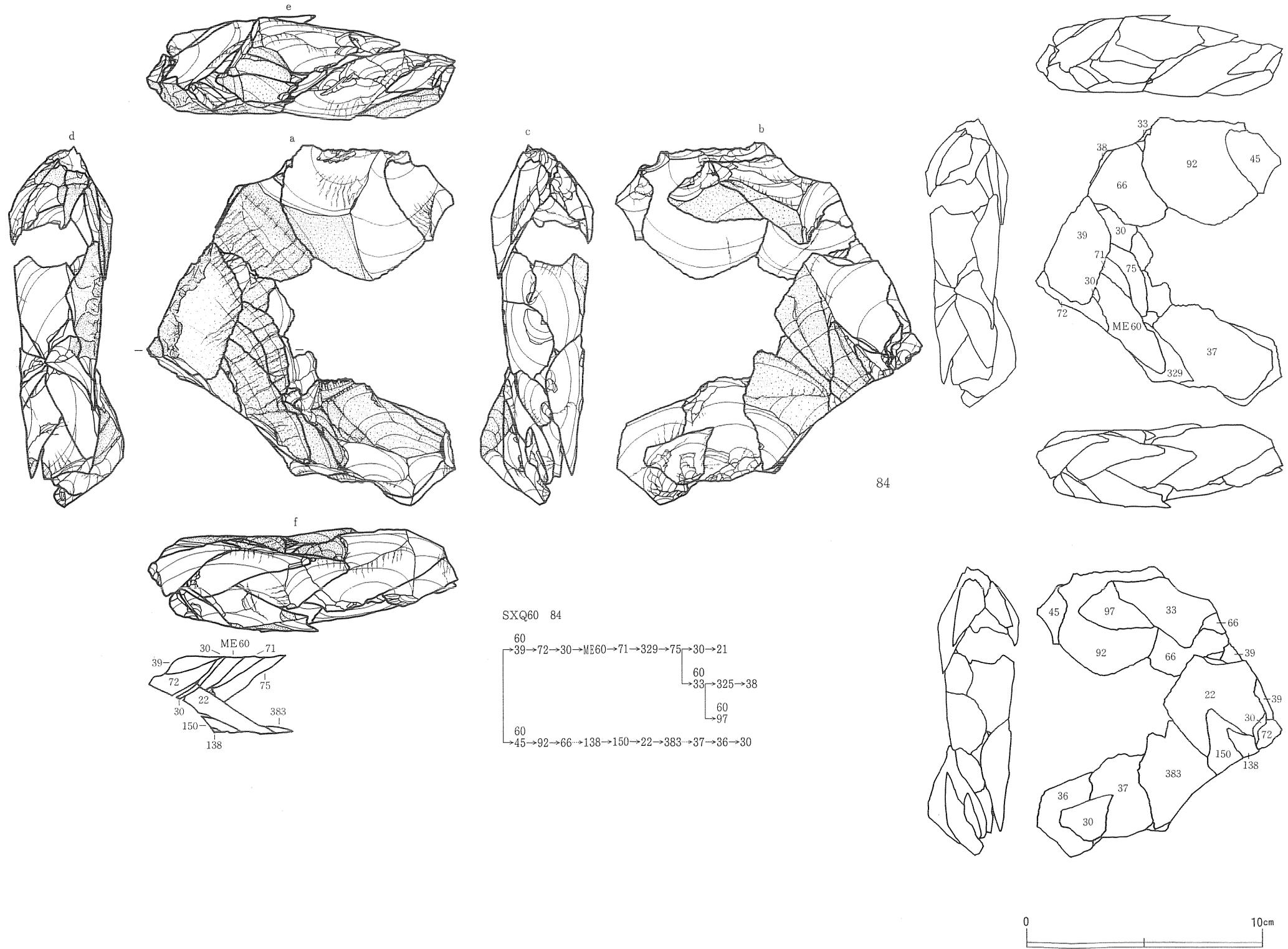
第 62 図 遺構内出土遺物 (27) S X Q 60③



SXQ60 83

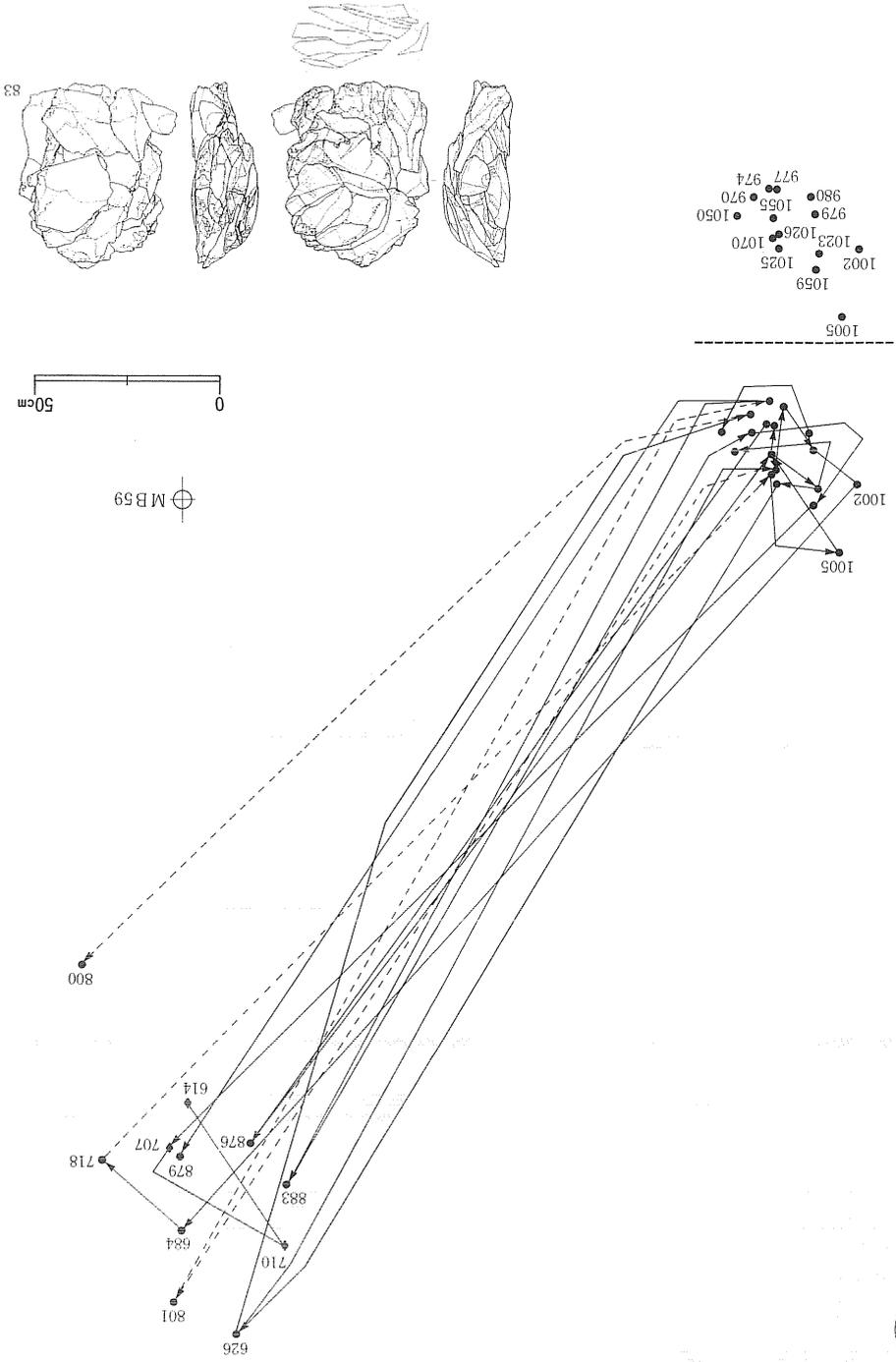


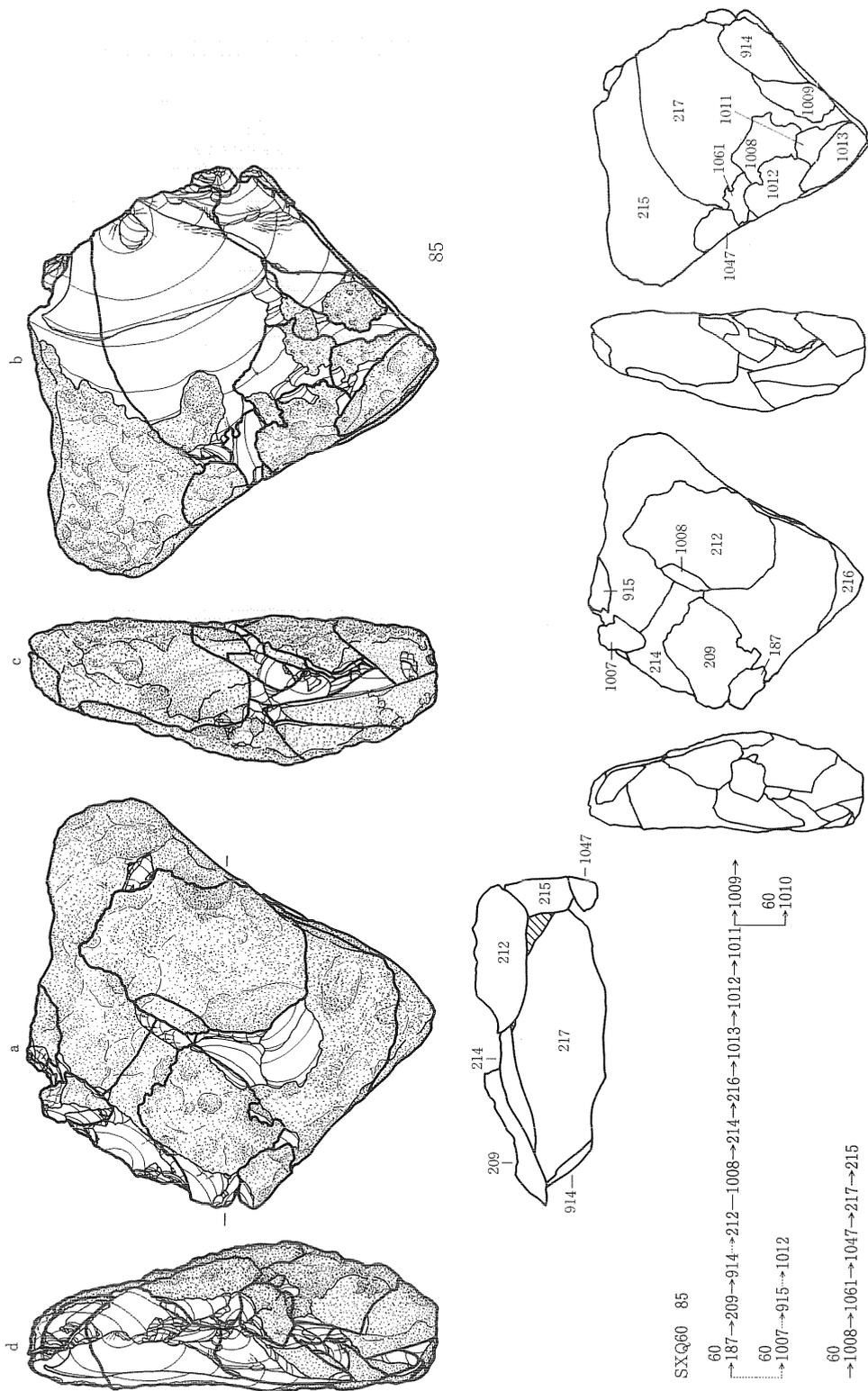
第63図 遺構内出土遺物 (28) S X Q60④



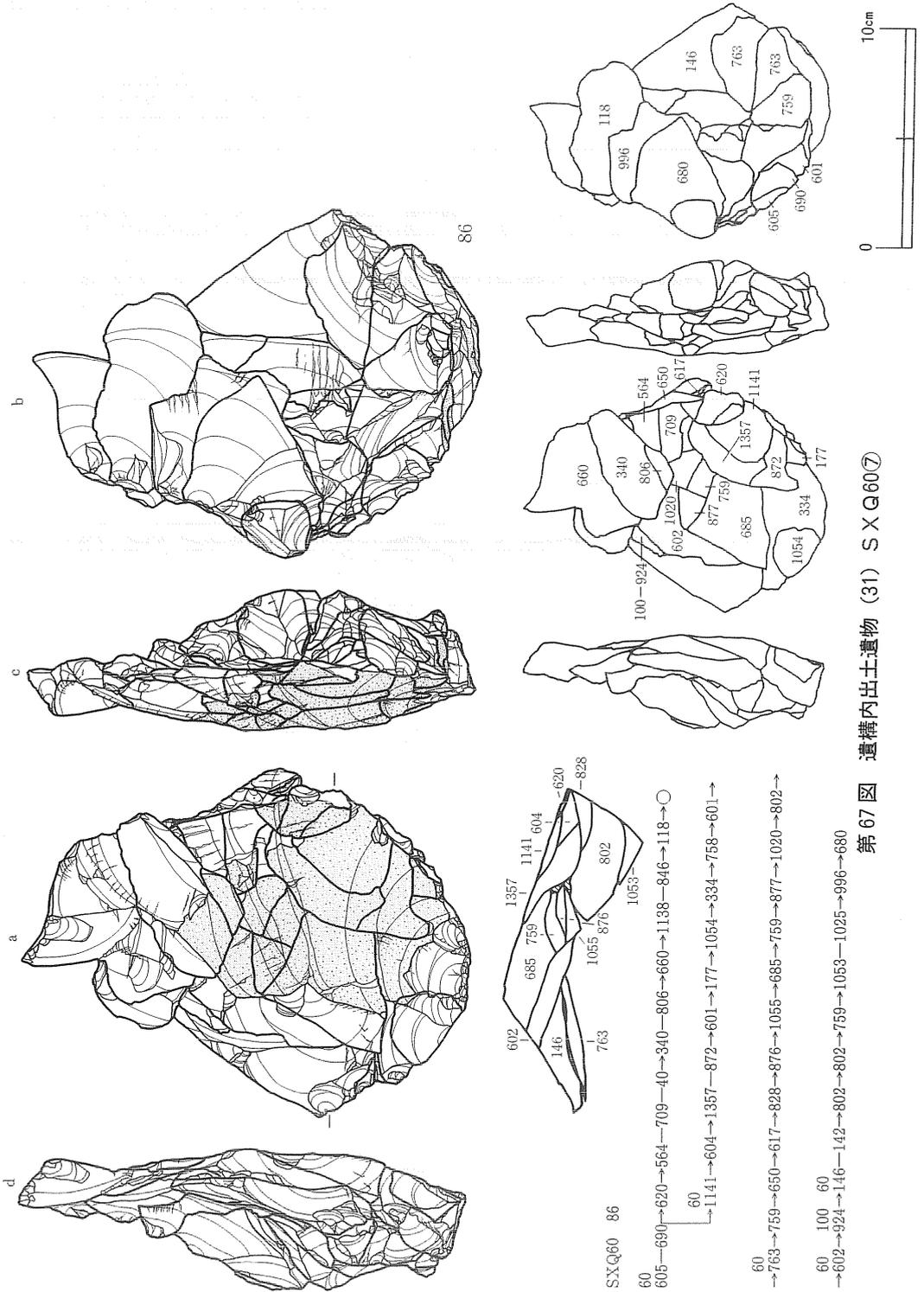
第64図 遺構内出土遺物 (29) SXQ60⑤

第65図 接合関係図(5) S X Q60③

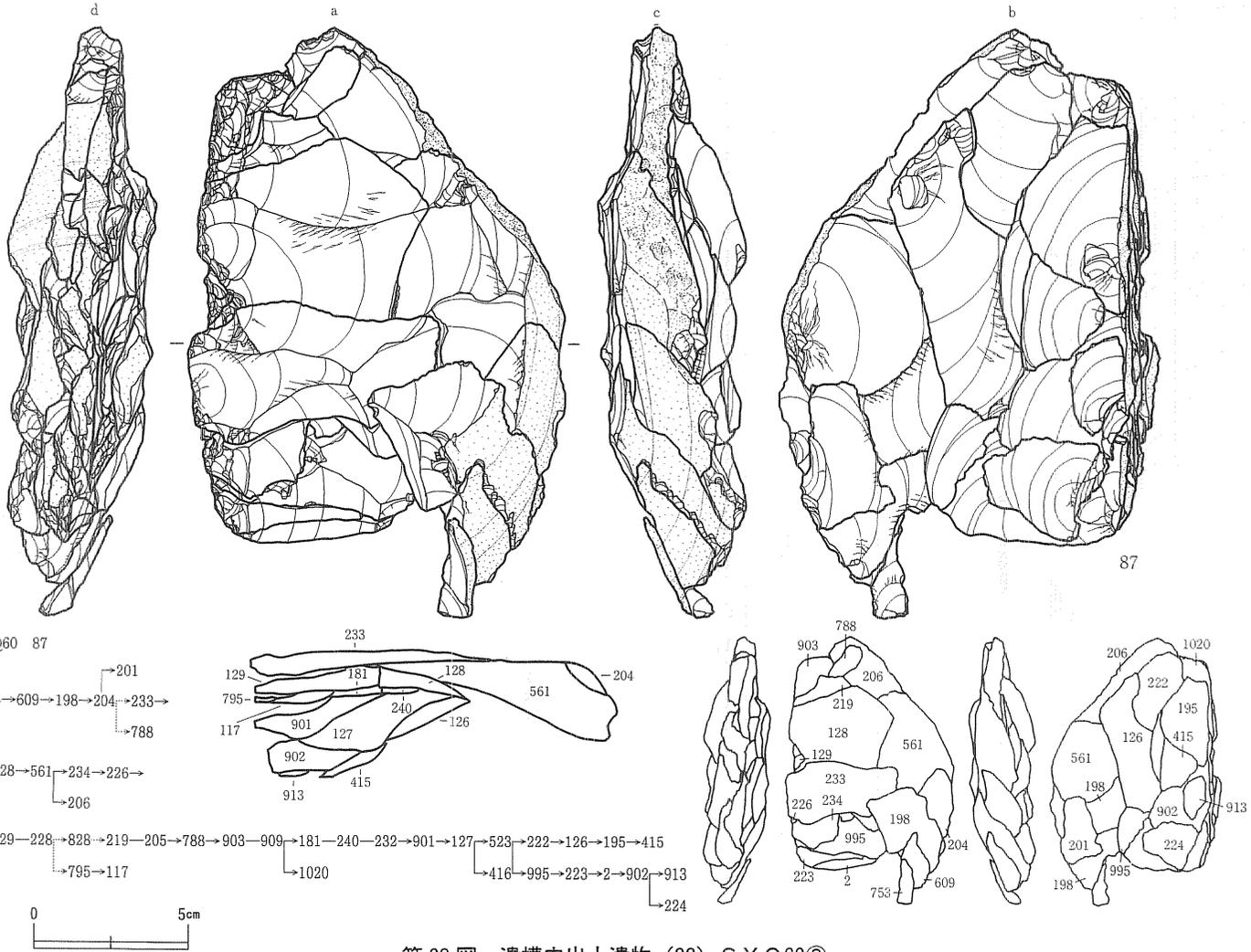




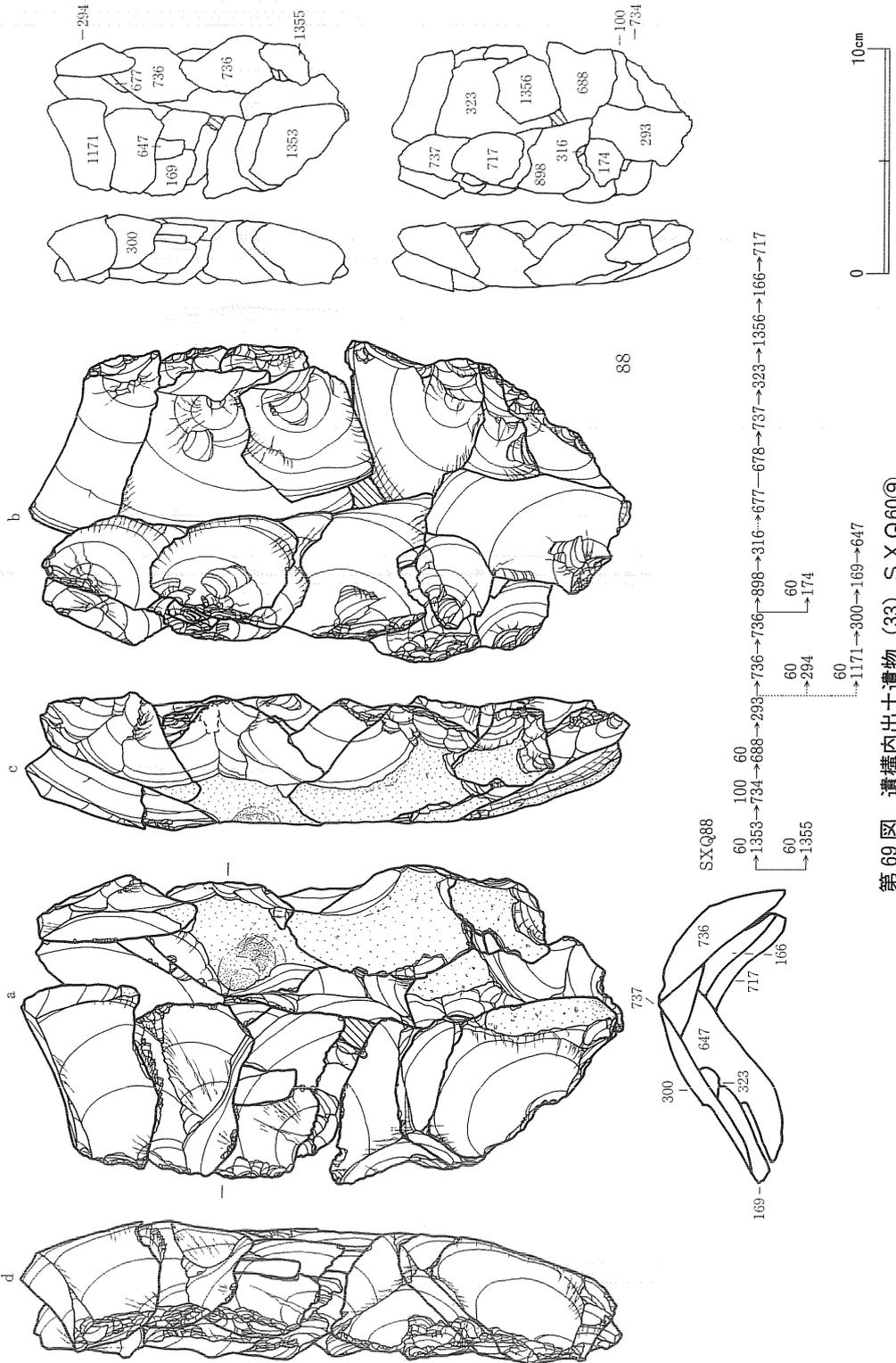
第66図 遺構内出土遺物 (30) SXQ60⑥



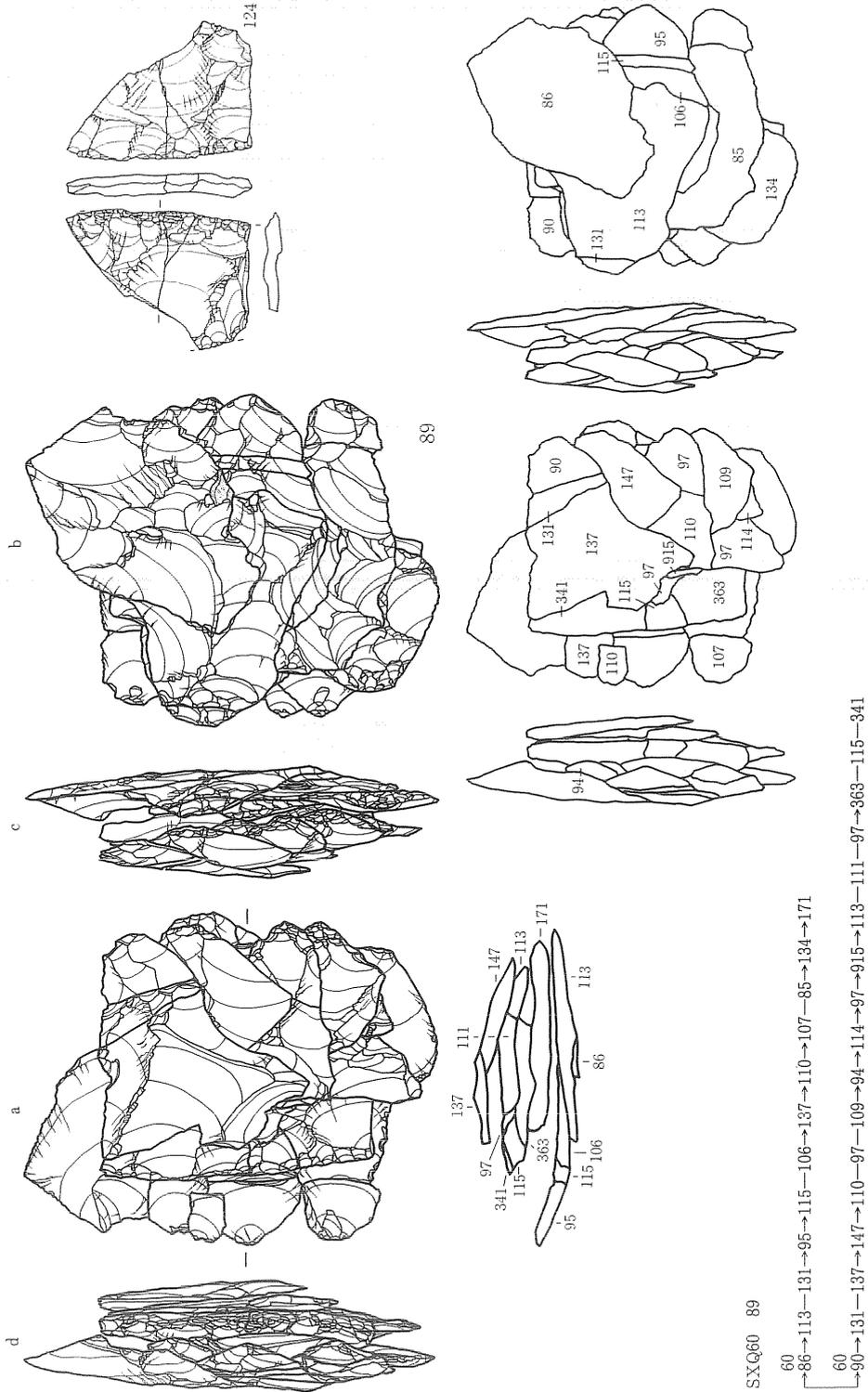
第 67 図 遺構内出土遺物 (31) S X G 60(7)



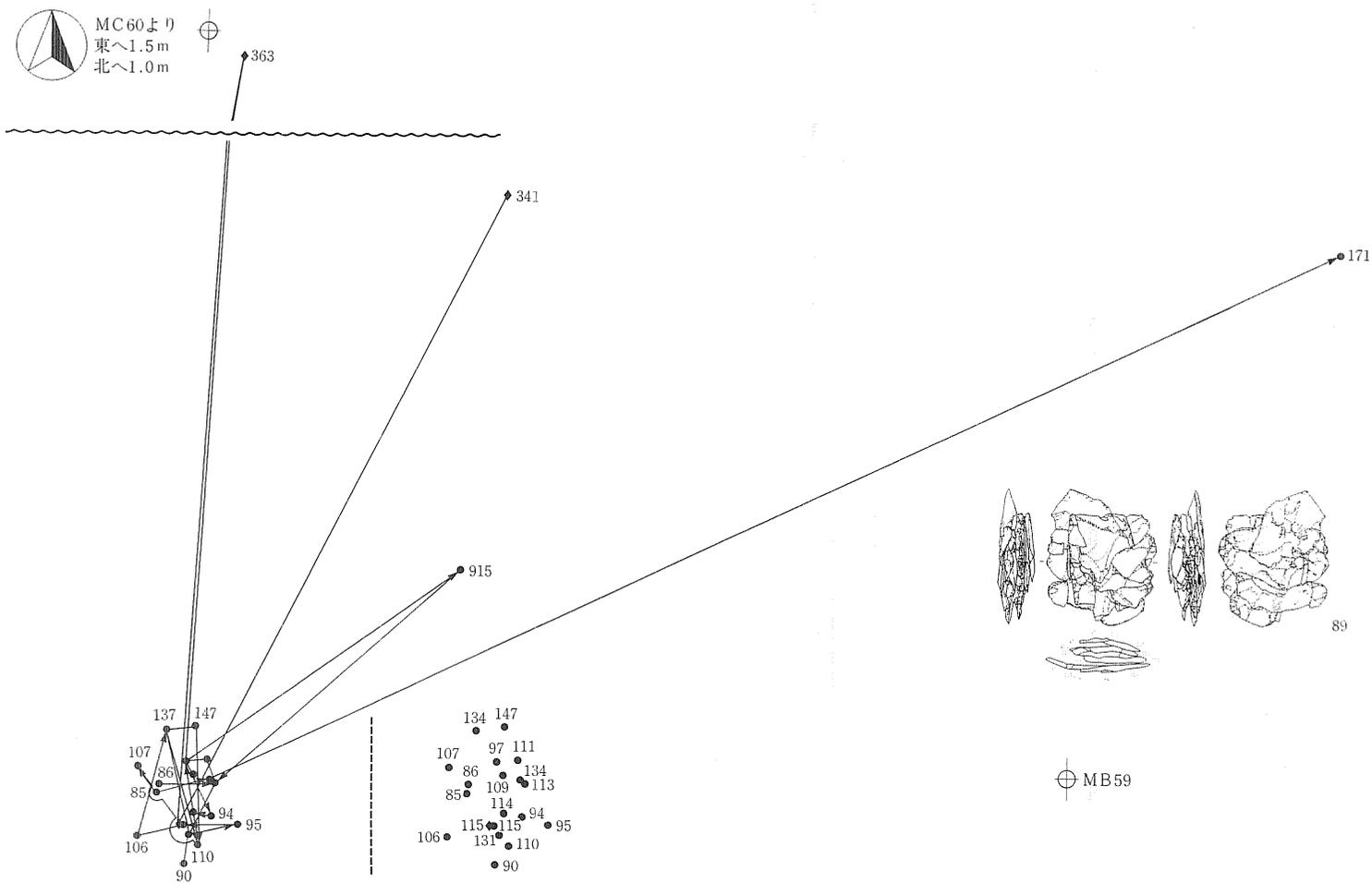
第 68 図 遺構内出土遺物 (32) S X Q 60⑧



第 69 図 遺構内出土遺物 (33) SX Q60㊟

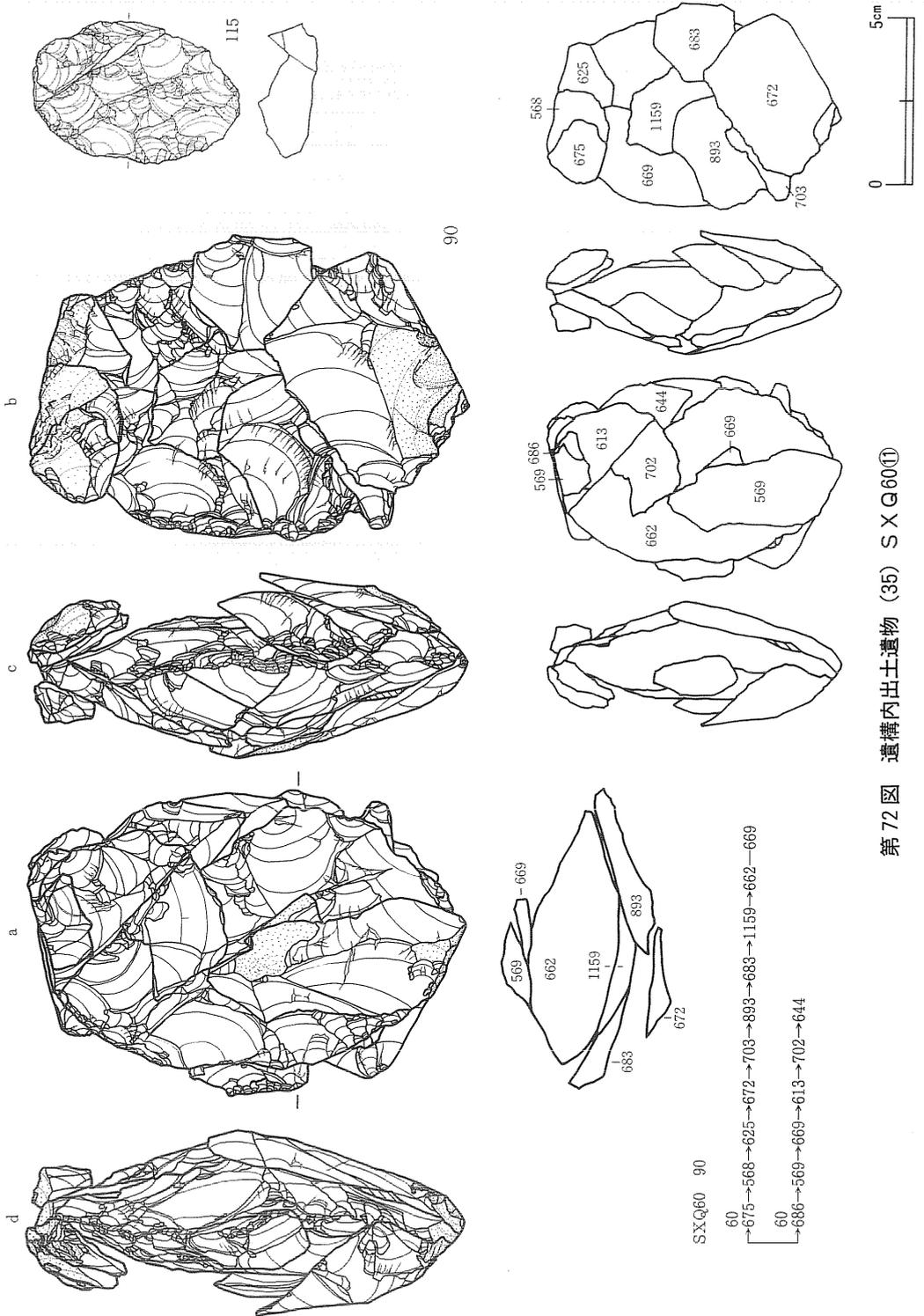


第70図 遺構内出土遺物 (34) SXQ60⑩

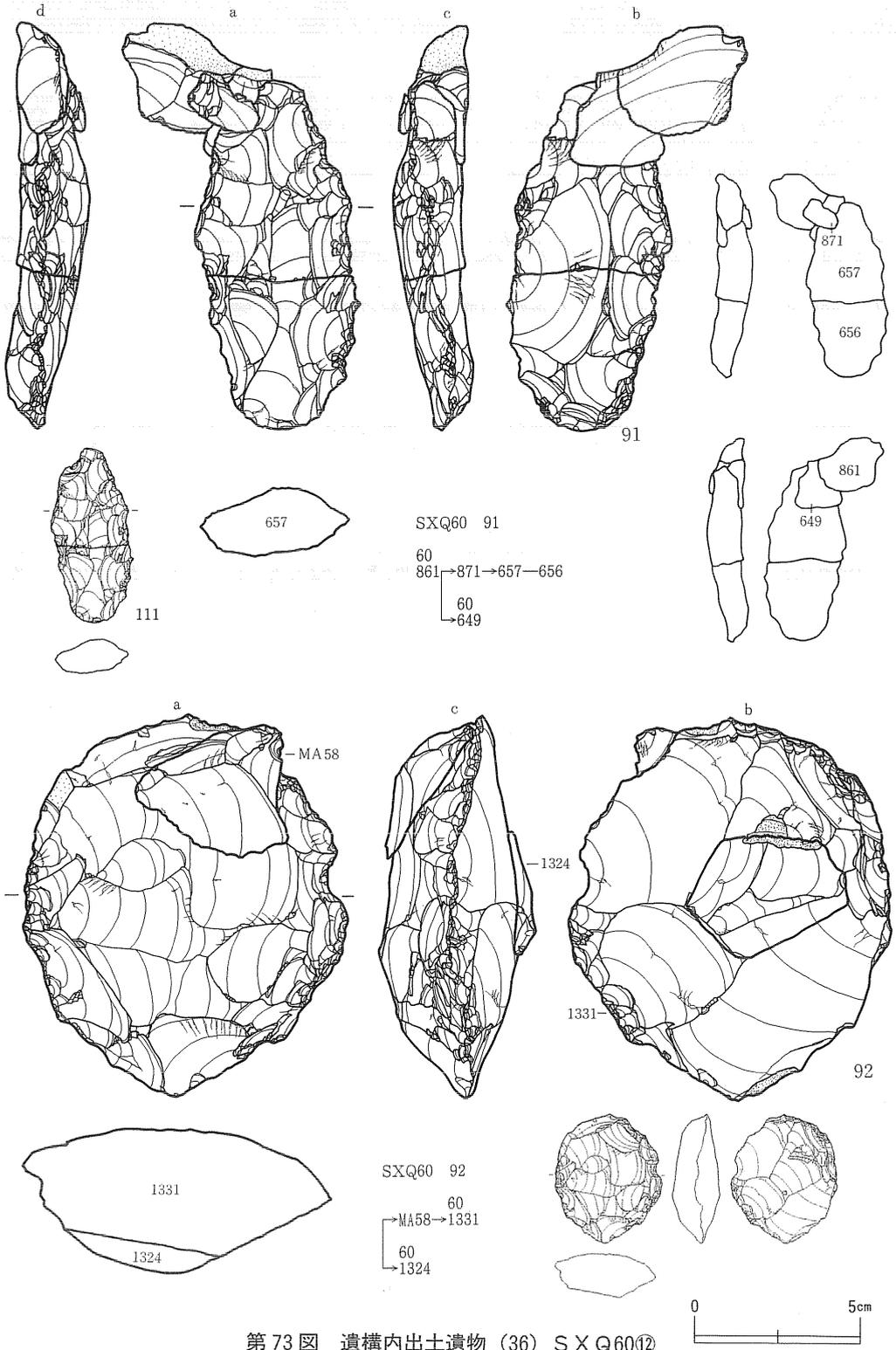


第71図 接合関係図(6) SXQ60④

0 50cm

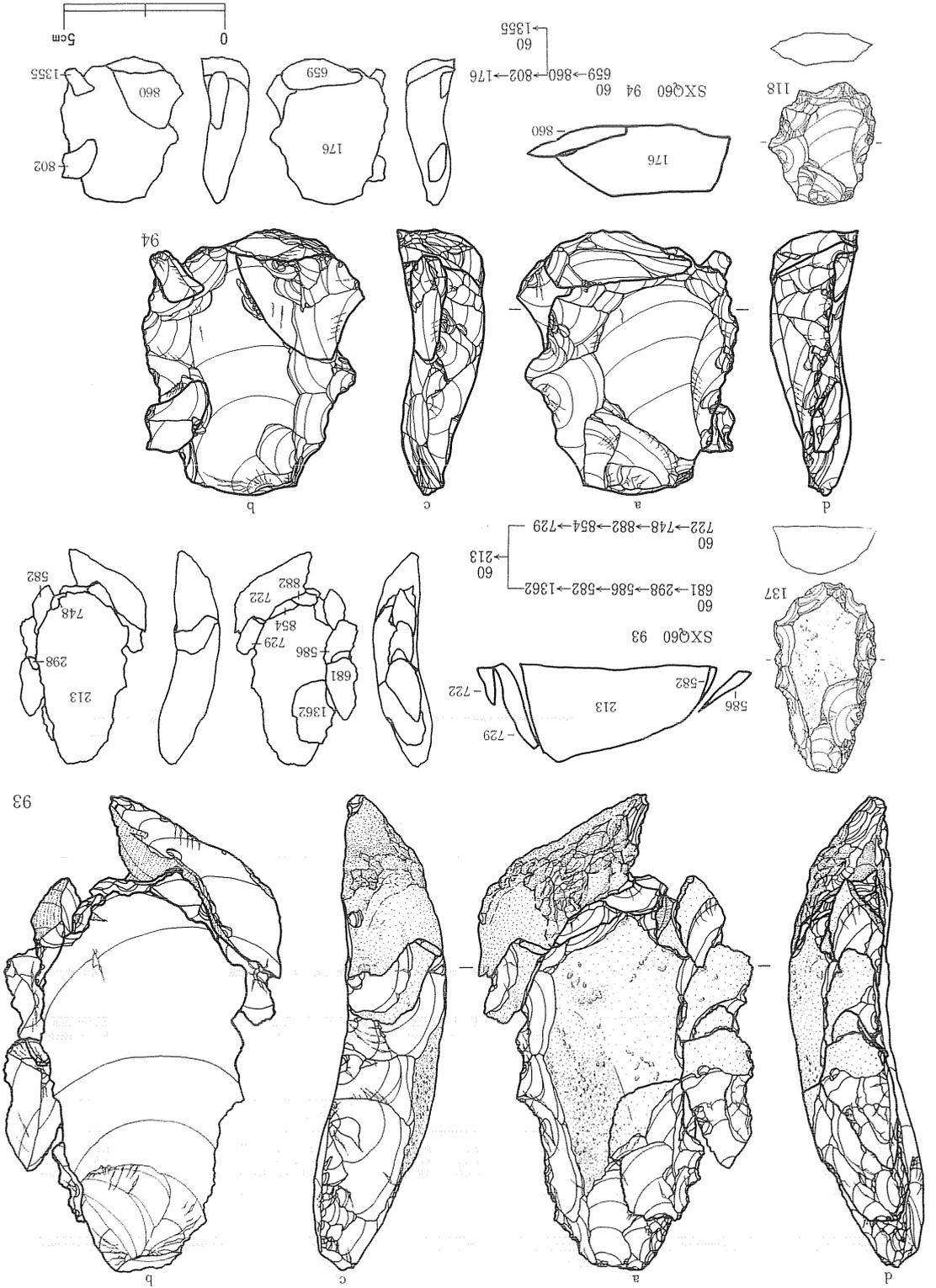


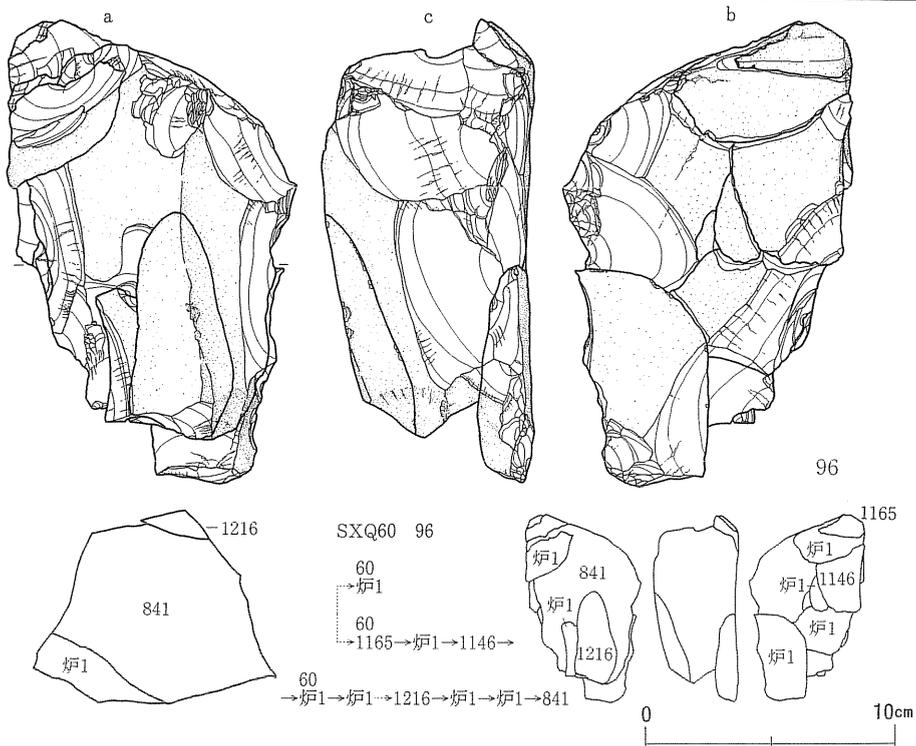
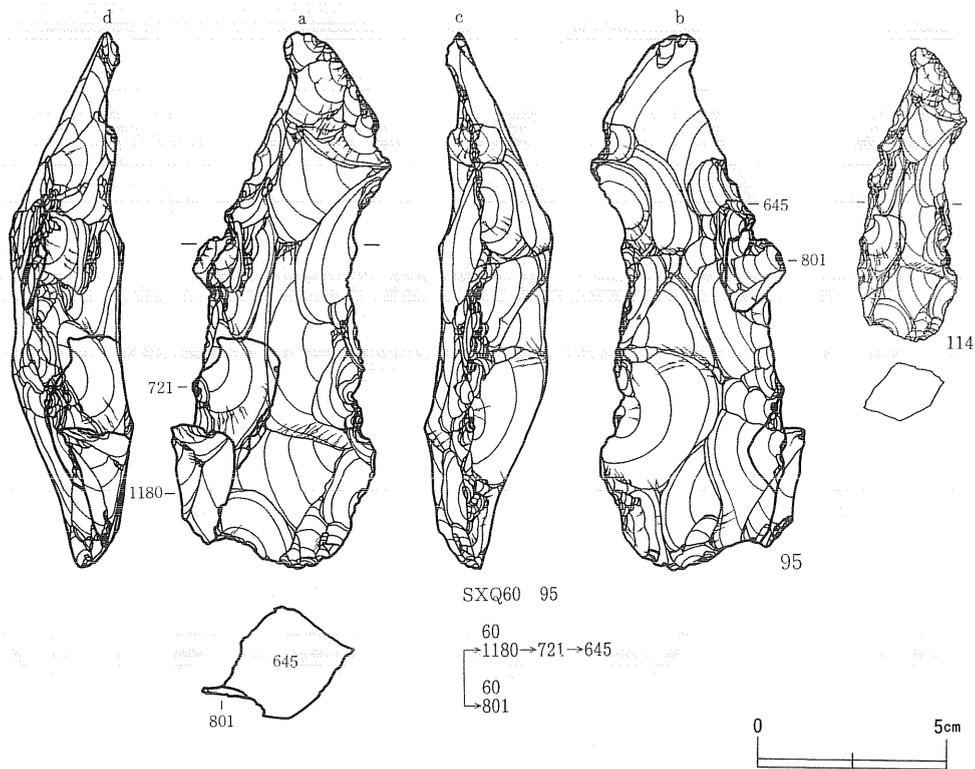
第72図 遺構内出土遺物 (35) SXQ60①



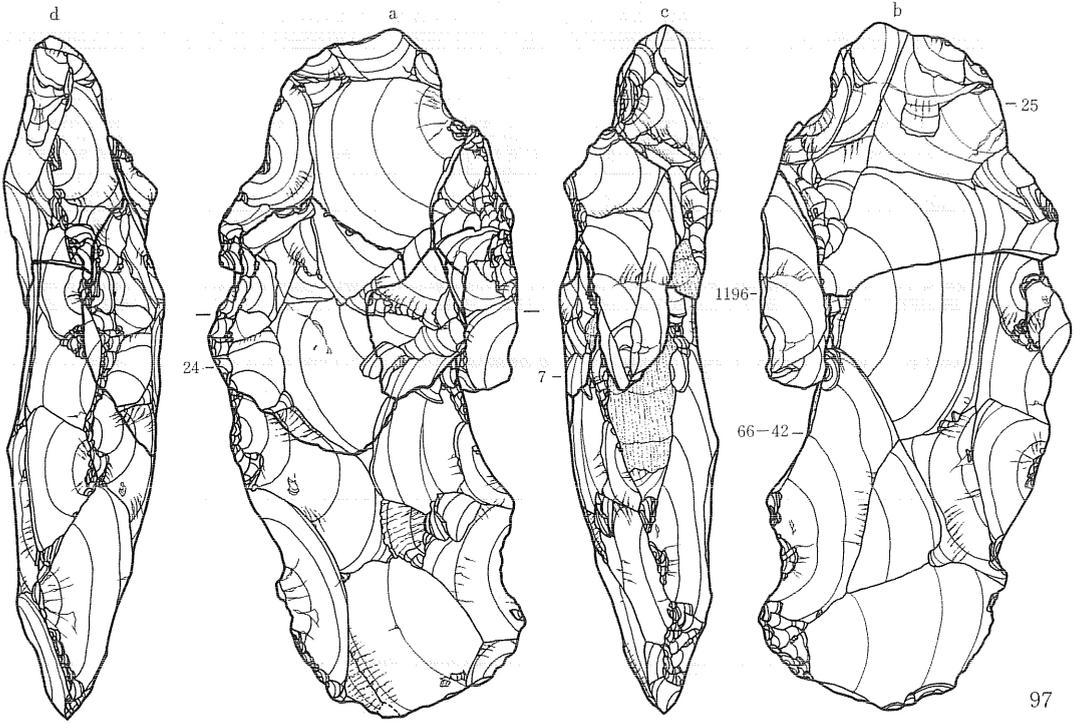
第73図 遺構内出土遺物 (36) S X Q 60⑫

第74図 遺構内出土遺物 (37) SX Q60⑬



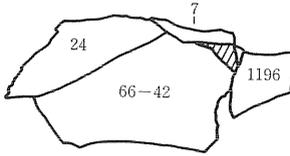


第75図 遺構内出土遺物 (38) S X Q60(14)



SXQ60 97

60
1196→7→24→25→42

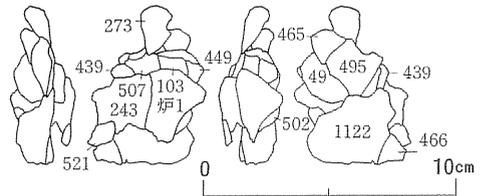
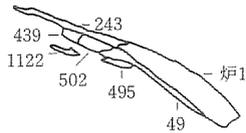
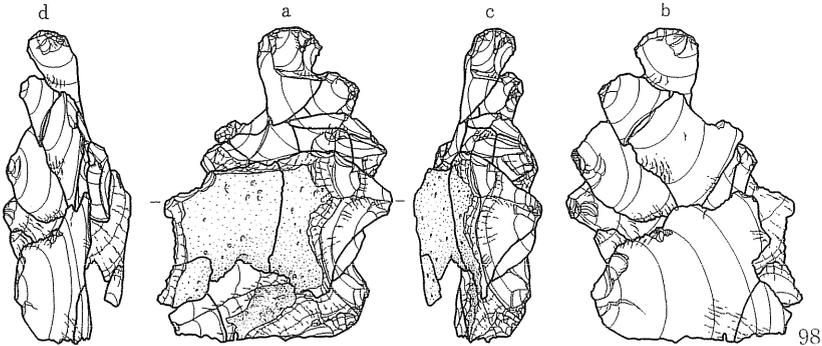


SXQ60 98

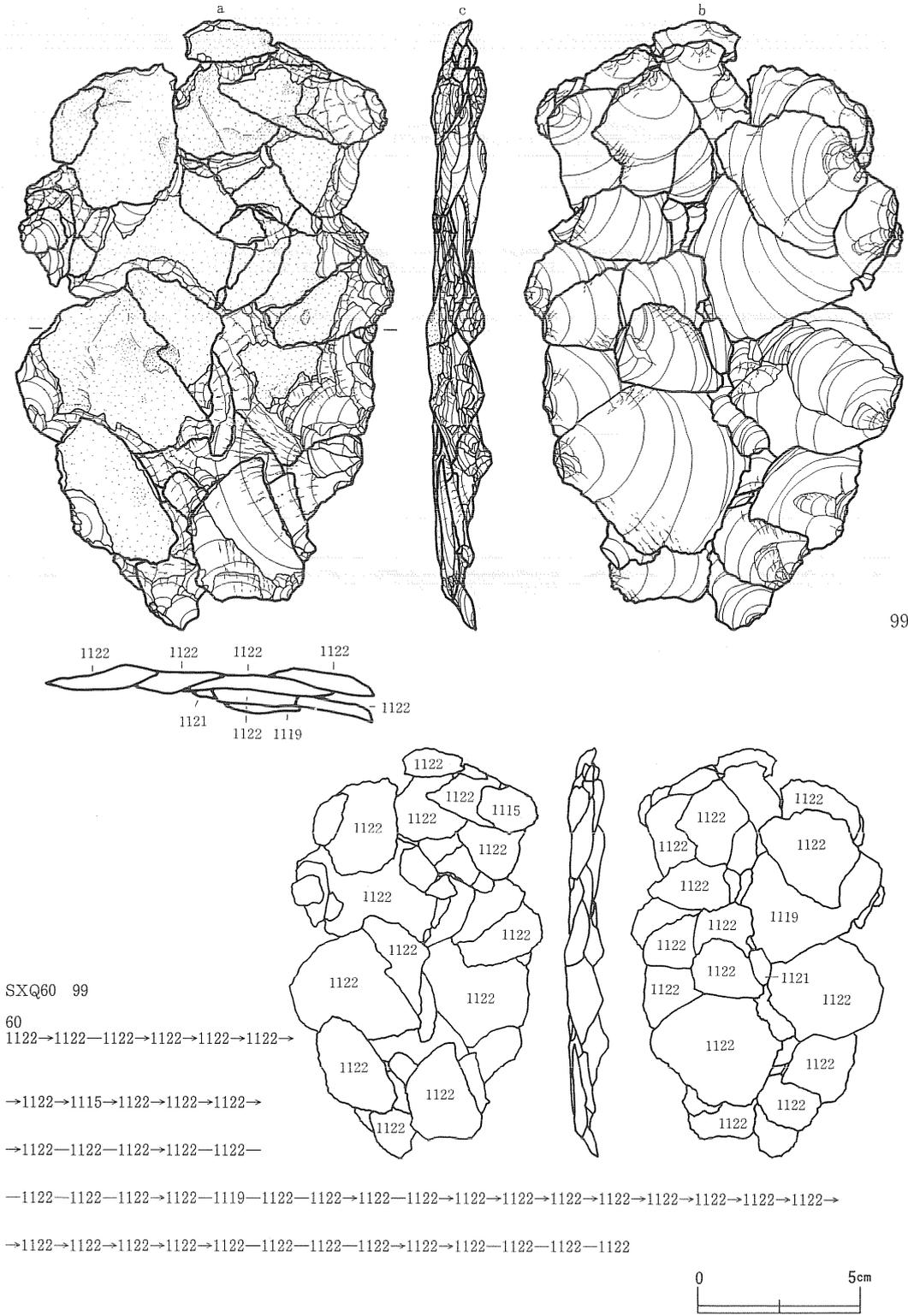
60
521→炉1→243→502→273→449→103→507→49

60
→439

60
→465→495→1122→466



第76図 遺構内出土遺物 (39) SXQ60⑮



SXQ60 99

60

1122→1122→1122→1122→1122→1122→

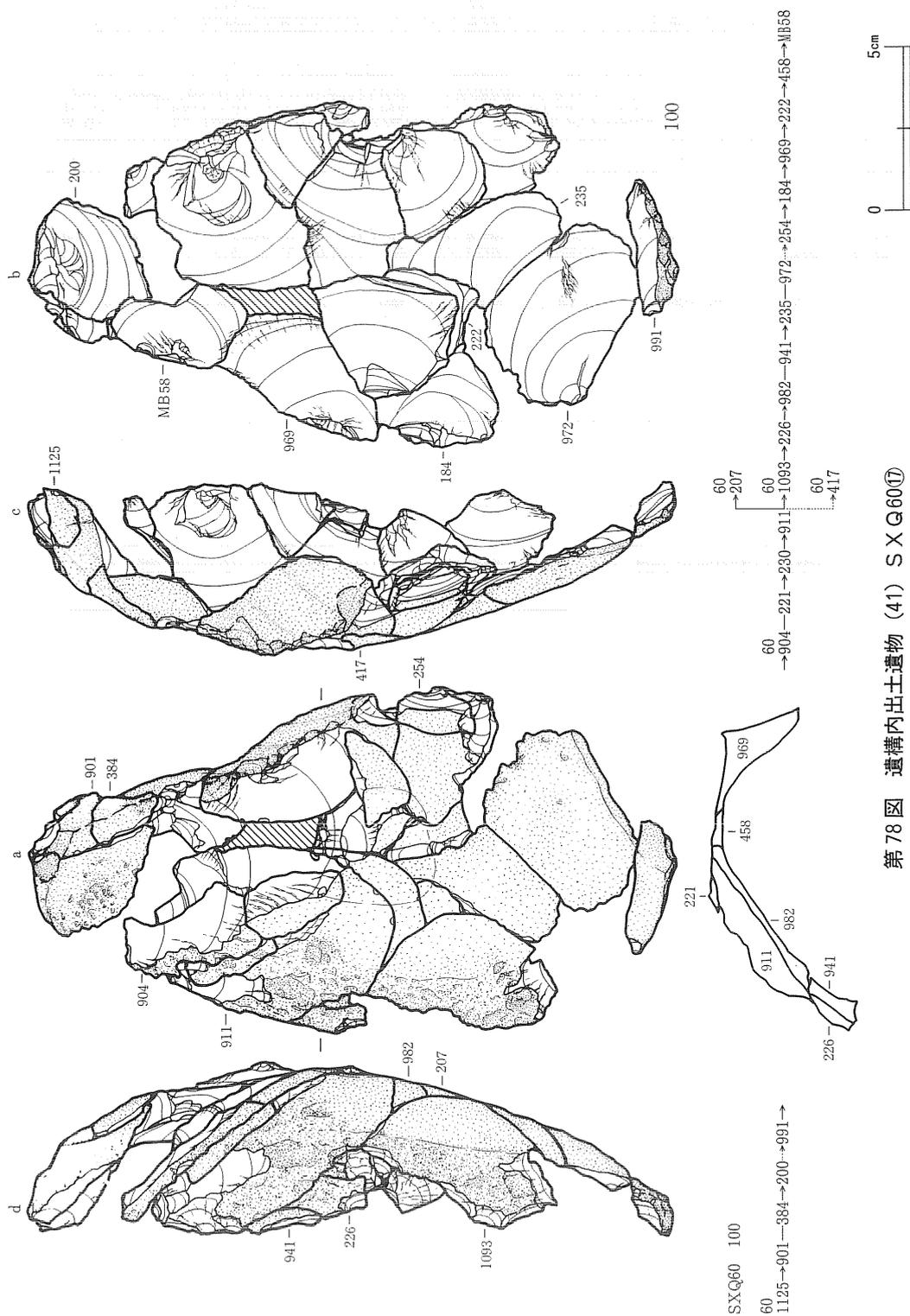
→1122→1115→1122→1122→1122→

→1122→1122→1122→1122→1122→

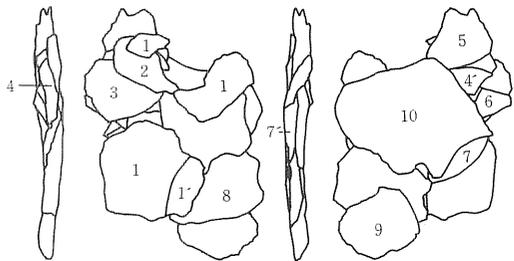
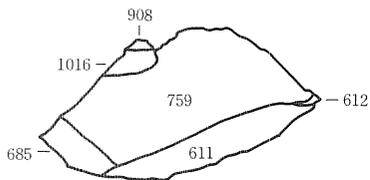
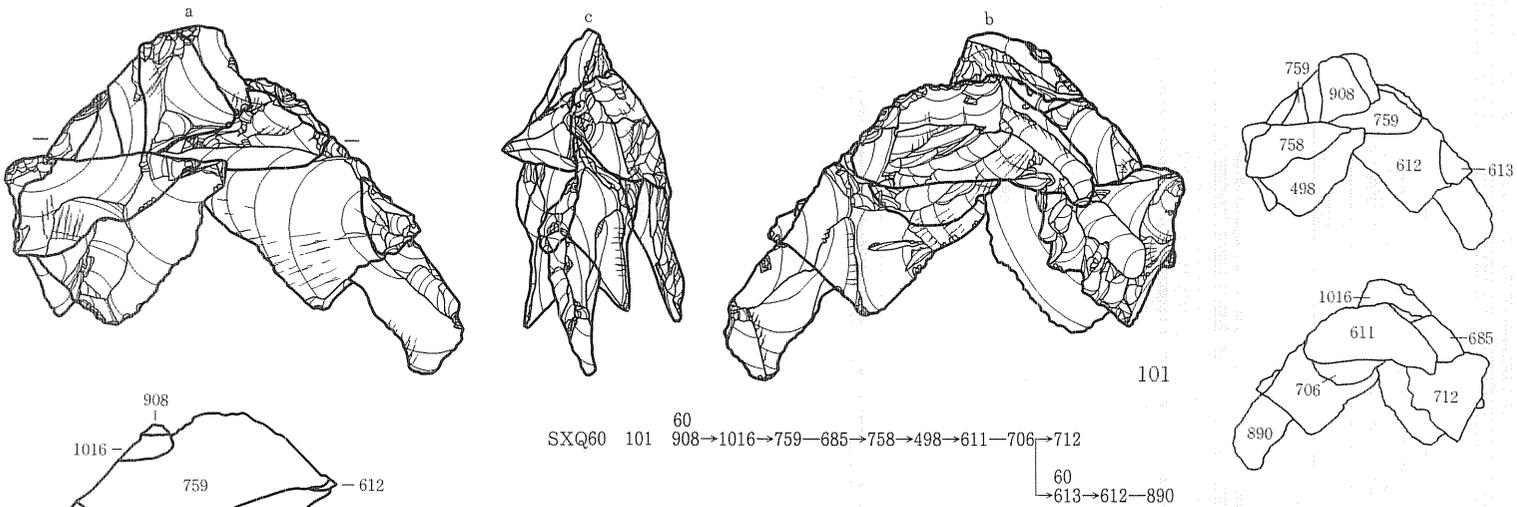
—1122→1122→1122→1122→1119→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→

→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→1122→

第77図 遺構内出土遺物 (40) S X Q60⑩

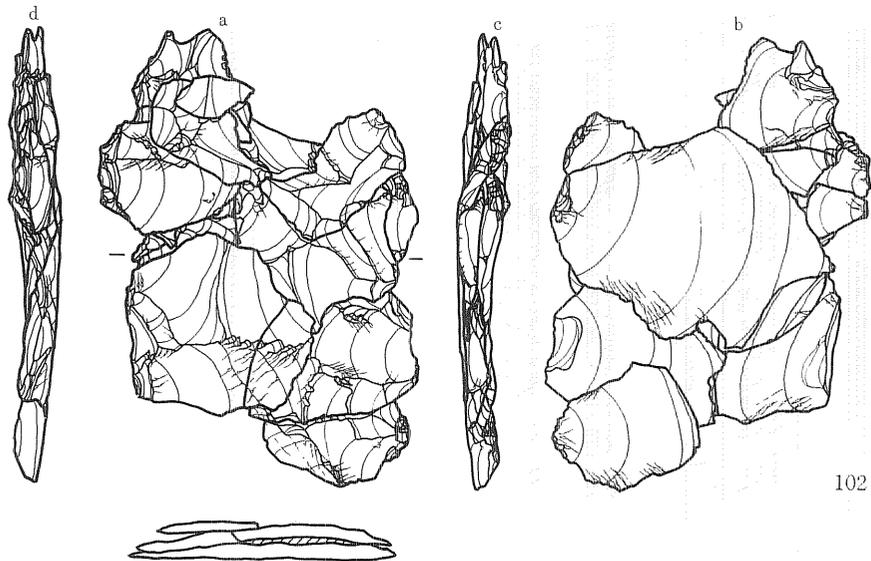
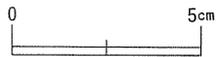


第78図 遺構内出土遺物 (41) SXQ60①

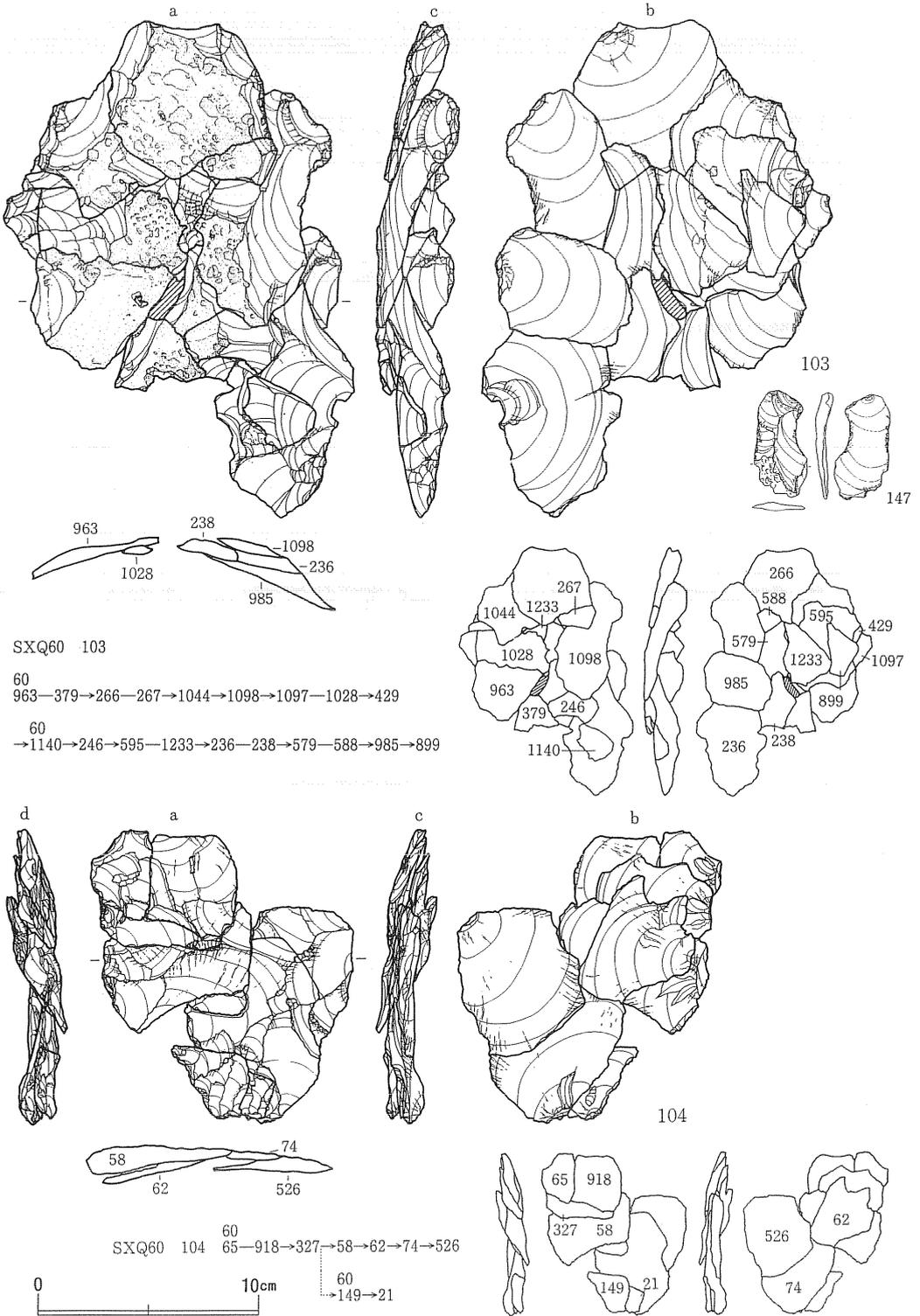


SXQ60 102

60
1→1'→2→3→1'-1'→4-4'→5→6→7-7'→8-9→10

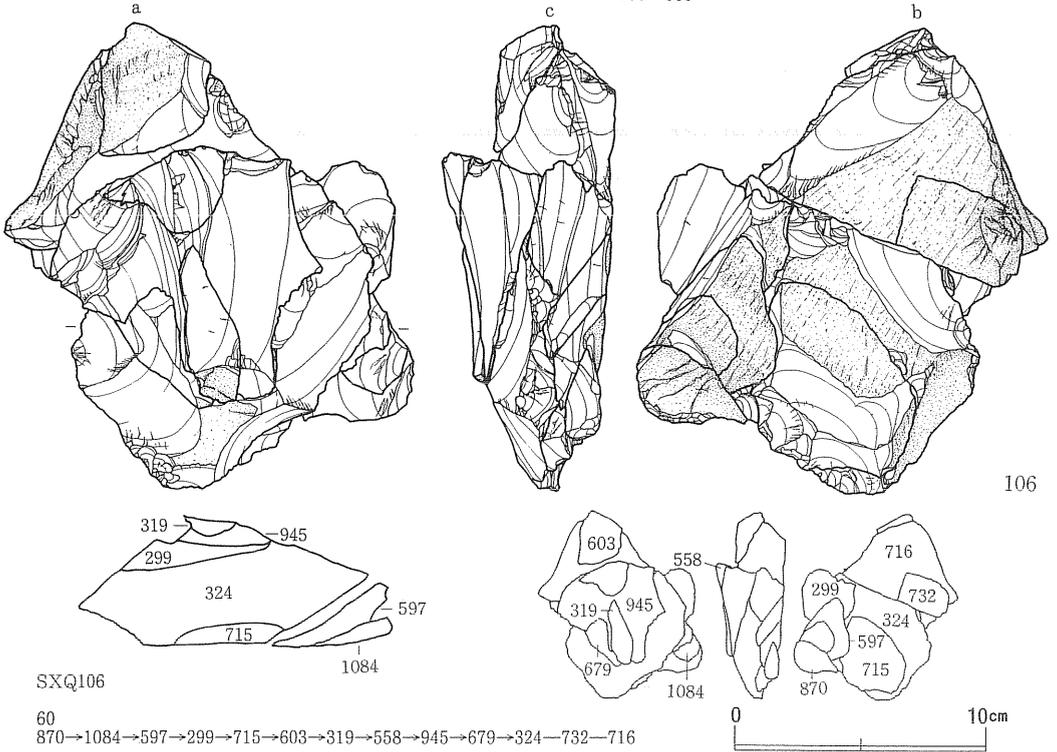
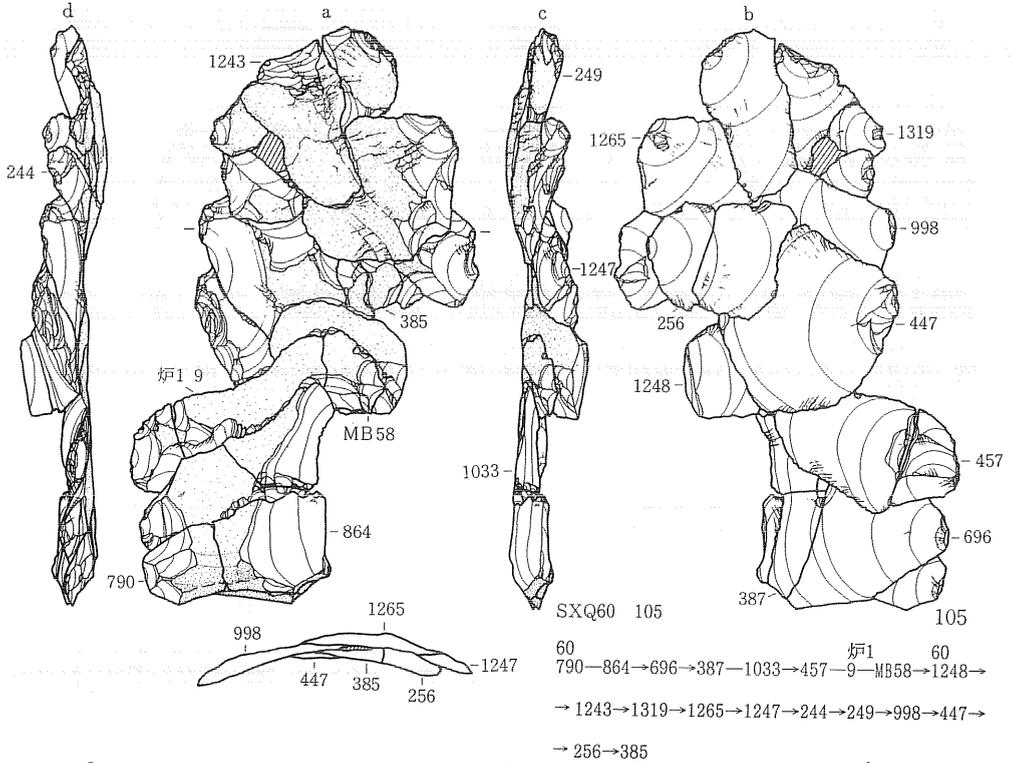


第79図 遺構内出土遺物 (42) SXQ60⑩



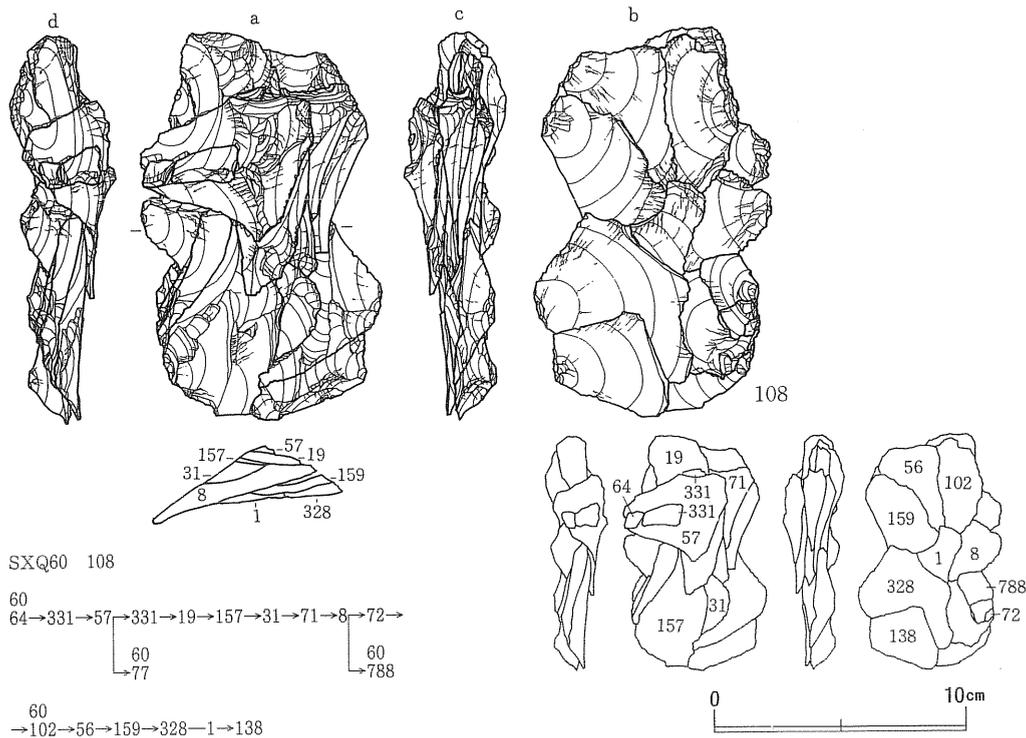
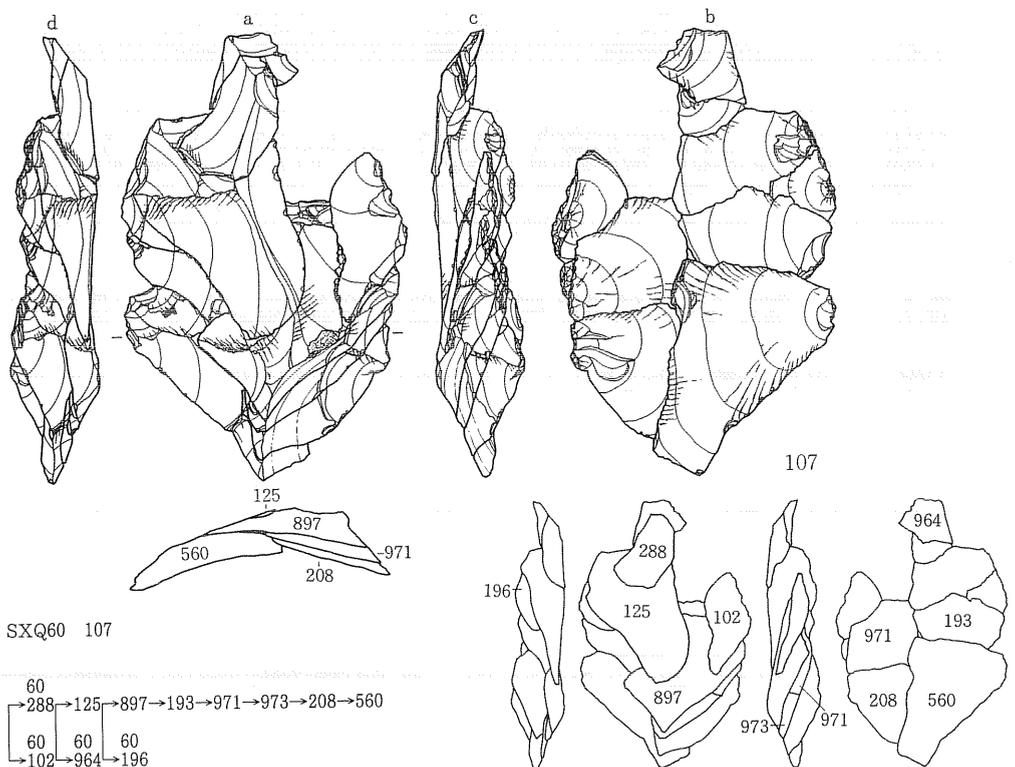
第80図 遺構内出土遺物 (43) S X Q60①

第1節 縄文時代の検出遺構とその遺物



第 81 図 遺構内出土遺物 (44) S X Q 60②

第4章 調査の記録



第82図 遺構内出土遺物(45) SXQ60②

部を除く両側縁に上位破片からの丁寧な調整を施し、その後 a 面からの折断がある。そして、下位破片で両側縁の調整を施す。126 は縦長剝片を素材に、主として a 面と b 面右側縁の調整を施す。石材は黄白色の頁岩である。127 は下位に素材面を残し、下半が厚く広い。両側縁に細かい剝離がある。先端の断面が三角形状を呈することから、石錐の可能性はある。128 は下端が丸く扁平で、両面の周縁に連続した細かい剝離がある。b 面からの折断がある。129 は上位が先細りで、抉りをもつ下位に最大幅がある。両面の側縁と下端には細かな剝離を施す。a 面からの、上下の折断がある。

石斧 (130・131) 130 は剝片素材の可能性はある。刃部は、a 面の礫皮面と b 面の細かい調整から成る。その断面は両刃で角度がある。131 は主に上位の素材面より、剝片素材と考えられる。刃部は丸く両面に縦の剝離がある。特に b 面では約 2.5cm の長いもので、断面は薄い両刃になる。

石匙 (132~134) 132 は横長の石匙で、横長剝片を素材にしている。打点部の a・b 両面に、形を整えた剝離がある。つまみには、a 面の頂部と抉れ部に細かく丁寧な剝離があり、b 面抉れ部右にも小さな剝離を施す。a 面下の側縁には、使用痕と考えられる微小剝離痕がある。133 は、つまみ部を打点にした縦長剝片を素材としており、a 面に礫皮面を残す。b 面つまみの両抉れ部とその a 面右側には、小さな剝離を施す。両側縁には、使用痕と考えられる微小剝離痕があり、全体にトロトロした光沢がある。134 は端部を打点にした縦長剝片で、a 面のつまみと下位に礫皮面がある。つまみの抉れ部は、a 面で小さな剝離がある。a 面の端部から右側縁下位にかけては、小さな剝離を施し角度のある刃部を作出する。両側縁には、使用痕と考えられる微小剝離痕があり、搔器の機能もあったと考えられる。

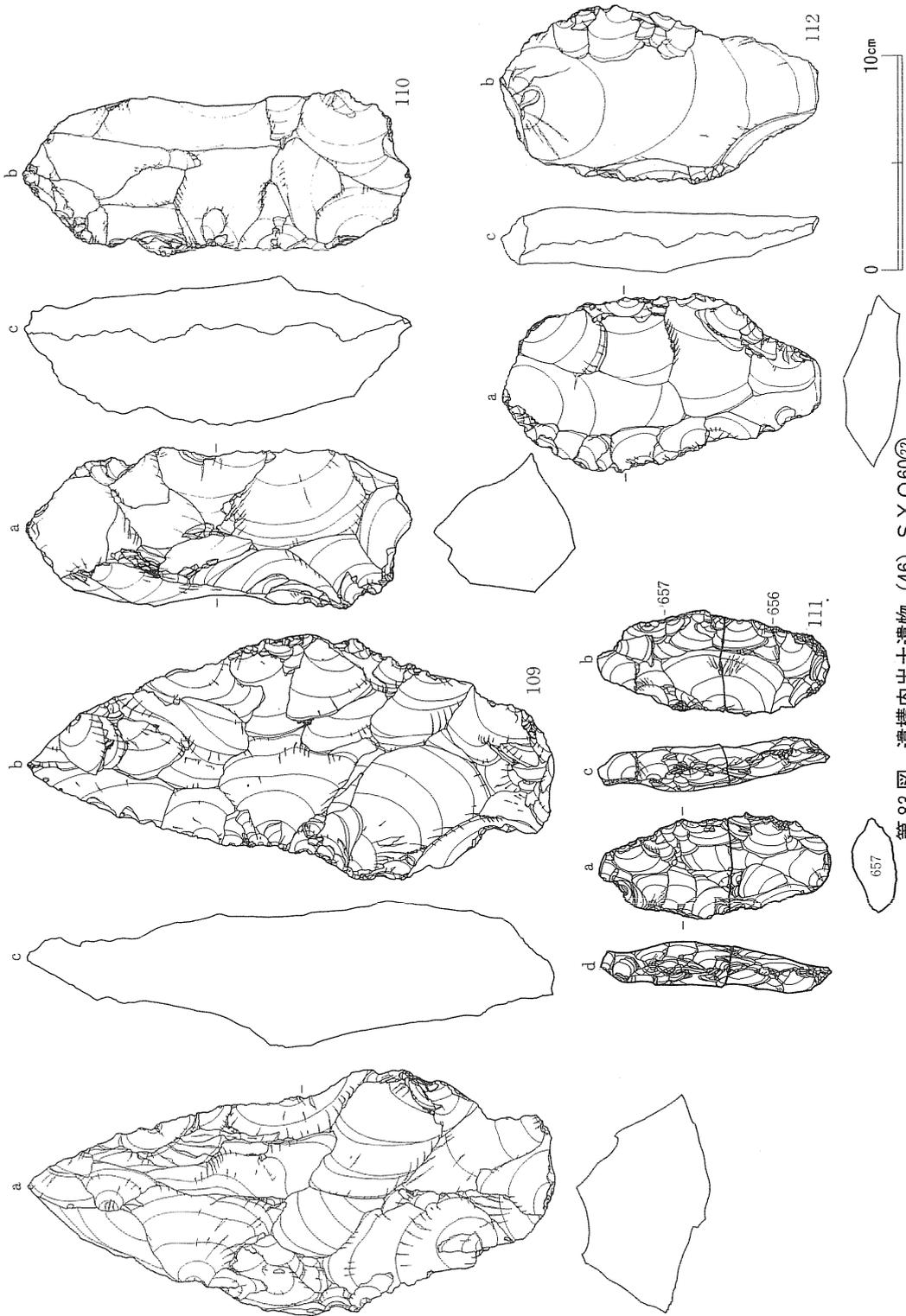
搔器 (135~137) 135・137 は縦長剝片、136 は横長剝片を素材にする。135 は a 面刃部に細かな調整を施す。下位が赤く上位が青黒い外、b 面上位で火熱による破砕が認められる。136 は、a 面刃部に丁寧な調整がある。137 は 93 の石核で、a 面に粗い調整がある。

削器 (138~145) 141 と 145 は横長剝片、それ以外は縦長剝片である。調整が両側縁にあるもの (138・139・141・144・145) と、片側だけのもの (140・142・143) がある。141 と 142 の a 面右側縁には、丁寧な調整が施され薄く鋭い仕上がりである。140 は、a 面右側縁を刃部にした横長の搔器の可能性もある。b 面右上位と左下位側縁に調整がある。

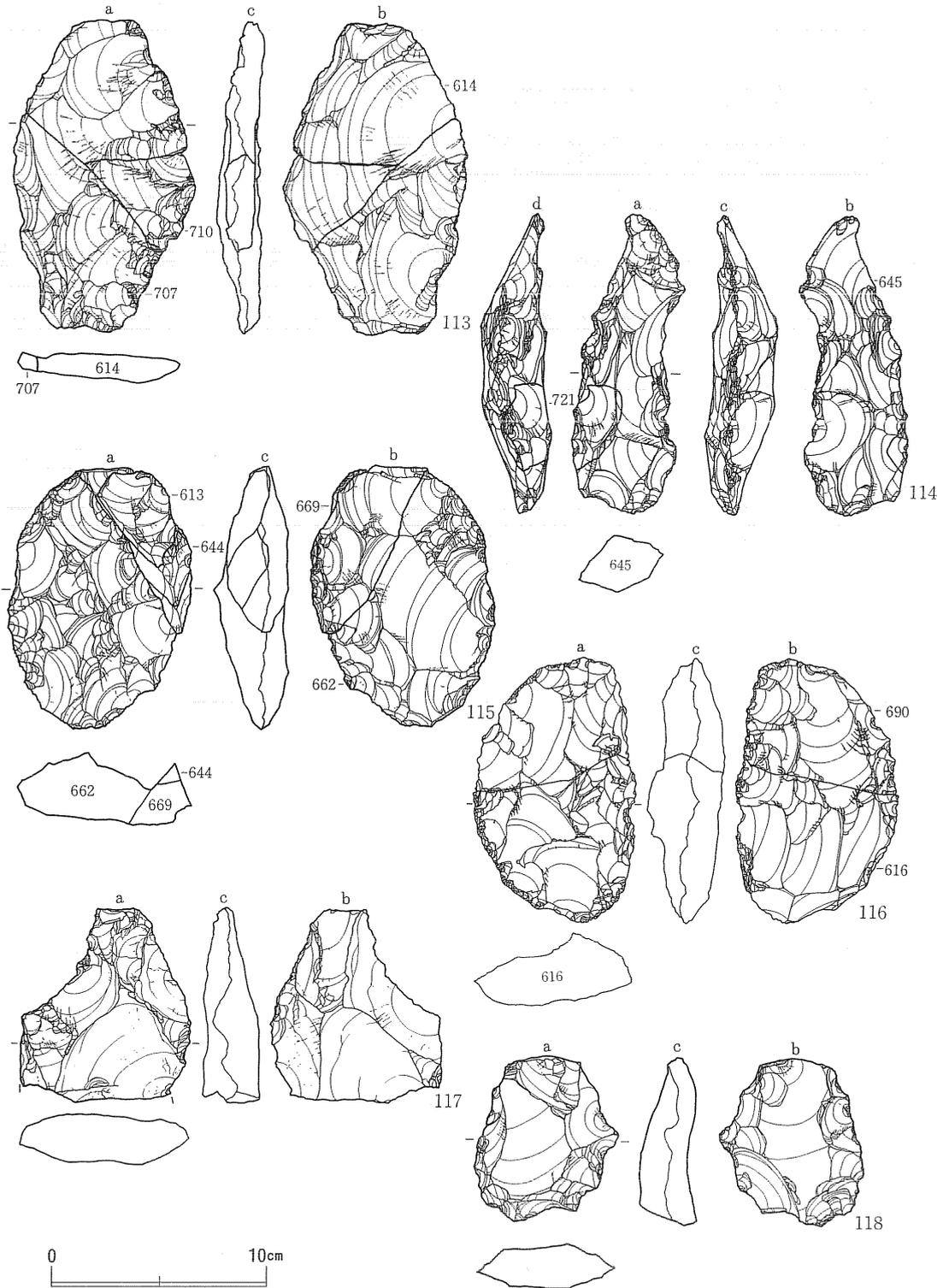
鋸齒縁石器 (146) 横長剝片を素材にし、a 面下位の縁に鋸齒状の剝離を施す。横長剝片で、素材面を大きく残す。

二次加工ある剝片 (147) 103 の縦長剝片で、両側縁に微小剝離痕がある。

台石 (148) 大型で扁平な礫を素材にし、b 面右側縁と同面上位の右側縁を加工している。大きさは長軸 51cm×短軸 25.5cm×厚さ 6.5cm で、両面に無数の切り傷がある。傷は

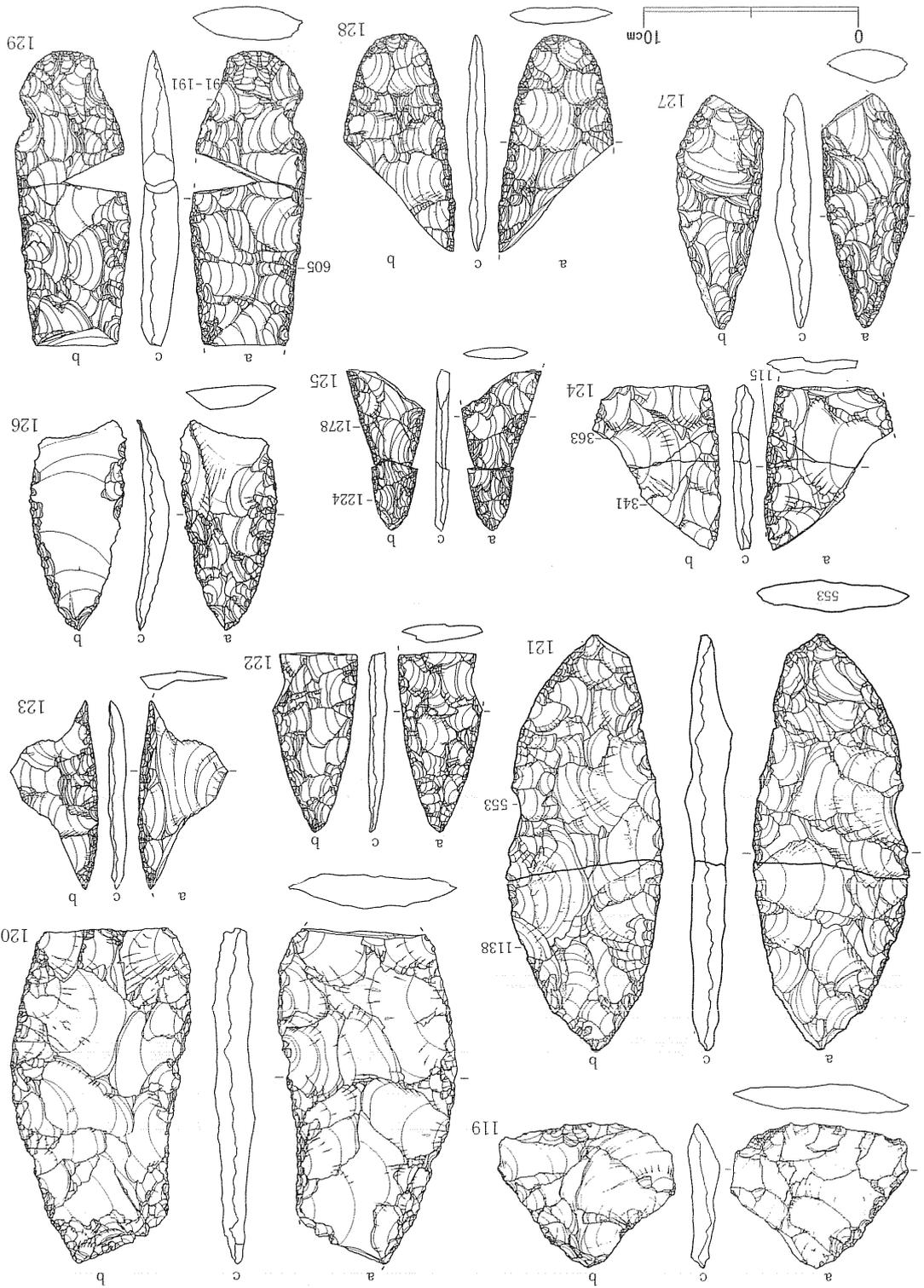


第83図 遺構内出土遺物(46) S X G 60②

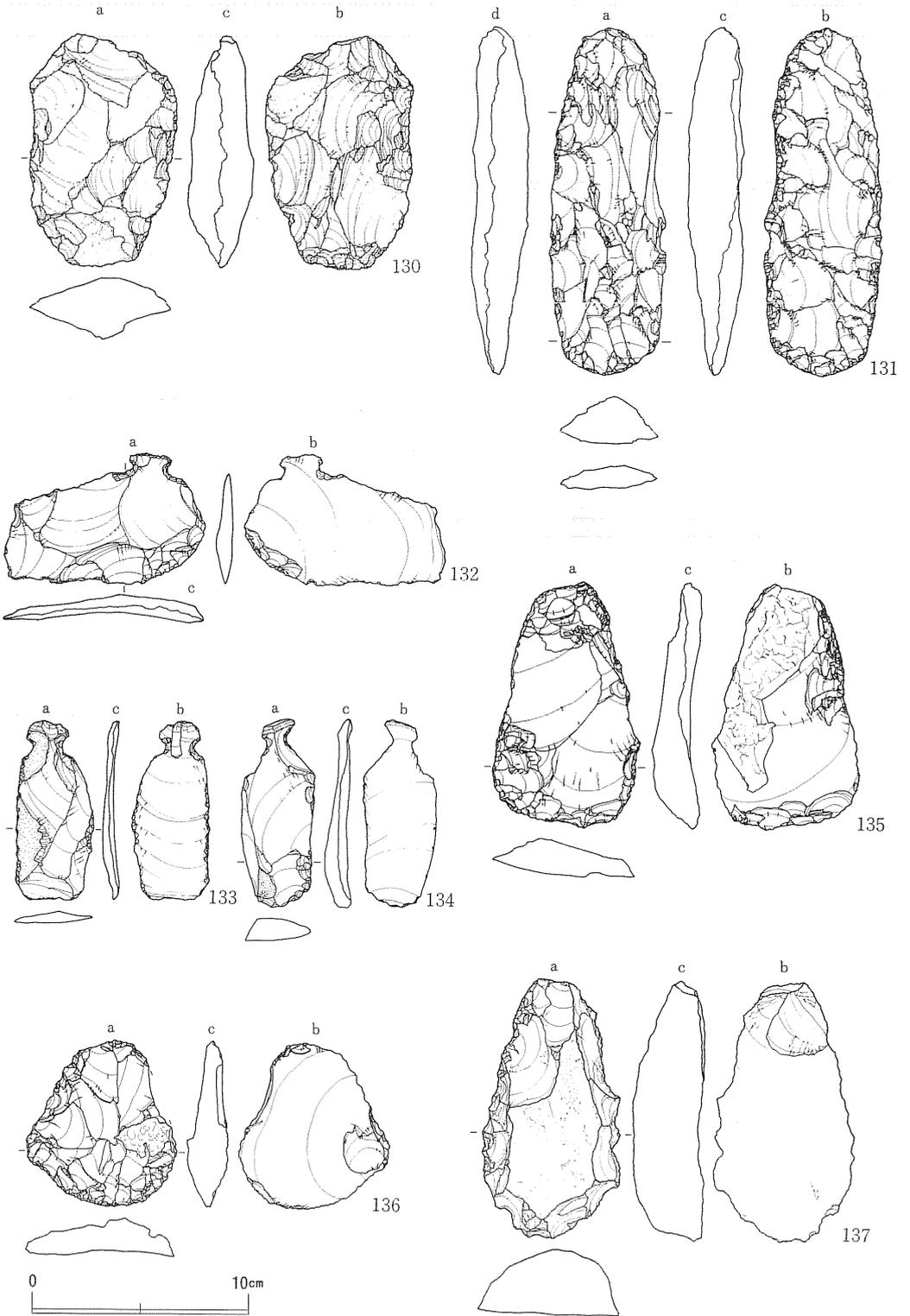


第84図 遺構内出土遺物 (47) S X Q60㉔

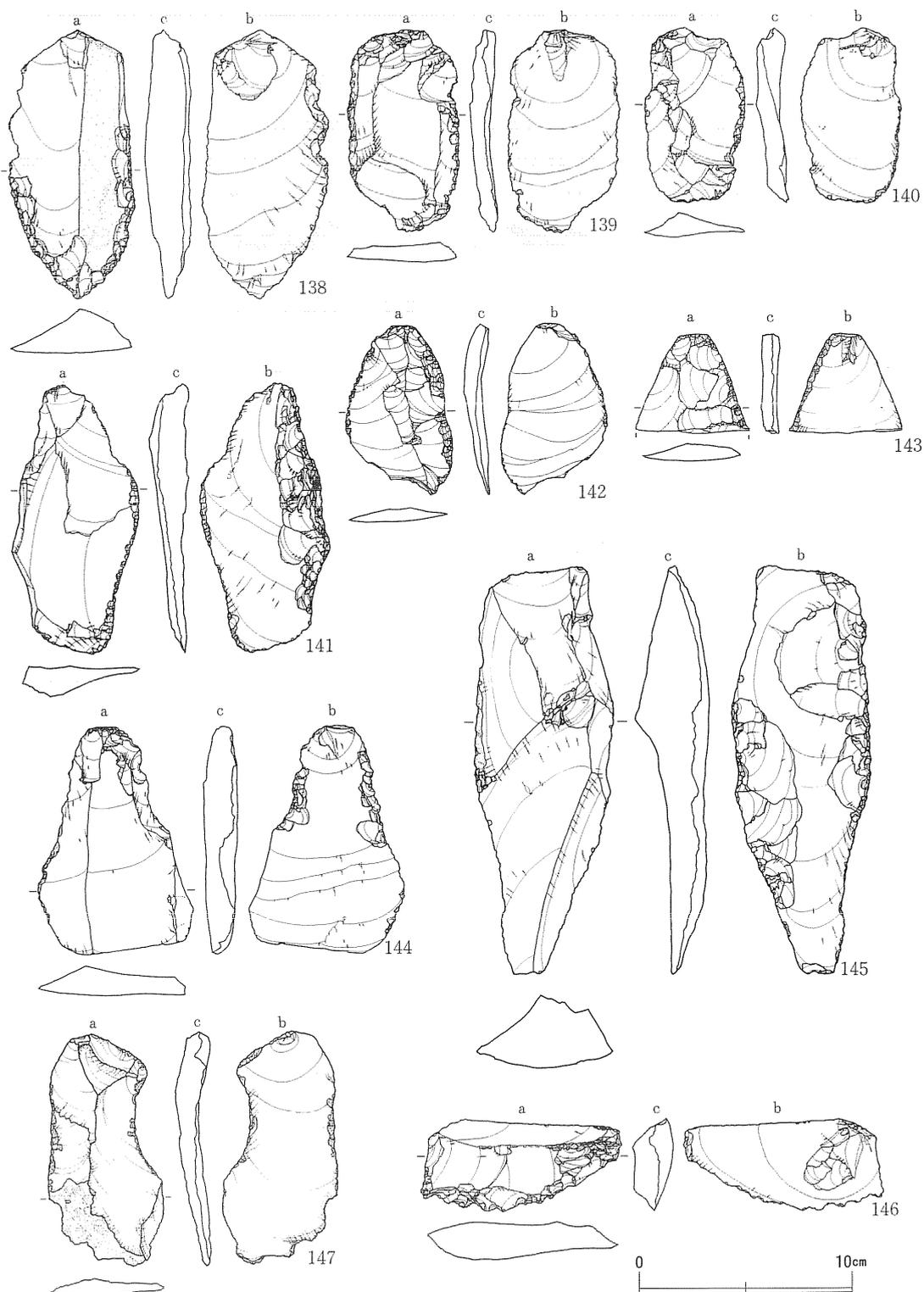
第85図 遺構内出土遺物 (48) S X G60(24)



第1節 縄文時代の検出遺構とその遺物



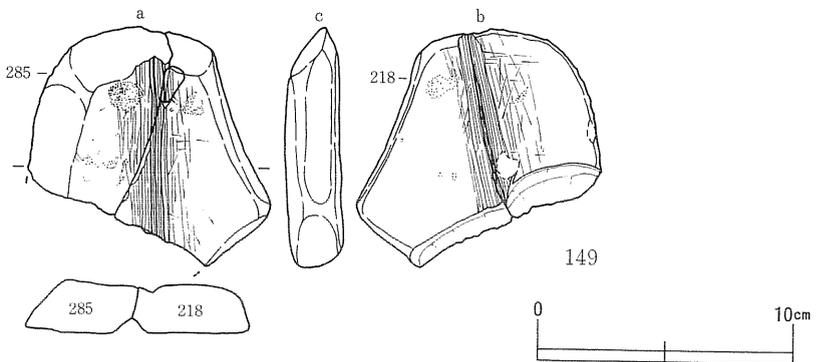
第86図 遺構内出土遺物 (49) S X Q60②



第87図 遺構内出土遺物 (50) S X Q60㊟



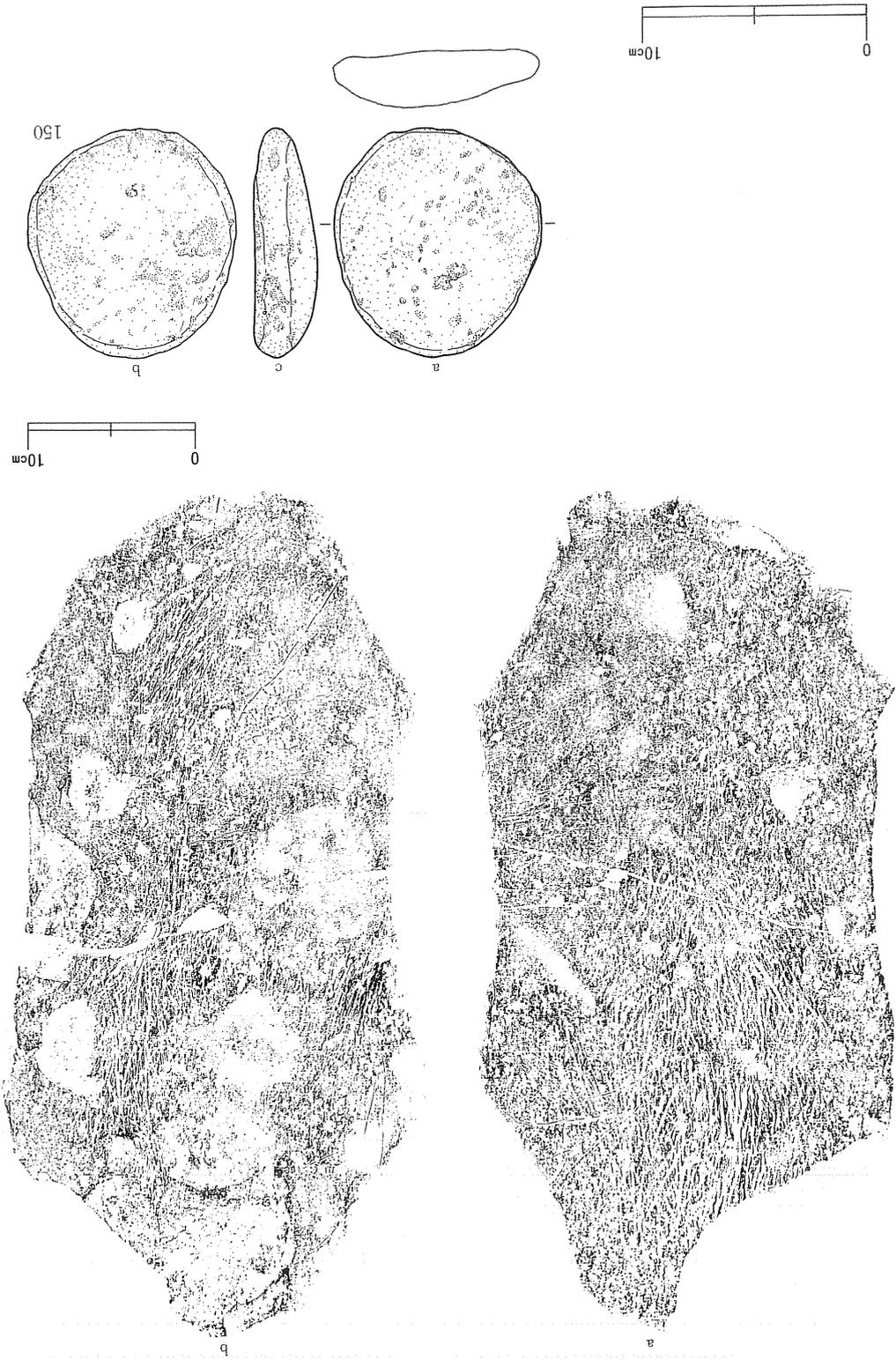
148



149

第 88 図 遺構内出土遺物 (51) S X Q60②

第 89 図 遺構内出土遺物 (52) S X Q60②



1~2mmの幅で、1mm以下の浅いものである。これらは不定方向を示し、a面の上位とb面の右側に特に顕著に現れる。まな板のように、ものを石器で切り刻んだ際にできた傷と考えられる。a面右側縁には火熱の痕跡を認める。

有溝砥石(149) 扁平な礫で、b面の平坦な面を擦っている。両面にV字状の溝があり、a面が幅5~10mm深さ2mm、b面は幅7~12mm深さ5mmである。どちらにも、溝に沿って直線的な擦痕がある。さらに、溝の近くにも同じ方向の擦痕を認める。

擦石(150) 扁平な略円形の礫で、火熱により全体が赤変している。b面は真平らで、全面を擦り面にしていると判断される。同面を中心に黒い付着物が認められる。

SXQ67(第54・106図)

上段で調査区中央のやや北西側MF61区に位置し、表土下約0.8mのVI・VII層にかけて検出。取り上げ総数は49点で、長軸1m×短軸0.3mの狭い範囲である。垂直分布も0.1mの幅に収まる。1点の尖頭器以外は剝片で、チップは含まれない。

出土遺物は石器のみで、剝片の外に石槍がある。

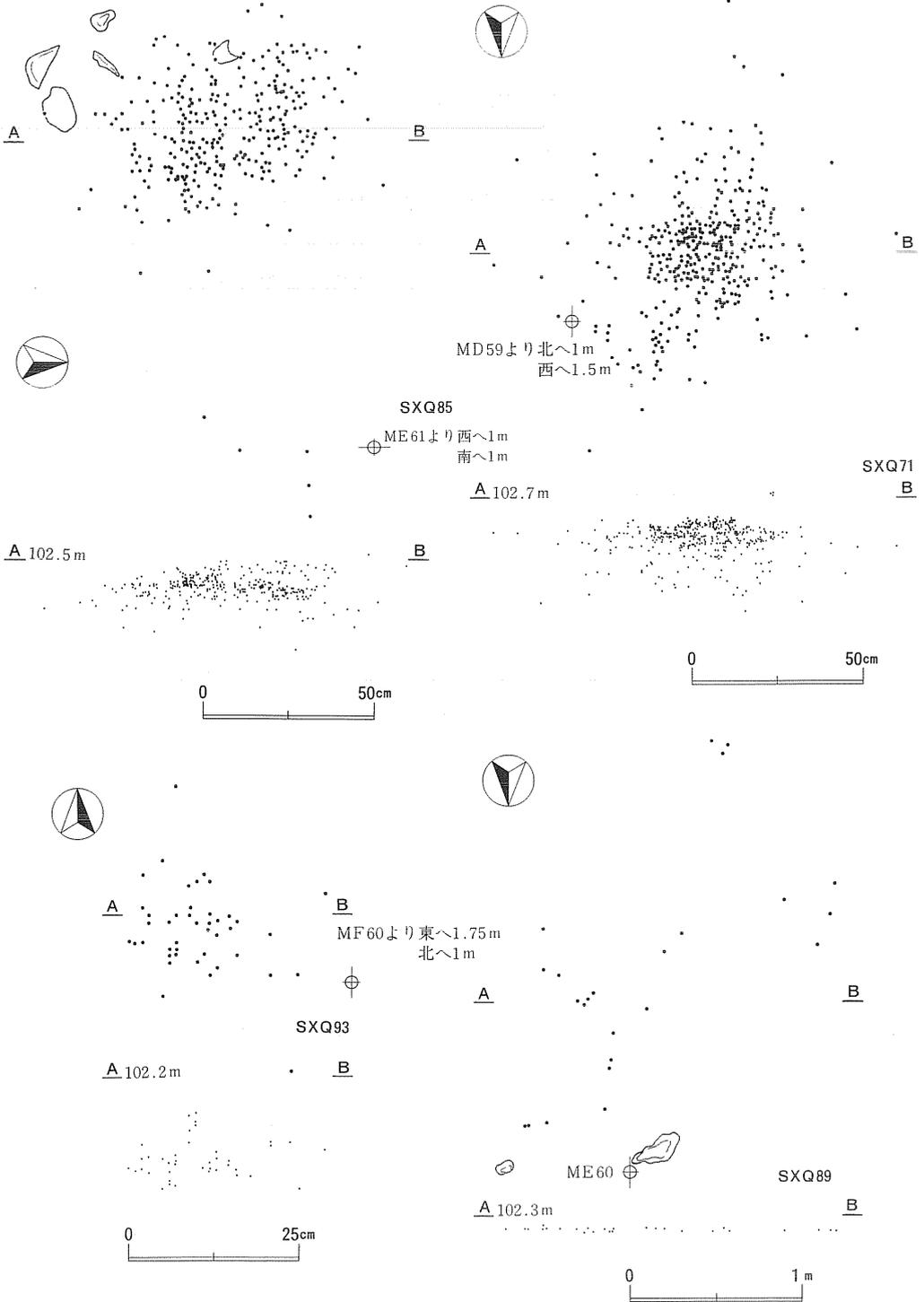
石槍(176) 木の葉形の整った形で、中央やや上位に最大径がある。a面右側縁とb面右側縁に、細かな調整がある。

SXQ71(第90~100図、巻頭図版9・10、図版18・26~33・69)

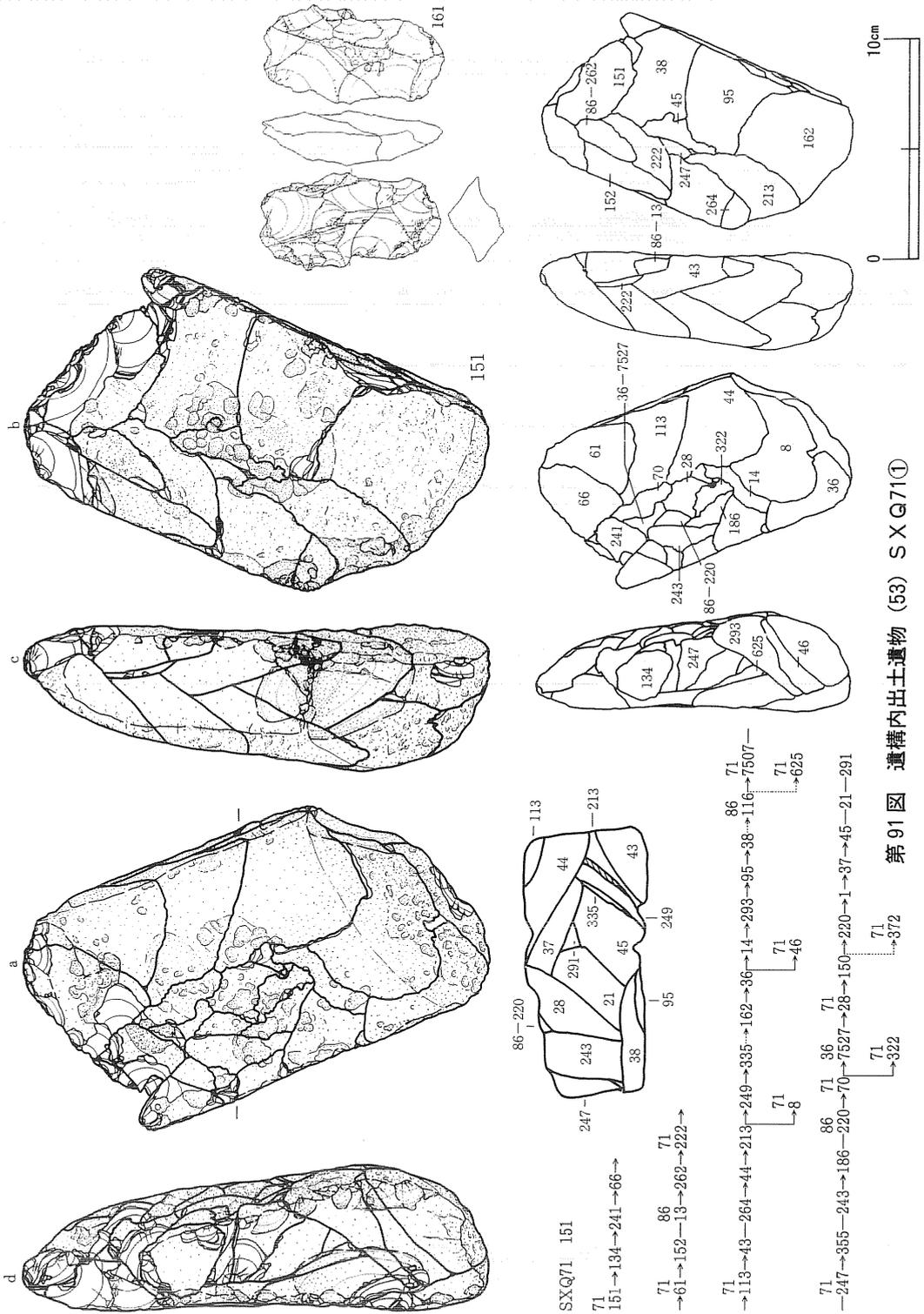
上段で調査区中央のやや北西側MD59区に位置し、表土下約0.4mのVI層で検出。取り上げ総数は381点である。径約1mの円形で狭い範囲から集中して出土した。特に、中央部の径0.3mの範囲は顕著である。石器の取り上げ状態から、長軸1m×短軸0.35m×深さ約0.2mの掘り方が確認された。多量のチップも出土することから、石器製作によって生じた石器をまとめて捨てた可能性がある。

出土遺物は石器のみで、接合資料・両面調整素材・両面調整石器がある。

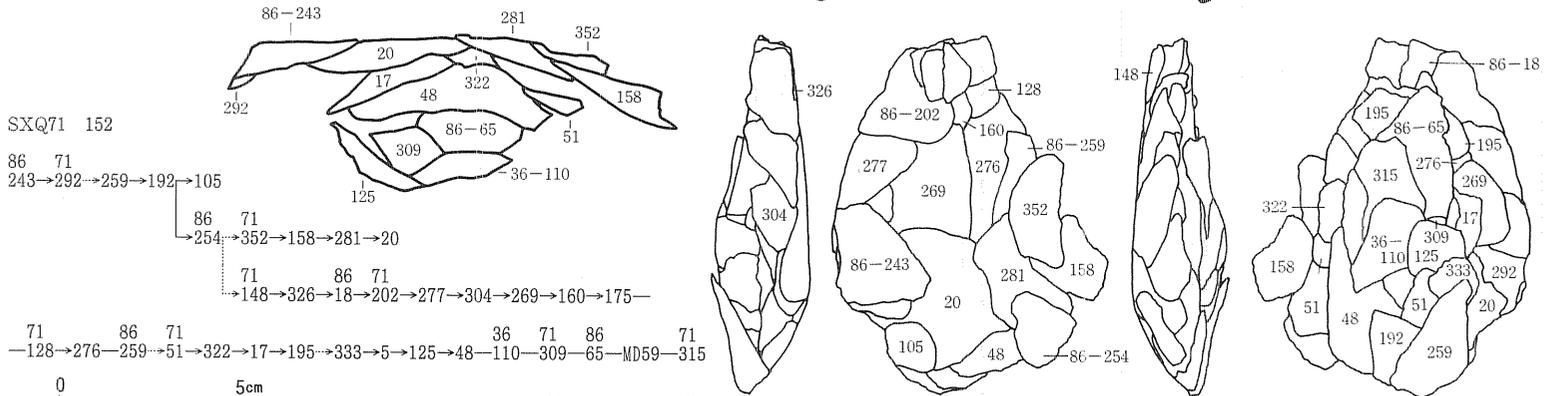
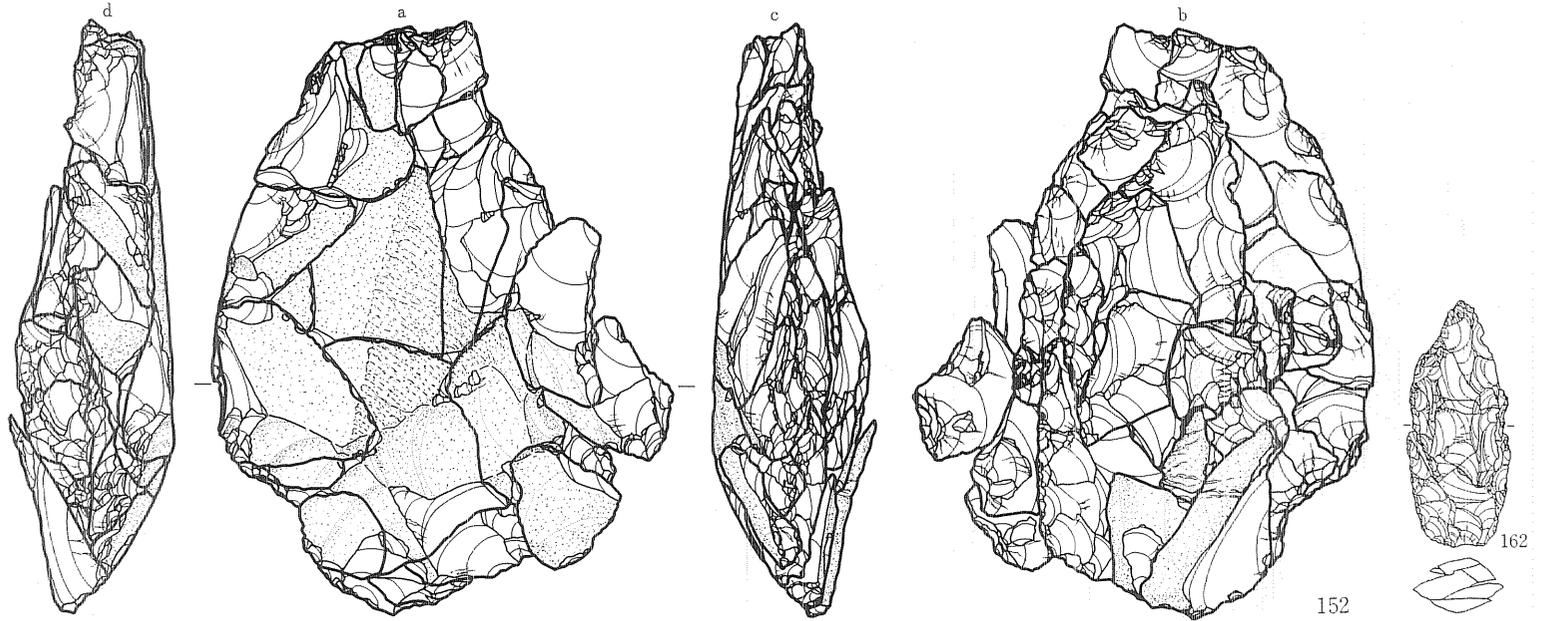
接合資料(151~159) 151は161、152は162、153は160、154は163、155は164の、各両面調整石器および両面調整素材に剝片が接合したもの。151は、厚く扁平な河原石を素材にしている。c・d面は平坦で、c面上位→同下位→d面下位→同上位へ、交互剝離を施す。上位の一部を除いて、ほぼ完全な形に近い。161は151の石核。152は扁平な河原石を素材にし、162の片側に多くの剝片が接合する。原石は、石器よりも少し大きいだけで剝離の効率が良い。153は甲高の縦長剝片を素材にしており、礫皮面の付く剝片が接合している。154は、扁平で細長い河原石を素材にし、礫皮面のある剝片等が接合。b面下半右側の剝片は、打点縁辺の断面が三角になるように丁寧な調整を施す。材質は黄白色の頁岩である。155は164のb面下位に剝片が接合。157は搔器(下方の大きい破片)に剝片が接合する。搔器は、b面左下位側縁に丁寧な調整がある。156・158・159は、両面調整を意図した片側の剝片接合資料で、すべてに



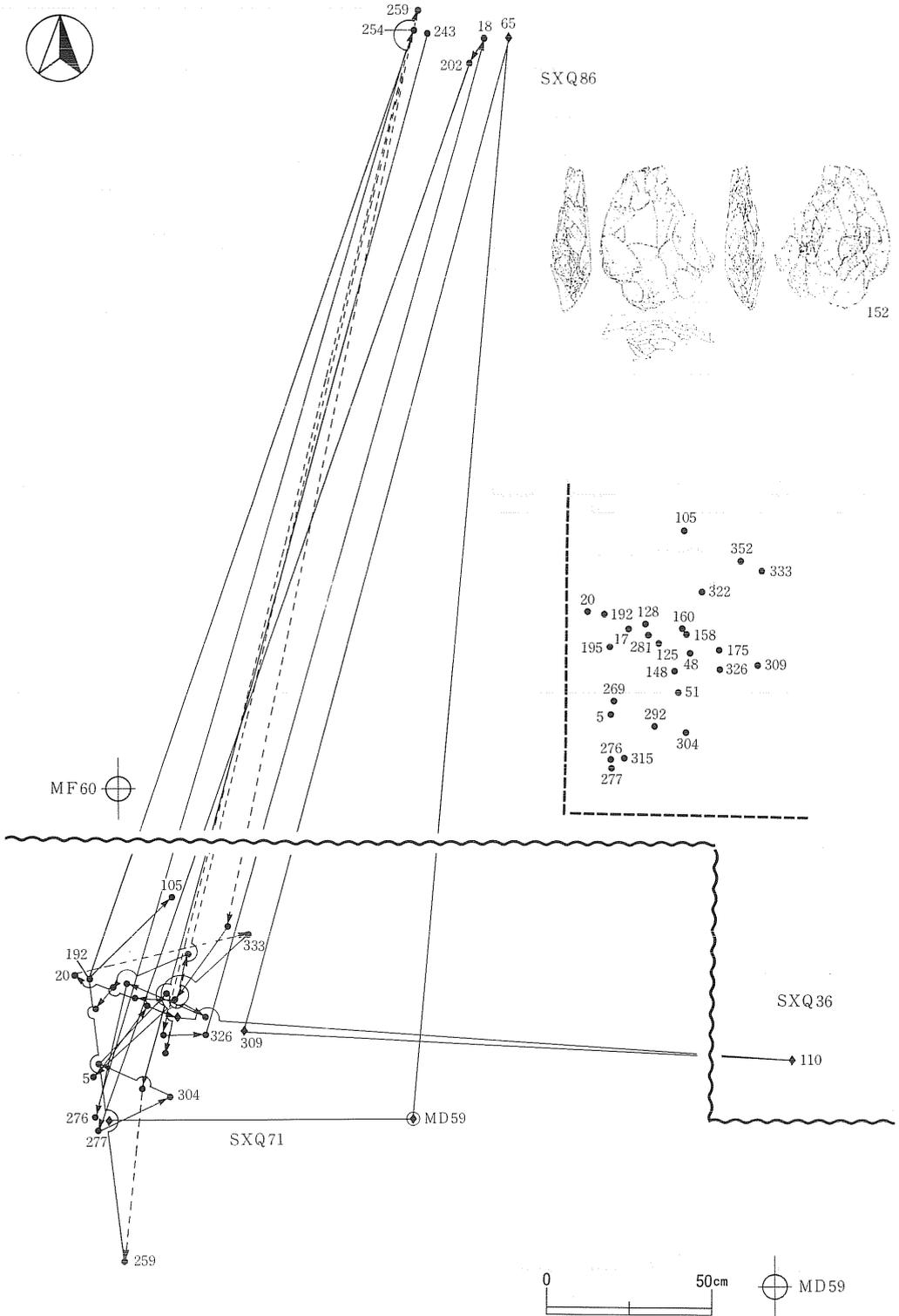
第90図 石器集中部(6) SXQ71・85・89・93



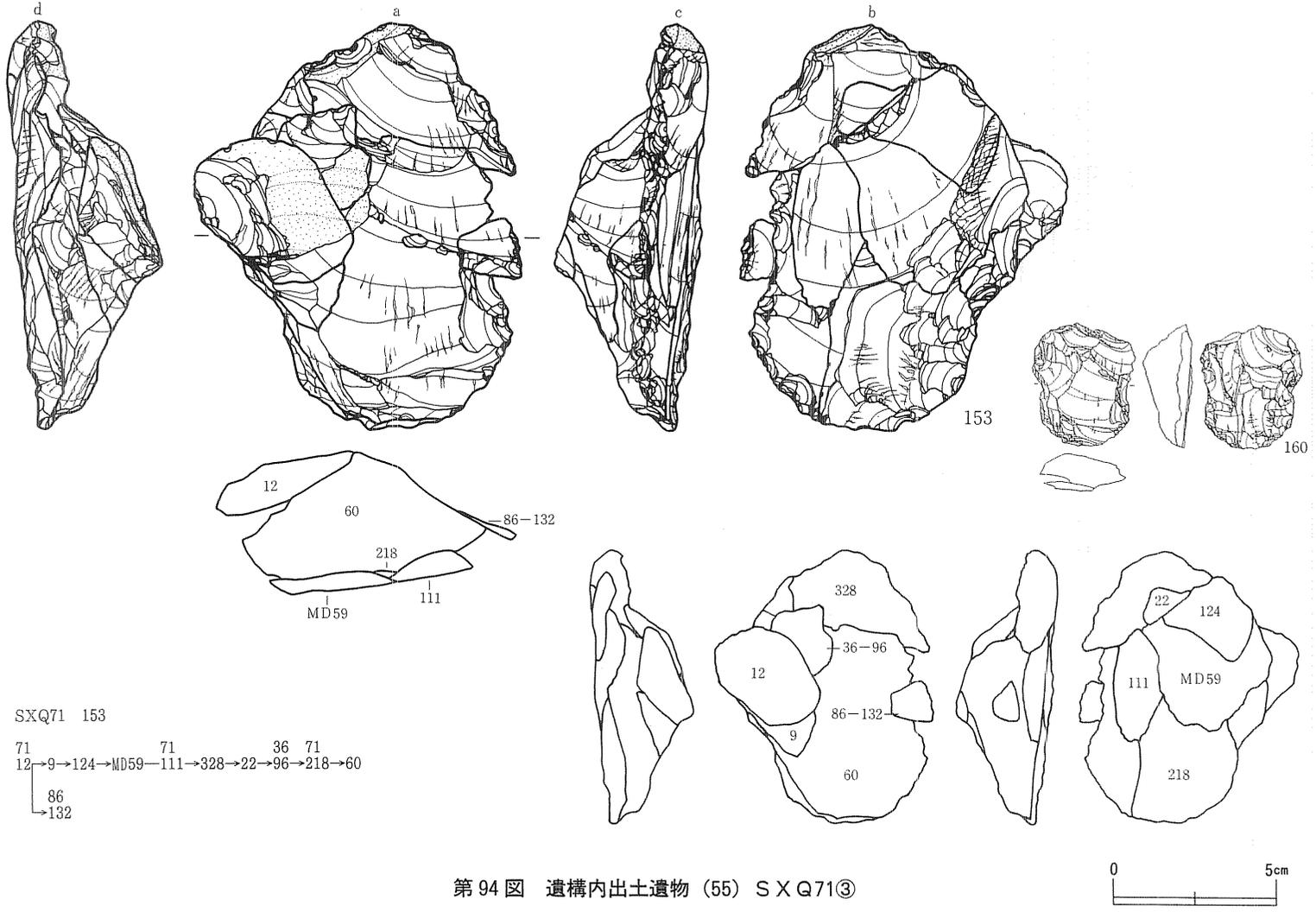
第91図 遺構内出土遺物 (53) SXQ71①



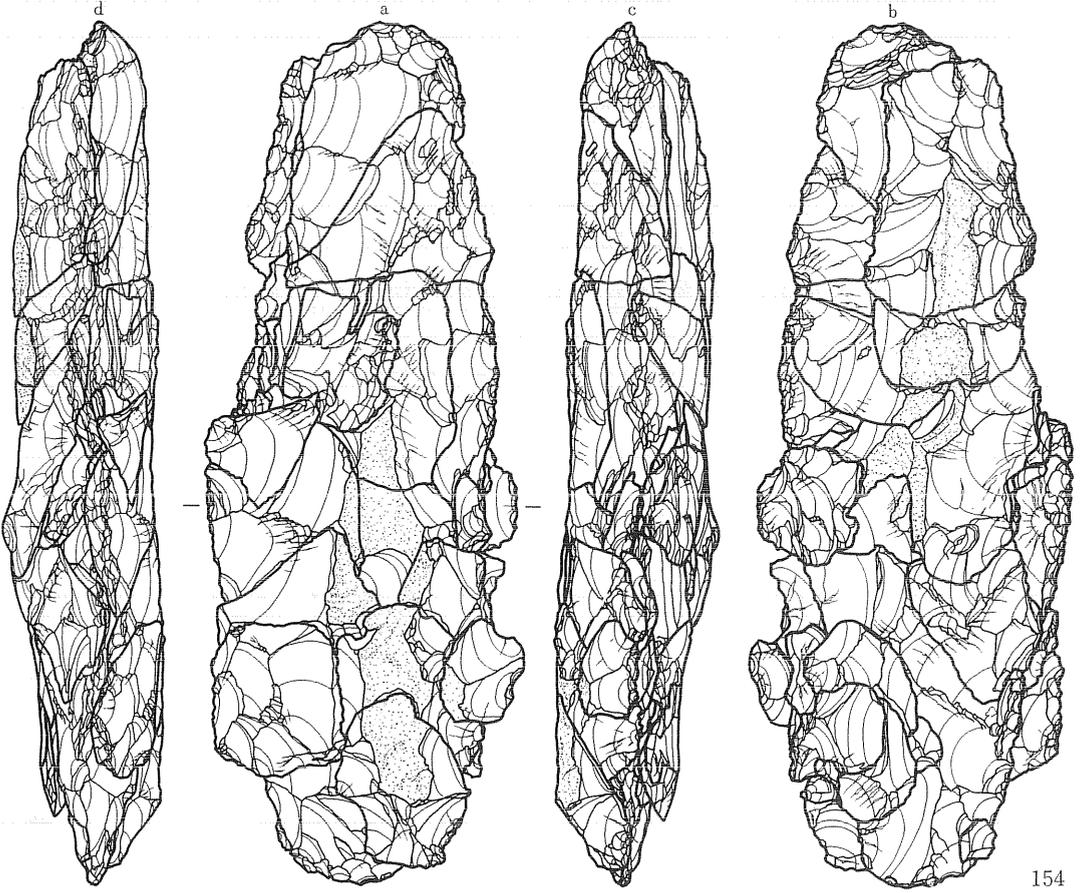
第92図 遺構内出土遺物 (54) S X Q71②



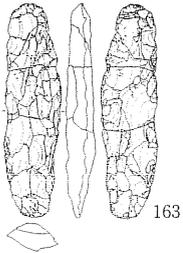
第93図 接合関係図(7) SXQ71①



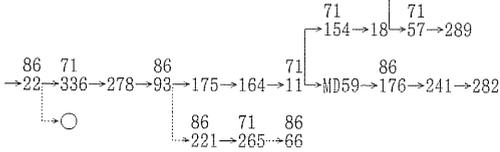
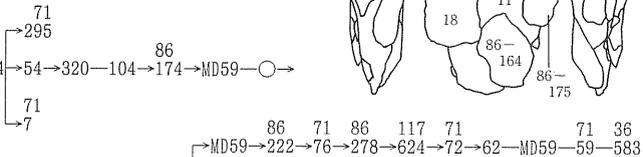
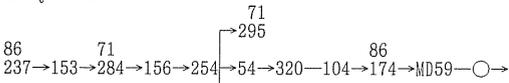
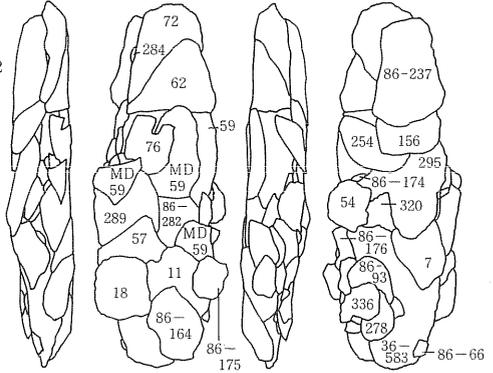
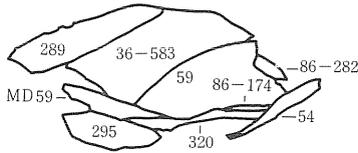
第94図 遺構内出土遺物 (55) SXQ71③



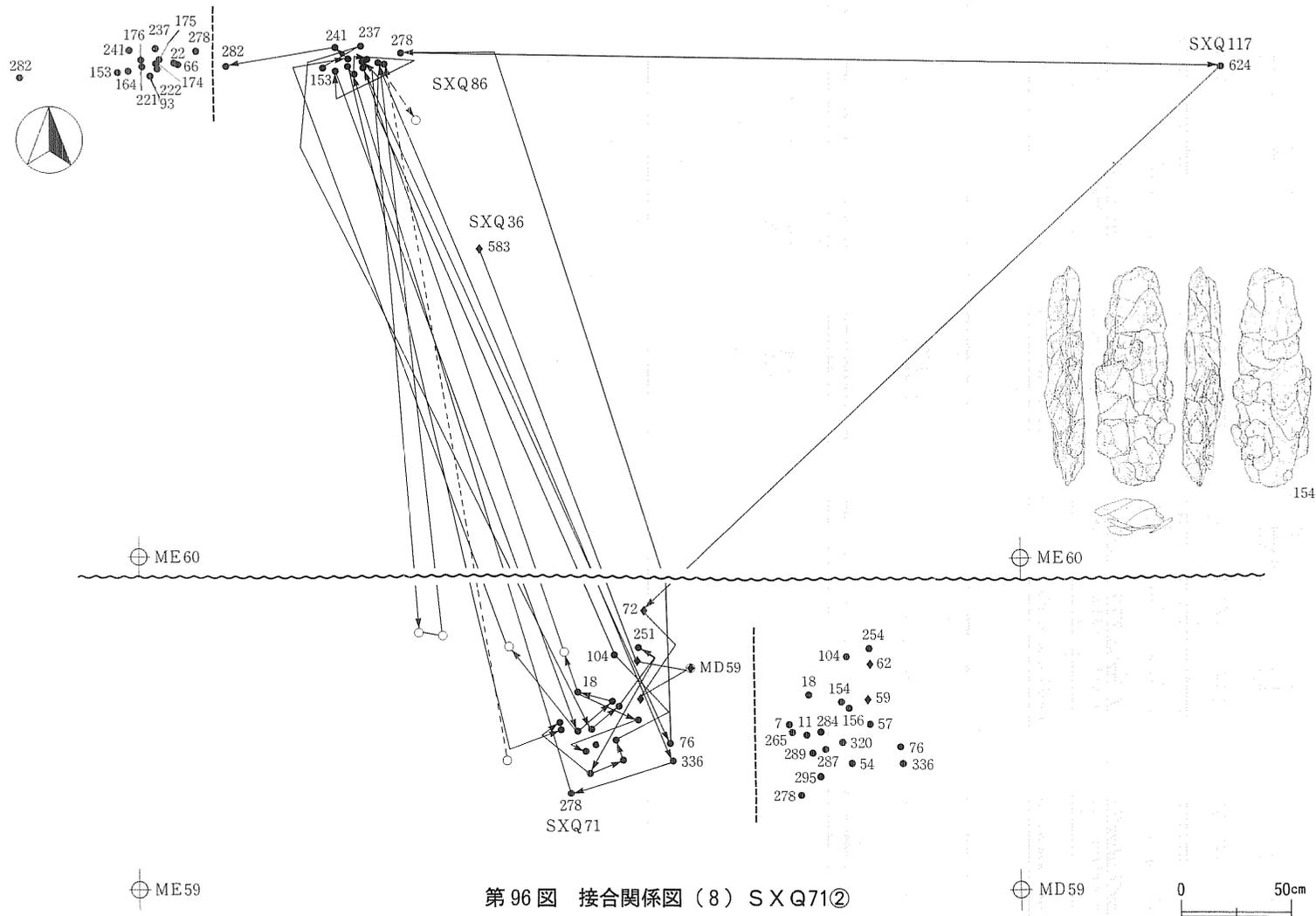
154



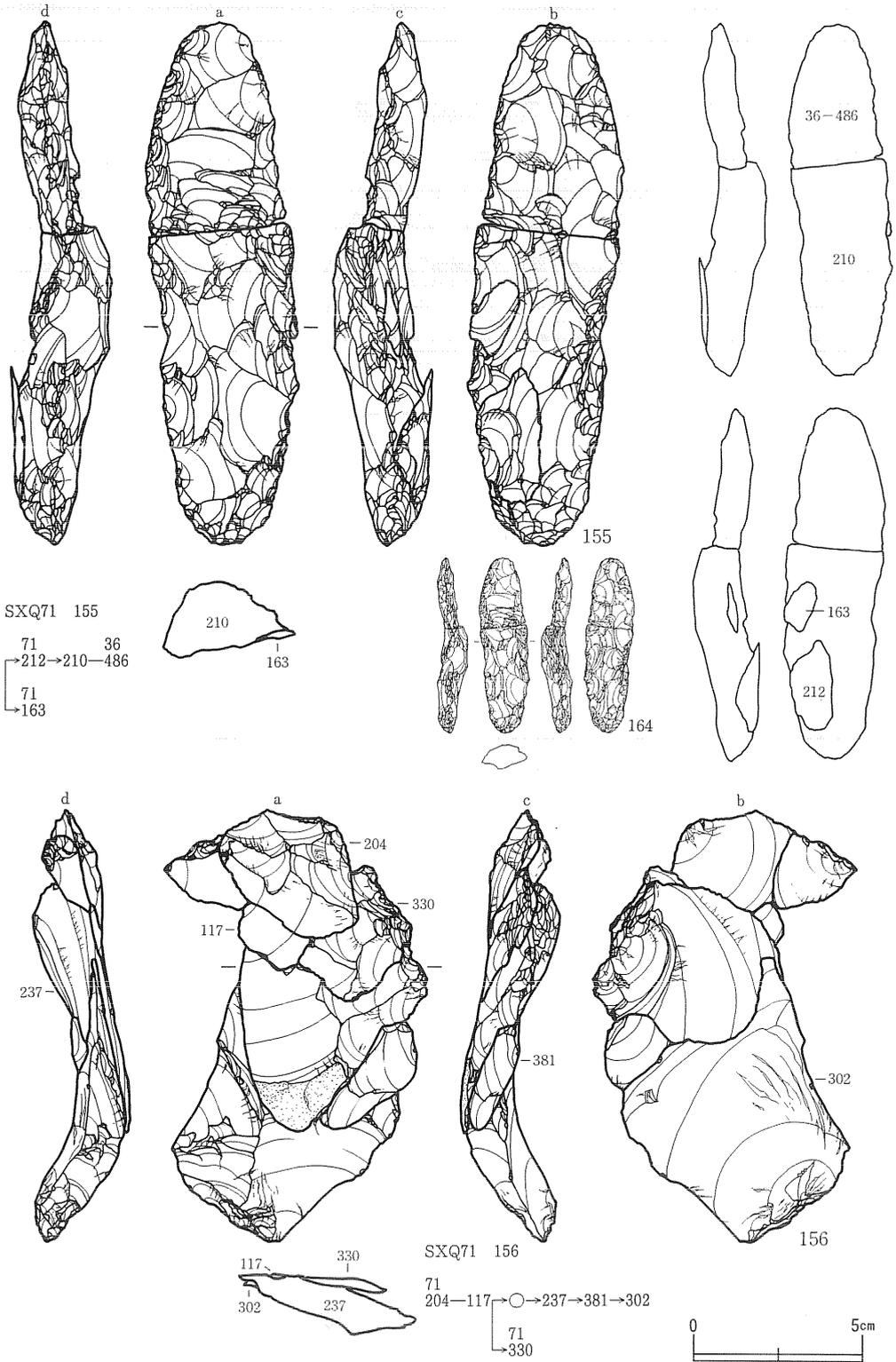
SXQ71 154



第95図 遺構内出土遺物 (56) SXQ71④

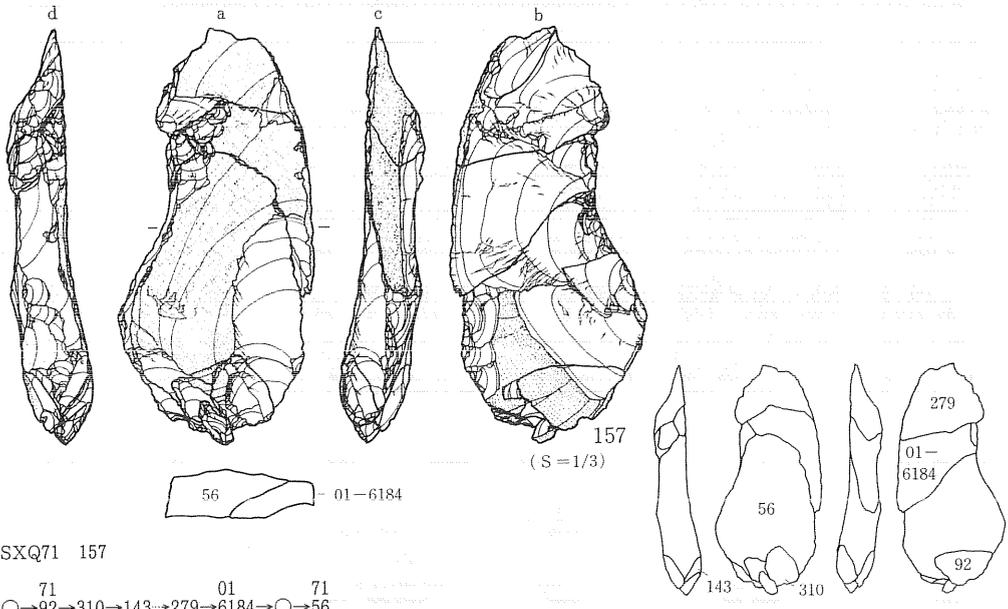


第96図 接合関係図(8) SXQ71②



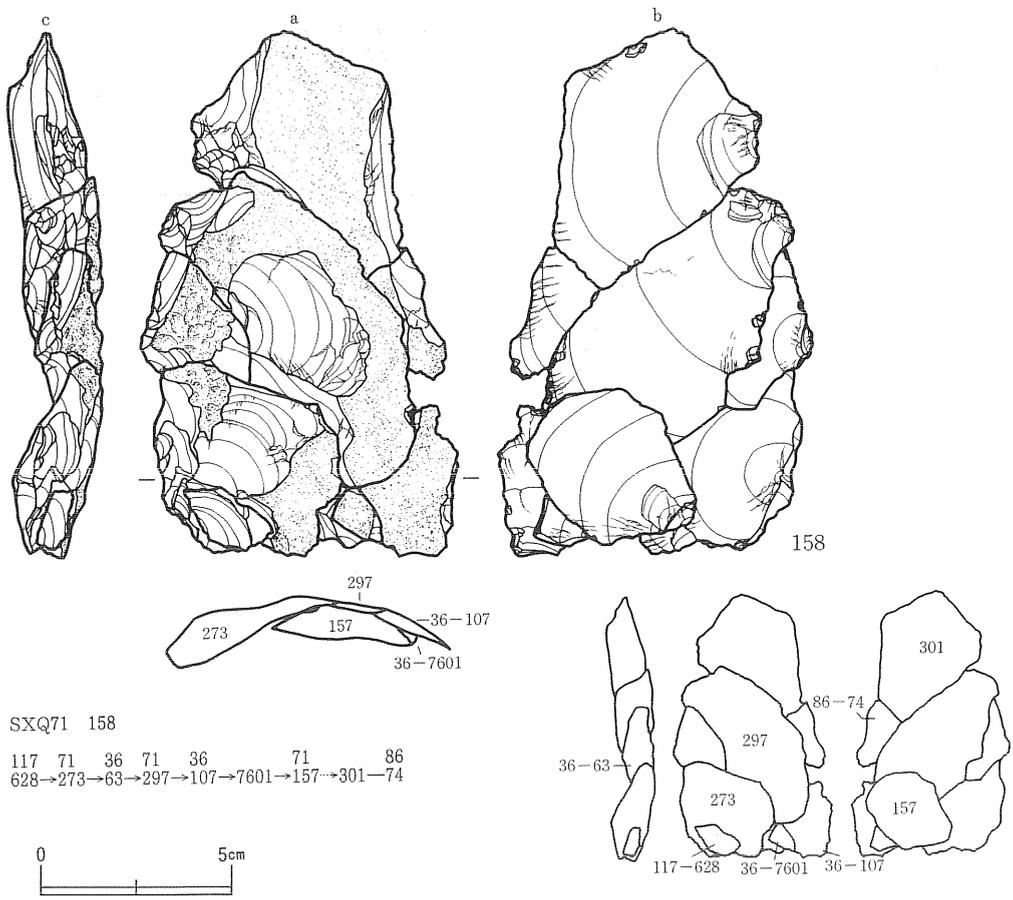
第97図 遺構内出土遺物 (57) SXQ71⑤

第4章 調査の記録



SXQ71 157

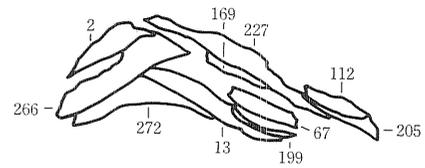
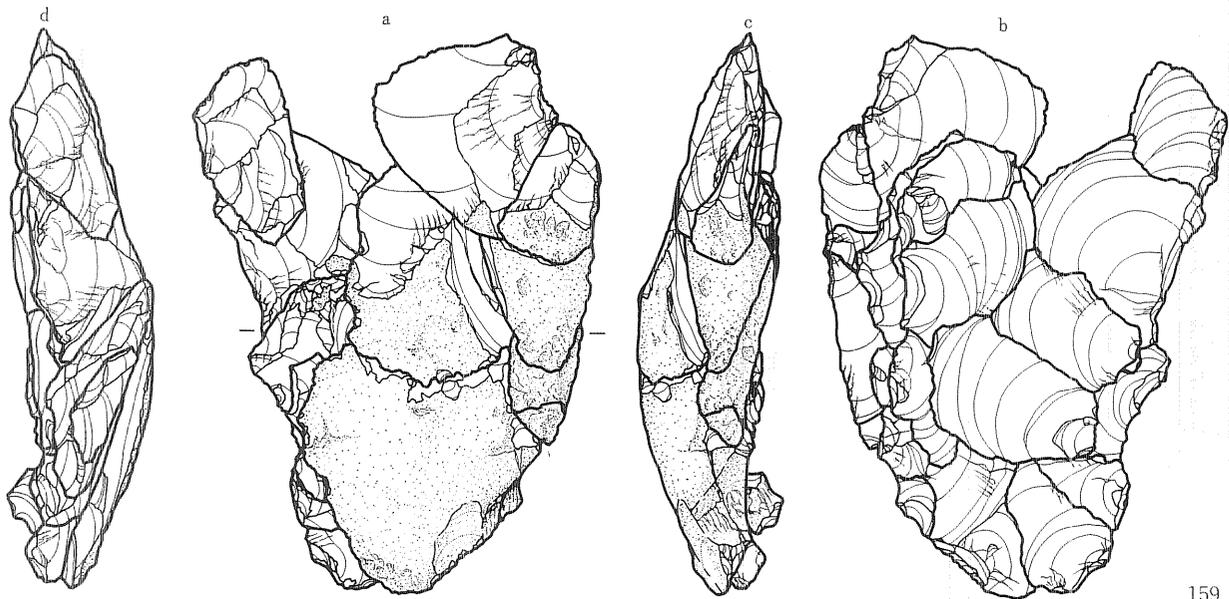
○→71→310→143→279→01→6184→○→56



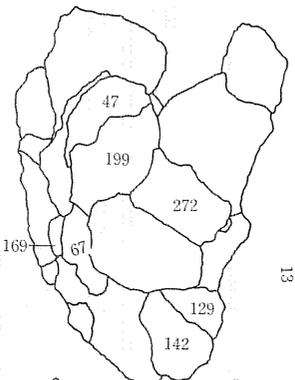
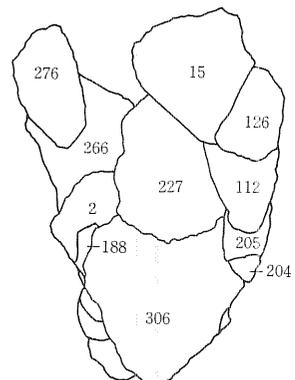
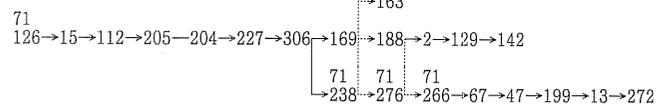
SXQ71 158

117 71 36 71 36 71 86
628→273→63→297→107→7601→157→301→74

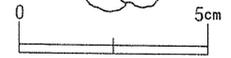
第98図 遺構内出土遺物 (58) SXQ71⑥



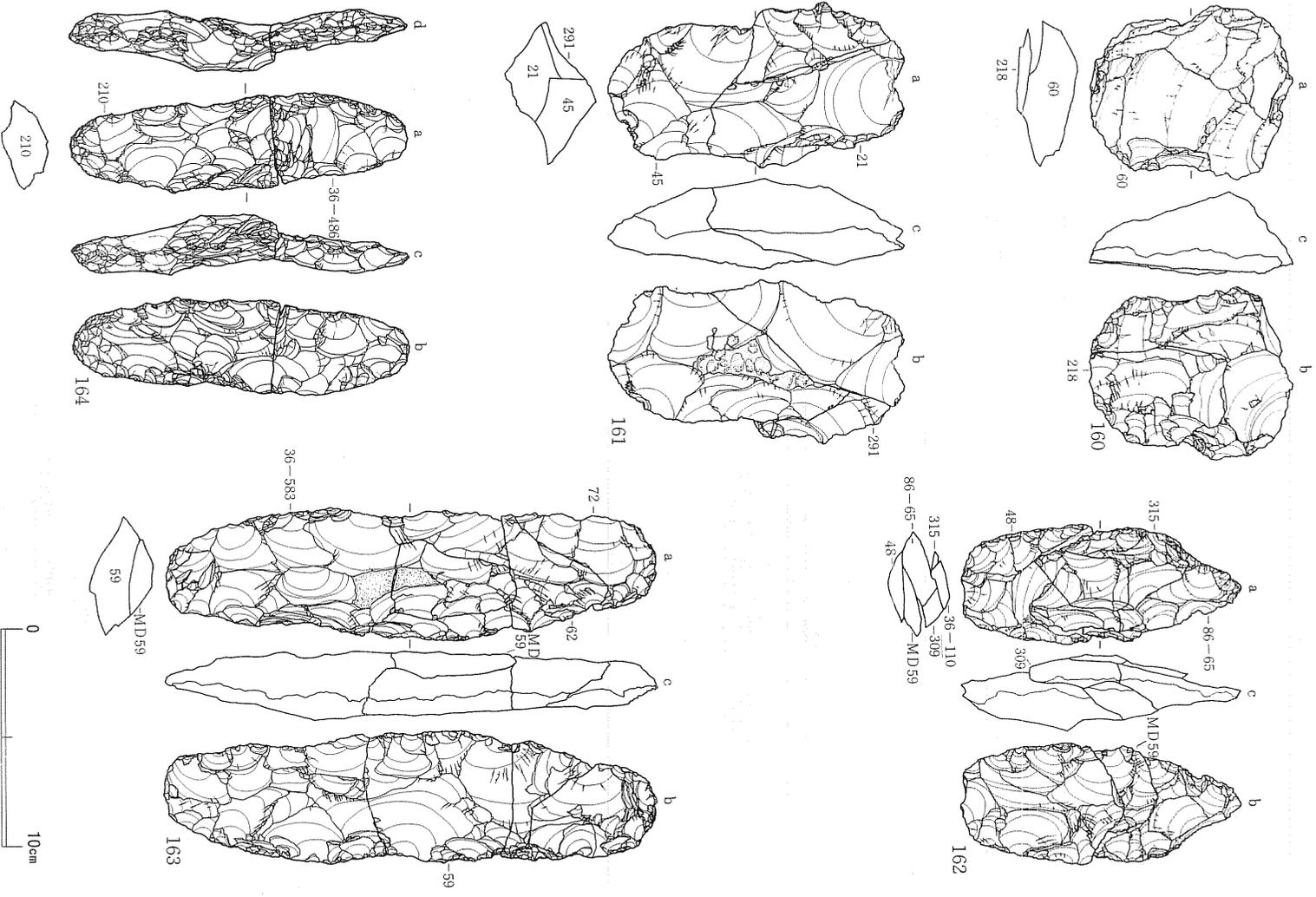
SXQ71 159



159



第 99 図 遺構内出土遺物 (59) SXQ71⑦



第100図 遺構内出土遺物(60) S X Q71⑧

自然面がある。158と159は、同一個体と考えられる。159のb面は、その左側で剝片が重畳的な接合状態を示す。

両面調整素材(160・161) 160は153の石核。甲高でb面下位の左右とa面上位に調整がある。161は151の石核。a面左側縁上位に僅かな剝離があり、b面に礫皮面を残す。a面からの折断で3つに割れる。

両面調整石器(162~164) 162は152の石核。下端を刃部にしたもので、石斧か石篋を意図したと考えられる。a面左右側縁には調整があり、同面右側縁の剝離調整の際、刃部を含んで斜めに折断してしまっている。163は154の石核。厚みのある細長い石器で、両側縁と上下端部に比較的粗い調整があり、未製品と考えられる。b面からの折断で、大きく3分割される。a面の中央には礫皮面を残す。164は、本来やや分厚く細長い石器と考えられる。b面からの折断がある。a面上位では、折断後左側縁と下端に調整を施す。

SXQ85(第69・90・101~105図、図版18・26~29・33・69)

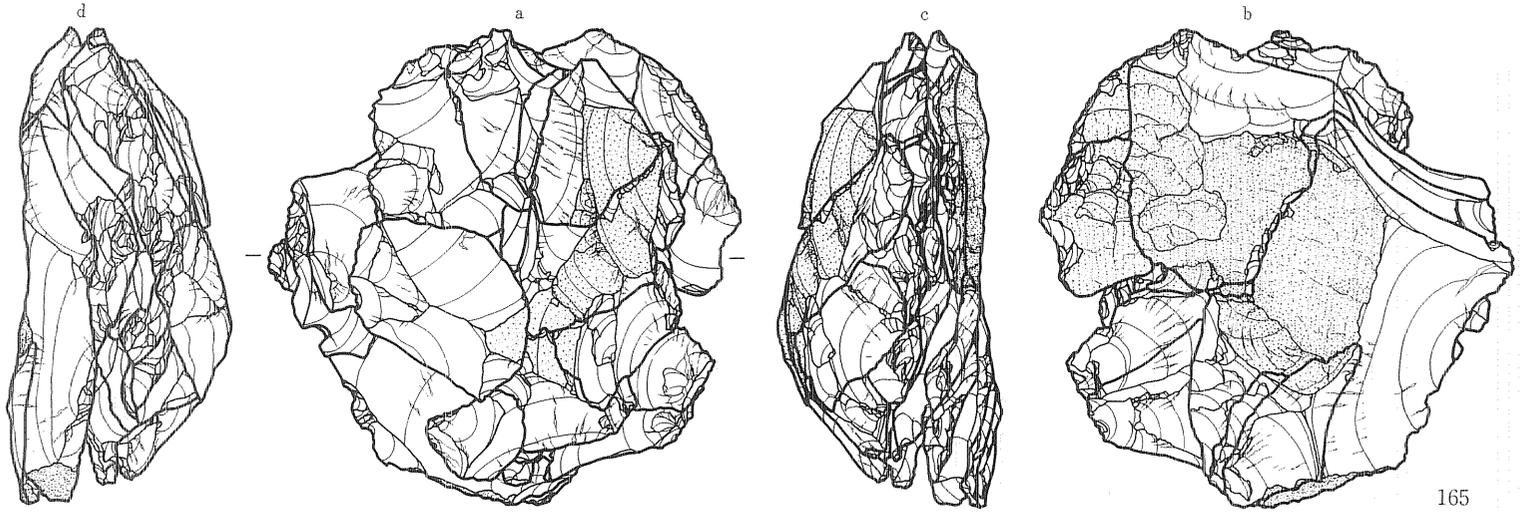
上段で調査区中央のやや北西側ME60区に位置し、表土下約0.6mのVI層で検出。西隣にはSXQ86が近接する。取り上げ総数は273点で、径約1mの狭い範囲から集中して出土した。特に長軸0.7m×短軸0.2mの範囲は顕著で、垂直分布は0.1~0.15mの幅で西側に緩く傾斜している。垂直分布うち下方から出土した石器は、本遺構とは無関係と判断される。遺構は、多量のチップが共伴する石器製作跡である。

出土遺物は石器のみで、接合資料・両面調整素材・両面調整石器・石鏃・二次加工ある剝片がある。

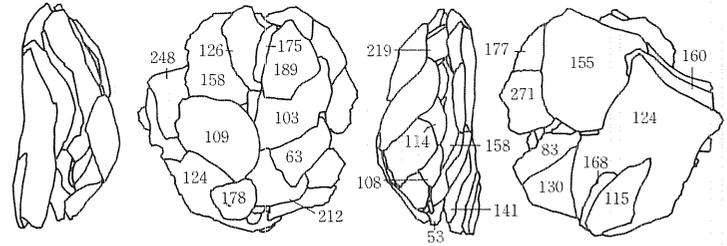
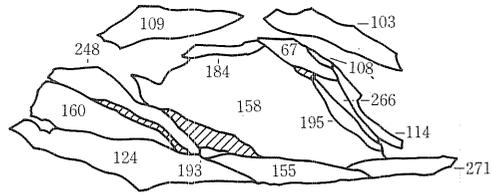
接合資料(165~169) 165は170、166は171、167は172・174の、各両面調整石器に剝片が接合したもの。165は分割礫を素材にした可能性があり、c面右側は平坦である。a面下端に礫皮面を残す。166は扁平な河原石を素材にしており、a・b両面と上端に礫皮面を残す。c・d面で中央が薄いのは、素材面の厚さに起因する。167は、a面左側縁の平坦面を打点にした横長剝片が素材である。剝離には、主にその打点面を利用している。174の二次加工ある剝片も接合している。168は石核に剝片が接合したもので、自然面を残す平坦な分割礫を素材にする。169は、両面調整を意図した片側の剝片接合資料である。a面両側縁の剝片は、打点部の分厚いものが多い。

両面調整素材(170) 165の石核で、周縁部の調整は粗い。

両面調整石器(171・172) 171は166の石核で、両側縁は調整がやや粗い。b面の折断があり、製作途中で放棄したと考えられる。b面には礫皮面が残る。172は167の石核。半月形状を呈し、周縁部の調整は粗い。b面からの折断があり、その後製作を放棄した未製品と考えられる。



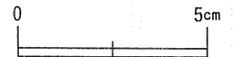
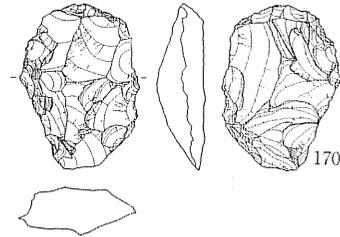
165



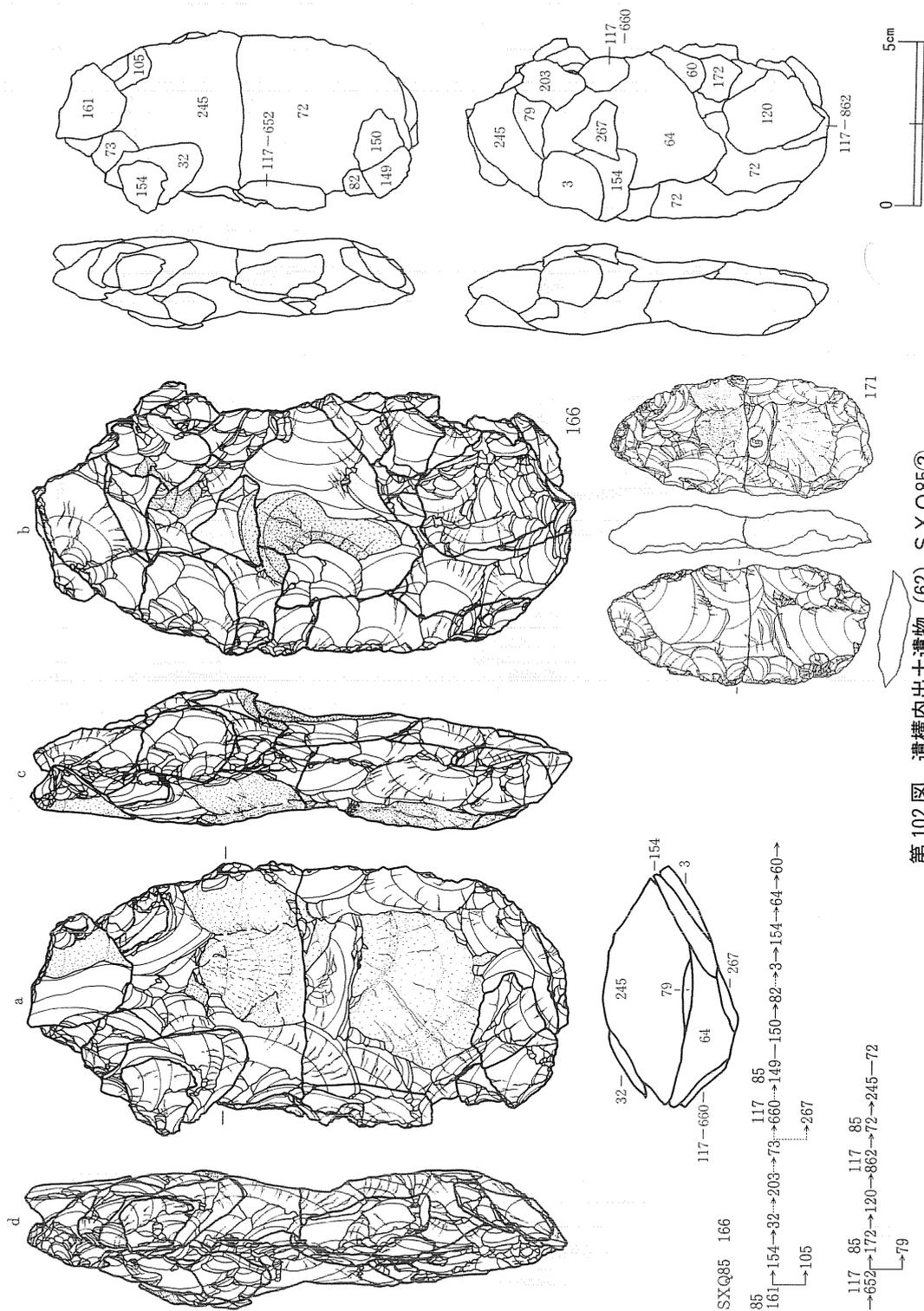
SXQ85 165

85
115→168→124→130→83→160→155→271→177→248→193→141→53→81→76→109→

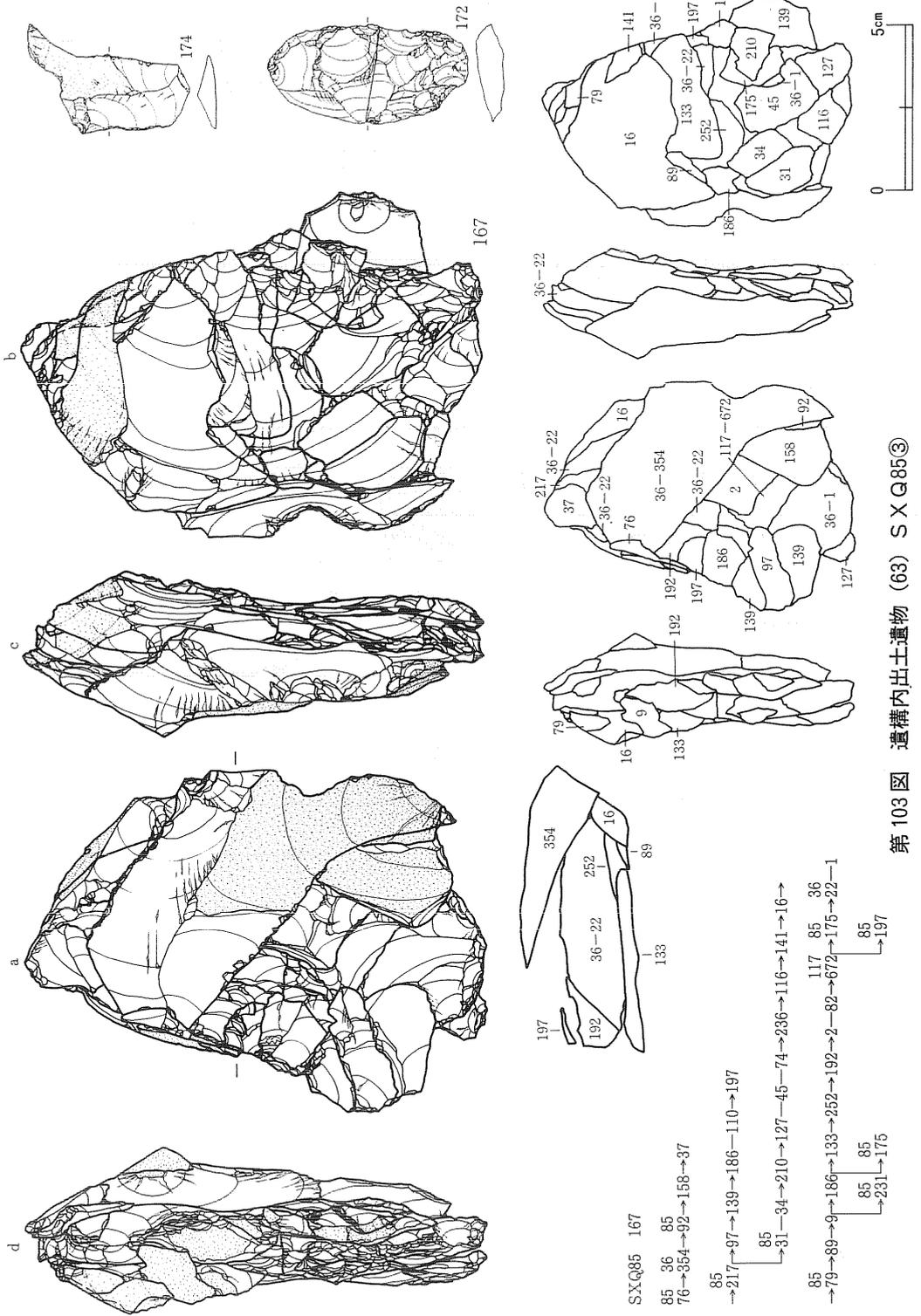
85
→189→103→63→212→178→86→219→175→126→114→108→67→266→195→184→158



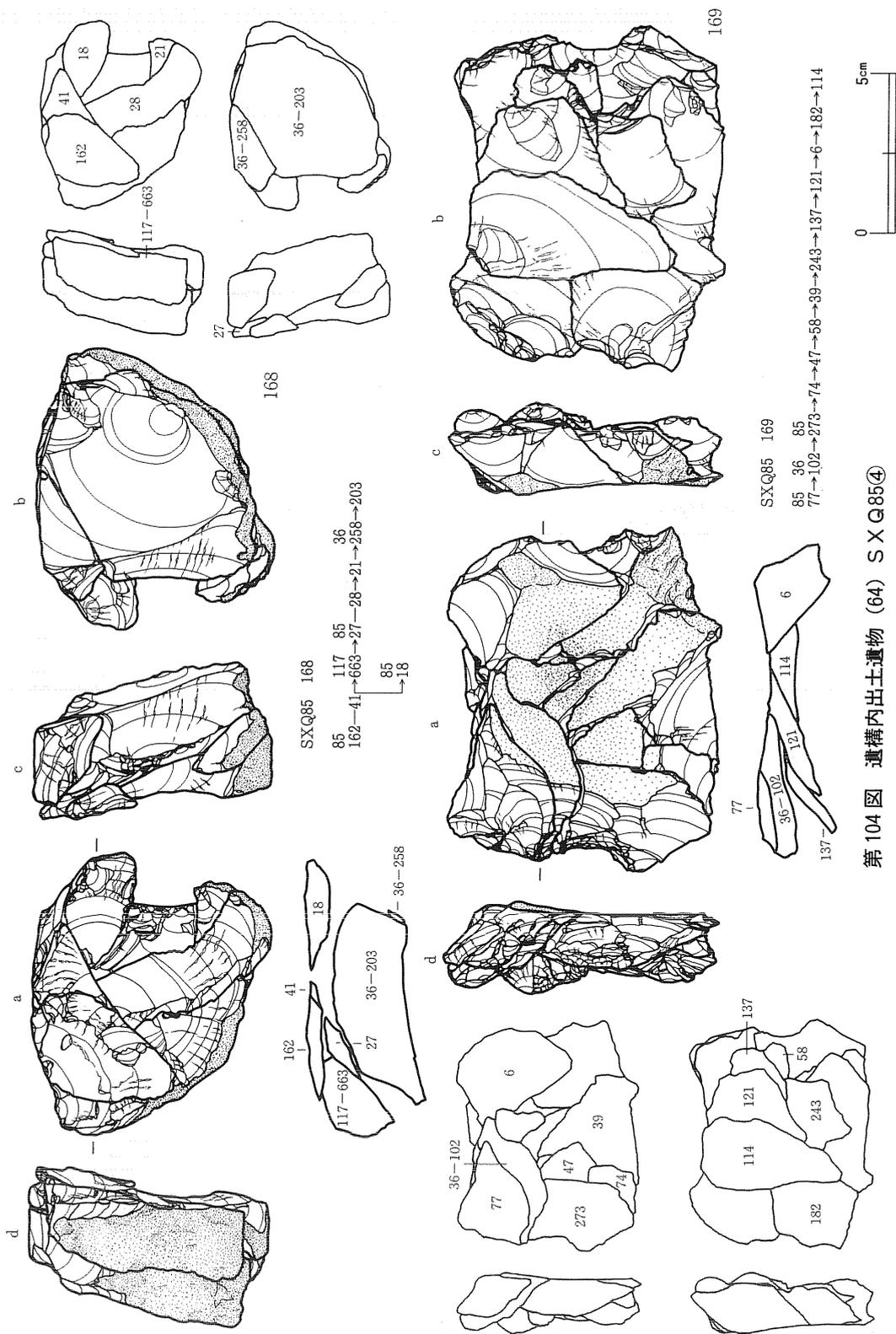
第101図 遺構内出土遺物(61) SXQ85①



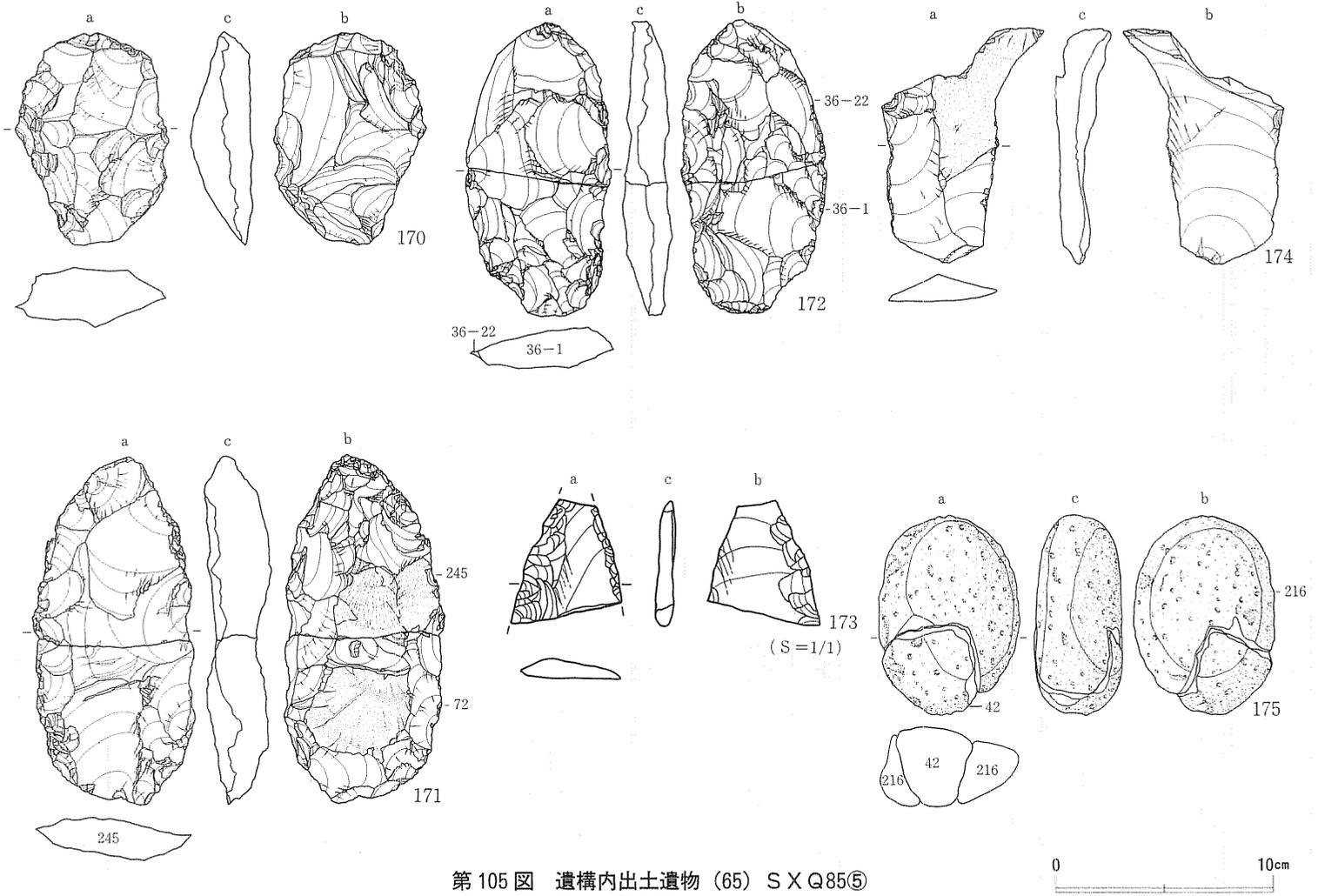
第102図 遺構内出土遺物(62) SXQ85②



第103図 遺構内出土遺物 (63) SxQ85③

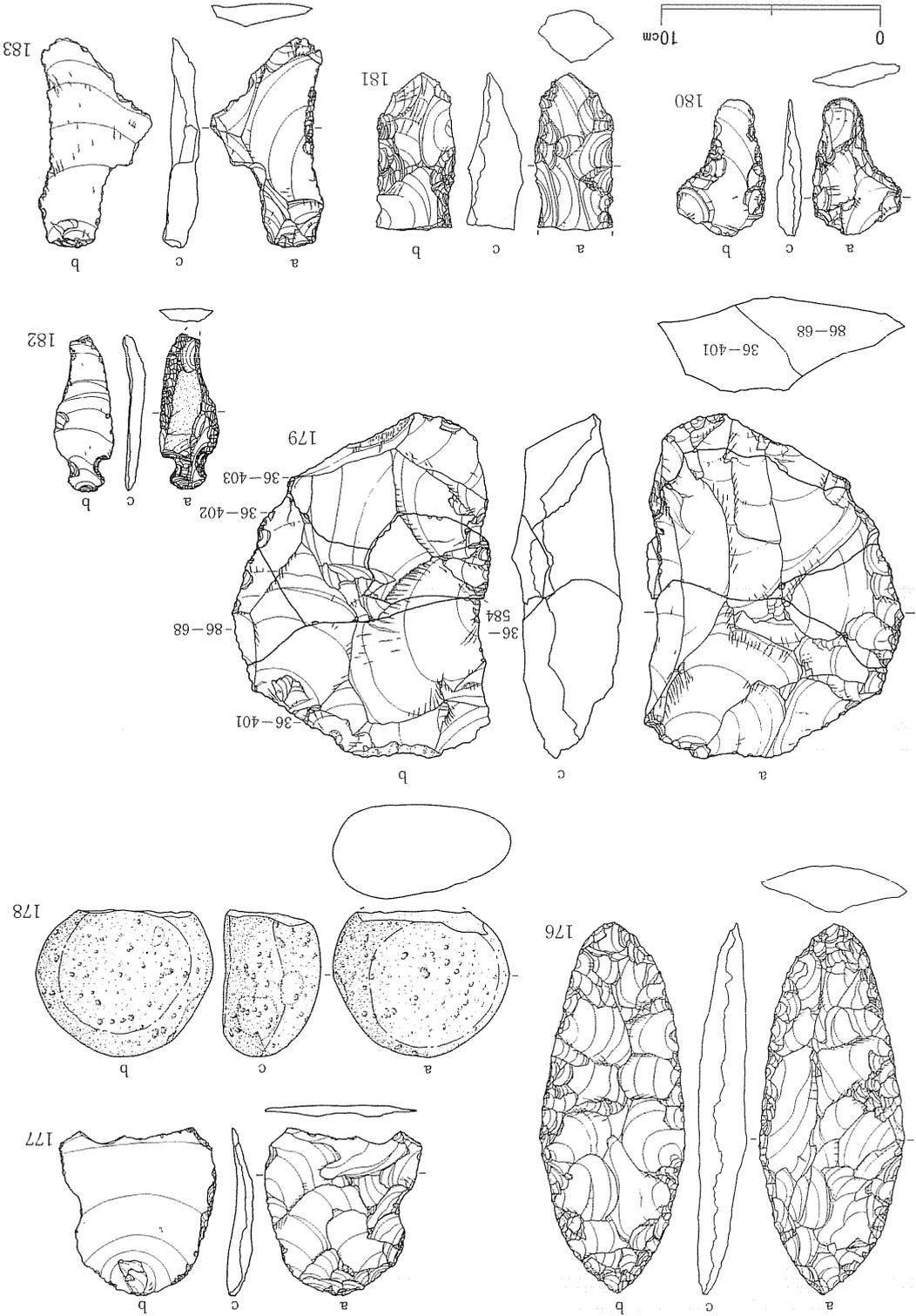


第104図 遺構内出土遺物 (64) S X Q 85④

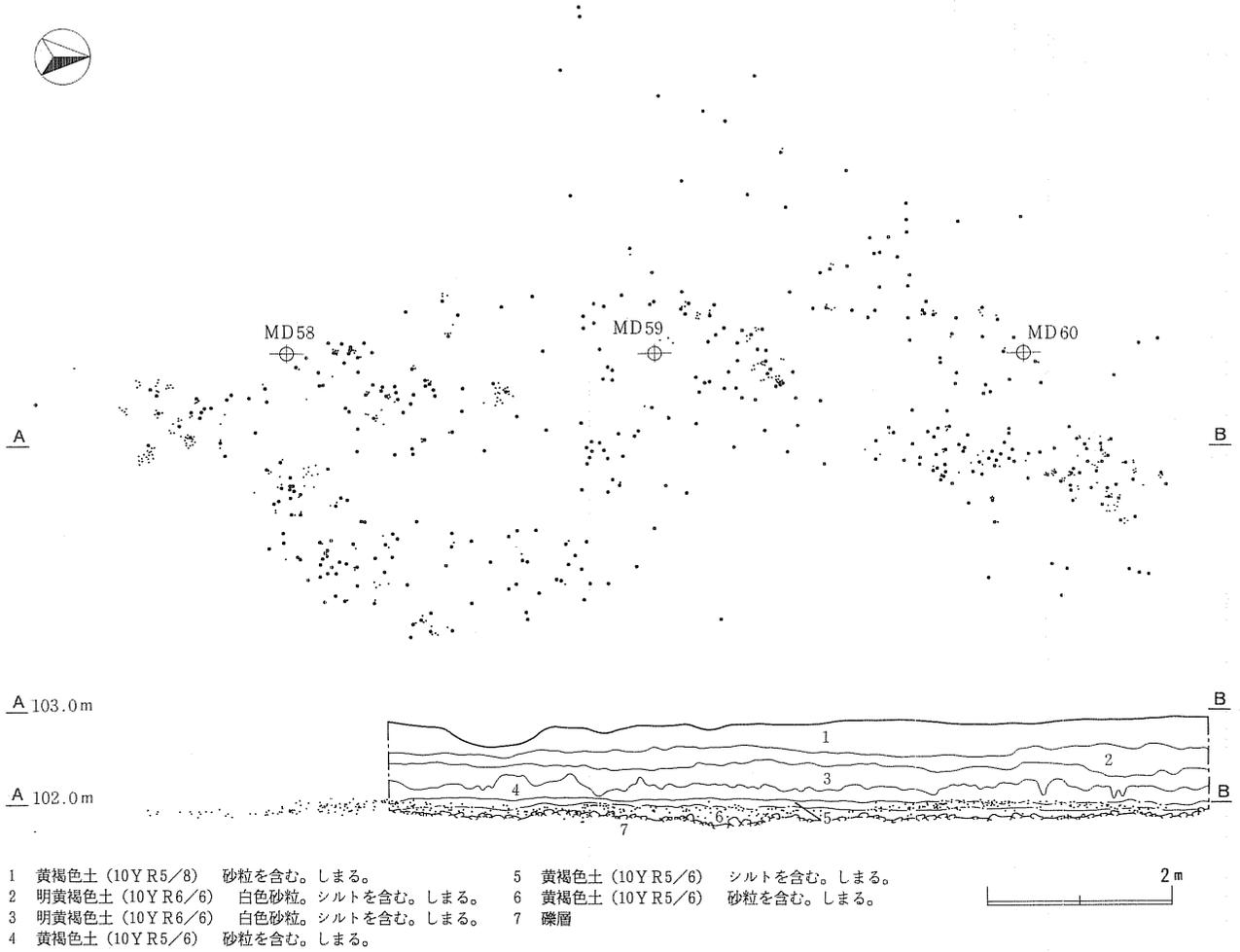


第105図 遺構内出土遺物 (65) S X Q85⑤

第106図 遺構内出土遺物 (66) S X Q67・86・89・91・93



第107図 縄文時代の検出遺構とその遺物



第107図 石器集中部(7) SXQ91

石鏃(173) a面を主要剝離面にした剝片素材で、先端部と下半を欠損。a面右側縁には浅い、a面左とb面右側縁には深い剝離がある。

二次加工ある剝片(174) 167に接合している縦長の剝片である。a面の左側縁に微小剝離痕を、右側縁には細かな剝離がある。

擦石(175) 横断面が二等辺三角形形状を示す。a・b両面は平坦で、擦り面と考えられる。一部の割れは火熱による可能性がある。

S X Q86 (第106・115図、図版18・70)

上段で調査区中央のやや北西側ME60区に位置し、表土下約0.5mのVI層で検出。東隣にはS X Q85が近接する。取り上げ総数は306点で、約径0.9mの狭い範囲から集中して出土した。特に径0.4mの範囲は顕著で、垂直分布では約0.1~0.15mの幅で水平に分布している。遺構は、多量のチップが共伴する石器製作跡である。

出土遺物は石器のみで、チップや剝片の外に両面調整素材がある。

両面調整素材(179) a・b両面に自然面があり、比較的扁平な河原石を素材にするが、分割礫の可能性もある。全体に粗い剝離を施し、半月形を呈す。b面からの折断がある。

S X Q89 (第90・106図、図版18・69)

上段で調査区中央のやや北西側MD・ME59区に位置し、表土下約0.8mのVII層で検出。北西にはS X Q36が近接している。取り上げ総数は25点で、長軸2.8m×短軸1.5mの疎な広がりを示す。垂直分布は0.05mの幅で、水平に分布している。チップも僅かに出土している。

出土遺物は石器のみで、チップ・剝片の外に二次加工ある剝片や礫石器がある。

二次加工ある剝片(177) 縦長剝片で、a面の両側縁とb面の左側縁に調整がある。

擦石(178) c面に小さな擦り面があり、a・b面ではその可能性がある。

S X Q91 (第106・107図、巻頭図版4・図版18)

上段で調査区中央のやや北側MC58・59区、MD59区に位置し、表土下約1mのX層およびXI層上面で検出。東側にはS X Q60が近接している。取り上げ総数は401点で、約長軸11m×短軸7mの広がりがある。垂直分布では0.2mの幅に収まり、礫層上面に沿って水平に分布する。遺構は、多量のチップが広く分布する石器製作跡である。

出土遺物は石器のみで、両面調整石器・搔器がある。

両面調整石器(181) 棒状の尖頭状を呈し、半分程が欠損。b面からの折断がある。

搔器(180) 横長剝片でa・b両面の両側縁に調整がある。a面に細かく丁寧な調整を施すことから搔器に含めてある。

S X Q93 (第90・106図、図版19)

上段で調査区中央のやや北西側ME60区に位置し、表土下約1mのVII層で検出。取り上げ



第108図 石器集中部(8) SXQ100

総数は47点で、径約0.3mの狭い範囲から集中して出土した。石器の取り上げ状態から、径約0.3m×深さ0.1mの不定形の掘り方が確認された。チップが少量確認できた。

出土遺物は石器のみで、石匙・二次加工ある剥片がある。

石匙(182) 縦長剥片を素材にするが、先端部が欠損。つまみの扶れ部は、a面右の内外面、同面左の側縁に丁寧な調整がある。石匙の側縁は両側縁に丁寧な調整を施し、a面左側縁下半の断面は垂直に近い角度である。

二次加工ある剥片(183) 縦長剥片を素材にし、a面左側縁に二次加工がある。この部分には光沢があり、刃こぼれが認められる。また、a面右側縁上部に微小剝離痕がある。

SXQ100(第108~114図、巻頭図版4・5、図版19・46・70・71)

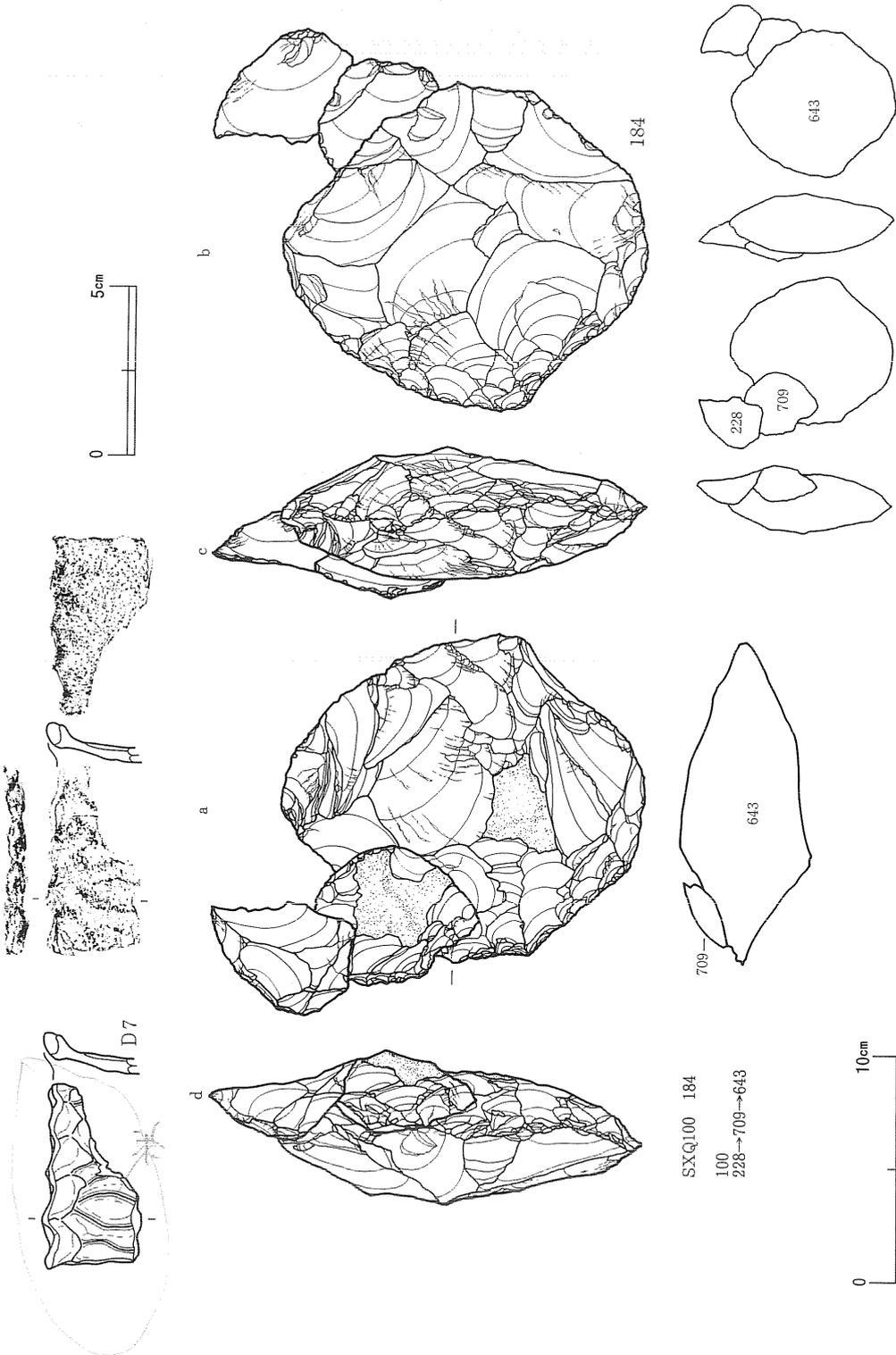
上段で調査区中央の北側LT57・58区、MA57~59区、MB57・58区に位置し、表土下約0.7mのIX層(礫層)で検出。取り上げ総数は1,000点で、約長軸11m×短軸10mの広さがある。特にMA58・59区での出土が目立ち、そこでの垂直分布は約0.5mである。全体の垂直分布は、西側が薄く東側で厚い傾向にある。そして、同様の方向で緩く傾斜しているが、これは岩盤の傾斜に呼応したものと考えられる。同層下位より、隆起線文と爪形文を併せもつ口縁部が1点出土している。出土石器は疎らであるが、多くのチップ類の存在から石器製作跡と考えられる。

出土遺物は、深鉢と考えられる縄文土器以外に、接合資料・石核・両面調整素材・両面調整石器・石匙・削器・二次加工ある剥片・擦石の石器がある。

深鉢(D7) やや外反する波状の口縁部である。口唇部とこの表面直下には、小さい波状(窪み部は4つ)を作る際にできた爪形文があり、その下には縦位の隆起線文がある。前者の、口唇部とその直下の爪形文は同時に作出されたもので、口唇部の人指し指による凹みと、直下の親指の先端による凹みが組み合う。特に口唇部凹みの内側よりに、深い爪の痕跡がある。隆起線文は、粘土の貼り付けかその寄せ集めと考えられ、幅が約5mm厚さが約1.5mmで緩い盛り上がりを示す。内面には指頭圧痕があり、器厚は3~4mm口唇分の最大幅は6mmである。色調は表面が灰褐色、裏面は煤の付着で黒色を呈す。時期は草創期に属す。

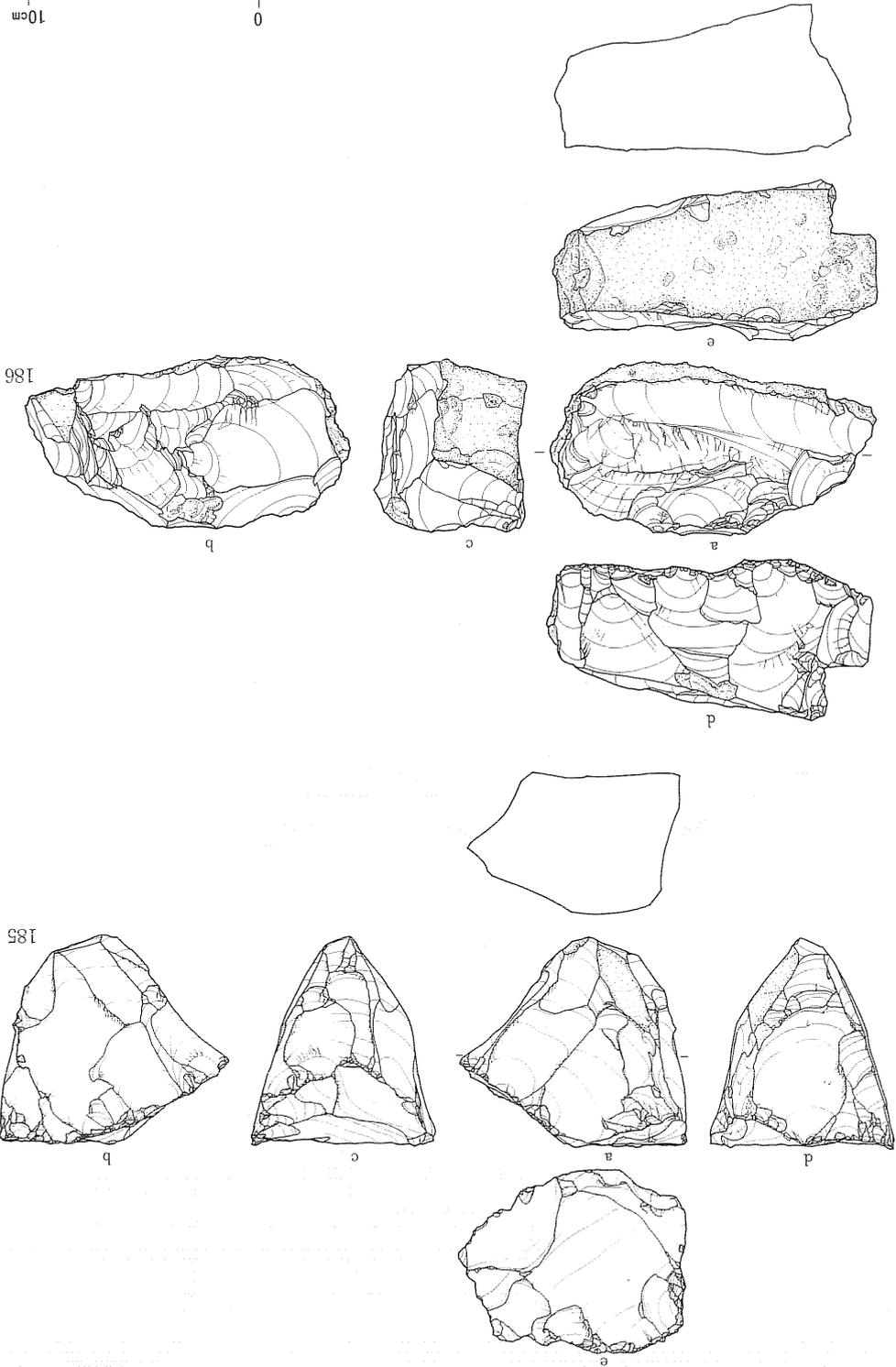
接合資料(184) 188の両面調整石器に剥片が接合したもの。分割礫を素材にした可能性があり、a面に礫皮面を残す。

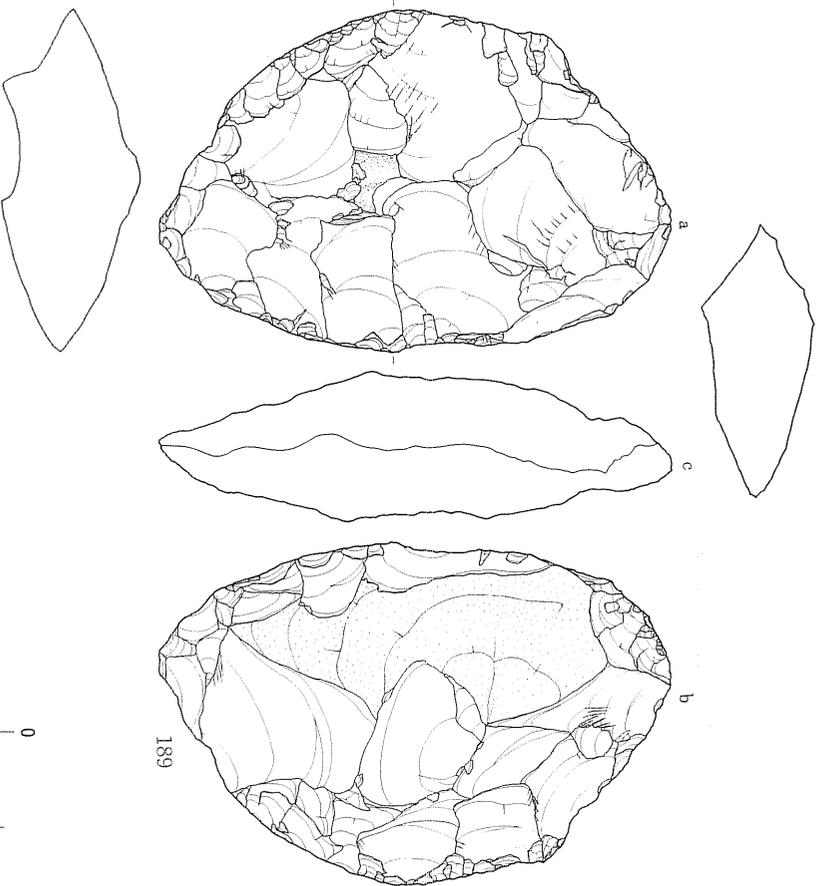
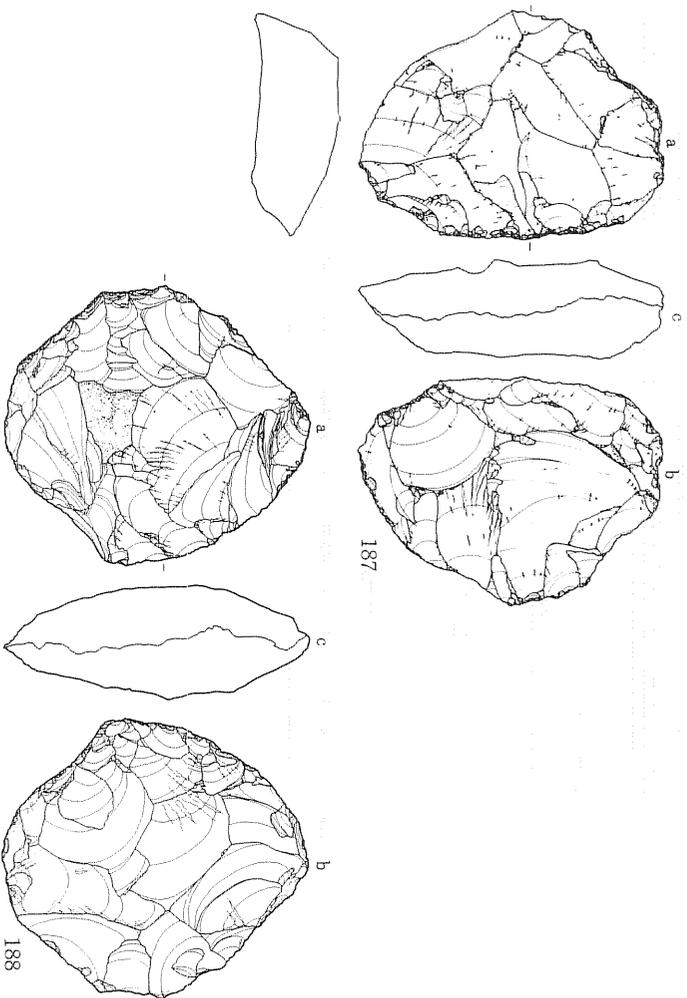
石核(185・186) 185は逆三角形もしくは逆四角錐の形態で、分割礫を素材にしたと考えられる。e面を平坦に調整し、そこを打点として主に縦長の剥片を得ている。a面には礫皮面を残す。186は分割礫を素材にする。aの分割面は平坦で、調整後打面として利用している。剥片はa面の上から連続して得るが、d面が平坦なことから剥片の長さが規定される。側面の半分が礫皮面(c)になっている。



第109図 遺構内出土遺物 (67) SXQ100①土器・石器

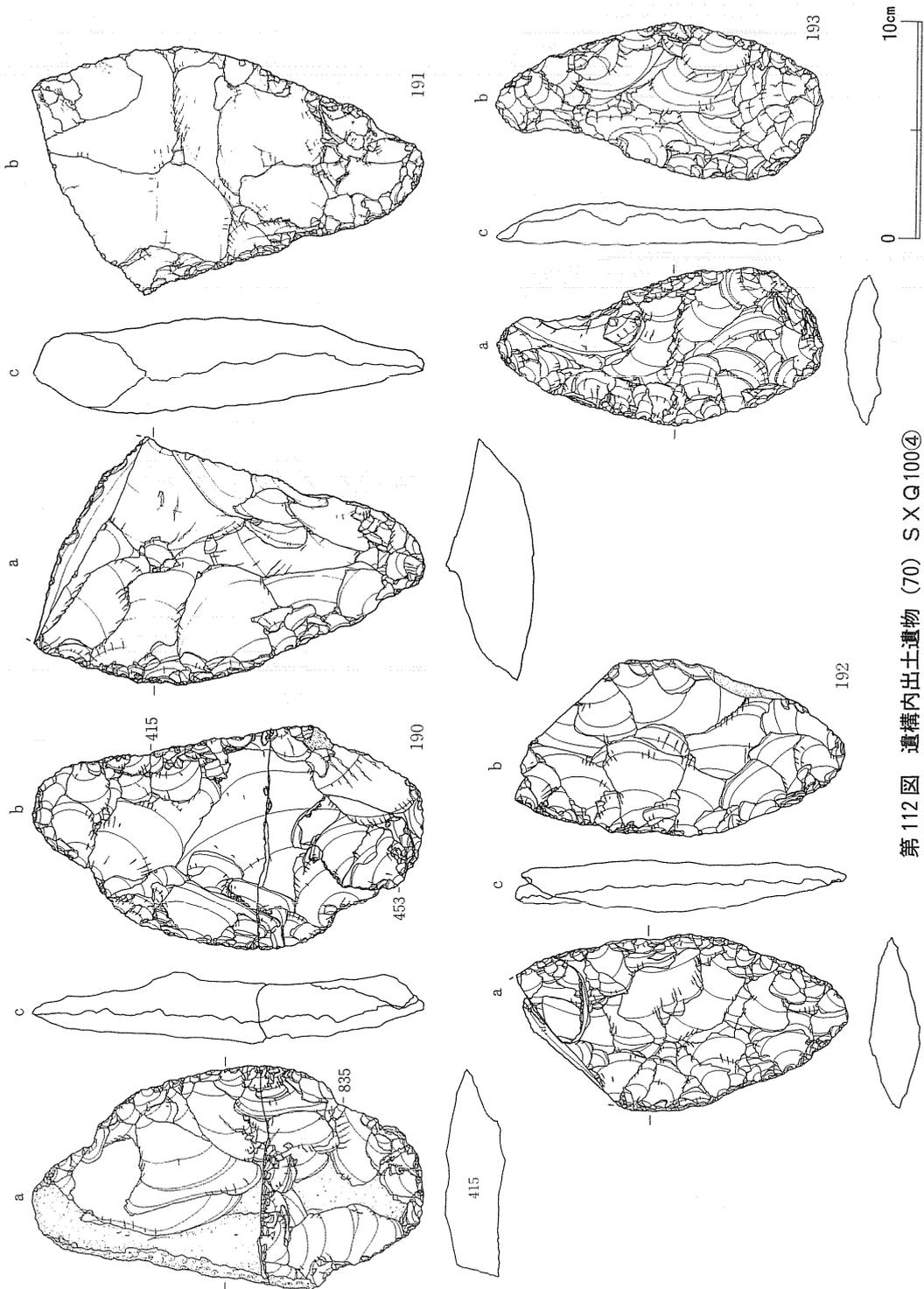
第110図 遺構内出土遺物 (68) S X Q 100②



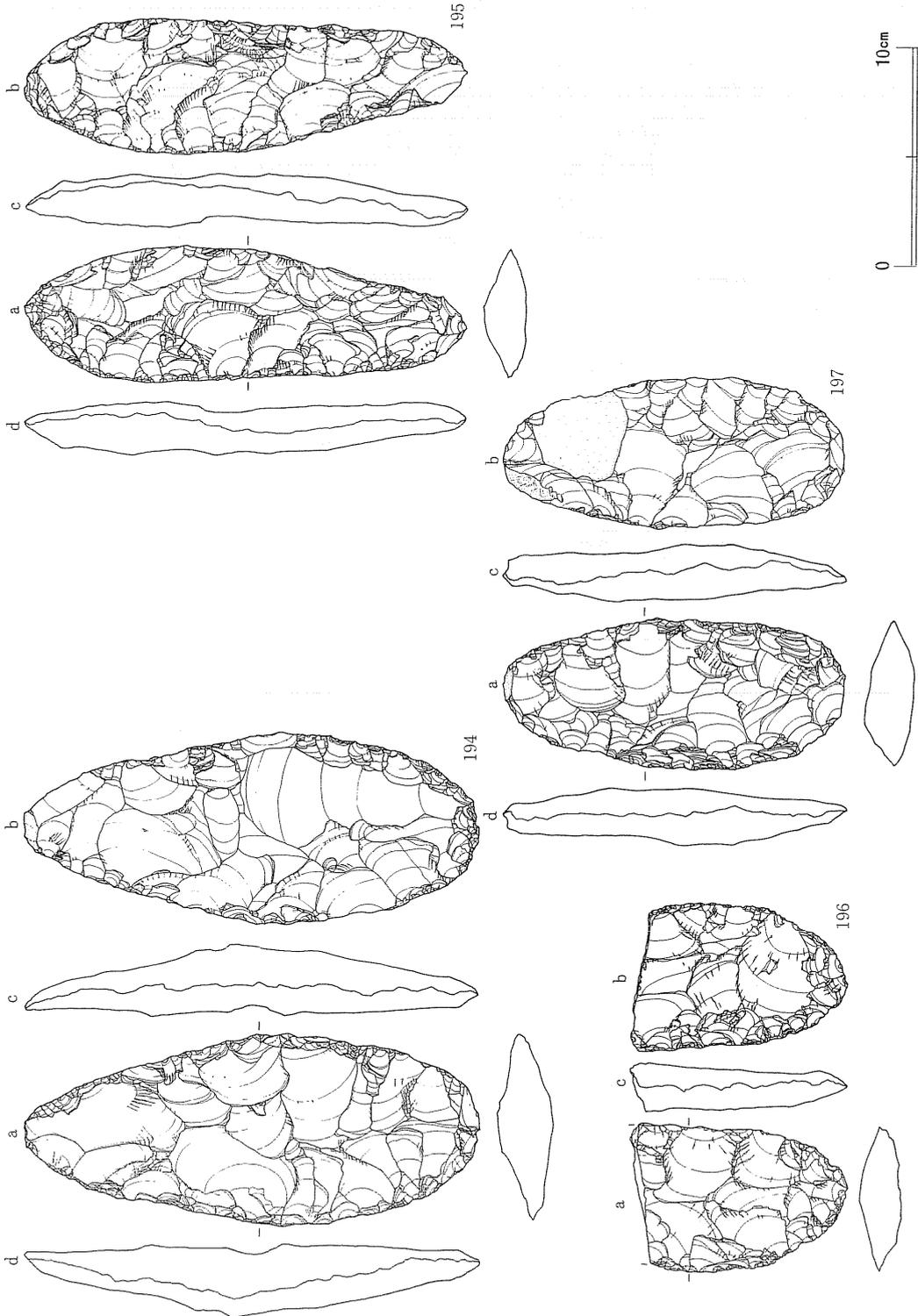


0 10cm

第111図 遺構内出土遺物(69) S X Q100③

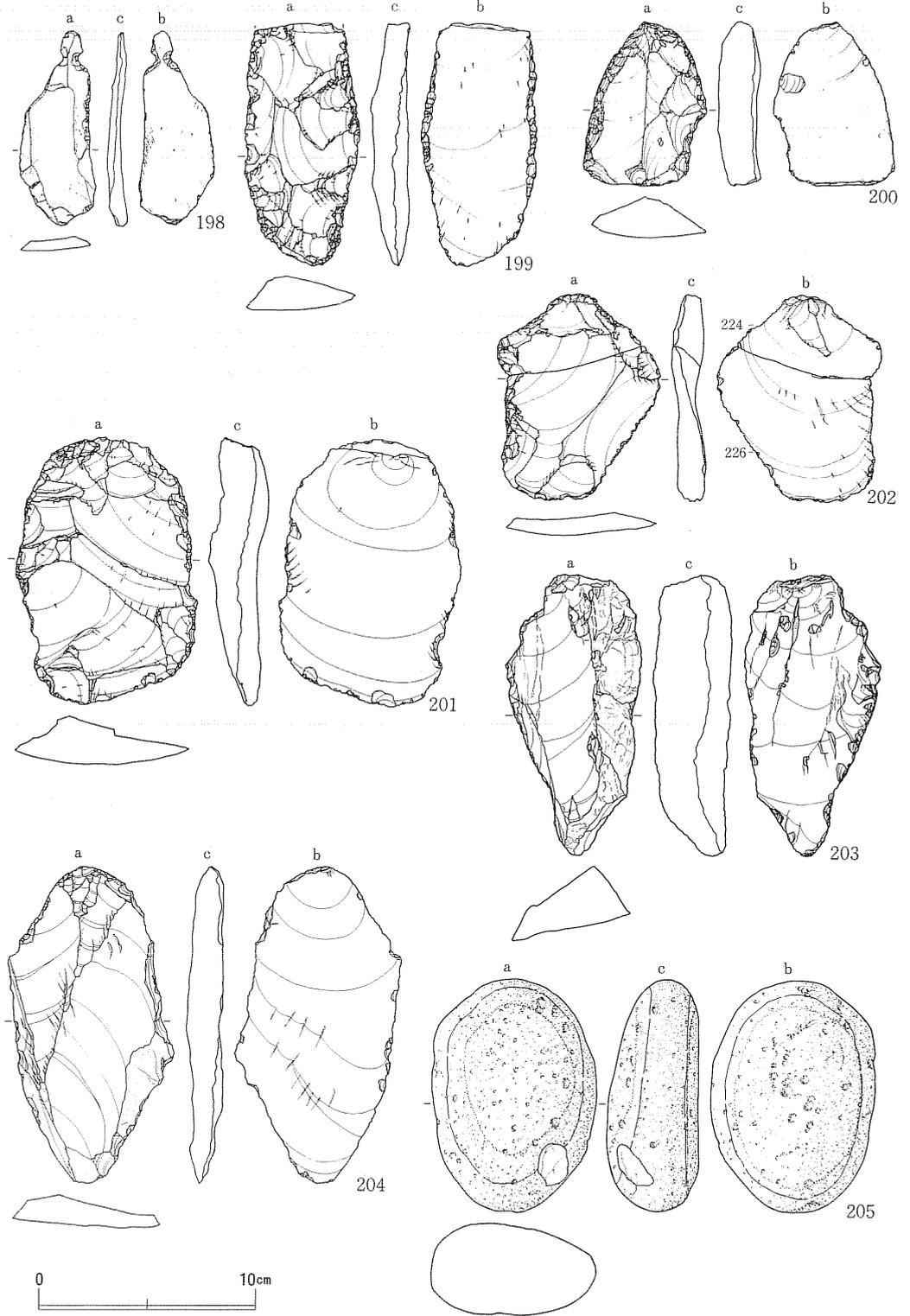


第112図 遺構内出土遺物 (70) S X G 100④



第113図 遺構内出土遺物(71) S X G 100⑤

第1節 縄文時代の検出遺構とその遺物



第114図 遺構内出土遺物 (72) SXQ100⑥

両面調整素材(187) 全体に粗い剝離を施し半月状を呈す。a面の右側縁と下端に調整があるものの、素材として分類した。b面に礫皮面を部分的に残す。

両面調整石器(188~197) 188は184の石核。大型剝片を素材にした可能性がある。主にa面下端から同左側縁下半にかけて、丁寧な調整がある。189は、分割礫を素材にした半月形の大型品である。b面の左側は分割面を大きく残しており、その傾斜を意識してa面右側に規則的で大きな剝離を施す。全体に、縁辺部の剝離が行き届いている。190は、b面の下端に1片の剝片が接合するが、単品として扱う。石器は扁平で、a面の左側縁は礫皮面である。また、同右側縁と下端には丁寧な調整があり、a面からの折断がある。折断後、下半の上部に剝離を加えている。191は扁平な河原石を素材にしたもので、片側の側縁が直線的な半月形を呈している。a・b面とも左側縁に調整があり、後者は細かく丁寧である。上半分には、a面からの折断がある。192は木の葉形で、薄く丁寧な作りである。a面上部は調査時に欠損したもので、上部はその時に失ってしまった。b面の右下位側縁に礫皮面を残す。193は剝片素材と考えられる。a面の右側縁に大きな剝離があり、同左側縁は両面からの調整を施す。194は木の葉形を呈し、下位が幅上で上位がそれよりやや細くなる形態である。b面上端に小さな礫皮面をもち、これ以外の縁辺には細かい剝離がある。a面には、中央やや上位に両側縁からの大きな剝離があり、柄などの装着に関わるものかもしれない。195は基本的に194と類似するが、細みで上下端部にも調整を施している。196はa面からの折断で上部を損失しているが、194・195の形態に類似したものと考えられる。197も木の葉形を呈し、下位が上位よりもやや幅が広い。上端に自然面を残し、下端には調整が及んでいない。

石匙(198) 端部を打点にした薄い縦長剝片である。剝片の先端につまみを作り、左右の扶れ部は両面から調整を施す。両側縁には、使用痕と考えられる微小剝離痕を認める。特にa面の側縁には、トロトロした光沢がある。

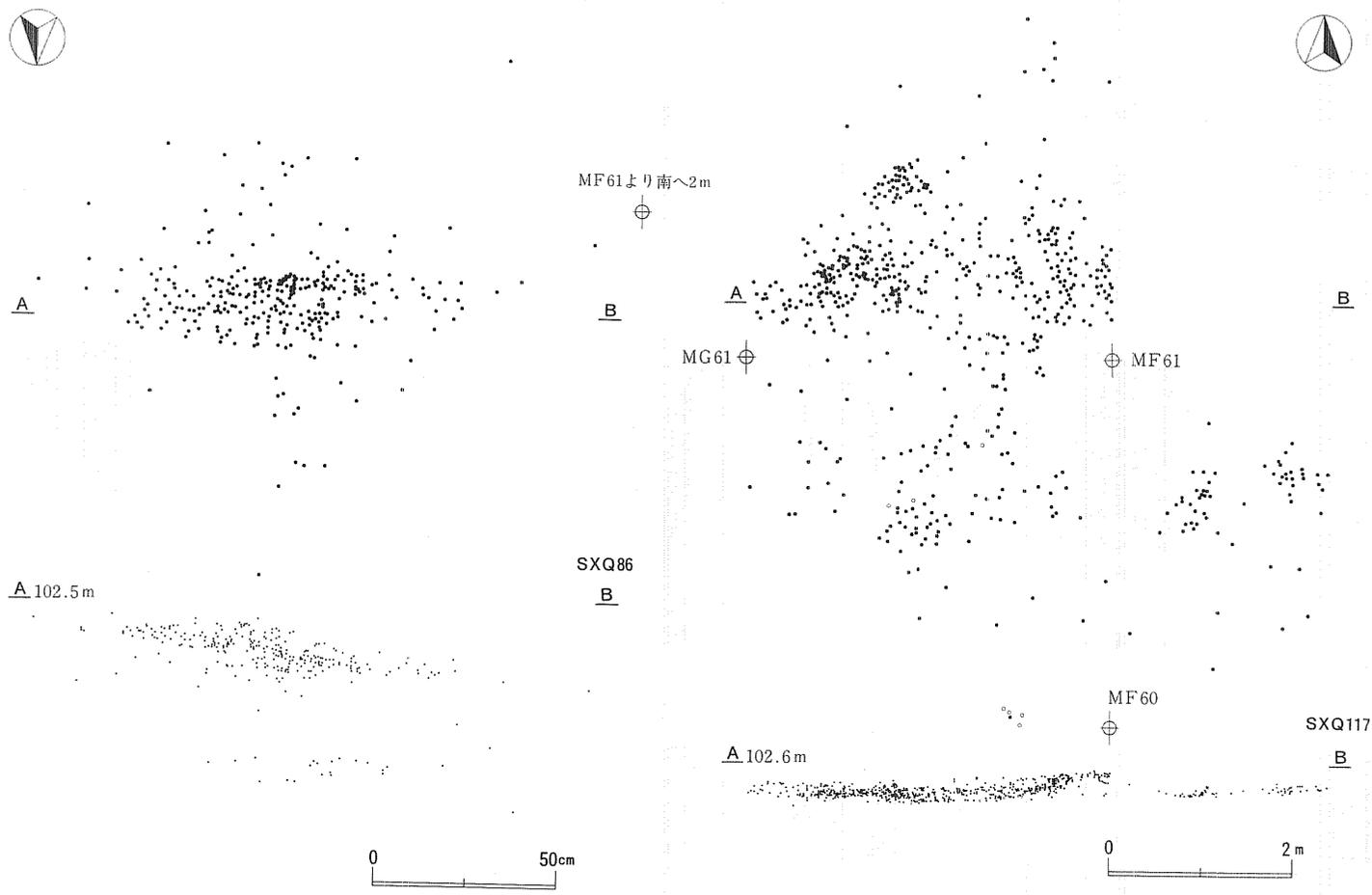
削器(199~203) 縦長剝片を素材にし、両側縁に調整のあるもの(199~201)と、片側に調整のあるもの(202・203)がある。199は両面からの、これ以外は片面からの剝離である。200は角度のある丁寧な調整を施す。199・202はa面から、200にはb面からの折断がある。

二次加工ある剝片(204) 縦長剝片で、a面下端から右側縁にかけて礫皮面がある。同面上位と左側縁に二次加工を施す。

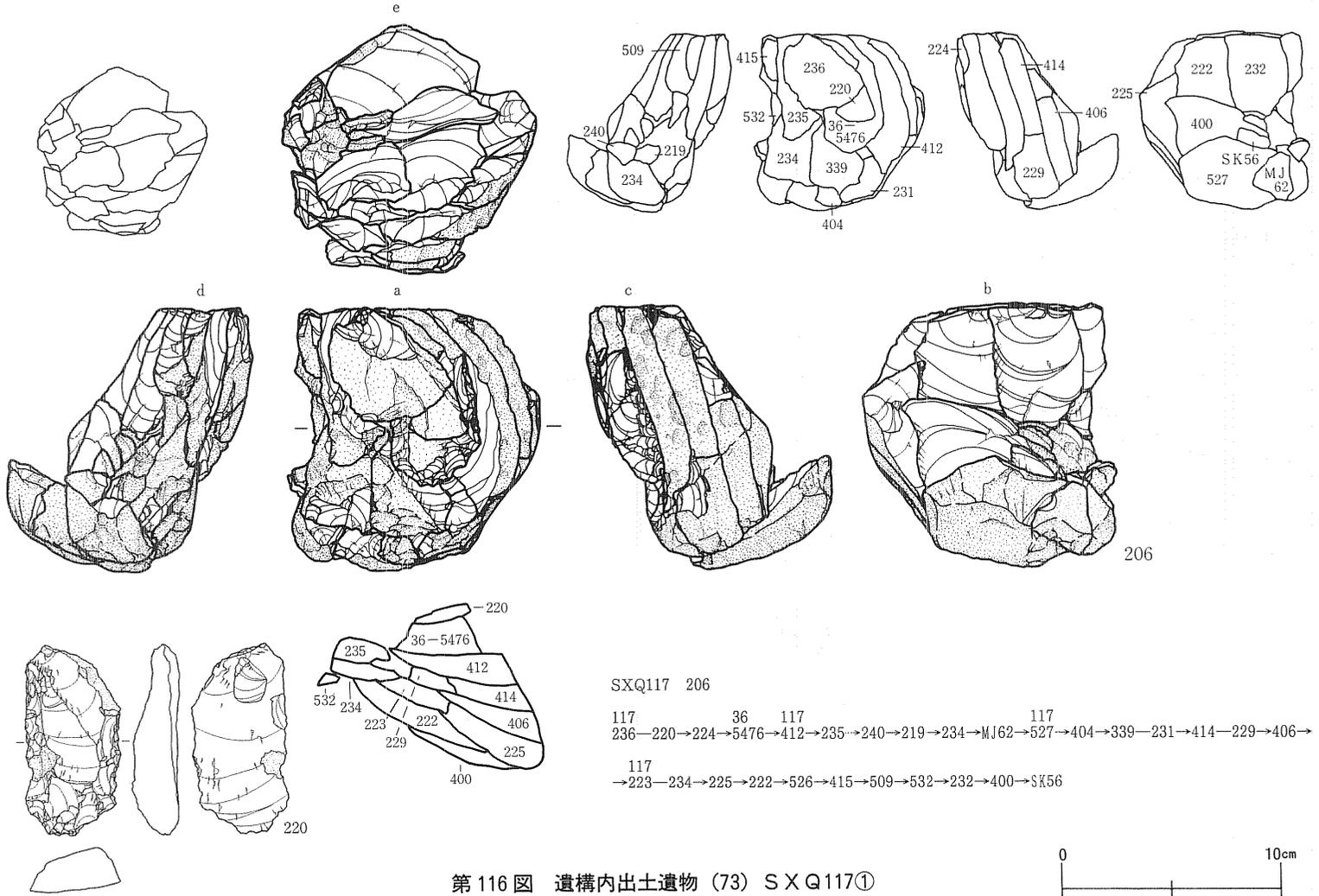
擦石(205) a・b両面に、不明瞭な擦り面が微かに認めらる。

SXQ117(第115~118図、図版19・30・71・72)

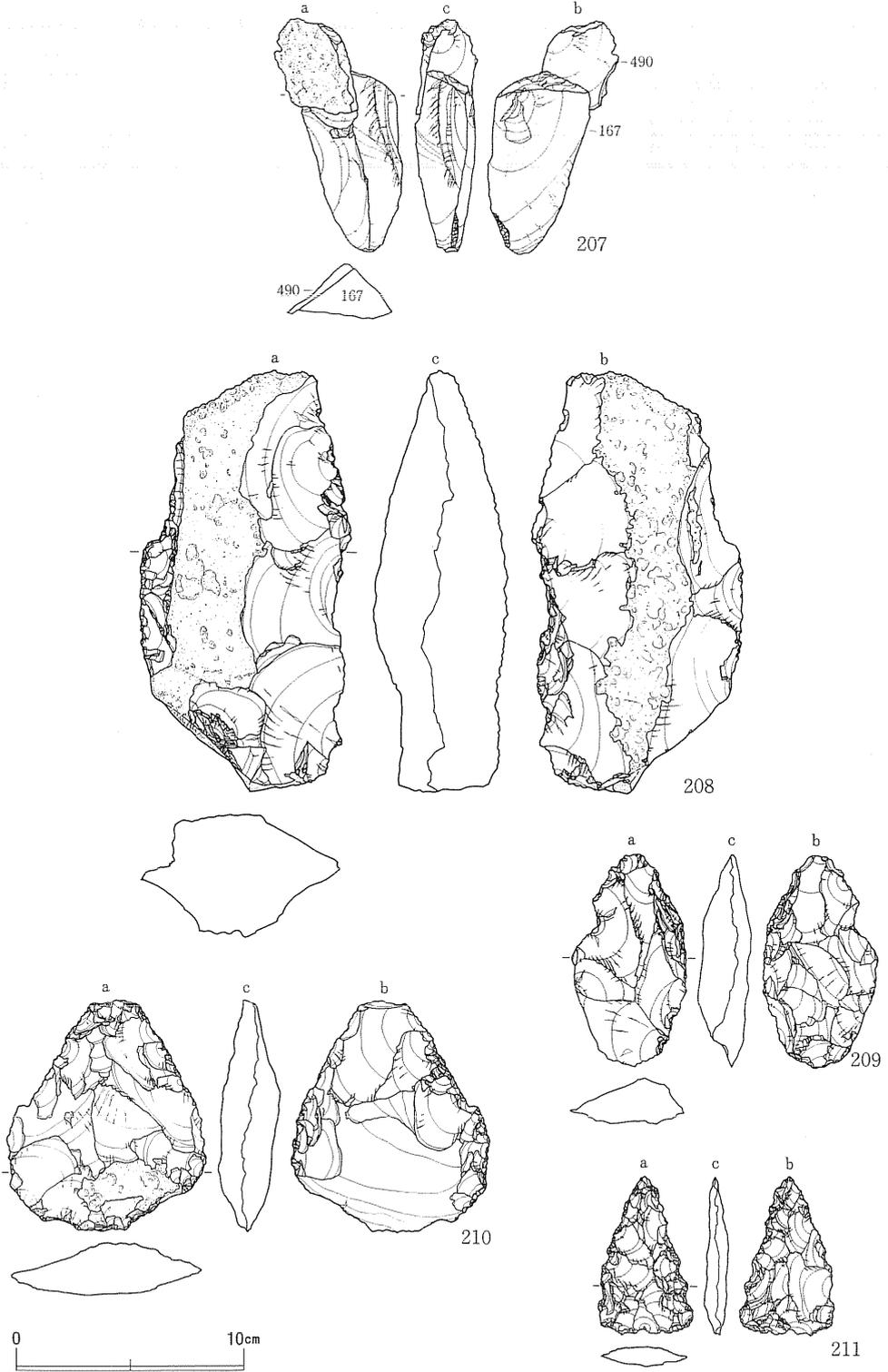
上段で調査区北西部のMF60・61区、ME60区に位置し、表土下約0.5~0.6mのVII層で検出。取り上げ総数は602点で、約7m×6mの広さがある。分布状態は南側が希薄で、北西部に径約0.6mの集中部が2カ所認められる。垂直分布は最大0.2mの幅に収まるが、このあり



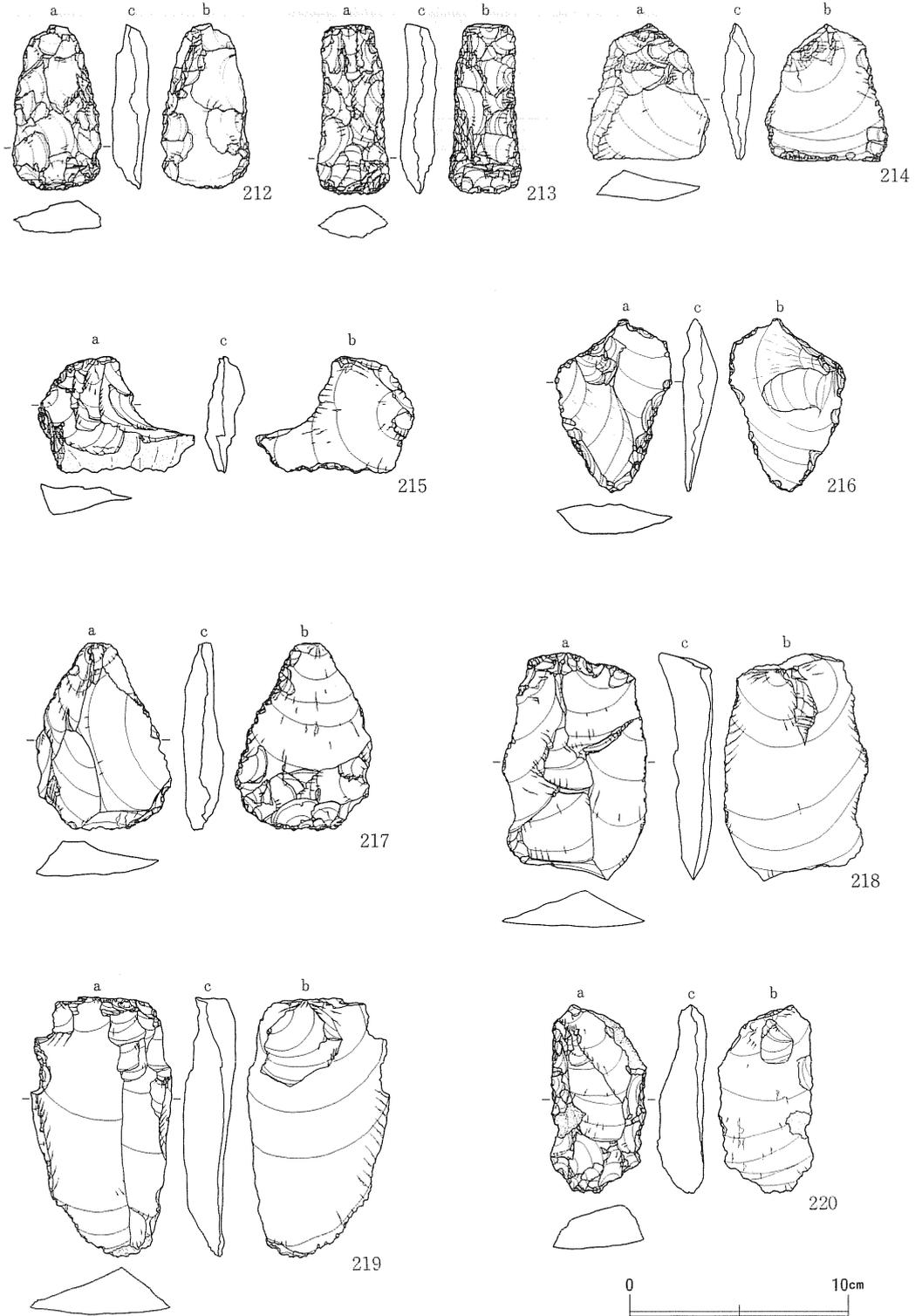
第 115 図 石器集中部 (9) SXQ86・117



第116図 遺構内出土遺物(73) SXQ117①



第117図 遺構内出土遺物 (74) SXQ117②



第118図 遺構内出土遺物 (75) SXQ117③

方からMF61区南東杭付近を境にした東西には、緩やかな窪みの存在した可能性がある。遺構は、多量のチップ類が共伴する石器製作跡である。

出土遺物は石器のみで、接合資料・両面調整素材・両面調整石器・石鏃・石篋・鋸歯状石器・搔器・削器・二次加工ある剥片がある。

接合資料(206・207) 206は、掌大の河原石を素材にしたものである。c面の上位打面と、同面下端の左からの剥離で形成した打面を基に、主として交互の打点転移を行いながら縦長の剥片を得ている。b面では、左の中央を打点にした剥片も観察される。c面左側には、搔器の未製品と考えられる220が接合。207は縦長の剥片に、礫皮面のある横長の剥片が接合したもの。

両面調整素材(208) やや扁平で細長い河原石を素材に、両側縁に粗い調整を施す。両面に大きく礫皮面を残す。

両面調整石器(209・210) 209は横長剥片の素材と考えられる。a面の右上位側縁に両面からの調整がある外、b面端部にも小さな剥離を施す。210は横長剥片の素材と考えられ、隅丸三角形を呈している。a面下端とb面の両側縁に調整がある。

石鏃(211) 剥片素材と考えられる大型品である。3辺に粗い剥離がある。

石篋(212・213) 212は縦長剥片で撥形を呈す。刃部には、b面からだけの細かい剥離がある。213は縦長剥片と考えられる細みの製品で、刃部には両側からの剥離を施す。

鋸歯状石器(215) 不整な縦長剥片で、その1辺に鋸歯状の剥離が並んでいる。刃部のあるa面は礫皮面である。

搔器(214・220) 214は横長剥片で、b面の一辺に細かで丁寧な剥離を施す。220は、接合資料206の一部である。礫皮面のある上端を除いて粗い剥離を施す。形態や刃部の角度から搔器の未製品と考えたが、石篋の可能性もある。

削器(216・217) 216は横長剥片で、主にa面の2側縁に剥離がある。217は、縦長剥片のb面左側縁に調整を施す。また端部を粗く整えている。

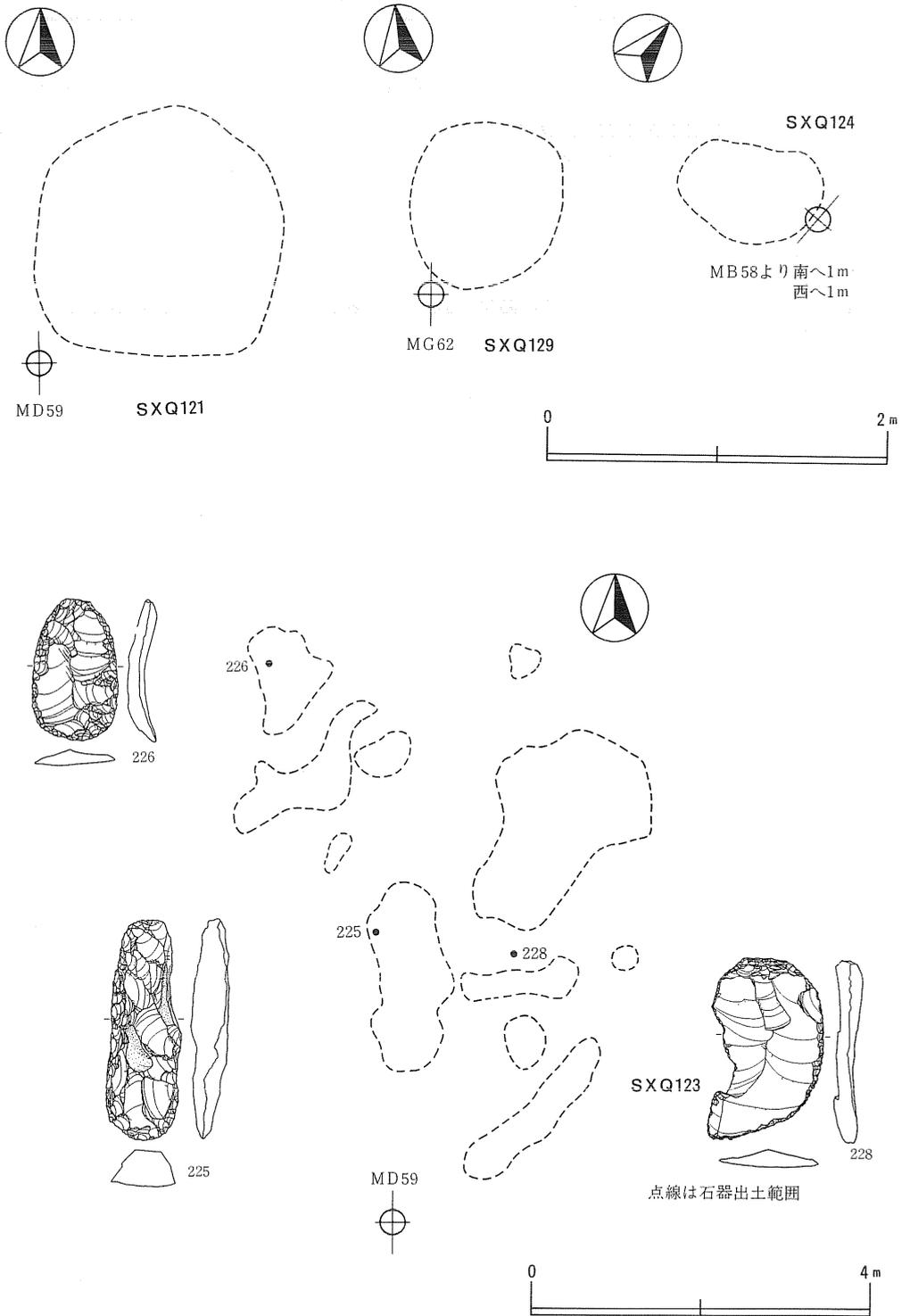
二次加工ある剥片(218・219) 218・219は縦長剥片で、前者はa面左下端に突出した剥離を、後者ではa面左側縁上位にノッチ状の剥離がある。

SXQ121(第119・121、図版19)

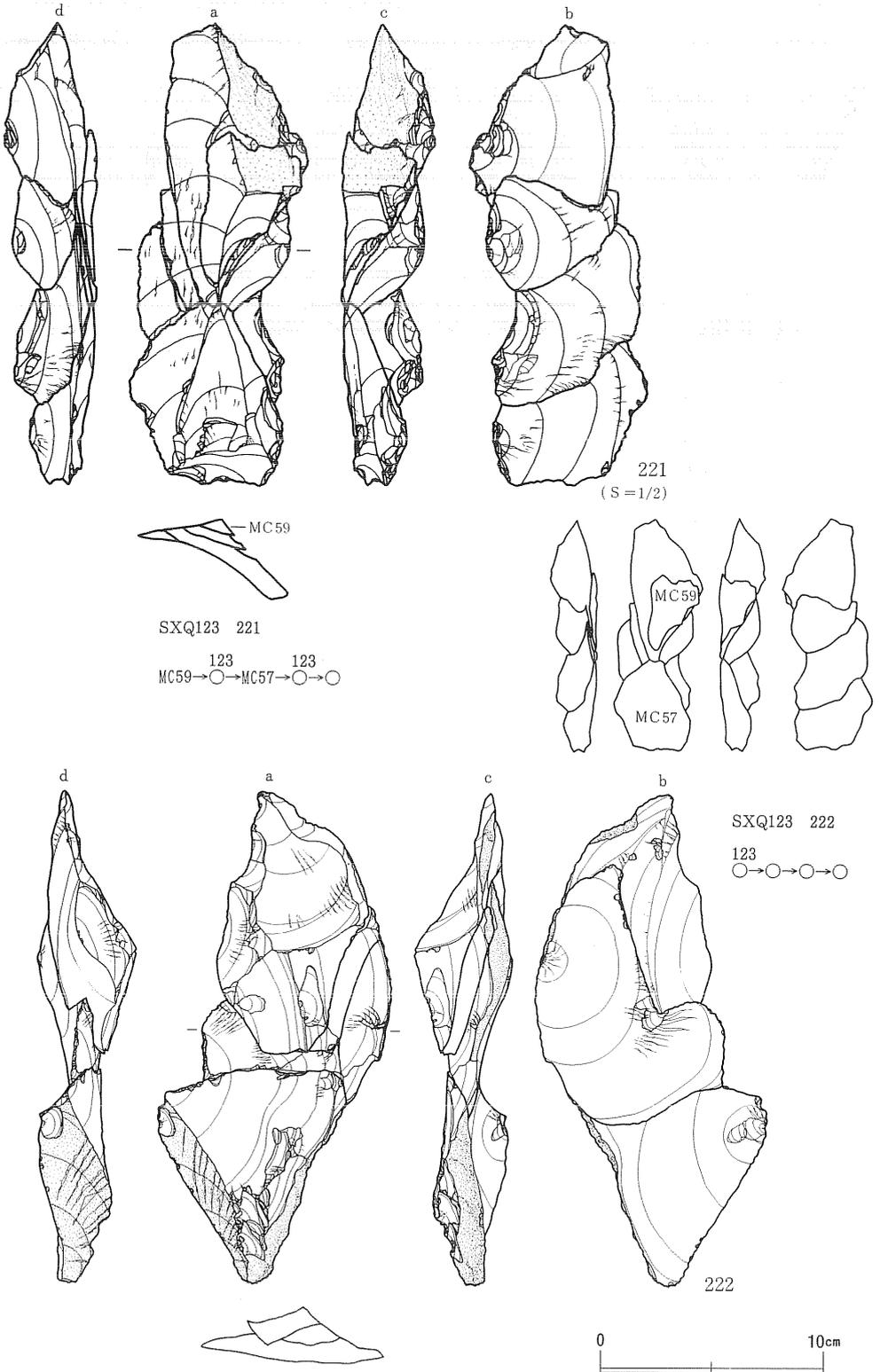
上段で調査区中央のやや北側MC59区に位置し、表土下約1.1mのXI層(礫層中)上位で検出した。範囲と主な石器の標高をおさえ、一括して取り上げた。チップを含んだ総数は276点である。分布範囲は径約1.6mの広がりがあり、3つの小さなブロックに分けられる。垂直分布の高低差は0.2m以内に収まる。遺構は、多量のチップが共伴する石器製作跡である。

出土遺物は石器のみで、両面調整石器・石槍がある。

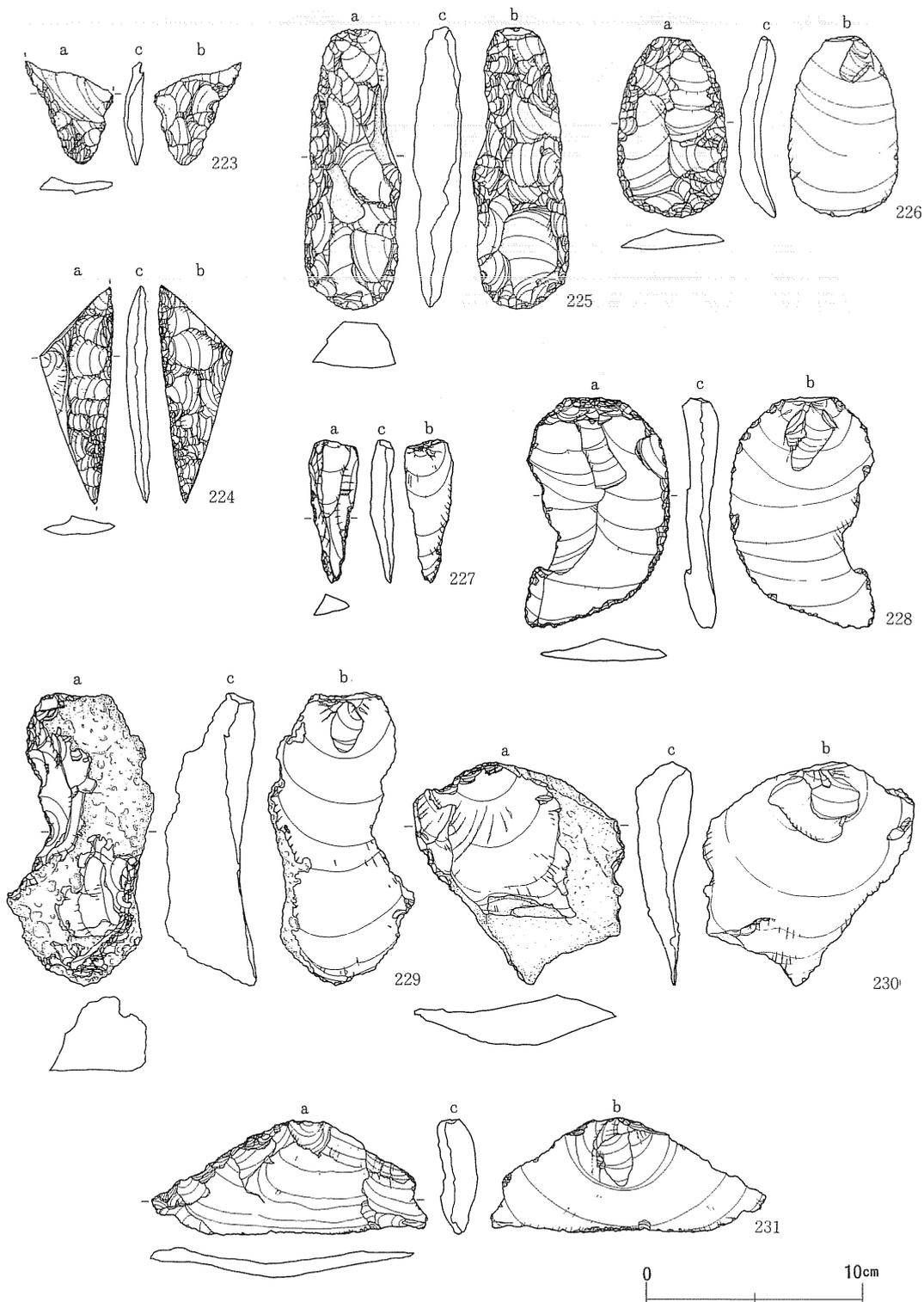
両面調整石器(223) 両側縁がやや抉れている尖端部の破片である。



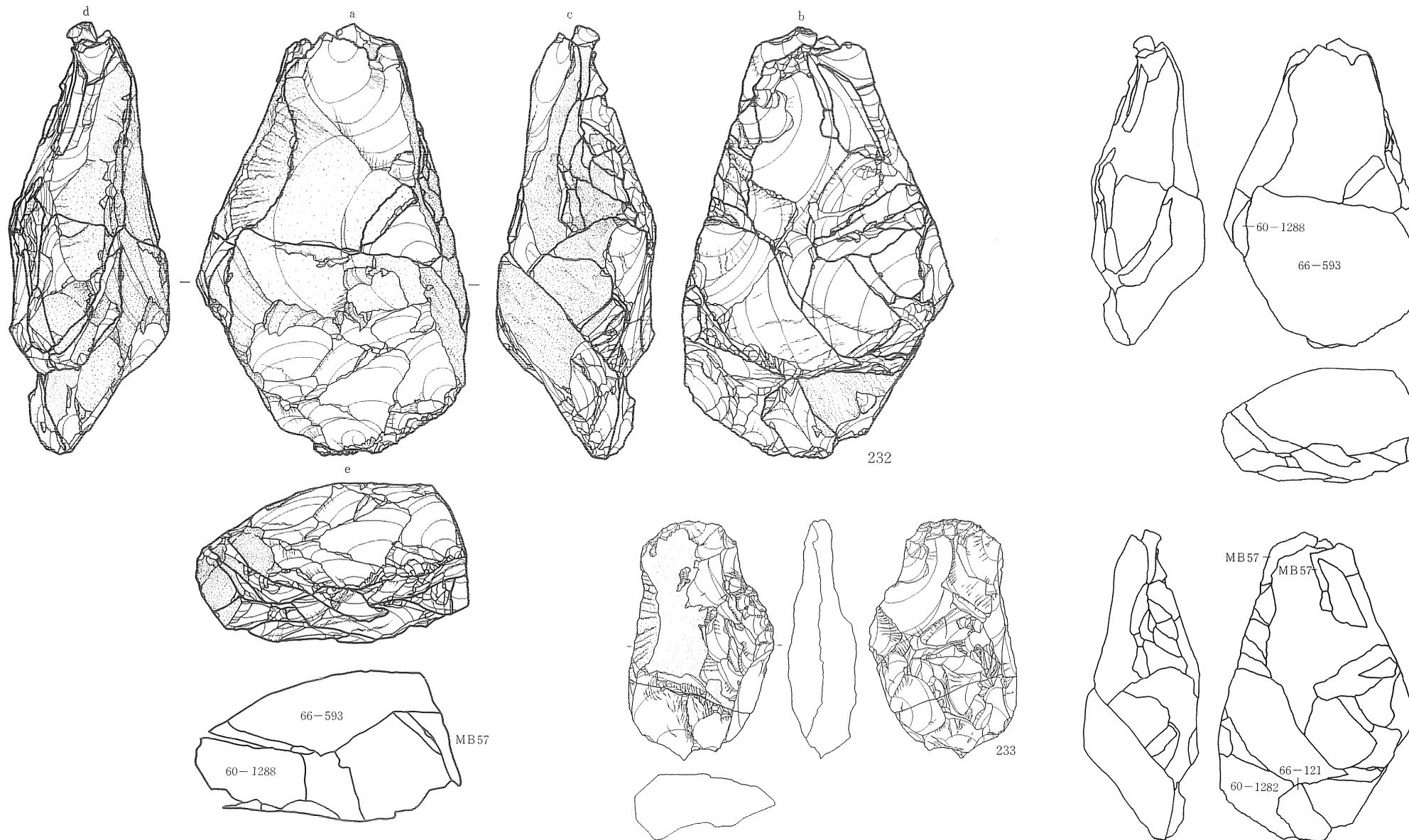
第119図 石器集中部 (10) SXQ121・123・124・129



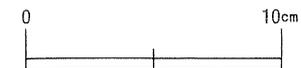
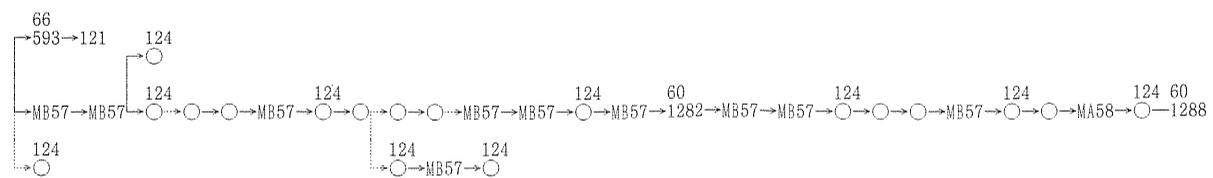
第120図 遺構内出土遺物 (76) SXQ123①



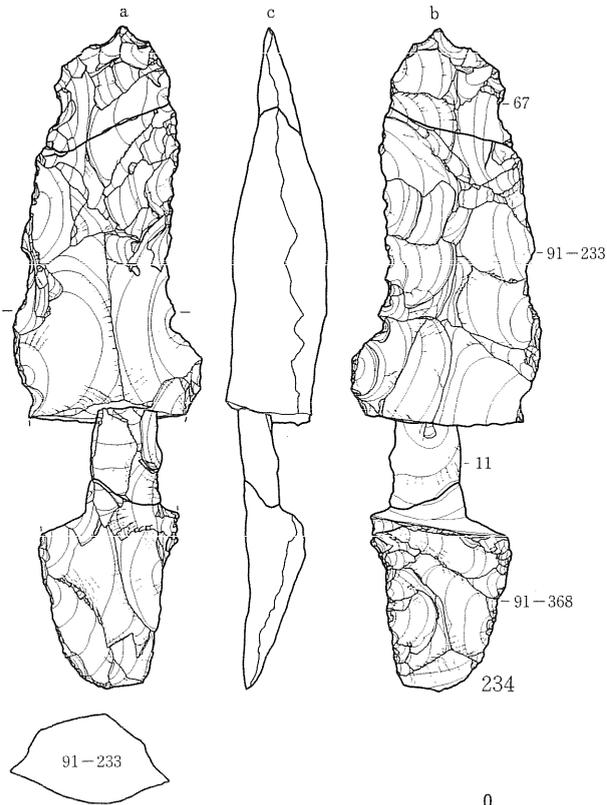
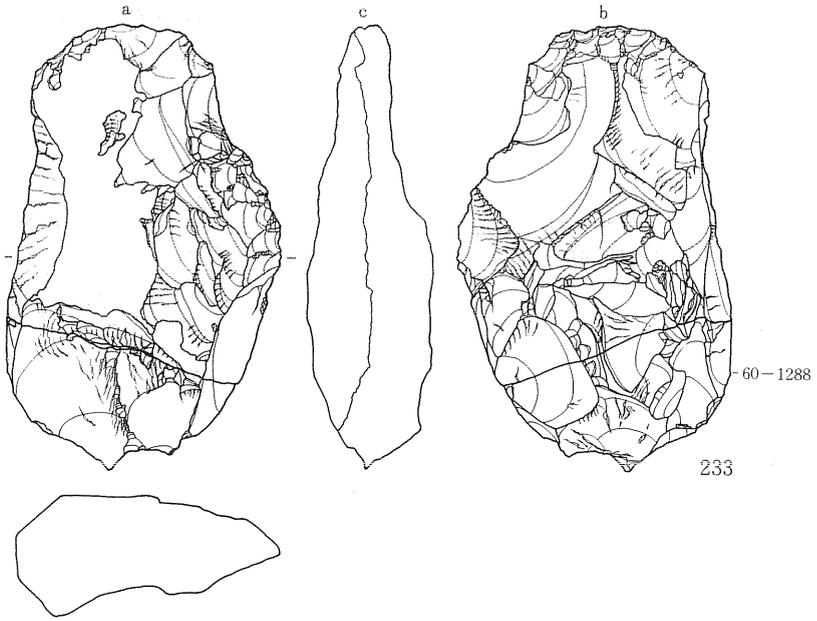
第121図 遺構内出土遺物 (77) S X Q121・123②



SXQ124 232



第122図 遺構内出土遺物 (78) S X Q 124①



第123図 遺構内出土遺物 (79) S X Q124②・125①

石槍 (224) 少なくとも 20cm 位の長さの製品で、その中央部の破片である。やや a 面側に反りがあり、側縁には薄く丁寧な剝離を施す。

S X Q 123 (第 119~121 図、図版 20・46)

上段で調査区中央のやや北西側 MC 59・60、MD 60 区に位置し、表土下約 1.5m の XI 層 (礫層) 中位で検出。範囲と主な石器の標高をおさえ、一括して取り上げた。チップを含んだ総数は 475 点である。分布範囲は約長軸 7m × 短軸 5m の広がりがあり、いくつかのブロックに分かれる。垂直分布は最大 0.3m の幅がある。遺構は、多量のチップが共伴する石器製作跡である。

出土遺物は石器のみで、接合資料・石斧・石錐・搔器・削器・二次加工ある剝片がある。

接合資料 (221・222) 221 は主に横長剝片が連続したものである。222 は剝片 4 点の内、3 点が大型である。b 面で両側縁から剝離しており、両面調整を意図したと考えられる。

石斧 (225) 横長剝片の可能性があり、b 面が上から下へ弓成りの状態を示す。刃部は a・b 両面から細かい調整を施し、両刃を作出している。a 面左側縁にも細かい調整があり、両面に礫皮面を残す。

石錐 (227) 縦長剝片で先端が三角形に尖る。a 面左側縁には、細かい剝離が連続している。同右側縁にも、形を整える為の部分的な剝離を施す。

搔器 (226・228・231) 226 は縦長剝片で、凸面側に大きく反る。刃部は丸く、打点を除く周縁部には細かく丁寧な調整がある。228 は縦長剝片で、打点を除く周縁部に全体的な剝離を施す。a 面右側縁には丁寧な調整がある。b 面に黒色の付着物が認められる。231 は、横長剝片の末端部側縁に細かい調整があり、搔器に含めてある。

削器 (229) 礫皮面の付いた分厚い縦長剝片である。a 面左側縁は大きく抉れており、そこに小さく部分的な剝離を施す。

二次加工ある剝片 (230) 不整な横長剝片で、a 面の上と右側縁にノッチ状の抉りがある。また上位左側縁にも二次加工を施す。

S X Q 124 (第 119・122・123 図、図版 20・44)

上段で調査区中央のやや北側 MB 57 区に位置し、表土下約 1.1m の XI 層 (礫層) 上位で検出。範囲と主な石器の標高をおさえ、一括して取り上げた。チップを含んだ総数は 22 点で、長軸 0.8m × 短軸 0.6m の狭い範囲から集中して出土した。垂直分布は 0.1m 以内に収まる。遺構では、チップ類も確認している。

出土遺物は石器のみで、接合資料・両面調整素材がある。

接合資料 (232) 分割礫と考えられる素材で、a 面下端の両側と上端に調整がある。両側面は平坦で自然面が残り、そこを打点面に利用している。内部に摂理面が多く、全体に砕けた状



第124図 石器集中部 (11) SXQ125

第4章 調査の記録

態を示す。233はb面右上の大型剥片である。

両面調整素材(233) 剥片素材であるが、素材の剥離にはa面の摂理面が影響している。同面の左下方の側縁に調整がある。

SXQ125(第123~125図、巻頭図版7、図版20・45)

上段で調査区中央のやや北側MC57・58区に位置し、表土下約1.1mのXI層(礫層)上面で検出した。北東側にはSXQ60が隣接している。範囲と主な石器の標高をおさえ、一括して取り上げた。チップを含んだ総数は476点で、分布範囲は径約4mの広がりがある。その中央やや西側には、炭粒を含む長軸1.2m×短軸1mの火熱を受けた礫の範囲があり、石器はこの南西側を除いた部分に分布している。垂直分布は約0.1mの幅である。

出土遺物は石器のみで、接合資料・両面調整石器がある。

接合資料(235) 太く細長い河原石を素材にしている。a面の上位とb面の全体は、古い剥離面である。これらとc面上位の剥離面を除いたのが、本来の礫皮面である。両面調整石器(234)を得るために、主にc・d面の側面で交互剥離を行う。上下両端で234の長さを規定しているのに、d面上端右側からと同下端右側からの剥離がある。これらの剥離方向は、交互剥離の方向と90°を成している。上端は早い段階で、下端ではb面下方左側の剥離の後に行っている。

両面調整石器(234) 235の石核である。細みで上下の先端が丸い形態である。調整途中に、a面からの打撃で3つに折断したと考えられる。中間資料は不明で、上位と下位が辛うじて接合しており、上位の折断面には不均一な部分がある。

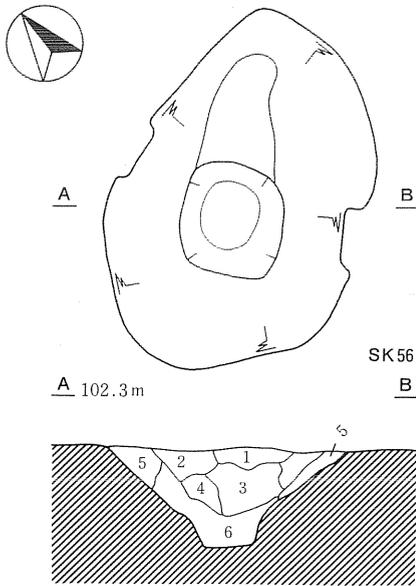
SXQ129(第119図、図版20)

上段で調査区北西のMF62区に位置し、表土下約2.2mのXI層(礫層)下位で検出。範囲と主な石器の標高をおさえ、一括して取り上げた。総数は395点で、それらは径0.6mの狭い範囲に集中して出土した。この中には、垂直分布で0.35mの高低差を含むものもある。

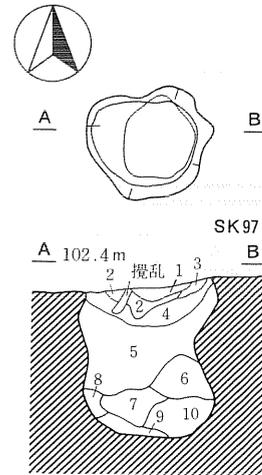
2 早期

早期の遺構と遺物は、調査区北東側を中心とする範囲で、特に草創期の遺構の外側に弧状を成して広がる。層位的には、主として河道A堆積層から河道B堆積層にかけてで、これらは基本層位のV層に含まれる。遺構の種類と数は、土坑4基、集石炉14基、焼土遺構1基、礫集中部4カ所、土器集中部1カ所、石器石材集積遺構1カ所、石器集中部21カ所である。遺物は、撚糸文・貝殻文・無文の早期の土器が出土した外、多量の石器が出土している。石器の種類は、両面調整素材・両面調整石器・石斧・搔器・削器等があり、接合資料に恵まれている。

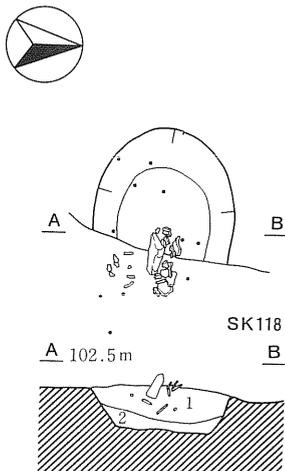
(1) 土坑



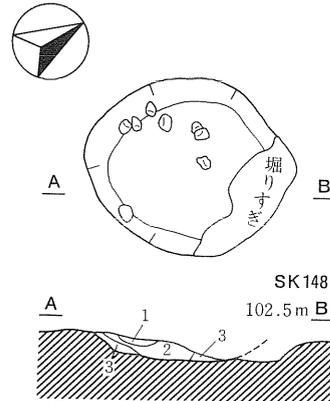
- 1 褐色土 (10Y R4/4) 炭粒、砂粒を含む。しまる。
- 2 褐色土 (10Y R4/6) 炭粒を含む。しまる。
- 3 褐色土 (10Y R4/4) 炭粒、砂粒を含む。しまる。
- 4 褐色土 (10Y R4/4) 炭粒を含む。しまる。
- 5 黄褐色土 (10Y R5/6) 炭粒を含む。しまる。
- 6 褐色土 (10Y R4/6) 炭粒を含む。しまる。



- 1 黄褐色土 (10Y R5/6) しまる。
- 2 黄褐色土 (10Y R5/8) 細砂、シルトを含む。しまる。
- 3 褐色土 (10Y R4/4) 細砂を含む。しまる。
- 4 明黄褐色土 (10Y R6/6) シルトを含む。しまる。
- 5 黄褐色土 (10Y R5/6) 明黄褐色土、細砂を含む。しまる。
- 6 明黄褐色土 (10Y R6/6) 細砂、シルトを含む。
- 7 黄褐色土 (10Y R5/8) 細砂を含む。しまる。
- 8 黄褐色土 (10Y R5/8) 細砂を含む。しまる。
- 9 明黄褐色土 (10Y R6/6) 砂粒を含む。しまる。
- 10 明黄褐色土 (10Y R6/6) 砂粒を含む。しまる。



- 1 褐色土 (10Y R4/6) 砂粒を含む。しまる。
- 2 褐色土 (10Y R4/6) 炭粒を含む。しまる。

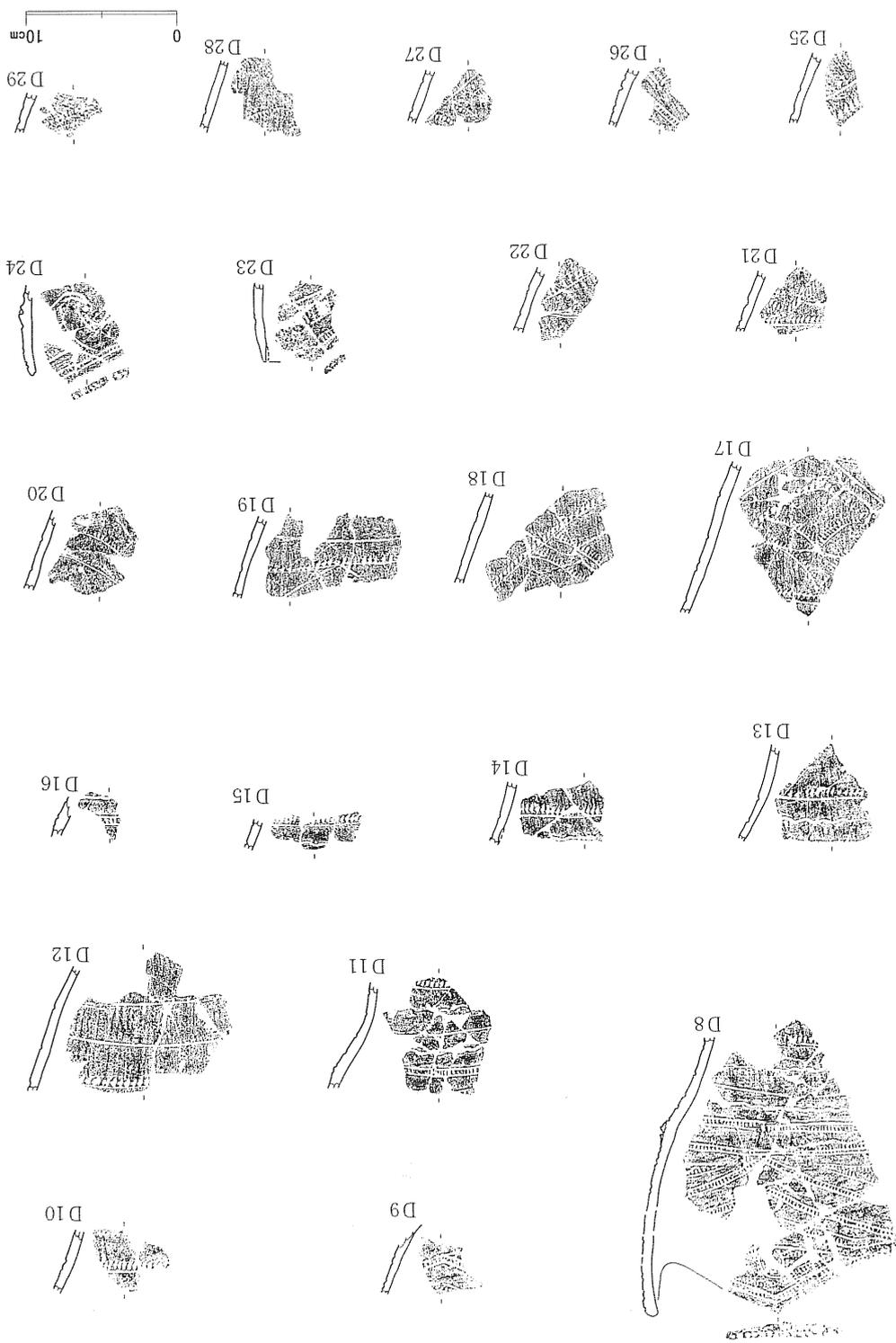


- 1 黄褐色土 (10Y R5/6) しまる。
- 2 におい黄橙色土 (10Y R6/4) 炭粒を含む。しまる。
- 3 明黄褐色土 (10Y R6/6) しまる。



第126図 土坑(1) SK56・97・118・148

第127図 遺構内出土遺物(81) SK118土器



S K 56 (第 126 図、図版 3)

上段で調査区北側のMF60区に位置し、V層で検出。覆土の上位面と、北西と南東の一部をトレンチで削平してしまった。掘り込み面はV層と考えられ、褐色土の楕円形プランとして確認。平面形は長軸1.95m×短軸1.3mの略楕円形で、深さは中央部で約0.7mである。底面には、長軸0.6m×短軸0.55mの隅丸長方形で深さ0.2mの窪みがある。断面形は摺鉢状を呈する。覆土は、炭粒を含んだ褐色粘質土が主体である。

S K 97 (第 126 図)

上段で調査区中央のMC55区に位置し、表土下0.7mの河道B堆積土で検出。黄褐色砂質土で、褐色土の不整形円形プランとして確認した。平面形は長軸0.7m×短軸0.6mの不整形で、深さは0.8mである。断面形は中央部に括れをもち、その上部と下部は共に袋状を呈す。覆土は褐色土が主体をなし、細砂の含有量で細分できる。

S K 118 (第 126・127 図、図版 3・72)

上段で調査区北西側のMF・MG62区に位置し、V層で検出。西側で辛うじて壁面を確認したが、東側は不明。掘り込み面はV層と考えられ、褐色の半円形プランとして確認。平面形は、長軸約1m(現状では0.65m)×短軸0.75mの楕円形と推定され、深さは0.25mである。覆土は大半が褐色土。

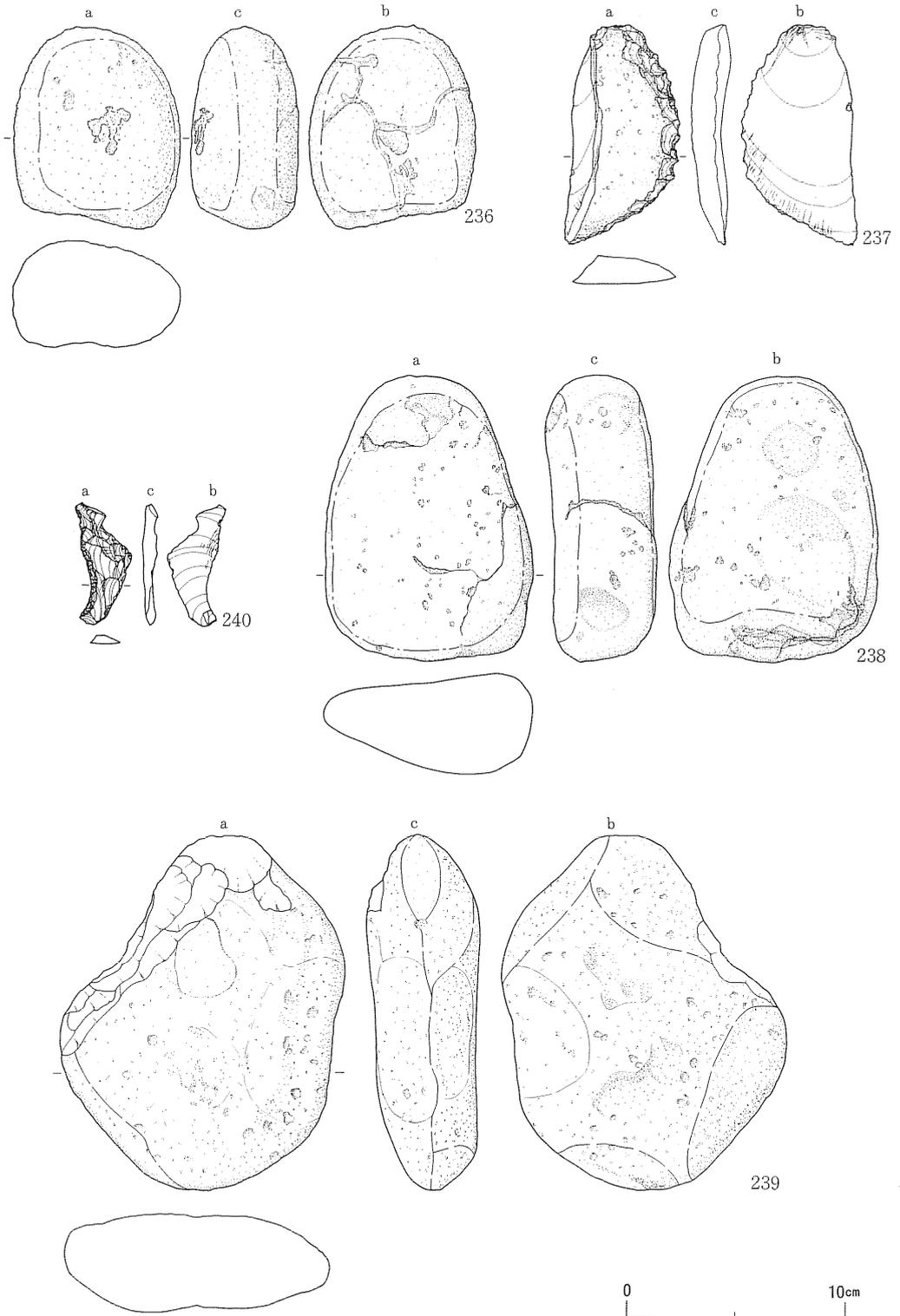
出土遺物には、深鉢の縄文土器がある。

深鉢(D8～D29) D8～D29は貝殻沈線文土器。4つの突起をもつキャリパー形を呈する土器と思われ、口縁部から胴部のもの(D8～D16)と、胴部(D17～D22)の2個体分が存在する。前者は、口縁部と胴部で文様のモチーフが分かれる。口縁部では、貝殻腹縁文を充填する幅の狭い平行沈線文が主体である。それは口唇部に沿うもの、口縁から胴部にかけて水平なもの、それらの間の斜行状のものに分けられる。口縁直下の幅約5cmの所は、平行沈線と波状文が交互に現れる。以下には、貝殻の背面と考えられる縦のナデが走るが、そのナデの始まりにある平行沈線に沿って貝殻腹縁文を施す。D17～D22は胴部の破片で、細かく浅い斜状の曲線やそれに沿って貝殻腹縁文を施す文様がある。それには、調整に貝殻背面の縦位ナデを施すもの(D17～D20)と、それのないもの(D21・D22)がある。内面に丁寧なナデを施す。器厚は5～8mmである。色調は表裏面とも灰褐色が多く、煤で表面が黒色を呈するものもある。胎土は良好で、金色の雲母をほんの僅かに含む。焼成は良好。これらは、早期中葉の物見台式期に属す。

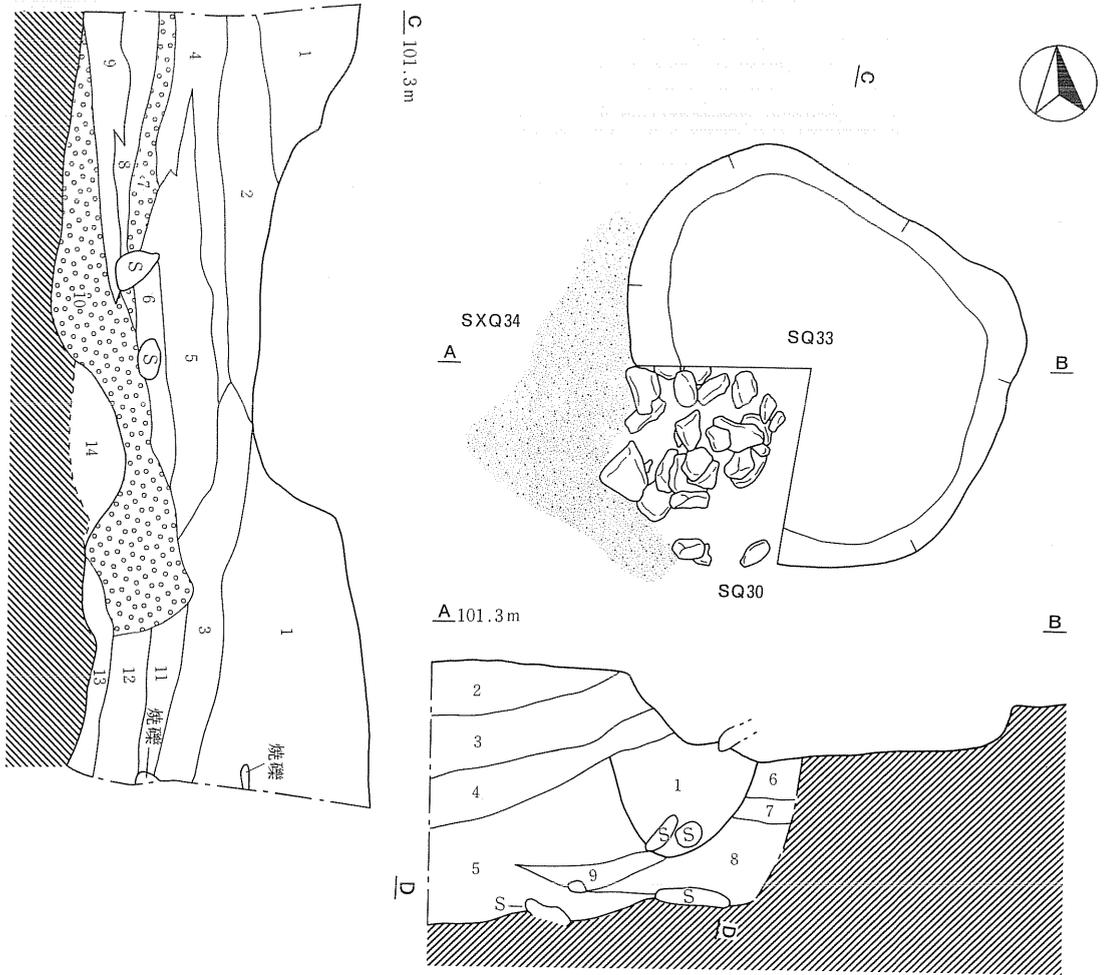
S K 148 (第 126・128 図、図版 3)

上段で調査区中央のMC53区に位置し、表土下0.6mの河道B堆積層で検出。覆土の東側を削平してしまった。黄褐色粘質土で、褐色土の円形プランとして確認。平面形は長軸1.15m

第4章 調査の記録

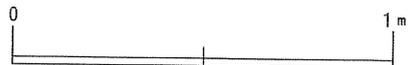


第128図 遺構内出土遺物 (82) S K 148, S Q34・35・77・90



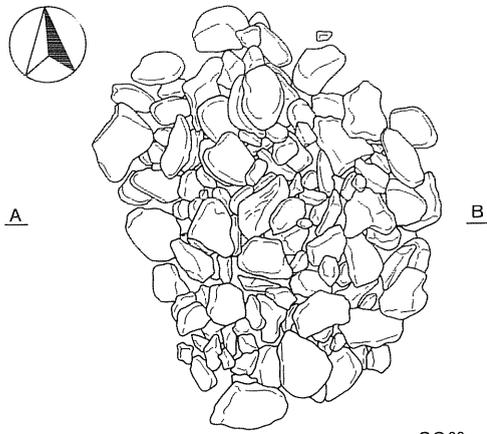
- 1 黄褐色土 (10Y R5/6) 細砂を含む。しまる。
- 2 褐色土 (10Y R4/6) 粗砂を含む。しまる。
- 3 黄褐色土 (10Y R5/6) 小礫、細砂を含む。しまる。
- 4 黄褐色土 (10Y R5/6) 細砂を含む。しまる。
- 5 褐色土 (10Y R4/6) 小礫、粗砂を含む。しまる。
- 6 褐色土 (10Y R4/6) 数点の礫、粗砂を含む。しまる。
- 7 褐色土 (10Y R4/6) 礫、細砂を含む。しまる。
- 8 褐色土 (10Y R4/6) 粗砂を含む。しまる。
- 9 黄褐色土 (10Y R5/6) 細砂を含む。しまる。
- 10 褐色土 (10Y R4/6) 礫、粗砂を含む。しまる。
- 11 黄褐色土 (10Y R5/6) 小礫、細砂を含む。しまる。
- 12 褐色土 (10Y R4/6) 小礫、粗砂を含む。しまる。
- 13 黄褐色土 (10Y R5/6) 小礫、細砂を含む。しまる。
- 14 褐色土 (10Y R4/6) 礫、粗砂を含む。

- 1 黄褐色土 (10Y R5/6) 黒褐色土、炭粒、粗砂を含む。しまる。
- 2 黄褐色土 (10Y R5/6) 黒褐色土、細砂を含む。しまる。
- 3 黄褐色土 (10Y R5/6) 砂粒を含む。しまる。
- 4 黄褐色土 (10Y R5/6) 黒褐色土、細砂を含む。しまる。
- 5 褐色土 (10Y R4/6) 礫、粗砂を含む。しまる。
- 6 褐色土 (10Y R4/6) 粗砂を含む。しまる。
- 7 黄褐色土 (10Y R5/6) 細砂を含む。しまる。
- 8 黄褐色土 (10Y R5/6) 細砂を含む。しまる。
- 9 褐色土 (10Y R4/6) 粗砂を含む。しまる。

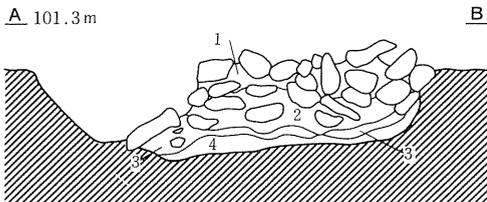


第129図 集石炉 (2) S Q30・33

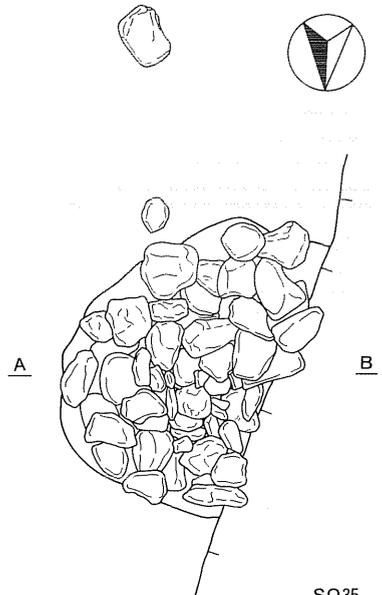
第4章 調査の記録



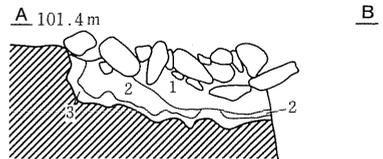
SQ30



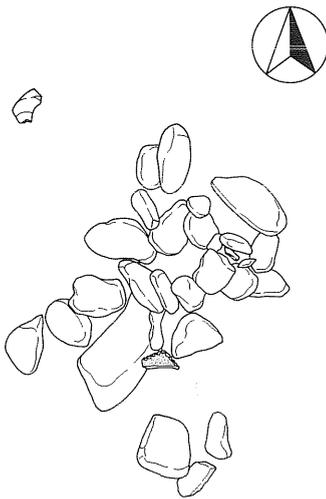
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/5) 細砂を含む。しまる。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物、細砂を含む。しまる。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土、細砂を含む。しまる。
- 4 黄褐色土 (10YR5/6) 黒褐色土、細砂を含む。しまる。



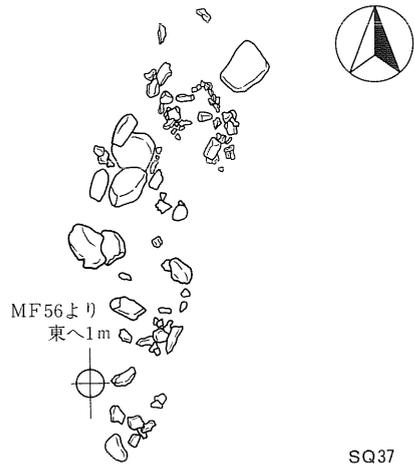
SQ35



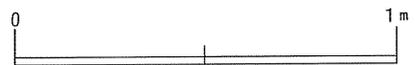
- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 砂粒を含む。しまる。
- 2 黒色土 (10YR2/1) 炭粒、砂粒を含む。しまる。
- 3 黄褐色土 (10YR5/6) 砂粒を含む。しまる。



SQ34



SQ37



第130図 集石炉 (3) SQ30・34・35・37

×0.95mの楕円形で、深さは0.1mと浅い。底面はほぼ平坦で、断面形は摺鉢状を呈す。覆土は褐色土主体である。

出土遺物には、凹石がある。

凹石(236) 扁平な楕円形で一端を欠損。摩耗が激しく、a・b両面に浅い凹みがある。

(2) 集石炉

SQ30(第129・130図、図版8)

下段で調査区東側のME56区に位置し、表土下約0.3mの河道A堆積層で検出。黄褐色砂質土で、にぶい黄褐色土の楕円形プランとして確認した。掘り方をもち、平面形は長軸1.15m×短軸約1mの略楕円形で、深さ約0.3mである。底面は緩く窪み、断面形は摺鉢状を呈す。この中に、長さ10~25cmの礫が充填して出土した。礫は長さ約15cm前後の扁平なものが多く、このほとんどが赤く焼けているものの、規則性はない。覆土は中央下方ほど黒みを増しており、炭粒を含む黒色砂質土が主体である。

SQ33(第129図、図版8)

下段で調査区東側のME56区に位置し、表土下約0.6mの河道A堆積層で検出。黄褐色砂質土で、SQ30の下からこれと切り合って確認した。深さ約0.3mの掘り込みに、5~20cmの礫を充填させたもの。掘り方は不明瞭であるが、礫の広がりから径0.4mの円形を呈していたと考えられる。礫は赤く焼けた扁平なものが主体を占めている。これらは上下に間層を含んでいることから、投棄された可能性がある。覆土には、炭粒と染状の黒褐色土を含む。

SQ34(第128~130図、図版8・73)

下段で調査区東側のME56区に位置し、表土下約0.9mの河道A堆積層で検出。褐色の砂質土で、SQ33の下からこれと切り合って確認した。掘り方は不明である。砂層に近い所では、主として10~20cmの赤く焼けた礫が長軸1m×短軸0.7mの広がりて集中していた。この最下部には、砂層に含まれる長さ30cm以上の礫が、上面だけ赤く焼けて存在していた。覆土には黄褐色砂質土や砂を含む。

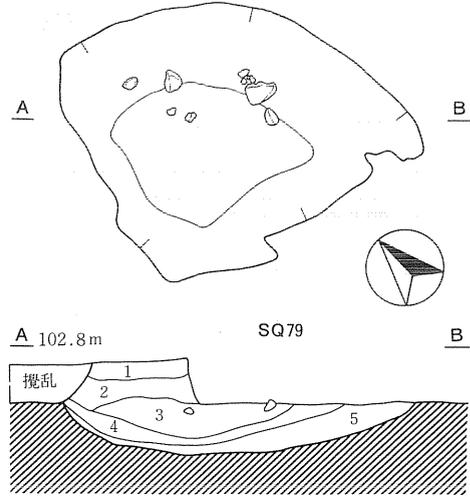
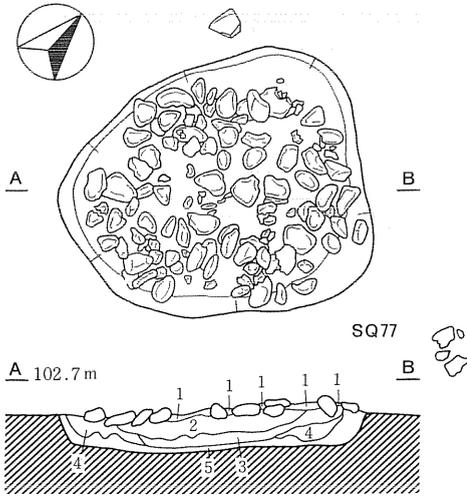
出土遺物には、削器がある。

削器(237) 縦長剥片で、a面右側縁に鋸歯状の剥離がある。それが比較的丁寧なことから、鋸歯縁石器とすべきかもしれない。

SQ35(第128・130図、巻頭図版4)

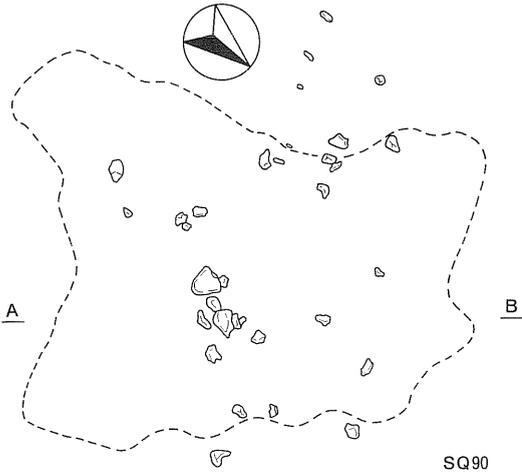
上段で調査区中央のME56区に位置し、表土下約1.6mの河道A堆積層で検出。1次の調査で西側の一部を、2次で主体的な残りの部分を調査している。黄褐色砂質土で、暗褐色土の円形プランとして確認。掘り方をもち、平面形は長軸0.9m×短軸0.8mの略楕円形で、深さ約0.4mである。底面は緩く立ち上がり、断面形は摺鉢状を呈す。この中に10~20cmの礫が充

第4章 調査の記録

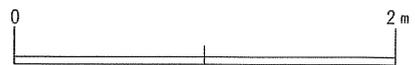
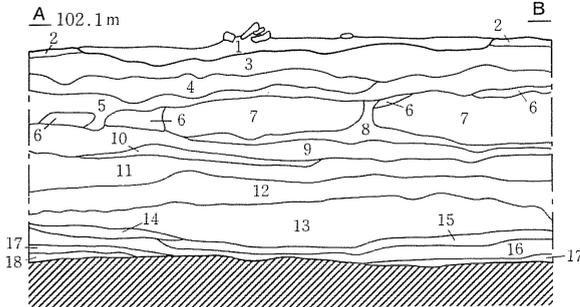


- 1 黄褐色土 (10Y R5/6) 炭粒、砂粒を含む。しまる。
- 2 暗褐色土 (10Y R3/4) 炭粒、粗砂を含む。しまる。
- 3 褐色土 (10Y R4/6) 炭粒、砂粒を含む。しまる。
- 4 黄褐色土 (10Y R5/8) 炭粒、細砂を含む。しまる。
- 5 明黄褐色土 (10Y R6/6) 炭粒、細砂を含む。しまる。

- 1 黄褐色土 (10Y R5/6) 礫、砂粒を含む。しまる。
- 2 黄褐色土 (10Y R5/6) 礫、砂粒を含む。しまる。
- 3 黒褐色土 (10Y R3/2) 炭粒、炭化物、細砂を含む。しまる。
- 4 明黄褐色土 (10Y R6/6) 炭粒、細砂を含む。しまる。
- 5 黄褐色土 (10Y R5/6) 細砂を含む。しまる。



- 1 明黄褐色土 (10Y R6/8) 炭化物、シルトを含む。しまる。
- 2 明黄褐色土 (10Y R6/8) 砂粒を含む。しまる。
- 3 明黄褐色土 (10Y R6/8) 砂粒を含む。しまる。
- 4 黄褐色土 (10Y R7/8) シルトを含む。しまる。
- 5 黄褐色土 (10Y R5/8) 細砂を含む。しまり弱。
- 6 黄褐色土 (10Y R5/8) 小礫、粗砂を含む。しまり弱。
- 7 黄褐色土 (10Y R5/6) 礫、砂礫を含む。しまり弱。
- 8 黄褐色土 (10Y R5/8) 小礫、砂粒を含む。しまる。
- 9 黄褐色土 (10Y R5/8) シルトを含む。しまる。
- 10 黄褐色土 (10Y R5/6) 砂粒を含む。しまる。
- 11 黄褐色土 (10Y R5/8) 細砂を含む。しまり弱。
- 12 明黄褐色土 (10Y R6/8) シルトを含む。しまる。
- 13 黄褐色土 (10Y R5/6) 砂粒を含む。しまり弱。
- 14 黄褐色土 (10Y R5/8) 細砂を含む。しまり弱。
- 15 黄褐色土 (10Y R5/8) 細砂を含む。しまる。
- 16 黄褐色土 (10Y R5/8) 細砂を含む。しまり弱。
- 17 黄褐色土 (10Y R5/8) 砂粒を含む。しまり弱。
- 18 黄褐色土 (10Y R5/8) 砂粒を含む。しまり弱。



第131図 集石炉 (4) SQ77・79・90

填しており、扁平なものが比較的多く見られる。礫のほとんどは赤く焼けており、規則性は無い。覆土は中央下方ほど黒く、全体に炭粒を含む黒褐色砂質土である。

出土遺物には、擦石がある。

擦石(238) 横断面が三角形の扁平な礫。b面のほぼ全体が擦り面で、中央側が僅かに凹む。部分的に炭素が付着し、火熱の影響が認められる。

S Q37 (第130図、図版8)

下段で調査区東側のME56区に位置し、表土下約0.4mの河道A堆積層で検出。黄褐色砂質土で、焼礫と炭粒を含む範囲として確認した。掘り方は不明で、約5cmの破碎礫と10cmの礫を主体に、長軸1.2m×短軸0.45mの範囲で出土した。礫はほとんどが焼けており、0.4～0.5mの高低差をもつ。覆土には黄褐色砂質土や砂を含む。

S Q77 (第128・131図、図版9)

上段で東側調査区中央のMA53区に位置し、表土下約0.4mの河道B堆積層で検出。黄褐色粘質土で、暗褐色土の円形プランとして確認した。掘り方をもち、平面形は底辺1.2m×高さ1.6mの二等辺三角形状で、深さ約0.25mである。底面はほぼ平坦で、断面形は摺鉢状を呈す。この中から、礫が充填して出土した。礫は長さ5～20cmの扁平なものが多く、ほとんどが赤く焼けている。これらは規則性がなく、覆土の上位に集中している。覆土は上位で暗褐色土を主体的に含み、焼土や炭の固まりが見られた。

出土遺物には、凹石がある。

凹石(239) 扁平な礫で一部を欠損。a・b両面に、浅いが大きめの凹みがある。また、c面上位の狭い範囲が擦られている。全体が赤変しており、a面中央で炭素の付着が認められる。

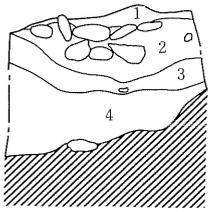
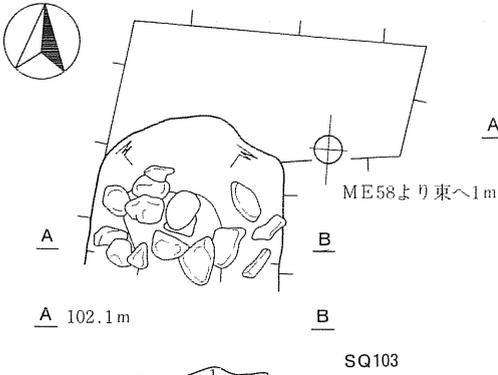
S Q79 (第131図、図版3・9)

上段で調査区中央やや東側のMA53南東杭付近に位置し、表土下約0.5mの河道B堆積層で検出。南側の一部がトレンチで削平されている。黄褐色粘質土で、褐色の楕円形プランとして確認した。掘り方があり、平面形は長軸2m×短軸1.5mの底辺が長い二等辺三角形状で、深さは0.25mである。底面の断面形は摺鉢状を呈す。覆土の中央は、炭を含んだ暗褐色土である。覆土上位には、5cm以下～20cmまでの破碎礫が集中して出土した。そのほとんどは赤く焼けている。

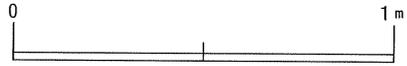
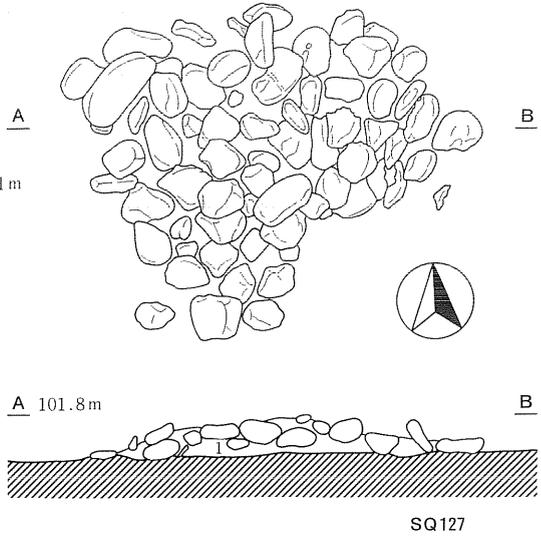
S Q90 (第128・131図、図版9)

上段で調査区中央のMD56区に位置し、表土下約0.9mの河道B堆積層で検出。黄褐色砂質土で、覆土は不明瞭だが炭粒の広がり不整形プランとして確認した。掘り方があり、平面形は約2m×1.5mの不整形で、深さは約0.2mである。底面には凹凸があり、壁面は僅かに外へ開く。礫はほとんどが焼けて破碎しており、覆土の上部に散在している。

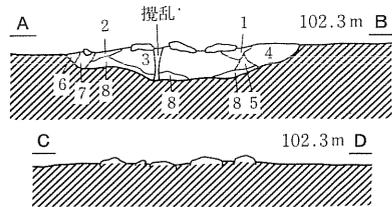
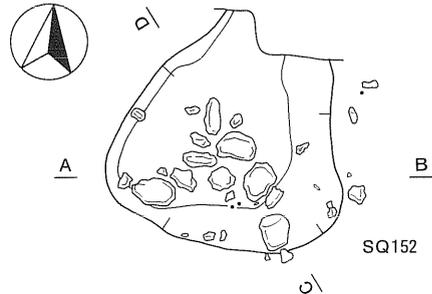
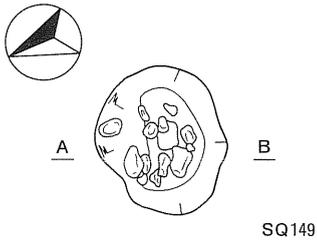
第4章 調査の記録



- 1 褐色土 (10Y R4/4) 炭粒、砂粒を含む。しまる。
- 2 黒色土 (10Y R2/1) 炭粒、砂粒を含む。しまる。
- 3 暗褐色土 (10Y R3/3) 炭粒、粗砂を含む。しまる。
- 4 黄褐色土 (10Y R5/6) 小礫、粗砂を含む。しまる。

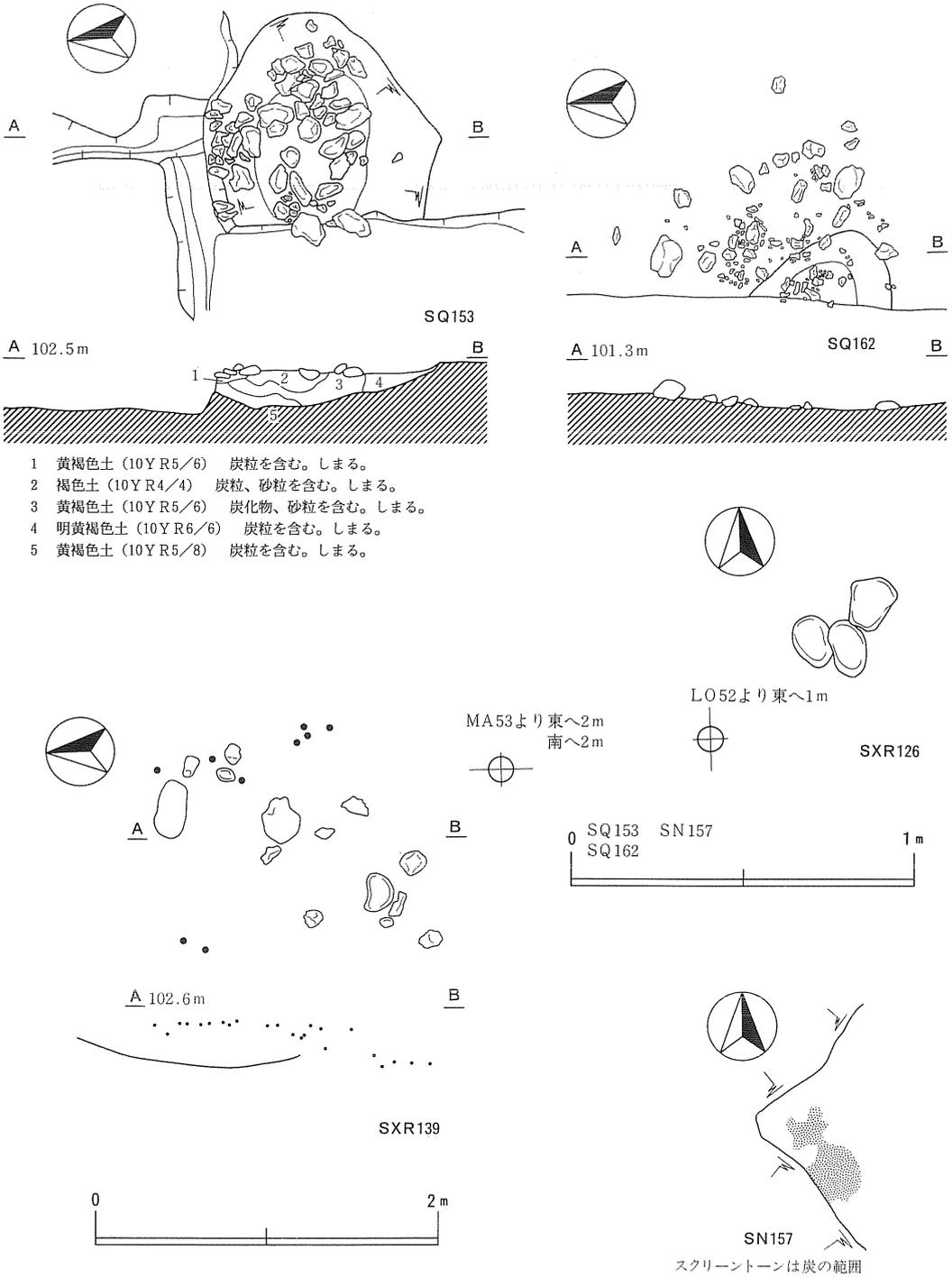


- 1 明黄褐色土 (10Y R6/6) 炭粒を含む。しまる。



- 1 にふい黄褐色土 (10Y R5/4) 炭粒を含む。しまる。
- 2 黄褐色土 (10Y R5/6) 炭粒を含む。しまる。
- 3 にふい黄褐色土 (10Y R5/4) 炭粒を含む。しまる。
- 4 黄褐色土 (10Y R5/6) 炭粒を含む。しまる。
- 5 黄褐色土 (10Y R5/6) 炭粒を含む。しまる。
- 6 褐色土 (10Y R4/4) 炭粒を含む。しまる。
- 7 黄褐色土 (10Y R5/8) 炭粒を含む。しまる。
- 8 明黄褐色土 (10Y R6/6) 炭粒を含む。しまる。

第 132 図 集石炉 (5) S Q 103・127・149・152



第133図 集石炉(6), 焼土遺構(1), 礫集中部(1)
SQ153・162, SN157, SXR126・139

第4章 調査の記録

出土遺物には、削器がある。

削器(240) 下端を打点にした縦長剥片で、a面右上位が欠損。a面の両側縁に、丁寧な調整がある。特に左側縁は大きく抉れている。

SQ103 (第132図、図版9)

上段で調査区中央やや北側のME58区南東杭に位置し、表土下約1mの河道A堆積層で検出。東西と南側を削平してしまった。黄褐色砂質土で褐色土のプランとして確認。掘り方をもち、平面形は円形と考えられ、深さは0.25cmである。この中に、長さ約10cmの礫を充填させたもの。底面は緩く窪み、断面形は摺鉢状を呈す。礫はほとんどが焼けており、これらに規則性はない。覆土は礫を含んだ中央ほど黒く、炭粒の混入が顕著な黒色土である。

SQ127 (第132図、図版9)

上段で調査区東端のLP52区南東杭に位置し、表土下約1.2mの河道A堆積層で検出。黄褐色砂質土で、暗褐色の円形プランとして確認。掘り方はなく、礫の広がりによる平面形は1辺が約0.9mの略三角形を呈し、中央がやや盛り上がる。平坦な面に長さ5~25cmの礫を充填させたもの。礫はほとんどが赤く焼け、長さ約10cmのものが主体を占めている。礫の間は、炭粒を含んだ暗褐色土が顕著である。

SQ149 (第132図、図版10)

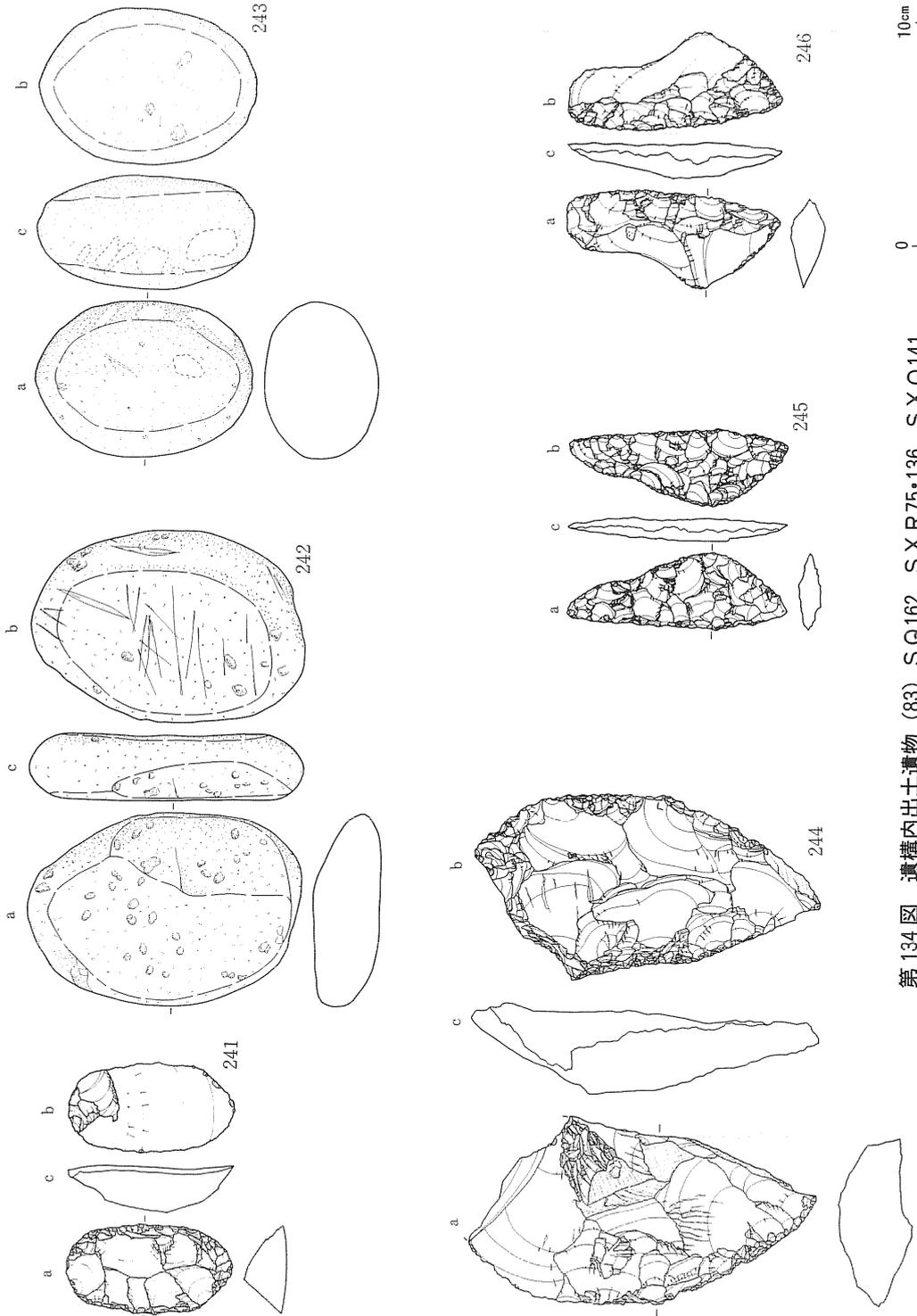
上段で調査区中央のMC53区に位置し、表土下約0.6mの河道B堆積層で検出。黄褐色粘質土で、褐色土の円形プランとして確認した。掘り方をもち、平面形は長軸0.8m×短軸0.7mの略楕円形で、深さ0.1mと浅い。底面は半月状で緩く窪み、北側に緩く狭い棚状部分がある。断面形は摺鉢状を呈す。この中には、長さ5~15cmの礫が充填しており、ほとんどが赤く焼けている。覆土は炭粒を含んだ褐色土。

SQ152 (第132図、図版10)

上段で調査区中央のMD55区に位置し、表土下約0.7mの河道B堆積層で検出。黄褐色砂質土で、炭粒を含んだ褐色土の円形プランとして確認した。北側の一部を削平してしまった。掘り方をもち、平面形は底辺1.3m×高さが推定1.4mの二等辺三角形で、深さは0.2mである。底面は緩く窪んで、断面形は摺鉢状を呈す。中央の覆土上面には、長さ10~15cmの赤く焼けた約10個の礫が、上面を平らに揃えるようにして出土した。覆土は炭粒を含んだ褐色土が主体である。

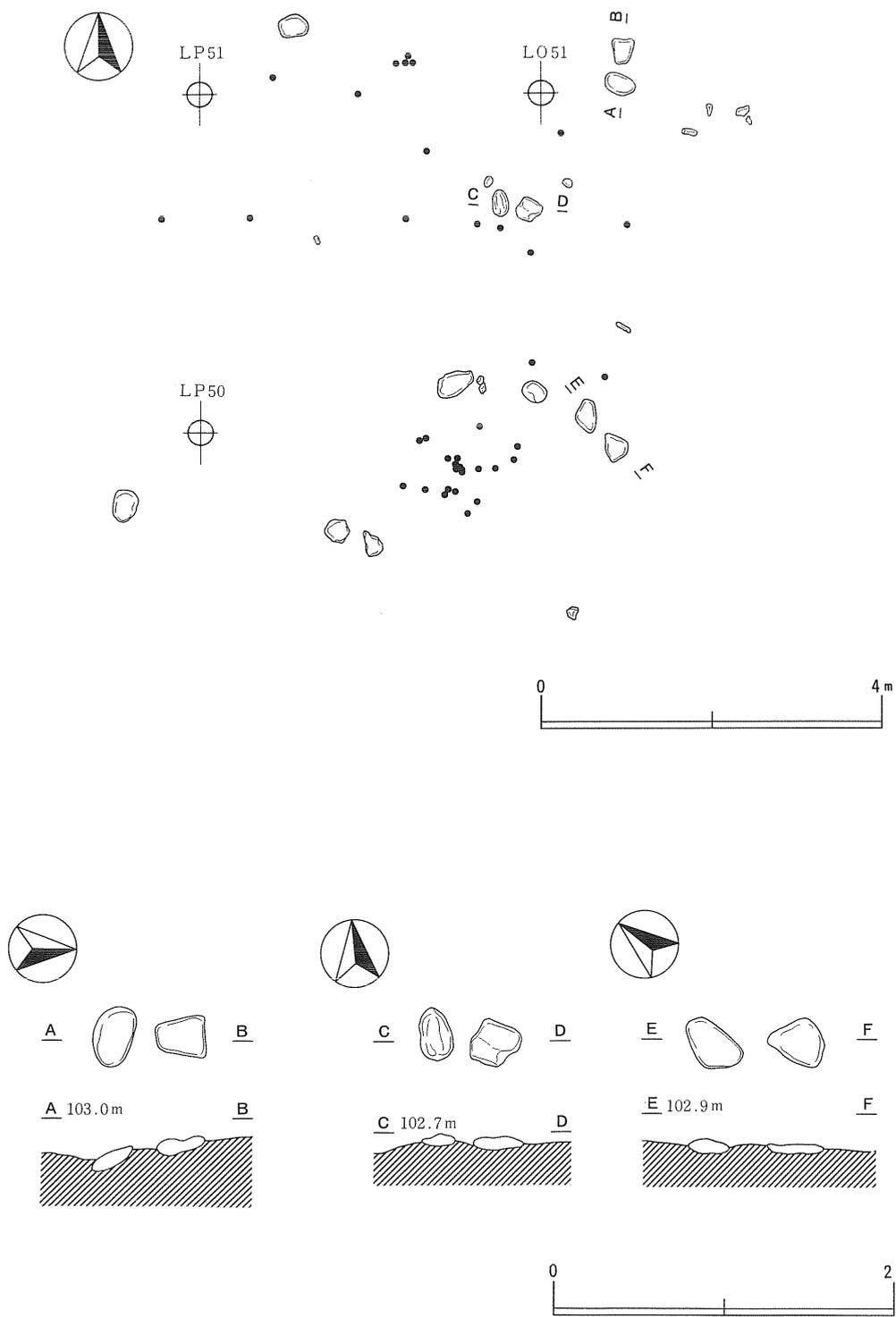
SQ153 (第133図、図版10)

上段で調査区中央のMC54区に位置し、表土下約0.5mの河道B堆積層で検出。西側は、一部トレンチで削平してしまった。黄褐色粘質土で、褐色土の楕円形プランとして確認。掘り方をもち、平面形は推定長軸1.6m×短軸1.3mの楕円形で、深さは0.25mである。底面は緩く



第134図 遺構内出土遺物 (83) S Q 162, S X R 75・136, S X G 141

第4章 調査の記録



第135図 礫集中部(2) SXR75

窪み、断面形は摺鉢状を呈す。この中から、長さ5～25cmの礫が充填して出土した。取り分け、長さ15cm前後の扁平なものが主体を占める。ほとんどの礫が、赤く焼けて覆土の上位に集中しているが、規則性はない。覆土は炭粒を含んだ褐色土。

SQ162 (第133・134図、図版10)

上段で調査区中央のME55区に位置し、表土下約1.7mの河道A堆積層で検出。この西側は上下段との境になっており、北東側の一部は削平を受けている。黄褐色砂質土で、赤く焼けた礫の範囲として確認できた。この下には、礫の範囲よりも小さいがこれに伴う土坑がある。礫は疎な状態で、破碎しているものが多い。その広がり、長軸0.7m×短軸0.5mの範囲と推定される。土坑は、長軸0.45m×短軸0.35mの楕円形で、深さは0.2mである。底面は中央部が緩く窪み、断面形は摺鉢状を呈す。覆土は黄褐色砂質土で、炭粒を僅かに含む。

出土遺物には、擦石がある。

擦石(242) 扁平な礫で、a・b両面の平坦面が擦られている。b面では、横位の擦痕が顕著である。火熱の影響で全体が赤黒い。

(3) 焼土遺構

SN157 (第133図、図版11)

上段で調査区中央のMA52区に位置し、表土下約1.8mの河道A堆積層の礫層に近い上部砂層で検出。焼土はやや赤みをさす程度で、むしろ炭粒の広がりとして確認した。範囲は0.6m×0.3mの不整形で、深さは0.05m以内である。遺物は出土していない。

(4) 礫集中部

SXR75 (第134・135図、図版13)

上段で調査区東端のLN50・51区、LO49～51区、LP49区に位置し、表土下約0.2mのV層で検出。礫は、密集していないものの近接した在り方を示しており、便宜的に礫集中部として扱う。西側にSXP98が近接している。遺構からは、石器少量と土器の細片が出土。30～50cmの扁平な礫が12個出土している。礫は0.2m以内で近接し、2個一対のように見える例が東側を主体に認められる。それらは各々が北より1.5m、2.4m、2.7mの距離にある。

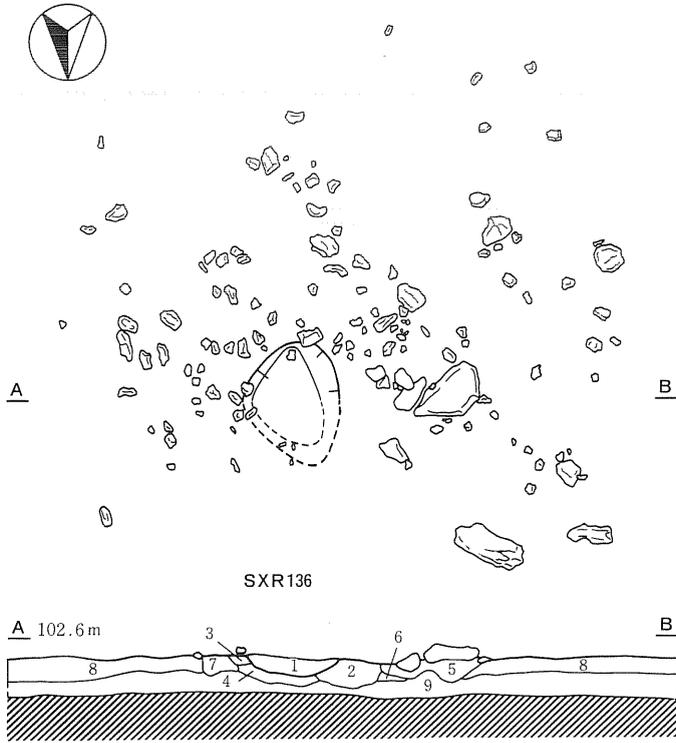
出土遺物には、凹石がある。

凹石(243) 分厚い楕円形の礫で、a・b両面に小さな凹みがある。黒色の付着物を認める。

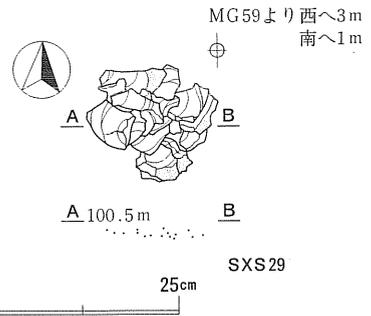
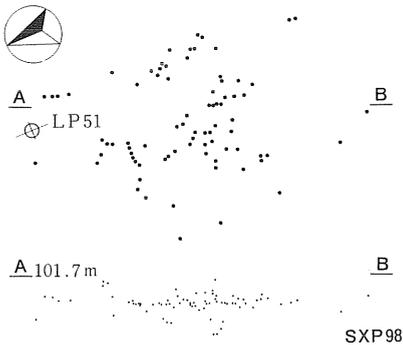
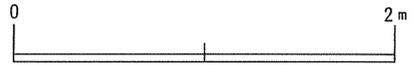
SXR126 (第133図、図版13)

上段で調査区中央のLN52区に位置し、表土下約1.1mの河道A堆積層で検出。黄褐色砂質土で、3個の礫が接するように確認できた。3個とも火熱を受けているが、2個は赤く1個は黄褐色である。付近には、焼土・炭粒の痕跡は認められない。SQ127に関連するかもしれない。

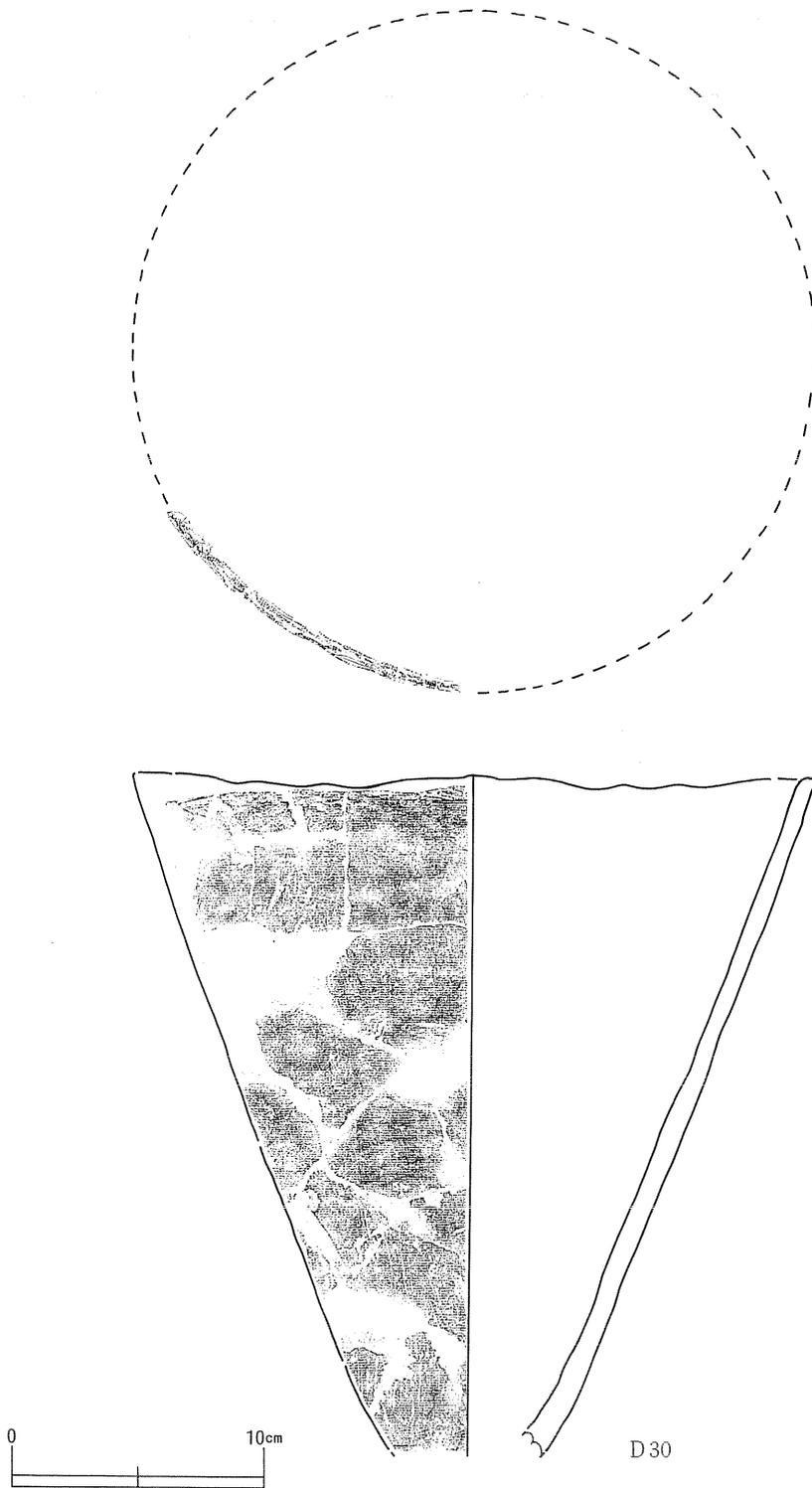
第4章 調査の記録



- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 粗砂を含む。しまる。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 小礫、粗砂を含む。しまる。
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) 粗砂を含む。しまる。
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粗砂を含む。しまる。
- 5 黒褐色土 (10YR2/3) 粗砂を含む。しまる。
- 6 褐色土 (10YR4/4) 粗砂を含む。しまる。
- 7 黒褐色土 (10YR3/2) 礫、粗砂を含む。しまる。
- 8 黒褐色土 (10YR3/4) 小礫、粗砂を含む。しまる。
- 9 褐色土 (10YR4/4) 粗砂を含む。しまる。

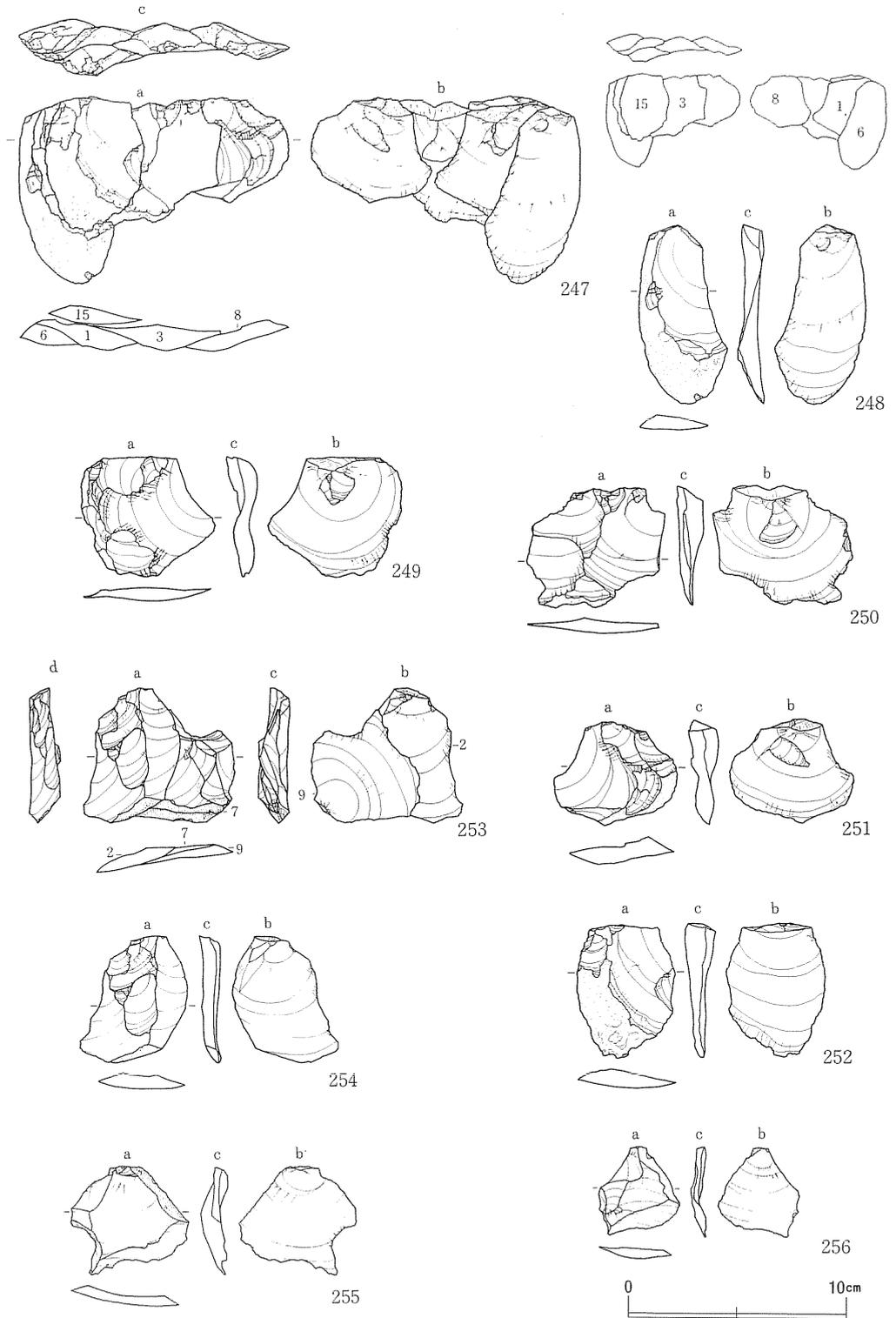


第136図 礫集中部(3), 土器集中部(1), 石器石材集積遺構(2)
SXR136, SXP98, SXS29

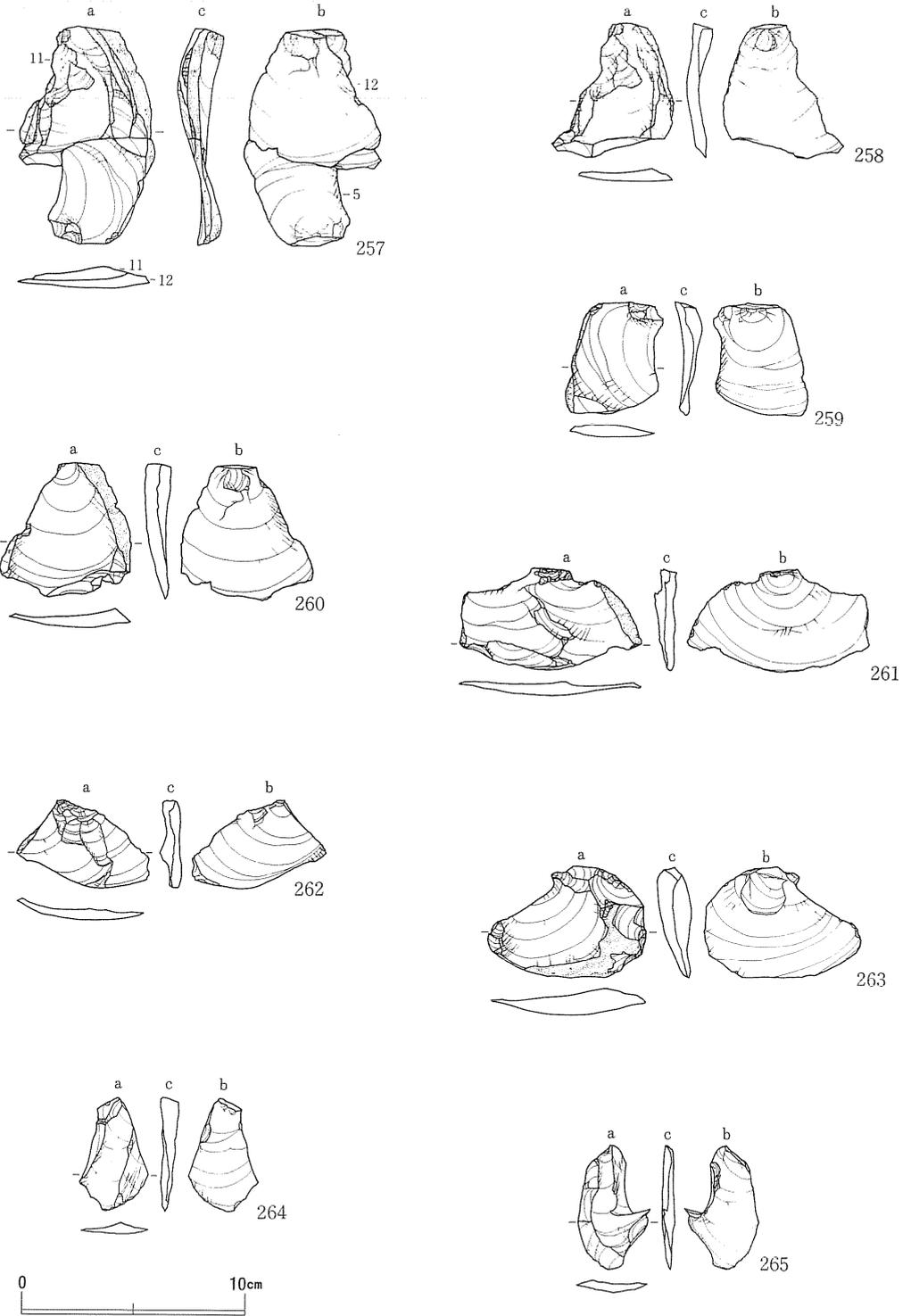


第137図 遺構内出土遺物(84) SXP98土器

第4章 調査の記録



第138図 遺構内出土遺物 (85) S X S29①



第139図 遺構内出土遺物 (86) S X S29②

S X R 136 (第 134・136 図、図版 13)

上段で調査区中央の南東側 L T 50 区南東杭付近に位置し、表土下約 0.5m の V 層で検出。掘り方は不明瞭だが、断面で長さ 1.5m の落ち込みを確認しており、礫はここに集中する。礫の広がりには径 3.2m の不整円形で、礫の長さは 5 cm 以下の小さいものから 40cm の大きいものまでさまざまである。礫は焼けていない。覆土は暗褐色土を主体的に含む。

出土遺物には、搔器がある。

搔器 (241) 縦長剝片の楕円形で、甲高の先端がやや細いもの。b 面上位で打点を剝離し、刃部と両側縁に丁寧な調整がある。

S X R 139 (第 133 図、図版 13)

上段で調査区中央の L T 52 区に位置し、表土下約 0.5m の河道 B 堆積層上部の黄褐色土で検出。礫は長さ 5 ~ 30cm のものが主体である。総数は 23 点で、長軸 1.8m × 短軸 1.5m の広がりをもつ。垂直分布は、北側と南側で 0.2m の落差があり、そこから急に傾斜する地形に沿った在り方を示す。ほとんどの礫は赤く焼けている。S Q 79 と関連している可能性がある。

(5) 土器集中部

S X P 98 (第 136・137 図、図版 14)

上段で調査区東側の L O ・ L P 50 区に位置し、表土下約 0.2m の V 層で検出。この層は、河道 C の横断面が U 字状を形成する部分の堆積層上面を覆ったもので、緩やかな窪み状を呈す。ここの、主として 1.8m × 1.2m の範囲に土器が集中して出土した。土器の総数は 79 点で、これらの垂直分布は最大約 0.2m の幅がある。

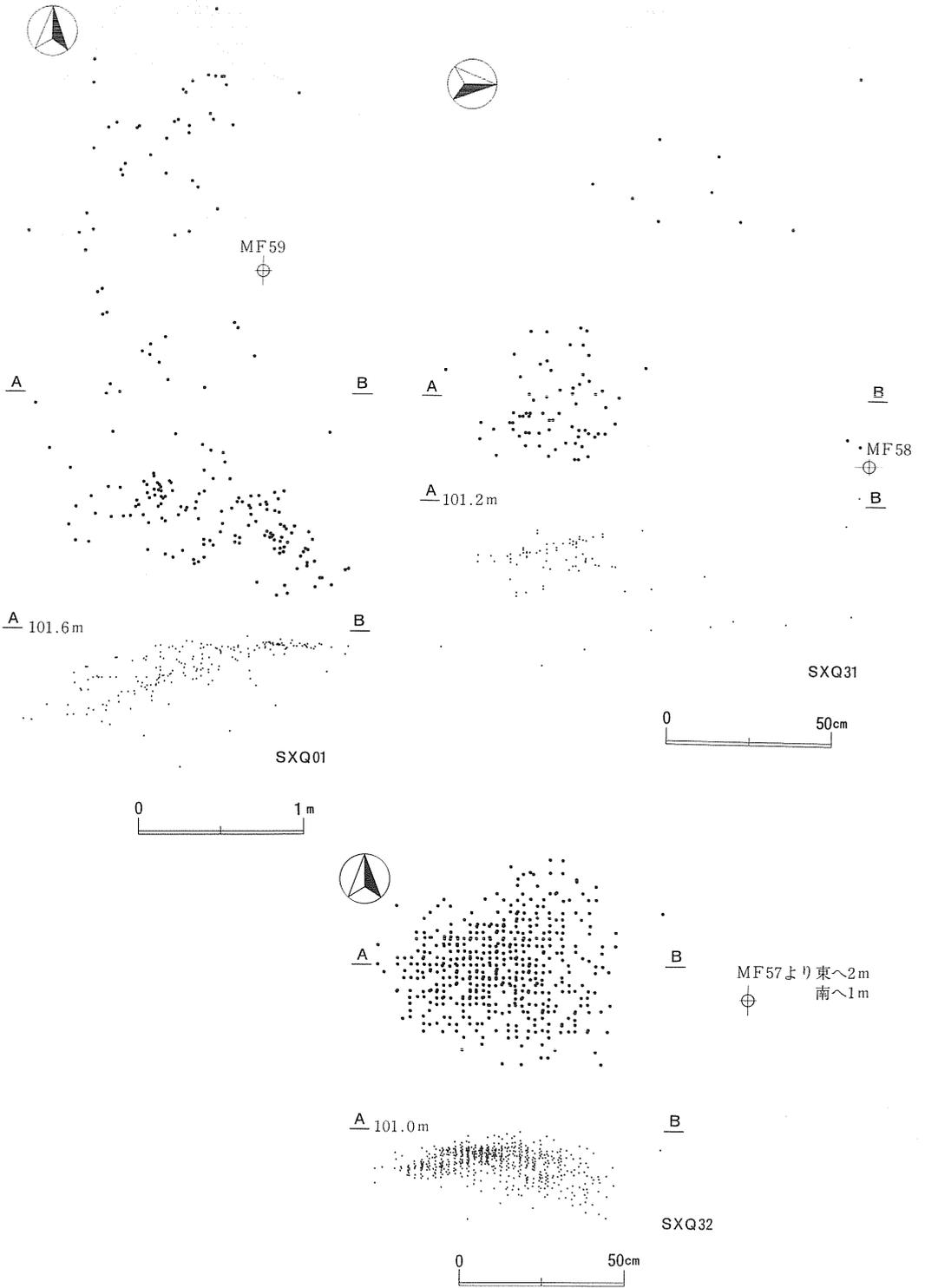
出土遺物には、深鉢の縄文土器がある。

深鉢 (D30) 無文の尖底深鉢で、口縁から胴部中央の 2/3 と底部を欠損。口径 27cm、現存高 27cm である。底部から口縁まで外傾して開く。口縁の一部は、幾分盛り上がり緩い波状を呈すが、全体ではほぼ平口縁と考えられる。口唇部は外側が角張って高く、内側は丸みをもって内面に連続する。内外面には、全面的にミガキ様の丁寧なナデが施されるが、外面の口唇直下と底部付近には横位と縦位のカキ目が認められる。上位胴部の内外面に、炭素の付着がある。器厚は 7 ~ 10mm である。色調は、内外面が浅黄橙 ~ 褐灰色である。胎土は、1 ~ 2 mm の砂粒を僅かに含む。焼成は良好。時期は早期に属す。

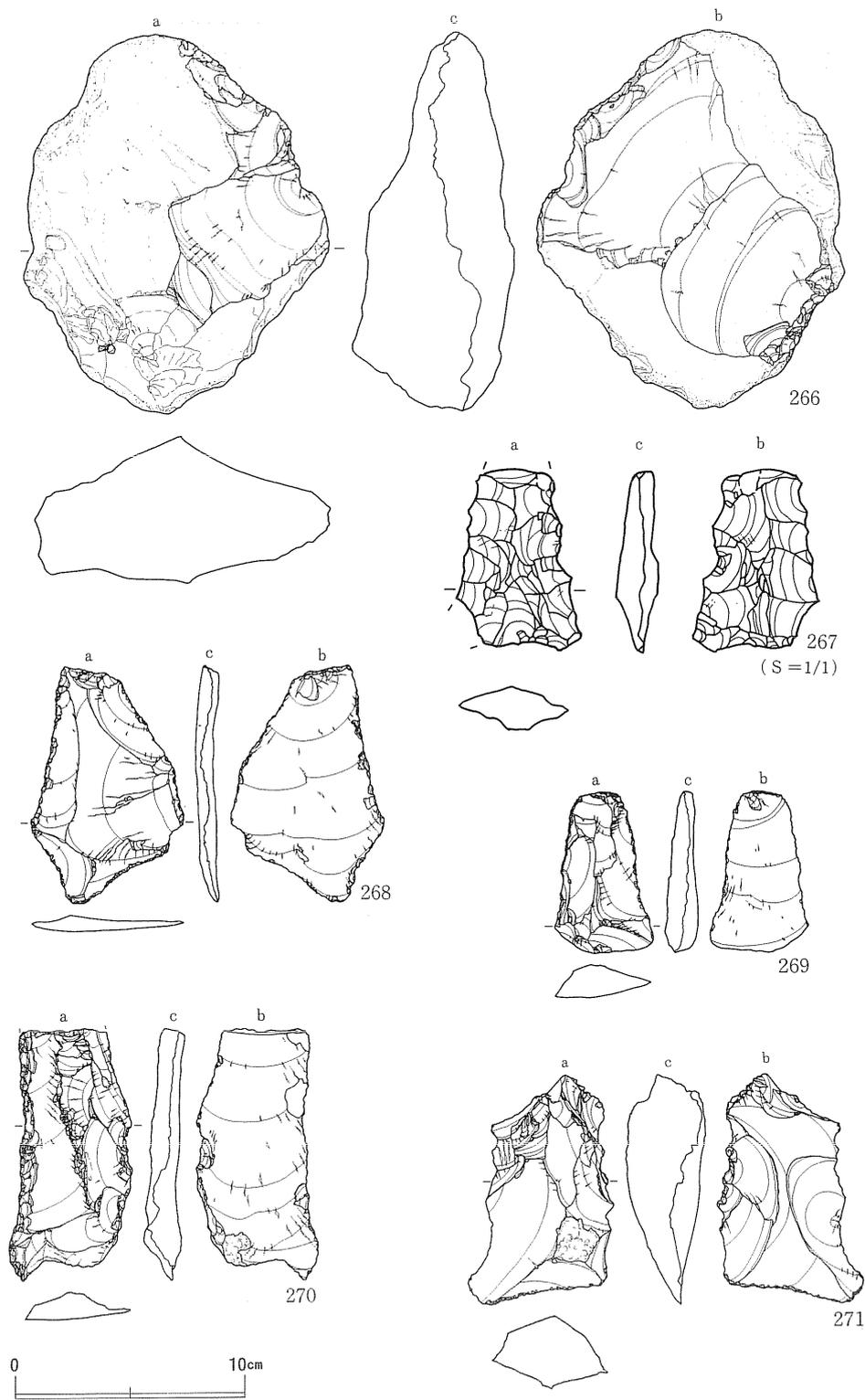
(6) 石器石材集積遺構

S X S 29 (第 136・138・139 図、図版 15)

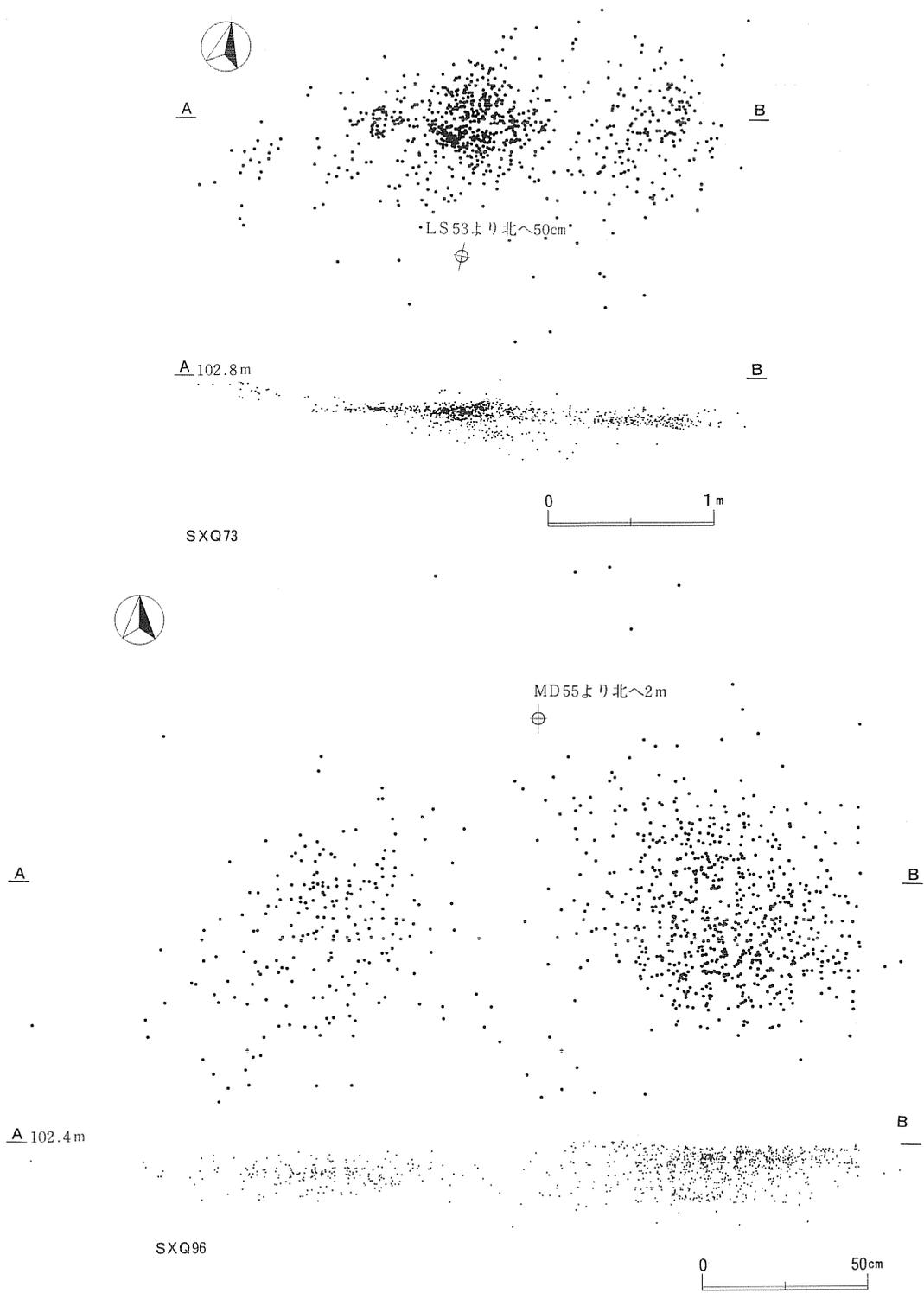
下段で調査区中央やや北西の MG 58 区に位置し、表土下約 0.1m の A もしくは D 層で検出。長さ 8 ~ 45cm の剝片 16 点が、0.2m の極狭い範囲に重なって出土した。これらは頁岩で、同一の石材である。チップは認められない。



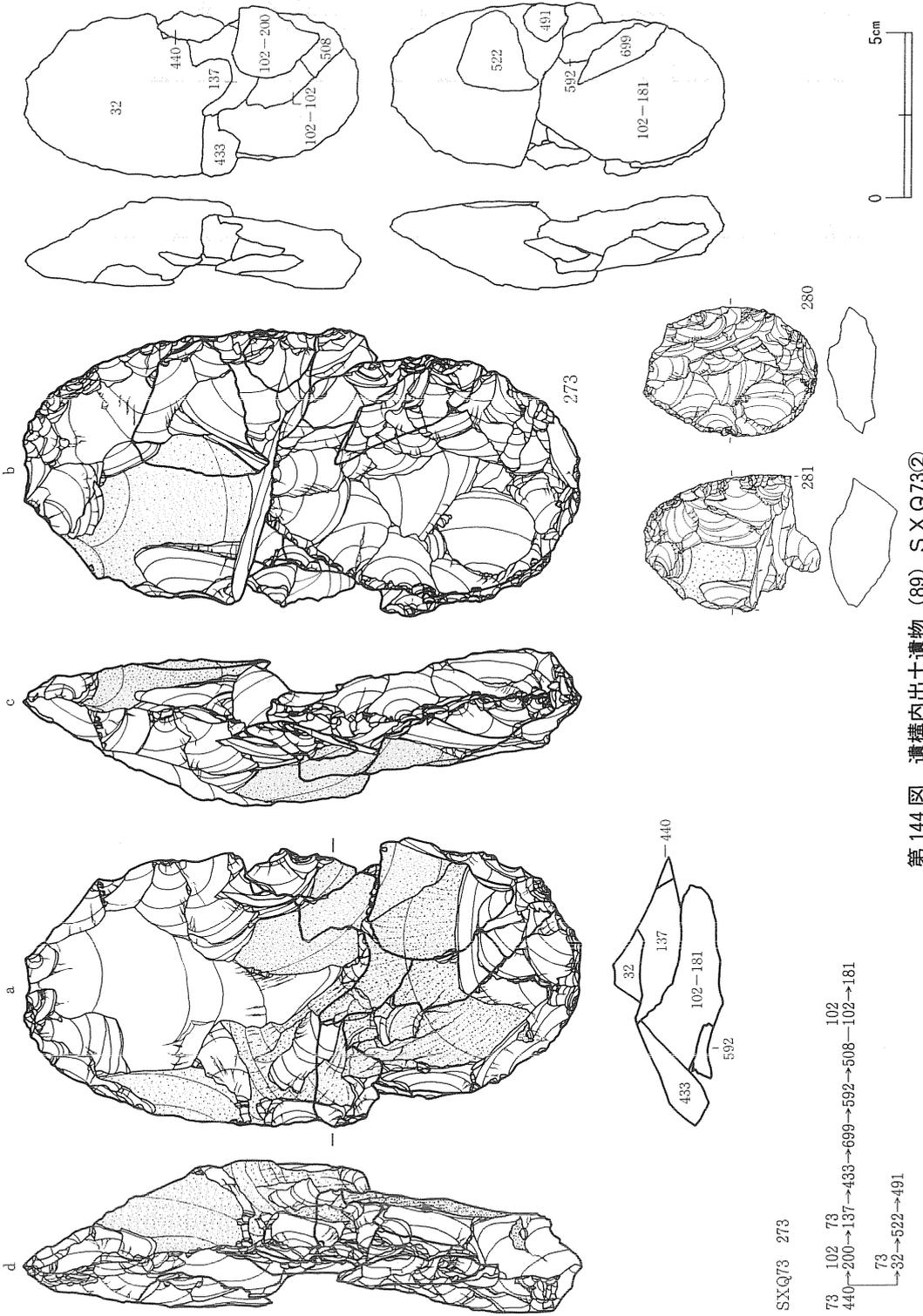
第140図 石器集中部(12) SXQ01・31・32



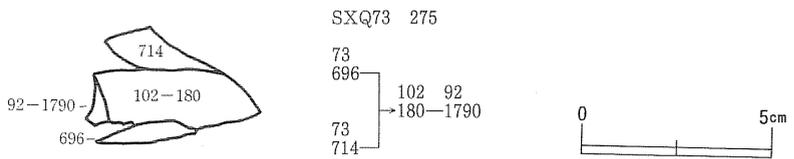
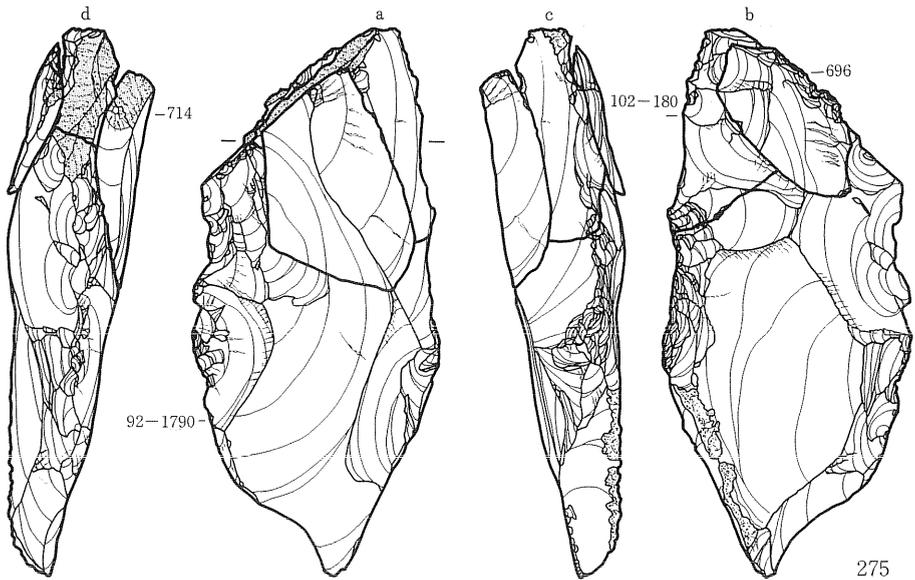
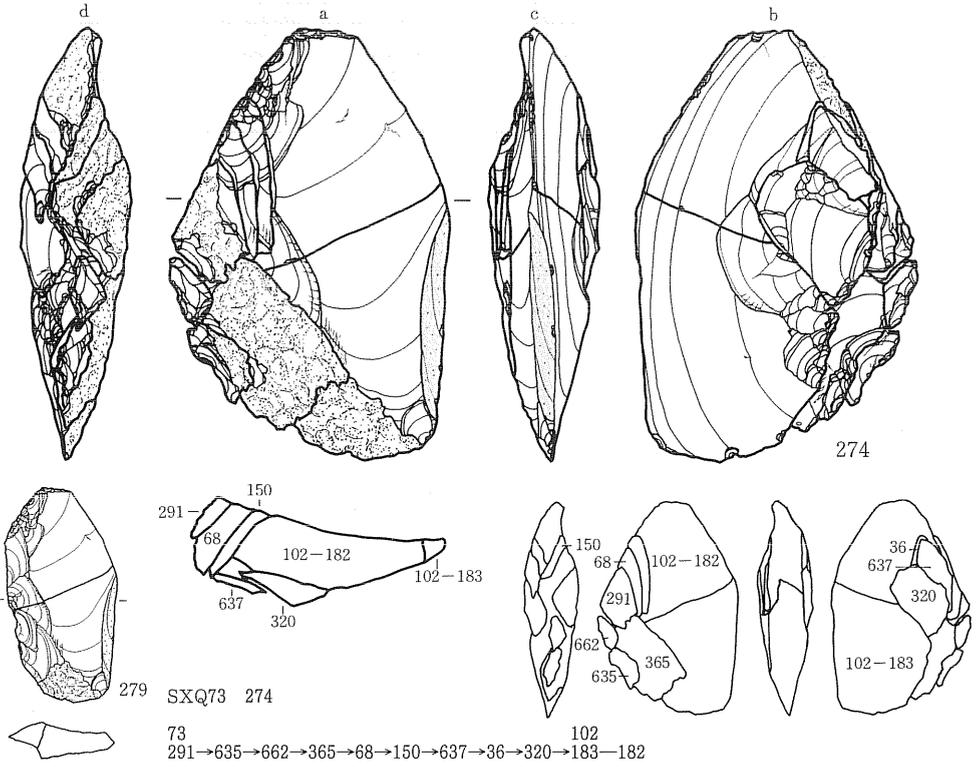
第141図 遺構内出土遺物(87) S X Q01



第142図 石器集中部 (13) S X Q 73・96



第144図 遺構内出土遺物 (89) SXQ73②



第145図 遺構内出土遺物 (90) SXQ73③